THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十一月號

第三十四年第十二號　第三百七十六號

獨逸イエナ大學名譽教授
ヘッケル博士著
文學士 栗原古城譯

宇宙の謎

八版出來

四六判・總洋布製
極美本・全一冊
紙數六百七十頁
定價 貳圓六拾錢
郵稅 內地十二錢 其他十四錢

『樹木だけ見て森を見ない實驗學者』と『森の繪を見るだけで滿足して其一々の樹木を見ない哲學者』即ち『科學と哲學との間、實驗と思索との間の不自然なる矛盾』を超越して、一元論の立場から宇宙の生成、物質の本體、人類の起源、生命の現象、心靈の本質等永遠の神秘に對して人間理智の極致を盡せると同時に、著者の徹底せる人生觀、社會觀を述べたものが本書『宇宙の謎』である。苟も**智識欲**ある**讀者**には**其興味**は**小說以上**であらう。著者は近代獨逸の大家、專攻の生物學に於ては世界第一の泰斗と仰がるゝばかりでなく、又有名の大思索家である。而して本書が如何に歐洲の讀書界を震撼したるかは、其發賣後多年を出でざる今日、獨逸本國にて既に**數十萬部**英譯のみにて**十四萬部の賣行**を見たりと云ふ事實に見ても其一端が知れよう。譯筆の明快は云ふ迄もない。

萬朝報評 『少しく心ある人にしてヘッケルの『宇宙の謎』の名を知らざる人は無かるべし譯筆快暢にして凝滯なし』

東京朝日新聞評 『同教授一代の研究を壓搾したる精髓たるのみならず、實に歐洲の科學界、哲學界を震撼せしめたる名著なり』

十四版出來

ノベル賞金を得たる白耳義文豪
マーテルリンク著
文學士 栗原古城譯

死後は如何

四六判總洋布製
正價壹圓五拾錢
郵稅十二錢

東京本郷西片町 玄黃社 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

怠業防止案

優良なる萬年筆は自然的に事務を進行す怠けやうとしても怠けられず

オノト萬年筆　無飾金七圓　飾付金八圓以上

アルビオン萬年筆　金五圓五拾錢

オリオン萬年筆　金貳圓八拾錢

萬年筆用　アテナインキ　金參拾五錢

送料各拾八錢



東京日本橋通

大阪心齋橋筋
京都三條通

丸善株式會社

福岡上西町
仙臺國分町

樋口麗陽先生著

常識教科書 知らぬと耻

■定價壹圓 郵稅六錢

■ポケット型 上製美本

大歡迎 忽四版

立派で輕快で氣の利いた厭味のない紳士ぶり淑女ぶりを途上などで見掛けるのは實に氣持の好いものです。どうしたなら、あゝした態度を何の澁滯もなく氣安く而も充分に發揮する事が出來るだらうか？それには其の道があるのであります。その道を知つて居りさへすれば譯はないのでありますが、皆樣はそれを御存じでせうか？若し御存じなければ何うか速に此の「知らぬと耻」をお讀みなさい。この本には日常生活上、社交上その他に知つて居らねばならぬ事、心得て居らねばならぬ事をうんと蒐載してあります。ポケット型で携帶至便です。

内容非常に豐富で、此處には到底その一つ二つを紹介するをも不可能ですが、ほんの一例として短い一節を抄出して見ます。かう申しちや失禮ですが、皆樣はステッキの持ち方を御存じでせうか？

ステッキは杖のやうにゴツン〱地に突くものではありません……元來ステッキといふものは散步の時などに手持無沙汰である所から持つものであります。……歐米人はステッキの中程を持つて、輕く前後に振つたり、上下に輕く振つて見たり、一種の玩具にして居ます。……そして持物のある時や業務のために活動する時などは持たないのであります。

又フロックを着る時はどんな靴をはいたらいゝか？

靴は必ず黑のゴム靴を用ふべきで、赤革のものや、白のズック製のものや、黑でも編上げなどを穿いて行つたら、忽ち田五作扱ひにされて嗤はれます。

又乘車下車する時の心得はどうでせうか？

馬車、自動車、汽車などに乘る時、男子が婦人を伴ふ場合は、婦人を先に乘せて自分が後から乘る。乘つてからは婦人が上席に坐し、男子が下席に坐する……下車する場合、婦人同伴であつたら、男子が先に降りて婦人を扶擁するのが禮、男子とであつたら其の必要はない。

東京京橋南紺屋町 ■ 實業之日本社 ■ 振替東京三二六番

佛國ア・ドビドゥール著　早稻田大學教授 煙山專太郎譯（新刊）

歐洲最近外交史

背皮製全一冊
六百五十餘頁
正價
金參圓五拾錢
郵税十八錢

今や世界は縺れたる外交の十字街頭に立てり。世界大戰の因て起れる外交上の經緯を審にし、大亂勃發當時の外交界の曲折を究めんとする歐米の士は、唯一の指針として皆此書を推奬せり。斯學の泰斗佛國ドビドゥール氏の新著『歐洲最近外交史』は、筆を伯林公會に起し、獨墺伊三國同盟、露佛同盟、日英同盟、英佛の接近、英露佛三國協商等の由來を詳述したる後、漸く世界大戰勃發の顛末に入りて開戰中の國際關係を明確に叙し、更に之に加ふるに深刻なる評論を以てし、實に露國革命の前夜に於ける條に至りて筆を收めたり。凡そヴエルサイユ會議の議に上れる波蘭問題、チエック問題、アドリヤ海問題、アフリカ問題、南スラブ問題、ガリシヤ問題、アルメニヤ問題、ペルシヤ問題、支那問題、乃至國際聯盟問題の如き、苟も此書を手にするに非ずんば、五里霧中に彷徨するの感あるべく、一たび此書を座右に備へんか、他の戰前戰時の外交に關する一切の書籍は總べて之を繙くの勞と之を購ふの費とを省き得べし。吾人は最近我出版界に於ける最も權威ある刊行物として敢て之を江湖に奬む。

新早稻田叢書

既刊

米國大統領ウイルソン著　法學博士高田早苗譯　【訂正增補】政治汎論
背皮製千五百餘頁上下二冊　正價各貳圓卅錢郵税各十八錢

獨逸トライチケ著　法學博士浮田和民譯　【軍國主義政治學】
背皮製上卷七百餘頁（下近刊）　正價貳圓五十錢　郵税十八錢

發行所　東京牛込早稻田　振替一一三三番　早稻田大學出版部

（賣捌）東京堂、至誠堂、北隆館、東海堂　大阪 盛文館、名古屋 星野（其他）


専賣特許 黒中山帽
今年の世界中は
平和(ピース)ダービー
鷹印帽子製造元
大阪 株式會社 髙橋製帽所



中央公論第卅四年十一月號目次

▼公論

勞働運動に對する有識階級の任務……卷頭言……一

川崎造船所怠業の研究と我國勞働運動の前途……法學博士 堀江歸一……二

我國現前の思想界を論じサンタヤナを紹介す……ドクトル・オブ・フイロソフイ 小島茂雄……一九

「現代奴隷」解放論……法學博士 森本厚吉……三八

支那に於けるＡＢＣ同盟……日高進……五一

檢事論告の際に於ける被告人の起立問題……辯護士 松谷與二郎……五七

▼說苑

獄を出て……山中峯太郎……一

借金の記……大町桂月……四三

江戸の俠客……笹川臨風……五七



郵便飛行決行の宙返飛行家……九路天風……五四

俺の見た日本人……大泉黑石……六五

▼時論と思潮

政黨の地盤政策を難ず
西伯利派遣軍の始末
内柔外剛の跛行的政論
勞働運動に對する予の態度
……法學博士 吉野作造……七七

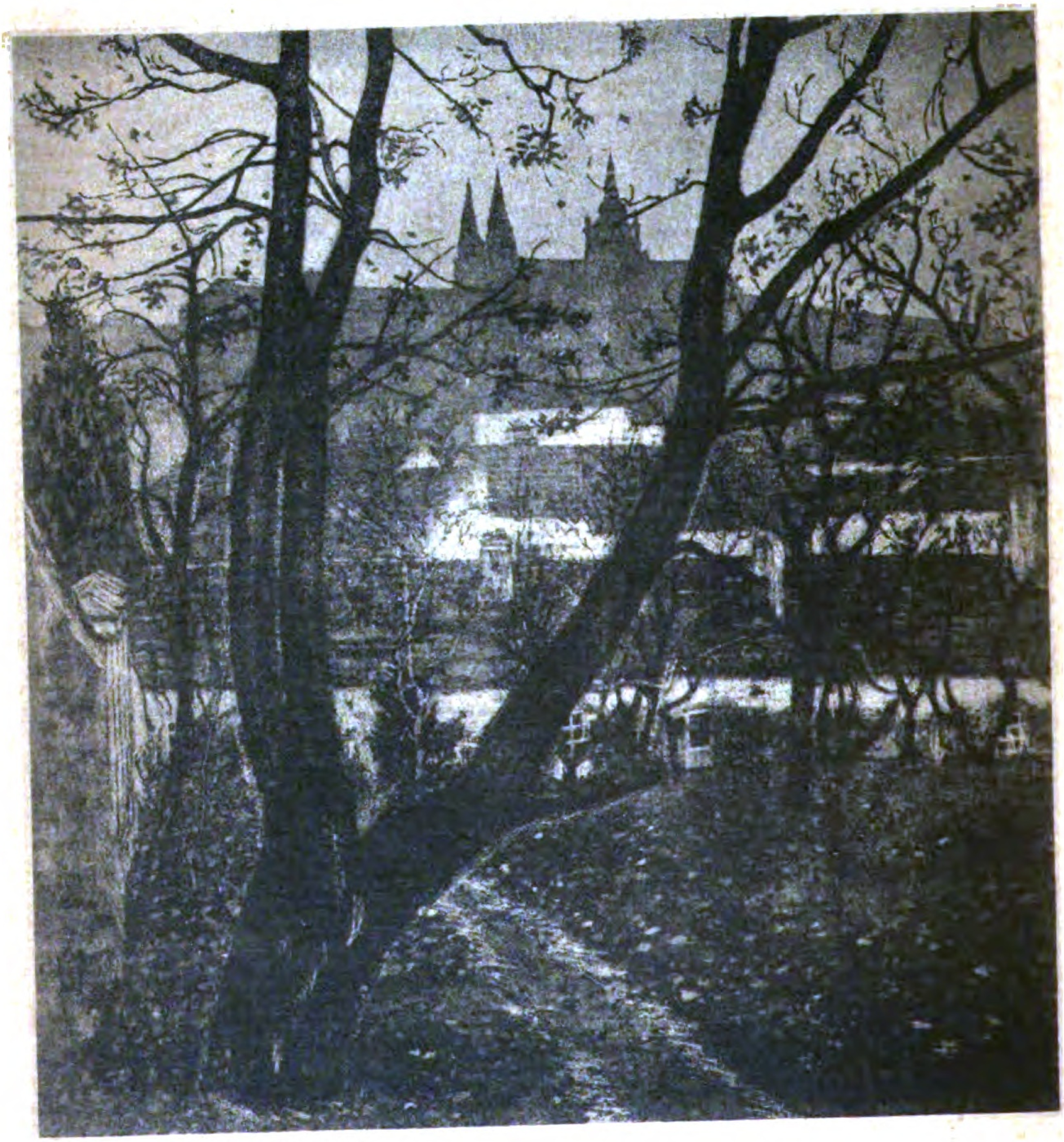
覺えがきより（〇正義も自由も手段 〇勞働の意義 〇社會科學の改訂）……中澤臨川……八八

《創作》

■小說 或る少女の死まで……室生犀星……一

■戲曲 拒婚同盟……上司小劍……八〇

■小說 美しき月夜……中條百合子……九七



AUTUMN

BY JAROMIR STRETTI-ZAMPONI

馬場睦夫譯

ボオドレエル詩集 惡の華 附散文詩

十九世紀の後半突如として巴里の一角に神を呪ふ魔王の如き叫喚を以て、死と暗黒と、墓場と、腐敗と惡と不運との凄愴暗澹たる交響樂を奏で出で、爛熟せる浪漫的文學に醉へる佛國の俗人達を驚倒せしめ傳習的な社會を仰天せしめたものは實に此の『惡の華』一篇である。彼れ作者は果して神か惡魔か、聖徒か殉教者か、そは讀者の判斷に任すべしとして眞に本篇はクラシックと近代文學との一大時期を劃するものであつてそれが最近文學に與へし影響は理解すべからざる程大なるものであるされば近代文學殊に詩を口にする者にして此『惡の華』を知らざるは恰かも聖書を知らずして基督教を說くと同一である。譯者は佛の原文より忠實に譯して汎く世に紹介する次第である。

最新版

四六判天金四百頁
布製函入寫眞三葉
定價金貳圓五拾錢
郵送料拾四錢

中山昌樹譯

聖アウグスティヌス 懺悔錄

聖アウグスチヌスの懺悔錄は人類の有する最深最高の書である熱沙の如き情慾と清澄星の如き靈魂の白熱的闘爭史である我等は玆に人間性の悲痛なる呻吟と共に又其壯美なる凱歌を聞く。社會改造世界改造を叫ぶ前に先づ靈魂改造を思ふべきでないか。本譯は正確なるラテン原文に據れるもの生活改造を志す者は何人も本書より其根本動力を受けねばならぬ。

最新版

四六判布製函入
五百六十頁餘
定價金貳圓八拾錢
郵送料拾八錢

▼全譯詳註 ダンテ神曲（地獄・天國・煉獄全三冊）

▼各冊定價貳圓五拾錢
▼郵送料各拾八錢

發兌元 東京市麴町區隼町廿番地 振替口座東京二〇九一四 洛陽堂 （電話九段九六六番）

有る要求を理想的に滿し最高權威的に規矩準繩を顯示する觀世流標準謡本は是れ◈

大正改版 觀世宗家謡曲正本

◈完備精到の謡本◈

斯界の趨勢に鑑み、多大の歳月を經て、茲に典範的完備精到の謡本成る。現代の有らゆる要求を滿して餘蘊無し。世の屑々たる類書より眼を轉ぜば乾然として本書の優越せるを知らん。諸君の確實なる指南者は最善なる宗家正本を惜いて斷じて他に無し。

◈豫約會員募集◈

◈理想的補修の一斑◈

○本文上の補修○現代國文學界の諸大家に諮りて假名遣、誤字當字等悉く之を訂し全部新に書卸せり○謡譜上の補修○各種の音譜吟譜點補助記號等の補修は素より秘傳奥儀をも呈示し萬に一にも脱落遺漏等の無きを期せり其一斑を擧ぐれば各章各節の位緩急心持等謡ひ方を本文の傍に記し‖振假名を節と並記し‖讀クセを審かにし‖下ゲの箇所及一字下り二字下り三字下りを見易からしめ‖中落しとスクヒ落しとの別を明瞭にし‖ハル前のウキを明示し‖半句讀を施し‖小ブシとオサへとを明示し‖詞にヒラキを附し‖返しは從來のくを廢して本句を重ねて記し‖囃子仕舞獨吟小謡の各箇所を指示せり○拍子上の補修○間拍子走り寄せ持チ等を首め乘りの各種合方と關係を有する重要なる部分等に至る迄一點の驗無く補修し拍子に合ふ箇所と合はぬ箇所とを一々明示したれば拍子研究者に取りても其用を正確に辨ずるものなり◐各種の心得○以上の外一曲の梗概を首め役別裝束四季番組順小書に至る迄一切之を記して各曲の劈頭に添附し以て其曲の精神と結構とを知るに便せり。

豫約略規

▲大正九年一月二十五日より毎月五番綴三册宛發行大正十年二月全部完了。

＝一時拂＝ 上製＝金四十四圓也 並製＝金參拾七圓也

外に送料内地金貳圓五十二錢、朝、滿七圓七十錢臺、樺五圓六十錢加算御拂込の事 ○豫約特價上製四十八圓也並製四十圓也

＝毎月拂＝ 申込證據金として 上製＝金四圓 並製＝金參圓 十二月二十日迄に御拂込以下毎月十五日までに其の月分として月々

上製金參圓卅錢 並製金貳圓八十錢 宛拂込、最終の拂込は上製一圓十錢並製六十錢拂込の事

▲尚送料として内地十八錢朝、滿五十五錢臺、樺四十錢月賦金に御加算お拂込の事。

△半紙本五番綴番外共全四拾貳册○觀世水に千鳥模様表紙和綴本文石版印刷

●内容見本送呈 △〆切期日十二月二十日

斯の如き貢獻的安價提供は恐らく絶後なるべし敢へて諸賢の果斷と即決とを奬む◈

刊行及豫約元

東京神田錦町一の拾・京都二條鉄屋町角

大瓜堂檜謡曲書店

振替東京三五五二番・大阪三六一八番

勞働運動に對する有識階級の任務

人は能く曰ふ。勞働運動は解放運動であると。

成る程、賃銀制度の桎梏を破り、之と表裏する奴隷的地位より勞働者を解放するは、勞働運動の最主要目的の一である。併し之れ丈けでは不可い。モット大事なことは此「解放」の要求が、勞働者の内面的自覺の必然の結果として現るゝ樣に導かねばならぬことである。内面的自覺に根ささる外面的伸張は、畢竟砂上の樓閣に過ぎぬから。

今日の一般勞働者が内面的に何れ丈け自覺して居るかと問はゞ、何人も非常の樂觀を以て答辯するに躊躇するだらう。併し乍ら之を理由として彼等の外面的解放運動を尙早と論ずるは正しくない。勞働者に與へられて居る現在の待遇の餘りに不當なるは、之を取り去らんとするに、最早勞働者の内面的開發を待つに遑あらしめないではないか。況んやその所謂外面的酷遇が、實に亦勞働者の内面的發達阻碍の重大原因を爲すに於てをや。然らば一旦燃え付いた勞働運動は、其結果が如何あらうと、今更之を消し止むべきでない。只我々有識階級の任務としては、何處までも其運動を彼等の本當の内面的自覺に結び付けてやらねばならぬと思ふのである。

今日我國の勞働運動には、直接又間接に可なり多くの有識階級が關係して居る。勞働運動に所謂有識階級の關與するは、もと變則に屬するも、而かも差當り其後援乃至指導を必要とする以上、彼等の任務は、外面的解放の達成と内面的開發の助長とに在らねばならぬ。而して彼等は果して此任務を正當に諒して居るだらうか。

資本家が勞働者に歸屬すべき筈のものを不當に壟斷し、其一部を恩惠的に割與せんとするを溫情主義と云ふ。如何に美しい動機に出でても、要するに勞働者を奴隷扱ひにするものと謂はねばならぬ。若し勞働者の友を以て任ずる有識階級にして、勞働者自身の内面的要求として起るべき運動をば、僅に煽動に依つて支持するに甘んずるなら、是亦勞働者を愚民扱ひにするもので、畢竟資本家と其本來の態度を異にせざるものである。物質的に正當なる地位を認めざるの理由を以て溫情主義を罵倒すべくんば、正當なる精神的自覺の如何を顧慮せざるの點に於て、有識階級の這般の態度は、亦新溫情主義の惡名を附して大に之を排斥すべきではないか。

勞働運動は昨今大に盛である。之を國家の爲めに憂ふべしとする少數の頑冥者流を除き、多數の識者は國民的自覺の一徵候として大に之を慶祝して居る樣であるが、只願くは之をして健全なる發達を遂げしめたいものだ。夫には是非とも此運動を勞働者の内面的自覺の根柢の上に立たしめなければならない。

中央公論



第卅四年第十二號
十一月號
第三百七十六號

川崎造船所怠業の研究と我國勞働運動の前途

法學博士 堀江歸一

序言

勞働運動の極めて幼稚なる我國に於て、西洋諸國に行はるゝ所謂サボタージュが發生するは、遠き將來に屬するものと想像せられたるに、時勢の變化することの甚だしき、今や我國到る所に、怠業の形態に於て、サボタージュの行はるゝを見るに至れり。サボタージュの行はるゝ形態は獨り怠業のみに止まるものに非ず、怠業の外に、勞働者が、（一）故意に機械の運轉を休止し、又は之を緩漫にして（二）同盟して仕事を休止したる場合に、尚ほ各自從來の仕事場に留まり他

人の代つて就業することを妨害し、(三) 原料品其他傭者の所有に係る物資を濫費して、生産費を増加し、(四) 殊更に所定の條件に適合せず、當然不合格と爲る可き物資の製造を敢てするが如き、何れもサボタージュの形態を以て、見る可きものなり。我國には既に怠業の形態に於て、サボタージュの行はるゝこと、今日の如しとすれば、將來他の形態に於て、サボタージュを見るは、當然の勢なりとす可く、隨て此種の勞働運動の利弊に就ては、今日より充分に研究し以て他日に備ふる所なかる可からず。

我國に於て、始めて勞働者が怠業を行ひたるは、神戸市川崎造船所の職工を以て、嚆矢とす。此事件を先驅として、關西地方の工場に於て、怠業の行はるゝもの頻繁なるに至れり。然らば川崎造船所の怠業は他に對して、先例を示したるの點に於て、注目に値するのみならず、一萬數千人の職工が十數日に亙りて、相當の秩序を保ちつゝ、怠業を遂行したるの點に於て、職工が各自一日分の賃銀を醵出して、相當の資金を蒐集し、種々の費用に備へたるの點に於て、職工が保安委員、交渉委員、會計委員等を設けて、秩序を維持すると共に、自治の能力を發揮したる點に於て、又此怠業が機會と爲りて、川崎造船所をして、八時間勞働制を實行せしめ、漸次關西地方の諸工場に風靡し、今や關東にも其影響を及ぼしつゝあるの點に於て、興味の特に大なるものありとす。余は九月末日より十月初旬に至る數日を費して、神戸に赴き、怠業事件の當事者其他に就て、事の眞相を探究し、聊か得たるものあるを以て、本論に於て感想を公にし、研究者の參考に資すると共に、我國勞働運動の前途に就て、攻究する所ある可し。

一、勞働運動と社會の同情

川崎造船所の職工約一萬六千七百人が結束して、四個條の要求を實行するの件に就て、社長松方幸次郎氏に歎願書を提出したるは、九月十五日にして、同月十八日を以て、回答の期日とし、同日までに回答せざるか、又は要求を拒絶し

たる場合には、全職工を擧げて、怠業を爲す可きの申合せを爲したり。四個條の要求と云ふは、(一)現日給に七割の歩增を繰入れて、本給とし、之に對して、更に五割の歩增を付すること、(二)特別賞與金三百七十五萬圓分配の期日を明示すること、(三)六個月以上の勤續者に對し、年二回の賞與を支給すること、(四)食堂洗面場其他衛生設備を完備することの四點にして、是等の內第一の項目こそ、會社に對しても、又職工を取つても、最も重要なるものと目せられたり。而して會社は十八日午前職工代表委員に向つて、會社に於ては、近々八時間勞働制を實行するの準備中にして、現在の賃銀給與法にも改正の意あることを明言したれども、果して職工の滿足する程度に於て增給するや否やに就ては、之を語らず。特別賞與金分配の時期は本年十月末日とし、二期の賞與は六個月に十日以內の缺勤者に給與し、衛生設備は漸を以て、完成を期するの諸點に就ては、職工側の要求略ぼ貫徹したれども、肝要なる賃銀增給に對する會社の方針明なるを得ざるを以て、右の報告の公にせらるゝや、十八日正午の汽笛と共に、當日出勤の本工場職工約一萬六千七百人は怠業することゝ爲れり。而して職工側に依て選出せられたる實行委員は之より前、機械を破壞し、又暴行に類する擧動を敢てせざるやうに、全職工に注意し、又怠業するは、罷業を行うものに非ざるを以て、職工自ら其地位を守り、機械も亦之を運轉し、唯極めて緩漫に仕事を爲す可しとし、全職工は此意を諒して拱手機械の傍を彷徨し、技師や工場長の如き、之に對して施す可き所を知らざりしと云ふ。

斯くて彼等の怠業は九月二十六日まで繼續し、同二十七日より純然たる同盟罷業と爲り、月末に至つて漸く解決し、十月一日復業するに至れる次第なるが、此間社會は造船所職工の怠業に對して、如何なる感を懷きたるや。第一に神戸市民殊に造船所附近に居住する市民が一種の不安を生活上に感じたることは、之を爭ふ可からず。固より怠業と罷業とは其性質に於て、異なるものあり、又罷業の場合に於ても必ず暴行殊に外部に對する暴行の伴うを必す可からずと雖も

一萬六千餘人の職工が事業主に對して、不平を懷き、勞働運動を試みつゝありとすれば、彼等の要求の貫徹せざる場合に、怠業は一變して罷業と爲り、勢の激する所、更に如何なる暴行の伴ふものなきを得るや、此點に就て市民が不安を懷き、怠業者を忌むの念を催ほしたることを否む可からず。第二、鐵工業は戰時非常の勢を以て繁昌し、之に從事する職工亦所得の增加に依て、家計に豐なるを得たるの事實も亦動かす可からざる所にして、川崎造船所の如き戰時每半季に增給を行ひ、造船所職工は勞働者間に於て、羨望の的と爲れるのみならず、伍長、伍長心得等の所得は市中に於て相當の名譽の伴ふ職業の所得を凌駕するものあり。造船所職工が之に滿足せず、物價騰貴を理由として、怠業を爲したるに就ては、職工自身の側に於ては、相當の根據ある可しとするも、世間が之に對して深き同情を寄せざりしもの亦怪むに足らざるなり。第三、始め職工が會社に申出でたる增給案に於ては、職工の間に於ける賃銀の高低如何に拘はらず、總て同一率の增給を爲すことを骨子としたり。然れども物價の騰貴、生活の困難を理由として、增給を事業主に求むるものならんか、增給の率は之を上級職工に薄くして下級職工に厚くせざる可からざるの道理なるに、上下一率の結果、金額に於て上級に厚くして、下級に薄きの事實を生ぜざるを得ず。斯の如きは世間をして怠業に依て、勞働運動を試みたる上級職工が自家の利益のみを發揚するに急なるものなりとの感を懷かしめ、運動に對する同情を冷却せしめたるの嫌を免かれず。松方社長と職工代表委員との第二回會見（九月二十五日午後）に於て、松方氏が此點に就て職工の態度を難詰し、「俺がお前方の條件第一を採用しない意見を簡單に言はう、お前方の理由とする所は生活難で困ると云ふのである、故に在る書類を見ると上の人も下の人も同じやうに賃銀を上げると云ふのである。上に爲れば、上に爲る程、率が多く爲るぢやないか、下に居る者は割が惡いねえ。下に居る者はそれだけ賃銀も低い、生活難も多い譯だ、下の者ほど氣の毒なものだ、之に氣が附かないかね。此理由だけでも、採用しないのだ」と云へるは、最も好く職工側の要求に於け

る弱點を攻撃したるものとす可く、流石に多年職工の操縦に從ひたる松方氏の手腕頗る凡ならざるを認めざるを得ず。

勞働運動の成效に必要なる條件は一にして足らず。就中必要なるは勞働者が或る種の運動を爲す場合に、其運動の趣意、之を必要とする所以に就て、廣く世人の理解を求め、同情を博するの一事なり。川崎造船所の怠業が此點に於て缺くる所ありしは、勞働運動として、盡さざりしものあることを語れりとす可く、殊に事業主に依て、運動の目標とする賃銀増率の方法に關する缺點を指摘せられ、上級職工と下級職工との間に於ける利害をして衝突せしむるに至る原因を設けたるが如き、一個の失態とせざるを得ず。

二、怠業の原因は何れに在りや

川崎造船所職工の怠業は彼等が賃銀の増率を事業主に要求し、其拒絕に會して、事業主の反省を求むる爲めに、行はれたること明白の事實なり。唯玆に一の問題とす可きは、何故に彼等は同盟罷業を行はずして、同盟怠業を敢てしたるやの事是れなり。同盟罷業は一時の氣勢又は感情に依て決行せられ、其突發的なると共に、同志を糾合するの容易なるものあり、且つ我國に於ては勞働運動として、同盟罷業は勞働者間に最も普遍せる形態なるに、彼等が此方法を取らず、我國に於ては極めて斬新なる怠業を行ひたるは何故なるか。怠業が將來は知らず、川崎造船所の職工に依て、利用せらるゝまでは、我國に於て頗る珍奇の方法にして、隨て怠業者全般に之を諒解せしめて、其趣意を徹底するに困難なりしや、論を俟たず。然も彼等が罷業を取らずして、怠業を用ひたるに就ては、深く根據の存するものあり。蓋し我國には治安警察法第十七條の規定の嚴峻なるものありて、常に勞働運動に壓迫を加へて已まず。同條に於ては、其第二項を以て、勞務者をして勞務を停廢せしむる爲めに、暴行、脅迫、誹毀を加へ、又は誘惑煽動を爲したる場合に、之を有罪とすることを規定したり。是れ卽ち同盟罷業に對するに最も辣手たる方法を以てし、斯くて罷業其ものを絕滅する意を

藏するの立法と見る可く、如何なる場合の同盟罷業に於ても、罷業の意思ある勞働者が他の勞働者を勸誘し、又は煽動して、罷業を共にせしめんか、直に誘惑煽動を試みたる者として、治安警察法に據る刑罰に處せられざるを得ず。我國に於ては、僚友の間に若干の犧牲者を出すの覺悟あるに非ざれば、同盟罷業の行はれざる所以玆に在り。現に最近砲兵工廠の同盟罷業に於て、始め政府は當今の罷業に治安警察法第十七條を適用せざることを非公式に言明しながら、後に方針を一變し、罷業解決の後に於て、「砲兵工廠の罷業に關係したる主動者を檢擧したる事實の如き、全國の勞働者に政府の對同盟罷業方針の如何に恐る可きものなるやを知らしむるの一端と爲れり。余は曩日勞働者の會合したる席上に於て一場の演説を試み「諸君にして大鹽平八郎たり、佐倉宗五郎たるの覺悟あれは、同志を糾合して同盟罷業を爲すも可なり。此覺悟なくして、一方に治安警察法第十七條の存在する今日、同盟罷業を企てんか、意外の災禍を蒙らさるを得ずと云へることあり。(然も今日同罷盟業を蛇蝎視する我國の内務省が浪花節を以て、國民教化の方便なりとし、浪花節語りをして盛に全國に就て、佐倉宗五郎其他の義民傳を講釋せしめ、「殺身爲仁」と云ふが如き人物を養成せんとしつゝあるは、滑稽の沙汰とす可し。)同罷盟業の善惡正邪に就ては、人に依て觀察の異なるものある可しと雖も、要するに勞働者が事業主に對して、勞働條件の改正を求むるに當り、自家の背後に備うる一の武器たるの點に於ては、疑を容る可からず。既に一の武器たり、之を用ゆることもある可く、又用ひずして、他を威壓するに止まることもある可し。然も此武器の使用が我國現行の法制に於て、容易ならず、勞働者の間に負傷者を生ぜしむるの覺悟なければ、之を使用する能はずとせんか、彼等が他に安全なる武器を求むるは已むを得ざるの數なりとす可し。

川崎造船所の職工が同盟罷業を爲す場合に、蒙る可き法律上の制裁を恐れ、現行法に於て制裁の加へられざる怠業を以て、事業主を苦しむるの手段としたるは、職工自身の發意なるか將た又何人かの智慧に依れるものなるか。余が神戸

市に於て會見したる人士中には職工中、代表委員として、活動したる者が多く友愛會員なるの故を以て、友愛會こそ怠業運動の指導者なりとの説を懐く者あり、又職工が近來新思想を紹介する雜誌を愛讀する結果なりとし、中央公論を其雜誌の一に數へたる者ありきと雖も、何れも一場の推測を逞うしたるに止まり、確乎たる證據の存するに非ず。余をして忌憚なく所信を陳ぜしめんか、治安警察法第十七條に於て、政府が同盟罷業に嚴重なる掣肘を加ふればこそ、勞働者は敢て怠業の已むを得ざるものにして、怠業を不可なりとすれば、勞働者をして斯る運動を必要とするに至らしめたる政府こそ、第一の責任者とせざる可からず。果して然らば怠業を抑壓し、又、我國の工業界より之を一掃せんとする以上は、怠業に代つて、或る範圍の下に、同盟罷業の行はるゝことを合法的處業とする外に、適當の道なしとす可く、今日の儘に同盟罷業を禁遏せんか、結局怠業は之を處罰するの規定なきに乘じて、到る所に我國の產業界を賊するに至る可し、寧ろ職工組合指導の下に、合理的に、又合法的に同盟罷業の行はるゝ餘地を存するを以て賢明なりとす可きなり。

三、怠業は所罰するを得ざるか

怠業は法律上所罰するを得るや否や。治安警察法第十七條が同盟罷業を所罰するを得ること、前論の如し。然も怠業に至つては、同條の規定は之を如何ともする能はざるなり。蓋し同條に於ては、其第二項を以て、勞務者をして勞務を停廢せしむる爲めに、暴行脅迫誹毀を加へ、又は誘惑煽動を爲したる場合に、之を有罪とすることを規定したり。然も怠業は決して勞務の停廢に非ず、單に或る時間又は日數に於て爲す可き一定分量の仕事を平生よりも、長き時間又は日數を費して、爲すものなり。川崎造船所に行はれたる怠業に於ては、職工が怠業なるものに慣熟せず、又其趣意精神を諒解せざりし爲に、動もすれば普通の狀態に於て、仕事を爲すか、然らずんば全然仕事を停廢するか、二者の一に出でんとしたるやに聞きたれども、怠業の特色は緩漫に仕事を爲すに在りて、之を停廢するに非ざる以上は、當局者が治安

警察法に大曲解を施さゞる限り、其第十七條を以て、怠業に臨む能はざるなり。勞働者が怠業を以て、事業主の横暴に當り、自ら同盟罷業を回避するに至れるは、治安警察法第十七條を楯として、勞働運動を禁遏せんとする我國の當局者に對して、最も皮肉なる態度を示したるものとせざる可からず。

怠業は勞働運動として、極めて卑怯なりと云ふの說あり、又同盟罷業の男性的なるに對して、怠業を女性的なりとして、排斥する者あり。現に松方社長と職工代表委員との第二回會見に於て、松方氏は「サボタージユ」を非難して、左の言を爲せり。

お前達は世界的に卑劣と云はれて居る「サボタージユ」などをして、情ない。世界では、「サボタージユ」に同情する人は一人もない。「サボタージユ」をやる位なら、男らしく「ストライキ」をせよ。「ストライキ」は世間に同情がある。同情を得ると得ないとは、非常な相違ぢや。

然るに職工代表者の一人は之に答へて「私達は決して好んでやるのではありませんが、日本の法律では、「ストライキ」をする事が出來ないやうに爲つて居りますから」と云へり。余は此問答を對照して、松方氏の「サボタージユ」に對する非難は日本に於て治安警察法第十七條の規定が改廢せられ、合法的に同盟罷業の行はるゝ餘地の存するに至れる場合に發せらる可き言にして、今日に於て、之を發するは聊か尙早の感なき能はず、寧ろ職工代表者が現行法の下に「サボタージユ」を已むを得ざる手段なりとしたる意見に贊成せんとす。左に掲ぐるは、職工委員の一人野倉萬治氏が怠業中大阪每日新聞に寄せたる文章なり。

（前略）彼の治安警察法、第十七條の如き惡法の未だ撤廢されざる今日吾々勞働者は假令飢餓に瀕することあるも、從業員全部結束して、所謂男らしき同盟罷業の擧に出づる能はざるのみならず、罷業者に同情して、寄附金を贈るさへ

處罰せらるゝ如き、不法の脅迫に苦しめられつゝあるのである。增賃を要求せされば、餓死を免かれず、同盟罷業の擧に出でんか、惡法の適用の之に臨むある時、吾々は生存を全うせん爲め、遂に男らしからざる怠業の擧に出づるも、亦已むを得ないではないか。抑も斯を玆に至らしめた責任者は誰であらう。之を國家的に見て、爲政者の罪である。之を社會的に見て、資本家の罪である。生產組織のみを歐米先進國に倣うて、勞働問題のみは封建時代の温情主義を以て、解決せんとする時代錯誤の罪ではないか。(下略)

野倉氏の意見に對しては、余は全然同意を表するに躊躇せず、怠業を以て、男らしからざる所業なりとして、之を排斥するが如きは、余の遽に與する能はざる所なり。

或は官憲が怠業を處罰するの目的を以て、强ひて「現行の法規中に適用す可き條章を求めんか、刑法第二百二十二條に於て「生命、身體、自由、名譽、又は財產に對し害を加ふ可きことを以て、人を脅迫したる者は一年以下の懲役又は百圓以下の罰金に處す」とあり、第二百二十三條に於て「生命、身體、自由、名譽又は財產に對し、害を加ふ可きことを以て脅迫し、又は暴行を用ひ、人をして義務なき事を行はしめ、又は行ふ可き、權利を妨害したる者は三年以下の懲役に處す」とあり。官憲が法律を曲解するの所業を敢てするの意あらんか、是等の規定に據て、怠業者を所罰するを得べく、又公安を害するの理由を以て、怠業者をして工場外に去らしめ、彼等をして其結束を解かしめ、然る後に會社に於て個々の職工と新條件を結んで仕事に復せしむるも亦一策なり。政府從來の態度を以てするときは、斯る强壓手段の怠業者に加へられざるやを保する能はざりしが、流石に川崎造船所に於ける十數日間の怠業に於て、斯る事實に接せざりしは、官憲の勞働問題に對する理解に一進步を來したるの證左とす可きや否や、余は此點に就て速斷を下さず、姑く他日の事實に徵せんとす。

四、警察、軍隊並に勞働運動

假に官憲が法律上の規定に或る假託を求めて、怠業者に取締を加ふるの方針を決定したりとして、如何なる手段を實際に施す可かりしか。警察が取締の局に當る可きは論を俟たずと雖も、神戸市に於ける警察官の數は三百名内外に過ぎざる一方に、川崎造船所の職工は一萬六千餘人の多きを數ふ。前者の三百名が如何に警察力を擁するも、自家の生活問題に基ひて、結束したる一萬六千餘人に對して、果して能く威力を發揮するを得べきや否や。後者にして暴行を逞うするが如きことあらんか、前者は殆ど手を下すの道あるを得ざる可し。茲に於てか往年神戸市に起れる米騷動に處したる先例に從ひ、軍隊の力に依て、勞働運動を壓迫するの外に、施す可きの手段なきに至る可しと雖も、軍隊を軍事以外の目的に用ゆることの可否に至つては、一個の問題とせざる可からず。聞く所に據れば、所轄警察署は警察官に職工同様の靑服を裝はしめて、造船所工場内に配備し、怠業者に混じて、以て怠業の狀況を偵察せしめたりと云ふ。思ふに警察當局者の意は之に依て一部の職工が他の職工に脅迫暴行等を加へて、其意思を強要し、怠業を共にせしむることなきや否や、怠業より更に歩を轉じて、機械其他事業主の財産に對する破壞的行爲の行はるゝに至らざるや否やを監視し、次第に依ては、斷乎たる取締を施す可き材料を蒐集するの一事に存したるが如しと雖も、怠業者の行動に非難す可きものなく監督取締の問題が有耶無耶に終れるは、種々の點より見て、慶賀せざるを得ず。萬一軍隊に依て、勞働運動を壓抑する先例の開かれしならんか、我國に取つて、甚だしき不祥事を現出す可かりしなり。

茲に於てか余は敢て主張せんとす、勞働運動に對して、適當なる處置を講ずるは、力の問題に非ずして、道理の問題なることを。勞働運動其ものが一の力なり。之に對するに、更に警察と稱し、軍隊と云ふ力を以てせんか、二種の力は遂に衝突するを免かれず、寧ろ道理に依て、勞働運動なる力を其正しき道に善導するを可なりとす。今回の川崎造船所

怠業事件に於て、松方氏が當初より官憲に依賴して、其解決を求めんとせず、一方に職工の行動必ずしも常軌を逸するに至らず、官憲をして其權力を用ゆるに所なからしめたるは、吾人の如き平生勞働問題の解決に官權の干與することを好まざる者の大に愉快とする所なり。

五、溫情主義の破產

溫情主義なるものは我國の資本家が勞働問題解決の手段として、常に誇稱する所にして、彼等は此主義の行はるゝを以て、我國に於ける資本勞働關係の特徵に充てんとす。溫情主義に對するものは、即ち薄情主義ならざる可からず。溫情と薄情と孰れか可なりやと云へば、其前者なるは、論を俟たざる所なり。唯世間に於て資本家の溫情主義と稱せらるゝもの、多くは外面を裝ふに止まり、實際に徹底せず、又時に行はるゝことありとするも、事業主は一方に勞働者に與ふ可き賃銀を低廉にし又は待遇を不良にし、溫情主義に依て與へたる所のものを他の形態に於て奪はざれば已まざらんとす。余が溫情主義を口にする資本家の態度に對して、毫も感服する能はざる所以なり。

假に資本家が勞働者に對して、溫情主義を施すことを可なりとせんか、川崎造船所に於ける松方氏の如きは、眞に模範的社長を以て目せざる可からず。氏は如何なる場合に於ても、毎日早朝職工と同時刻に會社に出勤すると云ふに非ずや、神戸の如き道路の狹隘なる市街に於て、自動車を疾驅することの市民殊に職工の感情を害するを慮り、舊式の馬車を乘用に充つるに非ずや、氏が出勤の途上、門限に遲るゝを恐れて、必死に疾走しつゝある職工に會するや、自ら自己の馬車に扶け乘せて、工場の門前まで送るが如きは、殆ど尋常の出來事なりと云ふに非ずや、市立の補習學校に寄附金を爲して、造船所の職工の通學に便せしめ、學校を卒業したる職工には優等卒業者に對して一日四錢、普通卒業者に對して一日二錢の割合を以て、賃銀を增給し、以て彼等の就學を奬勵しつゝありと云ふに非ずや。松方氏と職工側委員と

の第三回會見(九月二十七日)速記錄を讀むに、左の一節あり。

生活難だから、給料を上げて、呉れと云ふのは、一通り聞えて居るが、それも下級の者が可愛相だから、上級者よりも餘計に增して、呉れと云ふのなら、如何にも情誼のある申分だが、上級の者ほど率を多くし、下級の者ほど率の低いなどに至つては、全然情誼を履き違へた仕打だ。俺は歐羅巴に二三年も行つて居たが、五十幾歲になる男が一人ポツチで一つ部屋に朝夕を送り、斯くまで長く滯在したのは、何の爲めだと思ふ。全く川崎の職工が仕事の材料に苦しまぬやう努力するの一念に外なかつたのぢや。唯商賣ばかりして、儲けることに苦心した譯ではない。

此一節を通讀せんか、松方氏の職工に對して、懷きつゝある溫情は自ら言外に之を認むるを得べく、彼の溫情主義を聲明しながら、自己の管理する工場より、多數の肺結核患者を續出する某々資本家に比較して、不言裡に溫情主義を實行する松方氏の態度こそ稱讃するに値するものとす可きか。然らば松方氏の溫情主義は從來川崎造船所に於て職工の勞働狀態の極めて平穩なりし時代には、大なる效果あるものと想像せられたれども、今回の如き怠業の發生したる場合には、殆ど效果を認むる能はず、平生溫情主義を崇信したる者も、此主義の實際に資する所少なきに歎ずるの外なかる可し。

會社の當事者は斯く溫情主義の職工に徹底せず、又職工に依て報ひられず、却て怠業の如き不祥事件の現出するに至れる所以を解して、之を職工の出入頻繁なるの一事に歸したり。思ふに川崎造船所本工場の職工一萬六千人の內にて、六個月以內の期間に於て、他に職業を轉ずる者四千九百人の多きに上り、殊に近年各地方に鐵工業勃興し、職工爭奪の盛なる爲めに、益々異動の行はるゝを見るといふ。職工の異動の多きは、溫情主義を徹底せしむる、妨害たるを失はざる可しと雖も、一方より見れば、職工異動の自由は今日勞働者の有する權利の一にして、之を抑制せんとするも、抑制し得べきに非ず、之を抑制したる場合に、始めて溫情主義の效果を見る可しと云ふが如き、余を以て之を見れば、寧ろ溫

情主義の效果を否定するの言とせざる可からず。今や米國華盛頓に開催せられんとする國際勞働大會に、我國の資本家を代表する武藤山治氏は大に溫情主義を鼓吹し、之を以て我國勞働問題解決の關鍵なることを諸外國代表者に說明するの意氣込なりと傳へらる。氏の口より斯る說明を聽取したる外國の人士が日本を以て依然封建時代に於ける主從關係の存在する半開國と認めざるを得るや否や、一個の疑問とす可きのみならず、武藤氏よりも遙に溫情主義を實行しつゝある松方氏の工場に怠業事件を生じ、而して溫情主義を唱出する武藤氏が其使役する可憐なる工女に對して、八時間勞働を行はず、夜業も亦撤廢せずと云ひて、抑も如何なる邊に溫情主義の效果を擧げんとするものなるか、氏にして亞米利加三界に自己の不明不見識を暴露せずんば、幸なりとす可し。

六、立憲的工場制度の必要

川崎造船所に於ては、八時間勞働制度の採用の已むを得ざる事實なるを豫測し、其實施の準備として、必要なる機械を外國に註文し、其一部分は現に日本に到着して、据付の時を待つの狀なりしと云ふ。蓋し勞働時間が短縮せらるゝも直に勞働能率に上進を來して、生産力の旺盛を得るものに非ず、時間短縮と共に減損せんとする生産力を補充するに、機械力を以てするの一事は、當局者の最も必要と認めたる所の如く斯くて機械の設備を完全にし、八時間勞働制を實行し、八時間勞働の下に於て、尙ほ以前の長時間勞働に於けると同樣の賃銀を職工に收得せしむるの工風を講じつゝありしもの丶如し。故に川崎造船所の職工は今回の如き怠業を爲さゞるも、早晩八時間勞働制の下に、改正せられたる賃銀の給與を受く可きの地位に居れるものにして、彼等の怠業は此機會の到來を促進したりと云ふよりも、寧ろ之を遲延せしめたりとするを至當なりとす可きか。事業主には勞働者に利益ある處置を施す意の動かす可からざるものあるに拘はらず、勞働者が之を諒解せず、又近く事業主の或る處置を實行する時期を待つ能はず、不穩なる勞働運動に依て、其實

行を求むるが如き、要するに資本家と勞働者との間に相互の意思を理解するに至らしむる機會と機關との缺くるものあるの結果とせざる可からず。

更に今回川崎造船所に於て、事業主と職工との間に衝突の一原因と爲れるは三百七十五萬圓の功勞金分配の件なり。造船所が此功勞金分配を發表したるは、本年上半季總會の當時にして、爾來社員並に職工は一日千秋の思を以て、分配實行の時期を待望したるに拘はらず、夏來り、秋を迎へて、尚ほ分配金に接手する能はず。玆に於てか職工間には造船所は其以後に起れる船價暴落の損失に堪へず、分配金を有耶無耶に葬り去るに非ざるやの風說を生じたり、而して社員中分配金を見込んで、或は洋服を註文し、或は其他の物品を購入したる者も分配金の實行遲延するに於ては聊か目算の外るゝものあり、會社をして實行を急速ならしむるの目的を以て、職工を煽動したる傾ありと云ふ。（此事は余が神戸市に於て聽き込みたる風聞にして、事の眞僞に就ては、責任を負はず）然るに之を會社側に就て聞くに、功勞金の分配が遲延したるは、他意あるに非ず、會社に於ては、造船所が今日の發展を致したるを以て、現在の役員又は職工の功勞のみに之を歸せす、多年造船所に勤務して、今日既に他に轉職したる人の如き、將た又既に物故したる人の如き、同じく功勞者として功勞金の分配を受く可きものなりとし、其人々又は遺族の氏名住所を調査するに就て、時日を要し、遂に社員職工の希望に應じ難きものなりしと云ふ。然らば此點に於ても事業主と職工との間に、意思の疏通せざるものありて今回の爭議を惹起すに至れることを看取するを得べし。

事業主と職工との意思に疏通を缺くの一事は啻に川崎造船所に於て、然るのみならず、殆ど我國全體の工場に共通の事實とせざる可からず。而して此事たる、我國工場の經營が全然資本家專制の主義に基き、職工又は其代表者をして何等與り知らしめざるの故に、起るものとす可し。余は此機會に於て、敢て彼の「ギルドソーシヤリズム」を、我國に輸

入して、勞働者に產業管理權を與ふるの必要を主張する者に非ず、唯今日に於て特に必要なりと認めらるゝは、事業主が事業の經營方針、將來の計畫等に就て、社員に知悉せしめて可なる所は盡く之を勞働者にも知悉せしめ、彼等の所望にして、採用するを得べきものあれば、之を採用して、以て兩者の間に於て充分の諒解を得るの一事に外ならず。今日は會社の社長又は重役が職工勞働者に對して、漠然自分達に信賴せよとか、自分等の面目を立てよとか、お前等の利益は引受けたとか、空疎の言を弄したるのみにて、勞働者の滿足を收め得べき時代に非ざるなり。若しも、我國の勞働者階級にして斯る時代に彷徨するものなりとせんか、例の內務大臣床次氏が關西邊の俠客顏役連中を懷柔して、自家藥籠中のものとし、以て勞働問題の解決に利用せんとするが如き、一個の策略として、認められざるに非ずと雖も、今や時代は著しく急變し、勞働者は自己の權利として、或る事柄を事業主に要求し、其自己の權利たる以上は、事業主に對して一歩も假借する所なきの意思を有するの一事は之を否定す可からず。此事たる時代の進步の正に然らしむる所にして、國民に普通選擧權を與へて、立憲國民たる資格を有せしむることの必要なるが如く、勞働者にも立憲的工場制度の下に事業經營上の諸事項を知悉せしむるを以て、今日當面の急に適したる處置なりとす可きなり。

結論

川崎造船所に於ける怠業事件の副產物として、吾人が最も大なる價値を認むるは、八時間勞働制の實行せられ、又關西諸地方を通じて、此時間制の流行を促し、更に之を關東に及ぼさんとするの一事是れなり。固より川崎造船所は夙に八時間勞働制實施の方針を決定し、之を實行する時機を覗ひつゝありしこと前記の如くなれども、職工の怠業問題が八時間制實行を急としたるや、論を俟たざると共に、他の鐵工業其他大規模工業にて、續々之に追隨せざる可からざる機運と爲れるは、一に怠業なる禍が八時間勞働制なる福に化したるものとす可し。今や華盛頓府に開かる可き第一次國際勞

働大會に於て、一日八時間、每週四十八時間を以て、勞働の最長限とする條件は議題の第一に上り、而して之に對して日本政府は除外例や猶豫を要求せんとすることの公然の秘密に屬し、又、我國資本家代表として、勞働大會に出席する武藤山治氏は八時間勞働制に反對することを、殆ど自家唯一の使命なるが如くに心得て、此點に關して何か全國資本家の寄託を荷へるが如き態度を示しつゝあるの際、事實は彼等の所信若しくは態度を裏切りて、八時間勞働制實行の機運に向はんとす。政府や資本家の勞働問題に就て理解を有せざるの一事は此事實に徵しても、亦知る可きに非ずや。

或は武藤氏の如き、米國に出發するに先だち、國內に於て八時間勞働制の行はるゝ事實に接して、心苦しき感に堪へざりしものか、八時間勞働制の下に、事業主と職工と合意の上或る時間の殘業を行ふの點を指摘し、是れ即ち八時間制勞働制の精神に反するものなりとの攻擊を試みたり。然れども斯の如きは攻擊非難を目的としたるの外、何等根據を有せざる議論なるのみ。事業には常に變動あり、其事業の產出する物資に對する需要にも亦增減あるを免かれず。然らば或る場合に、職工が殘業を行はんとし、事業主亦之を許すは社會に於ける需要も之に應ずる事業の供給とを調節する所以にして、斯の如きは資本家並に勞働者の社會に致す可き公共的任務とせざる可からず。唯此場合に問題とす可きは殘業に對して支拂はるゝ賃銀率の如何に外ならず。既に八時間を以て、勞働の正常時間とする以上は、之を超過する時間の勞働に對しては、正規の勞働時間に於て支拂はるゝ賃銀に幾倍したるものを支拂ひ、殊に時間の延長するに隨ひ、賃銀倍加の率を增加し、斯くて事業主をして長時間の勞働に依る生產費の加重を恐れて、之を思ひ止まらしむるを必要とするのみ。現に川崎造船所の改正賃銀規定を見るに、殘業賃銀は一時間に付き日給の八分の一とし、三時間以上の殘業に對しては、最低一割より最高五割五分に至る步增を付することゝあり。八時間勞働制と云へば、八時間以上に、一分一秒も、勞働者の勞働に就くことを禁止するものゝ如くに解するは、固陋の見たり。正規の時間以外に、步增賃銀の下に、

時間の延長を認容するは、事業の性質上、當然の處置なりとす可く、如何なる程度に於て、之を認容するを可なりとするやは、職工組合の主として限定す可き問題なりとす。武藤氏が現に我國に行はれんとしつゝある八時間勞働制を變則なりと攻撃するは、氏の自由なれども、氏の經營する紡績工場に於ては、此八時間勞働制の所謂變則法すら、尚ほ實行するに堪へざるに非らずや。自己の實行する能はざるものを他人が實行したりとて、之を稱揚せず、却て之を貶稱するに至つては、余は我國實業家と稱せらるゝ輩の氣儘勝手なるに就て、一驚を喫せざるを得ざるなり。

吾が國現前の思想界を論じサンタヤナを紹介す

ドクトル・オブ・フイロソフイー
立教大學教授　小島茂雄

一

吾が國思想界に於いて、サンタヤナは決して初耳ではない。未だ系統的にとは言ひ得ないが、彼の著書は官私立大學の教室に於いて或る程度までは講ぜられてる。未だ徹底的にとは言ひ得ないが、彼の思想は今までに多少文筆に載せられて讀書界に紹介せられてる。その最も優なるは、蓋し、田中王堂氏が一昨年の本誌九月特別號の卷頭に掲げた「現代に於ける人類解放の三使徒」と題する略七十頁に亙る一大論説の中に見出されるであらう。

私は當時王堂氏のこの論文を讀んで種々の理由から多大の感興を覺えたが、その特に私を喜ばしめたことは、彼が椽大なる筆をもつて私の恩師サンタヤナを吾が思想界に稱揚紹介して呉れた點である。又その頃私は既に彼の名著「獨逸哲學に於ける自尊主義」「學説の動搖」「哲學的三詩人」「美感」「詩と宗教」「理性の生活」第一卷の翻譯を總つてゐたので、或は戰爭中物價紙價騰貴の結果頓に寂寞を極めてゐた讀書界に自分の翻譯の現はるべき機運の到來したのではあるまいかと窃かに喜びの微笑をも洩らして見た。然し當時私は如何しても、日本の思索界にサンタヤナを紹介するの時期が未だ熟してゐなかつたゝめに、王堂氏のこの高貴なる努力も或は何等の反響を贏ち得ずに終りはせぬかと危まれたのである。果せるかな私の危惧は事實となつて王堂氏があれ程の折角の勞作に對する責任ある批評家の批判を私は不幸にして一つも見ることが出來なかつた。

あの時、王堂氏は人類の解放を論じて吾人をば現在の外に解放することでなく却つて現在の中に解放することであるとし、更らに『現代に於けるわたくし共の生活を、人間の性情が其れの完成を求めながら開展して來た結果と見、生活の根本義から其れに含まれ、そこに發見される總てのものに相當の價値を與へるが、其れの孰づれの一つにも法外の價値を與へないとに依つて、生活の意義を求めることであらねばならぬ。一層正確に

云へば、そうして、生活をして、自然に、其れの意義を發露せしむることでなければならぬ』とし、かゝる企圖をもつて任ずるものが現代に一人でもあるならば、彼こそは最高の意義に於ける人類の解放者でなければならぬと言つた。そこで『然し今そんな人があるか、どうか。幸にしてわたくしは、尠なくとも斯くの如き人が一人あることを知つて居る。其れは、ジョルジ・サンタヤナその人である』と斷じた王堂氏に從へば、サンタヤナが稀有なる思想家である所以は、彼が過去二百年間の所謂科學の時代にその弱點を察しながらその長所に盲ならざる眞の批判者の乏しい中に、その結果として分離反目するに至つた知慧（生活全體の幸福を圖る考慮）と知識（この幸福の實現のために個々の方便を作る計畫）とに夫等の正當な關係を回復した點にある。而してそれが十九世記の哲學者のように認識論の中間物を通らずに、又學究的の方法にも依らずに、藝術的創造或は人生的興味の上に哲學的原則を立つることに依つてなされた點にある。則ち彼が「人間のあらゆる欲望、あらゆる行爲、あらゆる事件、あらゆる機關の意義と關係とを評價するために、彼等の精神作用の顯微鏡的分析と、社會生活の顯微鏡的觀察と」をなし、「人間の活動と發達との一切を擧げて、其れを、理性が衝動を材料として、永久に、實在を建設して行く、或は、其れを鞏固にし、豐富にして行く一つの道程」と見る點にある。私は王堂氏と共に『サンタヤナを呼んで、現代に生存する最賢者の一人とするに躊躇しないものである。何人にても、彼れの著書を讀むものは、彼れの示した博大な知識、雄深の見識、寛厚の同情、そして、精到の判斷をあの驚く可き程度にまで、あの驚く可き均勢に於て所持して居ることから、彼れを目して、たゞ學界に於てのみならず、汎く、人界に於ける第一人者とせざるを得まい』と思ふものである。故に、王堂氏があれだけに努力し、本誌があれだけに厚意を表してなされた、吾が國思想界に於ける鄭重なるサンタヤナ紹介が殆んど何等の反響をも持たずに葬り去られたことは、如何に時が戰亂野人的の時代にしてサンタヤナの流麗都雅な思想を許容するの期未だ熟してゐなかつたとはいへ、これは到底私共の忍び難いところである。これ實に私が今回王堂氏よりは一層系統的に且一層徹底的にサンタヤナ紹介を試みむとする所以で、サンヤナに緣故深い本誌を同一事のために再び煩はさむと欲するところである。

私のこの企圖の動機は、決してサンタヤナに對する王堂氏の純正なる理解を疑つてこれを補はむとするところにあるのではない。たゞ彼がサンタヤナを紹介した時と今日との間に、そのへだたりは僅かに二ケ年に過ぎないけれども、世界は物質的に

も思想的にも非常なる變化を經驗し、日本も今や漸く舊套を脱して新たに改造せられんとしてゐる時に際會し、單にサンタヤナの機運が熟したといふばかりではなく、この際吾が國現前の思想界を論じこの稀有の哲人を紹介するのが專心彼を研究してゐるものゝ一人としての私の最も厳かな義務だと感じたところにあるのである。

二

日本の思想界を論ずるものは、吾が哲學者思想家の間に一種の默契の存在してゐる事實を見逃してはならぬ。この默契といふのは、吾が國の文學博士閥主として東西兩帝大教授及びその弟子等の間に遵奉せらるゝ傳說で、サンタヤナの所謂 Genteel Tradition 即ち御家流傳說とも稱すべきものである。而してこの御家流傳說を多かれ少かれ或る程度まで體現してゐないものは、到底、彼等の仲間入りが出來ないことになつてる。

この御家流傳說の眞相は如何なるものかといふに、私をして卒直に言はしむれば、それは獨乙哲學に於ける自尊主義である。今私は徐ろに、讀者と共に、この自尊主義が獨逸に生れた事情を穿鑿し、次ぎに如何にして吾が國の思想界がこれを御家流傳說として後生大事に今日まで遵奉し來つたかを檢察して置かなければならぬ。これは私にとつて決して容易な仕事ではないが、サンタヤナの近著「獨逸哲學に於ける自尊主義」より受けた啓蒙に勇氣づけられて敢へて爲て見ようと思ふのである。

近世思想史は確かに文藝復興期(ルネツサンス)に於ける「我」の發見に始まると言ひ得る。この「我」が教權と國家と自然との外部的壓迫を蒙りつゝ、且それ自身の內部的不調和と乖離とを調停しつゝカントの批判哲學に至れる歷史は、極めて興味深い文明史の一節である。その教權に反抗するプロテスタントの宗教改革運動として發展するに當つて、カソリツクの教權と信條とに勇ましく挑戰してゐる間は、その內外に生々潑溂たる自由の氣が漲つてゐたが、その漸く運動の第一步を踏み出したと思つた時そは自ら編んだ神學系統と禮拜形式との繩をもつて自らを縛ることゝなつて了つた。又この教權の盲從から一時自由にされた、「我」は、當時旺盛を極めてゐた國家の壓迫に屈從することになつて了つた、則ち、國家至上權の下に個人の意志及び良心は威壓を受け、後に至つてはこの國家と結合した教權によつて再び自由であるべき筈の信仰を强制せらるゝことにすらなつたのである。而して眞に徹底した反教權中心主義と反國家至上主義とは最初「我」の科學的研究の方面に發展して行くところに見出されたのであるが、それも總て次第々々に教權よりも國家よりも

更らに一層怖ろしい自然てふもの丶確立を見るに至つて、「我」はそれ自身の自由を許容しない機械論的人生觀及び自然觀の束縛を甘受せねばならぬことになつて了つたのである。同時に、「我」は又內部的に種々の問題に出會した、例へば、理性我と情意我との不調和或は乖離はデカルトとスピノーザとに於いて認められ、彼等がその調停に於いて終ひに無益な努力を費したのを見るのである。

これを要するに、カント以前に發見された「我」は個人我たるに過ぎなかつたのである。それは他の多數個我と共に社會に生存してゐたもので、敎權國家及び自然等よりして絕對的には解放され難いものであつた。その生存する間は、必ず或る種の敎權國家及び自然の下に保護せられ、その代價として絕對自由を讓步し、且內外の妥協的生活を忍耐せねばならなかつた。其處で敎權と國家とに反抗して自由を叫んだルネッサンスの「我」は、別種の敎權と國家とに壓迫され、又中世紀神學の奴婢にされてゐた希臘科學の復興を叫んだルネッサンスの「我」は、冷酷なる機械論的自然人生に威嚇され、玆にその內部に於いてはその各部分の不調和或は乖離となり、外部に於いては社會多數個我間の共同生活の破壞となり、今やルネッサンスの曙光はあはや滿天の黑雲に蔽はれ終らむずる氣勢を示したのである。時しも一道の活路はカントによつて開かれた。これ、卽ち、彼が超個人我の發見である。

由來、カントの研究はその全部が「我」の研究であるが、彼の研究した「我」は「我」の全體ではない。それは單に「我」に於ける先天的の機能だけであつた。語を代へていへば、「我」の經驗的或は論證的の方面でなく自明的な方面、卽ち、自律的の「我」或は理性の自律といふことがカント哲學の根本思想である。カントの言ふところに從へば、法則といはるべきものは必然的で普遍妥當的でなからねばならぬ。而してこれは理性自身が純粹に自ら律したものでなからねばならぬ。なんとなれば經驗から生ずる法則の確實性と論證より生ずる法則の確實性とは前者は愈々多くの經驗を積むことによつて、後者は假定された前提或は概念の確實性を益々高むることによつて、高度の蓋然性は有し得ても、必然的な普遍妥當性を有することは出來ないからである。故に苟も法則たる以上は、自然法も道德法も審美法も皆理性が自ら自由に律したものであらねばならぬのである。

私は哲學史の講義をしてゐるのではないから、カント哲學の詳細に亙る說明をする必要もなく又その餘白も持つてゐない。此處にはたゞルネッサンスに發見された「我」とカントに至つて發見された「我」との比較をすれば足りるのである。ルネッ

サンスに發見された「我」は個人我であつた。それは教權と國家との束縛から全然脫し得ないもので、殊に自然界の必然の法則の前には無條件に服從せねばならぬものであつた。然るにカントの發見した「我」は自律的の理性であつて、實に自然界道德界審美界の立法者であつた、而してその命令たるや、カント自身の語を借りて言へば、先天的綜合判斷で、必然的な普遍妥當性を持つてゐるものであつた。然らば、カントの發見した「我」にとつて教權とか或は國家とかいふものゝ權威は最早認められなくなつたばかりでなく、流石に冷酷なる自然すらその機械論的自然觀及び人生觀をもつてこの「我」の前に屈服せねばならないことゝになつたのである。なんとなれば、カントに言はせると、自然は「我」を離れた實在にあらずして、却つて「我」の所產だといふことになるからである。然るに何故に自然はこの「我」を離れて存在すると思考せらるゝかといふに、カントの意見に從へば、かの自然を生產せしむる理性の自律的機能は個人的の意識的機能ではなく、超個人的無意識的の機能、卽ち、カントの所謂 Bewusstsein überhaupt であるからである。卽ち、與へられた感覺の材料を時間空間の形式と悟性の法則とに從つて先天的に綜合して、必然的な普遍妥當的な法則に支配せらるゝ認識對象の世界を生產する作用は、勿論、個人の中に働いてはゐるけれども、それは超個人的にして且無意識的の機能であつて、たゞその作用の產物のみが意識に上るからである。さればルネッサンスに發見された「我」の個人我であるに對して、カントの發見した「我」は超個人我であるといはねばならぬ。而してこの超個人我の中に獨逸哲學に於ける自尊主義の種子が含まれてゐたのである。

三

「我」の發見は、確かに、近世哲學者の大なる貢獻に相違ない。吾が國思想界の御家流傳說を論じ獨逸哲學に於ける自尊主義を排するに當つても、私は哲學者等のこの功績を指摘するとを忘れるものではない。私の問題は、然しながら、これより更らに一步を進めて、カントの發見したかの「我」の概念が、彼以後、十八世紀より十九世紀の初半の間に、フイヒテ、シエリング及びヘーゲルの哲學に於いて如何に發展して行つたかといふところに生ずるのである。

之等三體系は獨逸哲學が盛期に於ける代表的體系で、カント哲學の眞精神を展開したものと思惟されてるものである、而して之等に最も特異的な共通點は、カントの發見した「我」の絕對化卽ち形而上學化、卽ち超個人我の神化（アポセオシス）である。カントからフイヒテ、シエリング、ヘーゲルの三體系に展開して行く論理的

發展を促したものがカント哲學それ自身の中にもあること、及びこの論理的發展の過程の研究は私の此處に關するところではない。要は先づこの「我」の形而上學化がカントの眞精神を發展したものではなくて、却つて破戒の純理的形而上學を説くものであることを示して置かねばならぬのである。由來、カントの發見した超個人我を神化して、これを絶對的或は形而上學的實在と見ることは認識論の立場に立つカントの眞意ではないのである。而してこれは彼の道德論に於いても同じである。則ち、彼が道德論に於ける「我」は一私的の利害得失等に支配せらるゝ個人的の「我」にあらずして、個人の内にある必然的な普遍妥當的な確實性を持つてゐる良心である。この良心こそ道德論に於けるカント哲學の中心觀念で、彼が發見した超個人我に外ならぬものである。而してこの超個人我を神化して、これを宇宙の根底をなす絶對的或は形而上學的實在と見ることは、彼が道德論に於いても又彼が認識論に於ける場合と等しくカント哲學の眞精神ではないのである。然もカントの哲學が獨逸に於いてかくの如き發展を遂げた所以のものは、超個人我の優秀性をば移して世界諸民族間に於ける獨逸民族の位置に擬し敢へて獨逸文化を世界唯一の文化として誇る獨逸人の自尊心の中にこそが深く根を張るに至つたところにある。これ實にカントの思想が軈て獨逸哲學に於ける自尊主義の温室と化した消息である。

この「我」の神化といふことに就いて、吾人が忘れてならぬことは、獨逸に於ける十九世紀前半の文藝の風潮であつた浪漫主義である。この浪漫主義は、その數多の特長の中で、特にその態度が主觀的である。然しながらこの主觀的といふことは、カント哲學の超個人的な意味に於いてゞはなくて、それは寧ろ因襲より脱して無批判的に新奇を追求する放逸な主觀で、時としては腦裡の事象に勝手次第な技巧も加へれば變化も與へるのみならず、隨意にこれを絶對化、形而上學化、神化するといふ全く個人的のものであつたことを忘れてはならぬ。さればこの文藝上の浪漫主義者の主張する「我」は感情を主とした個人我であつて、その個人我である點はルネツサンスに發見された「我」と同性質のものである。然るに獨逸哲學最盛期の主張する「我」はカントの發見した超個人我であるから、兩者の差違は大であるが、その共に「我」の絶對化を主張するは同一である。かくしてフイヒテ、シエリング、ヘーゲルの哲學は當時の文藝思潮と相呼應して「我」の神化を全うし、カント哲學の眞精神は何時しか精彩絢爛たる哲學體系と奔放不羈なる文學作品との影にその影を隱して了ふことになつたのである。

四

前項の終りに言つたことを裏書きする意味で、また終に言はむとするところに豫め備へるために、私は暫く讀者と共に奔放不羈なる文藝作品の優れたる「ファウスト」に現はれた浪漫主義を撿察して見たいと思ふ。

ゲーテが「ファウスト」を盛んに書いたのは、彼がストラウスブルヒとエッツラルとにゐた時からして、フランクフルトの故鄕に歸つてからのことである。この時代を彼は「要求する時代」と呼んでゐる。卽ち、彼は『我等の生活してゐる時代は要求する時代である。自己に對しても、他人に對しても古來人の曾て爲さゞりしことを要求する。重立つた思想家、感情家はかう云ふことを發見した。自然を直接に、起原的に觀じて、それを基礎として行爲するのが最上策で、それ以外の事は人として願望することが出來ない、それならば、人として到達することが容易である。さてこれをどう實行しようかと云ふことになると、天才を呼んで來るのが一番早い手段である。天才なら、その魔術的稟賦で、爭を息め、要求を充たすことが出來よう』と言つてゐる。この思想は獨逸の飆進逼進(ストルム・ウント・ドランク)時代の思想である。當時の哲學界を見るに、カントが「人間を支配せんとする善惡二性の爭」といふ論文を書いたのは僅かに數年前であつた。而してフィヒテの世界觀は既に「我」の絕對的努力の觀念で一貫してゐたのである。

ゲーテは「序言」でファウストをばシルレルが要求した通りに理性的觀念の代表者としてゐるが、ファウストが第一の獨言をするところでは最早民間劇のファウストが持つてゐる世間欲と知識欲とに加へて所謂「要求する時代」の思想を體現するやうに取り扱つてゐる。而してこの思想の體現は、卽ち、ファウストの事業欲に外ならぬものである。

ファウストの事業欲は、彼がロゴスの解釋によく現はれてゐる。彼が「新約全書の中に燃えてゐる啓示」を求めつゝ「約翰(ヨハネ)傳(でん)」を繙くや、開卷第一にロゴスの一語を見て、「素直な感じの儘に一遍神聖なる本文を好きな獨逸語に譯して見たい」には見たいのであるが、さて「語(ことば)」、「意(こゝろ)」、「力(ちから)」、「業(わざ)」の中何れにせんかと苦心の結果終ひに最後の飜譯を得るのである。

かう書いてある。「初にロゴスありき。語(ことば)ありき。」
もうこゝで己(おれ)はつかへる。誰の助を借りて先へ進まう。
己には語をそれ程高く値踏することは出來ぬ。
なんとか別に譯せんではなるまい。
靈の正しい示を受けてゐるなら、それが出來よう。
かう書いてある。「初に意(こゝろ)ありき。」
輕卒に筆を下さぬように、

初句に心を用ゐんではなるまい。
あらゆる物を造り成すものが意であらうか。
一體から書いてある筈ではないか。「初に力ありき。」
併しから紙に書いてゐるうちに、
どうもこれでは安心出來ないと云ふ感じが起る。
はあ、靈の助だ、不意に思ひ附いて、
安んじてから書く。「初に業ありき。」

——鷗外譯による——

この「業」といふ文字を神の業に解して、「創世記」の初にある天地創造とするのは、勿論、誤謬である。「約翰福音書」の意味するところはキリストの業で、ファウストの眞意は、即ち、彼自身の業でなければならぬ、とりもなほさず、ファウストの事業欲でなければならない。

この事業欲は從前民間に知られてゐたファウストの世間欲と知識欲どを冠するもので、ゲーテのファウストある所以である。これがファウストを驅つて「廣い世界へ出て行く」の冒險を敢行せしめたものである、彼をして魔術に信賴せしめたものである、彼をしてメフィストフェレスとの契約の中に自らの浪漫的信仰を表白せしめたものである、彼をしてエルパヘの賽、魔女の廚、ワルプルギスの夜宴等に於いて世界の味覺を恣まゝにせしめ、且反射鏡の中にヘレネの像を眺めしめた者である。而してグレエトヘンの大きな插話の後に、ファウストが浪漫的古典主義の冒險をファルツの帝都になすのもこれがためである、彼が攻め來る激浪を喰ひ止める堤坡を築いて共處に理想の共和國を建設せむとする新土開拓の大望を懷いたのもこれがためである、そして、最後に、彼がこの事業の永遠に繼續せらるゝを見る「美しい刹那」に瞑目したのもこれがためである。

ファウストの事業欲は、最初はかの民間傳説のファウストが自分の靈魂を賭しても終ひに思ひ及ばなかつたやうな人生の五味を嘗め盡すことであつた、然しながら彼は何處にも滿足てふものを見出し得なかつた。觀樂の甘い杯は何時でもその底に苦い滓を殘してゐた、そしてそれをも飲み干さずには止まないファウストは、その度に他の新しい甘い盃を求めた。此小さな世界で彼が最後に飲んだ杯は、即ち、かの牢屋に於けるグレエトヘンとの會見のそれであつた。ファウストは更らに如何なる新しい杯をば、彼が絶えず求めて已まない唇に當てるであらうか。この答は「ファウスト」第二部に見出さるゝもので、私が特に讀者の注意を促したいところである。ゲーテが稀に見る詩人哲學者として幽環華麗なる天才の彩筆をもつて描いた第一幕「風致ある土地」で、ファウストは今疲勞し果てた身を花咲く野

邊に横へて、不安らしく眠を求めてゐる。其處へ心優しい自然の精靈の一群が彼の頭上を輕く飛んで、彼等の指導者であるアリエルはアイオルスの箏の伴奏に連れて歌つて彼の疲れた靈魂を慰めるのである。ファウストは今や新しい力と望とを得て、朝の日光が山巓に觸れ纔て彼の伏す野に輝き初めた時、「斷えず最高の存在へと志ざして、力強い決心を働かせ」ねばならぬといふ大きな世界に眼を醒ました。そして彼は叫んで言ふ。

　好いから日は己の背後の方にをれ。
　己はあの岩の裂目から落ちて來る瀧を、
　次第に面白がつて見てゐる。
　一段又一段と落ちて來て、千の流になり
　萬の流になり、飛沫を
　高く空中に上げてゐる。
　併しこの荒々しい水のすさびに根ざして、七色の虹の常なき姿が、まあ、美しく空に横はつてゐること。
　はつきりとしてゐるかと思へば、すぐ又空に散つて、
　匂ある凉しい戰をあたりに張らせてゐる。
　此虹が人間の努力の影だ。
　あれを見て考へたら、前よりは好く分かるだらう。
　人生は彩られた影の上にある。

かくファウストが大陽に彼の背を轉じて、アルペン山腹に高く懸つてゐる瀑布を眺め、其處から立ち登る霧の上に彩られた虹を見た時に、彼は人生の大いなる暗示を與へられた。己が過去を回想すれば、それは恰も瀑布が無數の細流に碎ける如き人事の激流に棹してゐたやうなものであつた。激流に棹すことは不斷の努力である。勇敢なる事業である。然るに思ひきや、その激流の飛沫高く空中に立ち登つて七色の美しい虹を彩るとは、而してその虹は常に消え、常に現はれるものであるとは。あゝこれが人生の眞の姿か。ファウストが低く狹い世界からかくして高く廣い世界に移り、グレシア旅行となり、古代のワルプルギスの夜となり、ヘレネ悲壯劇となり、さては新土開拓となることは、讀者の親しく「ファウスト」第二部に就いて見らるゝに任せる。此處ではたゞ「ファウスト」を貫いてゐる浪漫主義の根本義の理會を得れば足りるのである。

「ファウスト」の浪漫主義は、事業欲にその根底を置いてるものである。そしてこの事業欲といふのは、吾等の既に見し如く人生の有りと有らゆる經驗を自ら嘗めんとする不斷の努力を指すのである、人事の激流に捲き込まるゝことを指すのである。然しながら若し吾人が事業欲にのみ沒頭するならば、人生は渦と苦痛と死とのみで、たゞその盲從あるのみであらう。然るに

この境から、謂はゞ、雲霧の如きものが立ち昇つて七色の美しい虹を映すのである。是處にファウストの事業欲から浪漫主義が生れるのである。

雲霧に虹を映すやうなものだといつたが、この虹は太陽の常住不變の絶對の姿を反射するといふ意味ではない。實は、太陽の無限力と無限存在とに吾等の背を向ける時に、始めてこの虹が眼に見ゆるのである。則ち、この虹は絶對の反映ではなくて、ファウストの言葉を藉りていへば、差別世界に於ける「努力の影」である。ファウストの世界は數多く、其處には大小の差こそあれ、一つ一つが差別の有る世界であつた。彼の世界は、徹頭徹尾、過程であつて、結論ではなかつた。世の中に絶對の結論といふものは一つもない。人は結論に生きてるのではなくて、過程に生きてるのである。生命は不斷の過程ではないか。而してかの虹もまた結論の反映(リフレクション)ではなくて、過程の幻影(ヴィッション)である。この幻影は、夫故に、吾人に結論を示さないが、過程の方向を幽かに示すものである、否、ファウストはさう見るのである。そして彼は

Am farbigen Abglanz haben wir das Leben

人生は彩られた影の上にある。

と叫ぶのである。これは彼が胸のゆとりである。これはメフィストフェレスが主の前で彼を評して、

あいつは妙な行方でお前さんに奉公してゐます。
あの變人は此世の物を飲みも食ひもしませんね。

と言つたところのものである、また主が

善い人間はよしや暗黒な内の促(うながし)に動かされてゐても始終
正しい道を忘れてはゐないものだ。

と言つたところのものである。このメフィストフェレスが「妙な行方」といひ、主が「正しい道」といふ、即ち、ファウストの胸のゆとりこそ「ファウスト」全篇を貫いてゐる浪漫主義である。ゲーテの詩であり、哲學である。

五

私はカントとゲーテとの間に、一つの大いなる類似點を見出すものである。これは兩者共に自らの世界を創造することに全身の注意を傾注してゐたことである。而して事業中の最大事業をば、カントは哲學的に企圖し、ゲーテは藝術的に實現せむとした。

ゲーテが「ファウスト」を盛んに書いた時は「要求する時代」で、天才ならば如何なる要求でもこれを魔術的稟賦で充たすことが出來るといふ思想は、獨逸の飆進遒進(ストルム・ウント・ドランク)時代の思想にしてレッシングに覺醒しゲーテに至つて成熟した思想であるこ

とは既に言つた通りである。この要求の精神がファウストの事業欲となつて發動し、「魔女の廚」、「隣の女の家」、「マルガレエテの部屋」、「ワルプルギスの夜」、「曇れる日」、「牢屋」等の中に何等の滿足をも見出し得なかつた時に、魔術の魅力とでもいはうか「人生は彩られた影の上にある」といふ暗示を得てから、終ひにファウストをして新土を開拓して理想の共和國を建設することに着手せしめた。然も彼はこの新土共和國の實現を見ずに、たゞその事業の永遠に繼續せらるゝ幻影を見た「美しい刹那」に瞑目したのである。

カントの世界創造の事業は、ファウストの新土開拓のそれに比して、遙かに偉大なるものであつた。彼が超個人我を發見して「我」をば理性の自律と見、自然界の立法者と見た時に、彼は自らをコペルニクスに比した。則ち、後者が從來の天動說を破壞して運動の却つて地球にあるとを主張したやうに、前者は自然界の法則は外界に存するにあらずして、却つて超個人我の自律的に與へたものであると主張した。而して後者は何故に運動する地球が不動の中心に見ゆるかを說明したやうに、前者は何故に「我」の所產である自然が「我」を離れて存在する如くに見ゆるかを說明した。かくしてカントは世界創造の事業を果してその中に住む人をして教權と國家と自然との外部的壓迫から免れしめた。而して彼がこの大業を成就したのは超個人我てふ魔術的魅力によつてゞある。それは恰もファウストが「彩られた影」の上に人生を見たのと同じことである。たゞ前者の所謂哲學的なるは、後者の藝術的にして肉も血もあるに比して、甚だ骨の瘦せてゐる憾みがあるだけである。

「我」の哲學は、この意味に於いて、ファウストの浪漫主義の如くに、それ自身宇宙に關する何等の體系をなすものではない。それはたゞ一種の思索の方法に過ぎぬものである、胸のゆとりに止まるものである。これを吾人はアルベルト・ランゲの所謂概念詩（ベグリッフスデヒトング）として觀賞するに少しも差支へないわけである。然るに吾が國にて哲學者と稱せらるゝ人々は決してそれを好まないのである、また實際それを許すだけの雅量がないのである。嘗て私が紀平氏の「認識論」に自分等の聊か關係してゐる「神學研究」誌上で批評を加へた時、彼は『時分も時々友人から、紀平が勝手な詩を歌ひ出したと評せられる、又小島君も自分の議論を「文學的構想」として許すと言はれた、同じ意見と見ることが出來る。自分はこの評語で滿足して居る。何故なれば、哲學は本より一の藝術であるからである、然し哲學の構想は最實在の世界で、科學や數學の樣な抽象的 Fiction ではない。何の「狂妄」であらう』と言つて返事をしたのを記

憶してゐる。この返事は「我」の哲學者の典型的な言葉で、彼等は到底自らの哲學が一片の藝術的作品たるに滿足するとが出來ずして、自らの哲學的構想それ自身を最眞實在の世界と同一視し、是處に端なくもカントの思想の中に潜んでゐた世界創造の魔術的な離れ業を演ずることゝなるのである。「我」は、則ち、是處にマンマと神の位置に取つて代つてるのである。

この「我」の神化といふことは、必ずしも浪漫主義の旺盛を極めた十九世紀初半に初めて起つたものではなく、それ以前にもあつたものである。例へは、デカルトは彼の二元論に於いて、「我考ふ、故に我あり」の「考へる我」を形而上學化した、又スピノーザはこれを客觀化して本體の一屬性とした。然しながらかゝる考へ方が大袈裟に流行をなしかけたのは獨逸哲學最盛期に於いて、カントの哲學がフィヒテ、シェリング及びヘーゲルの哲學に發展して行きかのカントが折角發見した超個人我が本體的假定や内在的概念開展のディアレクティクに進化(敢へて進化と言ふ、何となればこれが異教哲學の極致だからである)した時である。爾後ツイ昨今に至るまでその流行衰へずして、殊にヘーゲル哲學の魅力のある處には到る處に、この「我」の進化はサンタヤナの所謂御家流傳説として世界の哲學界神學界に於いて大切に遵奉されてるのである、而して神學系統にもせよ哲學系統にもせよ、この御家流傳説を多かれ少かれ或る程度まで體現してゐない系統け斷じて神學或は哲學の仲間入りが出來ないようになつてるのである。吾が日本などは、殊に、獨逸と幾分その國情を同じうし、教育の模範を獨逸に求め、從つて大學教授の多くが獨逸に於いて教育を受けたものであるがために右の御家流傳説は何時の間にか吾が思想界に深い根抵を持つことになつたのである。

六

私は決してこの御家流傳説を貶視するものではない。私はサンタヤナと共にこの「我」の神化の哲學をば、嚢に言つたように、宇宙の體系としてゞはなくたゞ單なる一の思索的方法であつて一と度暗示されると殆んど忘れ難いもので、誰でも欲するがまゝに何時でも執り得る態度であると見てゐる。これは確かに思辨に對してなされた近世に於ける主要な貢献ではあるか、元來が一方法一態度たるに過ぎぬところから、自我とは獨立に存在する宇宙自然とは如何なるものかといふやうな問題に對する答にはなり得ないのである。この答は、實は、小さな自我を捨てゝ、對象の中に身を投じそして謙遜に對象の運動の跡を辿ることによつて見出さるべきものである。この對象が若し發見されるとすれば、これを發見することに興味を持つ誰かによつて發

見されねばならぬといふ事實を幾度繰り返したとて無駄な話である。サンタヤナに從へば、吾等がこの御家流傳說と稱するものは系統的主觀說である。そは知識の遠近をばそが自我から發射するまゝに硏究するものである。そは知識を望樓（ものみやぐら）の如くに見て過去も未來も推定された事物も意想された事物もその周圍に恰もパノラマの上に描かれたかの如く橫はつてゐて、之等は皆認識の注意と現前の興味との遠心的光線に浴するにあらざれば見えるやうに明るくはならないとするのである。

問題は、御家流傳說を奉ずる哲學者等がこの彼等が認識の注意と現前の興味との遠心的光線に浴してゐる事物が卽ち現實なる世界だと主張することである。彼等は自らの認識が屢々成功してそれが實生活に於ける一種の技術となる時に、而してそが軈て不自由なく自分の實際の用を辨ずるに至る時に、そは自らを全能なりと誇り且自身にこの現實世界を創造したと揚言することになるのである。彼等は自らの浪漫主義と自尊主義との加勢を受けて、ふと全實在は彼等自身の如く一の超個人我と浪漫的夢想との無限的外延であると大膽に肯定することになるのである。而して彼等は人間の實在に關する觀念を實在そのものと混同し、自尊癖の助勢を得て人間を神の地位に置き代へる如き狂妄と冒瀆とを敢へてすることになるのである。

かく「我」の神化を事とする御家流傳說をばそを遵奉する哲學者に卽して觀る時に、吾人は彼等の自尊心を排さねばならぬ、又そを遵奉する國民に卽して觀る時に、吾人は彼等の自負心を斥けねばならぬ。サンタヤナが世界大戰の眞最中に著した「獨逸哲學に於ける自尊主義」は、實に、この點を說いて餘すところがない。この書の中で著者は、所謂獨逸哲學とは獨逸に於ける哲學ではなくて獨逸國民の自尊心と結合した哲學を意味すること、この哲學が舊教に反抗する新教の自己中心主義てふ遺產を相續してゲーテにその暗示を見出しカントにその種子を見出すこと、フィヒテとヘーゲルとを經てこの自我を中心とする思想が最も大膽な形をとつて來たこと、終ひにそがニィチェの如く自我を肯定して超人道德を高調するものを見出したこと、彼等が宛ら無謀な鬪牛が無鐵砲に死に向ふが如く突進するは全く眞實の生活と實在の世界とを無視する自尊主義の必然の結果であること、――等を極めて平靜に論じてゐる。殊に彼が序文の終りに於いてかの御家流傳說を奉ずる哲學者及び國民の自尊主義に加へた次ぎの數言は驚くべく正鵠を得たものであると思ふ。

自尊主義――思想に於ける主觀性と道德に於ける主意性と――は獨逸哲學の魂であるが、そは決して謂れ無きものでは

ない。そは如何なる動物でも地上に於いて又如何なる理智でも宇宙に於いて見出す自らの傷心的事態の純な表象である。そは生に於いて避け難い頭初の境遇である。然しながら凡ゆる物質的偶發事の如く、そは出來るだけ抽象し且輕視すべきものである。獨逸人の執拗、彼等の地位の稚氣と詭辯とは、たゞ避け難い妨礙であるものを頌揚することゝ、地上の屯所から人の靈が――少くとも襲に於いて――天に召されて飛ぶところの時間を共還に劃することゝの中にある。

この頌揚されたそして頑固な自尊主義は、獨逸哲學に於いて幾多の一私的且專門的な證跡が永い間私に啓示して來たものであるが、そは　や全世界に明白になつたであらうと思はれる。之は獨逸哲學者が戰爭に對して、或はかの遠くよりこの戰爭を準備したところの團體的狂信の再發に對して責任があるといふのではない。彼等は單に獨逸國民が今實行に現はしつゝあるところのかの和解を許さゞる自己肯定と形而上學的自負心とに與り且これを豫言的に正しとしたゞけである。誤謬ある宗教を持つは怖ろしいことである、而してその源因が人間の靈魂に根ざすことの深い程いよ〳〵怖ろしいことである。その以前にあつた多くの惠まれる宗教の如く現今獨逸人に靈感を與へてゐる此宗教は人類に二重の襲擊を加へた、一は世俗の兵器をもつて、他の一は嚴かな主張と詭辯とをもつて。この襲擊は、たとへその偶發的方式は訝かしくあるにもせよ、原則に於いては可なり大膽にして正直であつた。そは凡ての征服者と凡ての戰鬪的宗教の建設者とが時折自由或は理性に對して爲した襲擊のようであつた。而してその結果は疑なく同一であらう。自由は傷け得るも、亡ぼし得ないものである、理性は枉げ得るも、折り得ないものである。この暗黑なる攻勢は、能ふべくむば、兵器の力をもつて逐ひ還すべきものである、けれども若しこれに失敗あらむか、そは時あつてか智慧に於いてヨリ富める更に一層成熟せる民族が執つてもつて征服者の粗暴なる意志に奏功的に反抗することの出來るかの征禦し難い道德的抵抗によつて無效にされるであらう。

先頃の世界大戰に於いて、世界は辛うじて獨逸の武器の襲擊の鋭鋒を免れた。これは吾人が大いに祝すべきことであるが、同時に吾人は獨逸の「嚴かな主張と詭辯と」の襲擊を受け、最に言つたやうな事情の下に、既に早く降參して城下の盟を結び最今まで頭上に課せられたる御家流傳說を遵奉して日もこれ足らざる有様にあつた日本は忘れてはならぬ。

七

二百十日の暴風雨の後に心地よい秋晴の日光に浴し得るように、今や世界大戰の嵐は鎭まり、全世界の人心は漸く再び靜穩なる意識を恢復して、一方、嵐の過ぎ去つた跡の破壞の甚だ大なりしことに驚異の眼を見張り、他方、大戰時に於いて世界が拂つた犧牲の代償として未曾有の社會改造を實現せむとしつゝある。この時に當り、吾が國思想界に於いて、先づ第一に爲すべきことは、既に早く爲すべくして爲し能はなかつた獨逸哲學に於ける自尊主義の排斥でなければならぬ。これ私が右に委曲この自尊主義の眞相を說明し、且その發達の歷史を敍述し、如何にしてこの自尊主義が思想界の御家流傳說として吾が國に尊重せらるゝに至りしかを討究した所以である。

今次の世界大戰に於ける獨逸の敗滅は、吾が國朝野にとつて青天の霹靂であつた。獨逸哲學に於ける自尊主義を御家流傳說として遵奉し且之を大いに吾が國に鼓吹し來つた大學教授等及びその一味のものが、一時茫然自失したのも決して無理なことではない。彼等は今や、恐らく、獨逸哲學の魅力が獨逸國民の國際的地位に依つて左右せらるゝ事實に氣が付き、自分の机の上に堆く横へられた大學の講義或は筆記の中に嘗て世界に絕對的優秀を誇つた獨逸文化（クルツール）の悲慘な殘骸を見出し、住み馴れた世界が急に居心地惡く變つたことを嘆いてゐることであらう。而してこの間に、或はデモクラシイといひ、或は勞働運動といひ、或は實用主義といひ、或は新實在論といひ、何れも獨逸哲學に於ける自尊主義に對する反駁の部分に於いて戰後漸次その輪廓を明かにし且相互の理解を進めつゝある思想が、遠慮なく彼等の身邊に迫つて來てゐる。獨逸の敗戰が謀らずも獨逸國民性と密接の關係を有する獨逸哲學を失墜せしめつゝある折りから、之等の思想は何れも未だ吾が日本に於いては獨逸哲學の全盛時代に於けるが如くに人心を支配してはゐないが、多くの若い人々をして吾が思想界多年の御家流傳說より離反せしむることに成功してゐる。

最近、吾が文壇には富田碎花氏有島武郎氏等に依つて米國詩人ウォルト・ホイットマンが紹介せられ、獨逸哲學に於ける人間理性の唯我獨尊を斥けて種々の本能感覺等にも自由平等なる發言權を賦與せねばならぬといふデモクラシイの心理學的應用を吾等は教へられた。政論としてのデモクラシイは、大戰中、聯合國側が獨逸の軍閥政治に反對する主張として又米國參戰の名分として强調せられた。これは主として獨逸文化の專制に反抗する世界諸文化の生存權の要求として確かに時代思潮を形成した。そが婦人參政運動勞働問題等に影響を及ぼしたことは言ふを要しない。吾が國ではこれが、吉野博士福田博士等の啓蒙運

動によつて、一方は、軍閥打破及び眞正のデモクラシイの要求となり、他方は、端なくも社會主義運動を促進して今日では猫も杓子も勞働問題を論議する世の中となつた。翻つて吾が哲學界を見るに、數ケ月以前にデゥエイ教授の來朝講演あり、ウイリアム・ゼームスの著書の翻譯あり、官立大學圏内には未だ左程の反響を認めないが、一般有識者階級の間には田中王堂氏等の努力に依つて意外に強く、獨逸哲學の絶對論を反駁する實用主義の相對論立場が植ゑ付けらるゝに至つた。又近來の社會問題に關聯して、大戰以來一個の志士と化して敢へて獄裡に投ぜらるゝを辭しなかつたベルトランド・ラッセルの意見が紹介せられ從つて彼が戰前冷靜なる哲學者として哲學及び道德をば獨逸哲學の主觀性及び主意性から解放して一の高い實在に導かむとする新實在論の主張が熱心に傾聽せらるゝことになつた。偶ま獨逸哲學を說くものがあつても、例へば桑木博士等の如く、獨逸哲學の主觀を心理學的或は形而上學的に解せず單に先驗的自我と解し、認識論の領域にのみ沒頭して、自尊主義の譏誹より免かれむとするものゝみで、以前の如く自我の形而上學化自我中心主義を大膽に唱導する學者、例へば東京帝大の紀平教授京都大學の西田博士等に今日殆んど全く沈默の姿である。

かくて吾が國現前の思想界は、到底世界の大勢から除外例となり得ずに、今や漸く獨逸哲學の自尊主義を放棄して、自我とは獨立に存在する宇宙自然に關する解釋にしても、小さな自我を捨てゝ寧ろ對象の中に身を投じそして謙遜に對象の運動の跡を辿ることに依つて見出さるゝことに氣が付くようになつた。

これ實に私がサンタヤナを紹介するに最も適當なる機會で、今日に於けるサンタヤナの徹底的紹介に優る吾が國思想界に對する貢献は他に私の想到し得ざるところである。私は以下號を追つて、先づ第一にサンタヤナの中心思想たる理性の生活の如何なるものなるかを鄭重に解說し、次ぎに彼が不朽の名著「理性の生活」第一卷に基いて彼の通常意識觀を、次ぎに「理性の生活」第二卷に基いて彼の社會觀を、次ぎに「理性の生活」第三卷及び、「詩と宗教との解釋」に基いて彼の宗教觀を、次ぎに「理性の生活」第四卷及び「哲學的三詩人」「美感」等に基いて彼の藝術觀を、次ぎに「理性の生活」第五卷に基いて彼の科學觀を、而して能ふべくむば、最後に彼の長篇及び短篇の二冊の詩集に基いて詩人としての彼が面目を紹介したいと思ふ。この間に私は彼が最近の二著「學說の動搖」及び「獨逸哲學に於ける自尊主義」を參考して、世界現前の思想界に動搖しつゝある種々の學說と思潮とに彼の思想を關係づけ、これに嚴正なる批判

を加ふるべく努力することを忘れぬであらう。

八

最後に、吾が國現今の思想界を論ずる私としては、吾が文藝界の思潮に一瞥を與へずに濟ますわけには行くまい。

今日我が國の文藝界に漲つてる思潮は、これを一言にして言へば、十九世紀後半の自然科學の勃興と共に文壇に優勢になつた自然主義に對して十九世紀前半に熾んであつた浪漫主義的精神の復興及びその徹底である。而してその眞相は、實に、曩に私がゲーテの浪漫主義を論じた時に言つたやうに、意志本位の思潮である。嗚呼、是處にも私は同じ自尊主義の跳梁を見るのである。

十九世紀前半の浪漫主義の復興し徹底したものが現今吾が文藝界の思潮とすれば、十九世紀前半の浪漫主義の一般影響に關しては、普通に思想及び生活に於ける絶對自由と、古典に對する憧憬と、人生の藝術化とが數へられるけれども、二十世紀初頭の浪漫主義に關しては、自ら別途の方面にその影響の跡を尋ねなければならぬ。而して私は、是處には、たゞこの影響が一途に吾が文藝批評家をして唯我獨尊的態度をとらしむる傾向のあることを明かにして、一方は、現今の文藝批評家に一片の警告を寄せて置き、他方に、文藝界にもサンタヤナを紹介する準備をして置きたいと思ふのみである。

由來、浪漫主義の復興が意志本位の自尊主義に徹底して行つたことには、これに心理學的根據のあることを見逃してはならない。心作用は普通に所謂知情意と分たれて考へられるのであるが、浪漫主義に徹底した人々はこの三作用の中特に意志のみが最も直接且深奧だとするのである。そして彼等はこの肯定を經驗世界から形而上學の世界にも及ぼし、結果は、さう露骨には言はないとしても、彼等自身の意志が宇宙人生の根柢に横はる「意志」の顯現或は體驗といふことになるのである。意志の形而上學を可能とする人々は、種々の方面から形而上學の「意志」は心理學的分析の所産であるところの意志とは甚だ趣を異にすることを力説する。例へば、日本に於ける意志の形而上學の最も有力なる代表者と目せらるべき京都帝大の西田博士は、「自覺に於ける直觀と反省」を著して、『主知論者が自由意志を容想の如くに考へるのは意志を對象化して見るが爲である。併し術も之を自然的因果の世界に投射した時には、既に意志といふものではなくなる、何等の意味に於てゞも、意志の背後に因果を認めるのは、意志を否定するといふことである。啻に外的必然のみならず、内的必然即ちスピノーザの所謂必然的自由といふことも、意志と結合することはできぬのである』と言つて紹

對自由の意志の優位を辯じてゐる。そして又『昔、デオニシユースやエリユーゲナなどが神は一切であると共に一切でないとか、神は總べての範疇を超越するとか云つた所から、應無所住而生此心と云つた樣に忽然として生じ現れ來る直接の經驗は如何なるものであらうか。無論その全豹ー思慮分別を施したものであらうが、余は之を絕對自由の意志と見るのが最も眞に近いと思ふ、即ち眞に具體的なる直接の經驗は絕對自由の意志に髣髴たるものであると思ふ』と言つてゐる。然しながら之は單に一片の髣髴に過ぎぬもので、髣髴は如何にしても自明の肯定とはなり得ないのである。然も猶吾等のこの直接の經驗をば絕對意志の顯現とか或は體驗とか見るのは、意志の形而上學が心理主義を根本に於いて假定してゐることを證據立てゝゐるものではあるまいか。私は、是處に、これ以上意志本位の哲學思想の批判を敢へてする餘白を持たないから、讀者がこの思想の影響として、嚴密なる哲學的批判を缺いてる吾が日本の多くの文藝批評家の態度が唯我獨尊的に墮する所因がこの思潮の根底に横はる心理主義的假定にあることを觀取して呉れるのをもつて滿足せねばならぬ。則ち、この態度は右の假定が髣髴となり、髣髴が肯定となり、肯定が體驗となり、終ひに各個人の小さな自我の意欲が總て宇宙人生の中心樞軸であり各自の作む世界の創造者であるといふ高慢な見解を固執することになるのである。

この唯我獨尊的態度は、現今新聞雜誌の上で、新刊の雜誌に發表された大家の小說及び新進作家の小說を十把ひとからげにして先を爭つて批評する所謂月評家（吾が文壇にはこの種の批評家が餘りに多過ぎる）などは皆一人の例外もなくこの態度をとるものだと言つてもよい位だが、さうと露骨に言はれると、彼等の中誰一人としてそれを是認するものはなからう。けれども彼等がひと度この態度に魅せらるゝや、その結果を見てこれを辨ずることに多大の不便を感ずるところより彼等は一も二もなくこの態度を否定するけれども、彼等の心胸の奥底深く假定したこの態度は彼等の辨解そのものゝ中にまで七重八重に織り込まれて、彼等は到底その魅力から逃れることが出來ずに、自らすることによつて自らいふことを裏切るのである。

彼等は、謂はゞ、心胸の駿馬を驅るも頭腦の轡と手綱とをとらないために、其駿馬に道もないところを暴れ廻られるやうなものである。成程彼等には奔放不羈なところがあつて、彼等の書くものを讀むものが一味淸新の氣に打たるゝといつたやうな事もあるにはあるが、彼等の言ふところの中に何等の統一も恒常も見出すことが出來ない。彼等の批評は、大抵、無秩序であり、又自家撞着するところがあつても一向平氣である。彼等に

認識の極限といふやうなことの解らないわけもなからうが、彼等は兎に角、彼等の少しも遠慮なくしてゐるところに徹するに全くこの極限を撤廢して了つて、そしてその彼方の道もないところを勝手氣儘に暴れ狂ふとより外には見えないのである。かくて頭腦の轡を嵌めてゐない心胸の駿馬は、軈て、大切な騎者を大地に振り落して了ふのである。

彼等は又餘りに高慢である。謙遜といふ言葉は彼等の使ふ字書の中から抹殺されて了つてゐる。彼等の共鳴するものは、かのニイチェの超人道德である。彼等は自分の經驗する小さな世界を絕對の世界と心得るのであるから、その世界に於いて彼等は無遠慮に自問自答するのである。偶ま、正直に文壇の大家の地位を贏ち得た人々の勞作に接する時でも、彼等は多くの場合何の苦もなくその價値を疑つたり、又これを何の造作もなく貶して了ふのである。私は新刊の文藝雜誌を繙く毎に、大抵どの雜誌にも小說月評とか或は文壇の或る知名の士の合評とか月旦とかゞ載せられてゐて、又其が何時も妙に私の興味をそゝるのであるが、私はかゝるものを讀む毎に批評家等の餘りに高慢なる態度に一驚を喫し、且それを苦々しく感ずるものゝ一人である。思ふに、彼等は價値批判の標準を自己の貧弱なる經驗の中に置き、甚だしきはその經驗を神化して己れ自ら神の座に坐つて文壇を睥睨して得意がるのである。ゾラの「人間獸」の終りの方に、兵士を滿載した汽車が機關手の殺されて倒れてる機關車に惹かれて暗から暗へと二條の鐵路を轟然に走つてる有樣の描寫がある。この汽車は世界で、兵士は人間で、暗は死で、鐵路は運命で、機關手は神である。神を殺して己れその座を奪ふが如き現代の意志本位の思潮にかぶれてる唯我獨尊的な文藝批評家に謙遜なる態度を求むることは、實に、石をパンとするよりも困難なことであらう。

顧みれば、我が國現前の思想界は今猶獨逸哲學によつて課せられた自尊主義なる御家流傳說より全く脫し得ず、文藝界はこれも同じく獨逸國民性に根ざしてる浪漫主義の意志本位の思潮に捉はれて唯我獨尊的である。私が是處に爲し得たことは、多く分析的破壞的に傾いて、綜合的建設的の方面はサンタヤナの思想そのものゝ解說に讓らねばならぬ。今はたゞ主題を試驗的（テンタティヴ）に取り扱つたゞけで、幾分讀者にその指標（オリエンテーション）を示し得たとすれば、私のサンタヤナ紹介の辭はこれをもつて充分に竭されたとせねばならぬ。（一九一九・一〇・七）

「現代奴隷」解放論

ドクトル（經濟學）法學博士　森本厚吉

（一）奴隷解放運動

文明史に於て十九世紀の最大事件の一は、政治的奴隷を解放した事である。吾等は二十世紀に於て經濟的奴隷解放といふ大使命を有して居るのである。

政治的奴隷解放事業は決して容易な業ではなかつた。漸く十七世紀の終から十八世紀の初になつて社會の注意を惹く問題となつたのである。先づリチヤード・ステイール卿、ポープ、トムソン、スミス、ハチソン等が奴隷賣買に反對の聲を擧げたが直接的には大なる感應を與へる事は出來なかつた。一七七六年は人道史に於て洵に記憶すべき年である。即ち米國がデモクラシーの基礎の上に獨立の宣言をしたのが此の年であり、アダム・スミスが個人主義の上に經濟に關する學説を大成して、富國論を出版したのも此の年である。而も此等の重大な事業以上に特筆大書すべきは、此の年に於て、初めてデビッド・ハートレーが、英國の議會に於て、奴隷賣買は神の法律及人類の權利（ライト）に反對する者なりと動議し、一時は隨分議論が熾んであつたが、之は遂に不成功に終つた。それに前後してクエーカー宗の信者殊にジヨージ・フオツクスが、極力反對をして、遂に一七九一年に奴隷輸入は禁止され、一八三八年には、英國に於ては奴隷が全く自由にされ、米國に於ては、アブラハム・リンカンの不撓の力に由て一八六五年に黒奴が全く解放さるるに至つたのである。即ち政治的奴隷解放事業は決して容易に成效をしたのでは無いことは周知の事實である。

今度國際勞働法に規定せらるべき勞働原則の第一條に、勞働は單に物件又は商品と見做すべからずといふ大原則が、擧げられてある。蓋し之は一七七六年に、ハートレーが奴隷賣買は人權に反するものなりと云ふ矢叫と同じ力を有する者である。而して若しも此の大原則が、幸に國際聯盟に於て認めらるゝ事を得れば、現代奴隷解放の第一着手段が成功したものと云ふ事が

出來る。

勞働者は人間である、人間は經濟の主體であるから勞力は普通の物件視せらるべきものでは無い、然るに今迄こんな明白な原則が認められて居なかつたのは、勞働者が物品と同一の取扱を受け、人間であり乍ら人權の認められなかつた事を證明して居るのである。換言すれば從來勞働者は生產の手段として取扱はれて居つたのであるが、夫れを今度改めて生產が人類生活の手段であるべきものなる事を、世界的に宣言したのである。今や現代奴隷解放運動は開始され、勞働者は經濟上の自由を得んとして大に活動して居る事は、眞に慶ばしい事であるが、英國の一八三八年、米國の一八六五年卽ち政治的奴隷が、全然解放された時期が經濟的に我國に何時來るであらうか、卽ち今日多數に存在して居る經濟的奴隷が、解放されて國民擧て自由の民となり健全なる經濟生活を樂み得る時期は何時到來するかを考ふる時は、復た感なき能はずである。

二　勞働者(廣義)の奴隷的地位

凡て富を生產する目的を以て、努力する者は、精神的の者でも、肉體的の者でも是れ皆等しく勞働者と云ふのである。卽ち頭を使ふ俸給取でも、手足を主として使ふ職工でも、自分の力を提供して、物件の效力を造り出す者なれば、凡て勞働者として尊敬を拂はなければならないのである。

勞働者本來の地位は實に高くして貴いものである。彼等は不毛の地を變じて、之を美田に化し、我等に食糧を供給する。彼等は我等に着るべき衣服を與へ、住ふべき家屋を與へ、其の他生活に必要なる殆んど凡ての者を與ふるのである。彼等の力を藉らない時は、我等は一日も生存することは出來ない。彼等の荒々しい手は、我等の爲めに傷を負ひ、彼等の粗野なる容貌は、我等の爲めに斯くの如くなつたのである。精神的下級勞働者も同樣で、其俸給は家族の生活安定を保證するには不充分である。にもかゝはらず、終日文筆を勞して事務の處理に從事し、文化の爲には身心の疲勞を意として居ない。

要するに其肉體的たると精神的たるとを問はず我等の爲めに働き、我等の爲めに苦しみ、我等の爲めに悲慘の一生涯を送つて居るのは彼等勞働者である。然るに彼等の造れる社會は彼等を待つに冷やかに、彼等を遇するに酷である。彼等は朝早く起きて終日過激な苦役に從事するが、其受くる賃銀は資本家の利益に比べると、實に九牛の一毛に過ぎない。物價は次第に騰貴して其止むところを知らず、今や戰前の約三倍となつた。之を我國民の主食物たる米に就て見るに、其の價一升實に六十錢た

超えて居るやうな次第である。勞働者一人が一日に要する米量を平均四合と認めんに、一日所要の米の價格だけでも既に二十四錢を超えるのである。一家族大人に換算した數が三人とすれば、米價のみにて一日、七十二錢、一ケ月約二十二圓を要するのである。彼等の住居する家屋の借料も亦著しく騰貴した、假りに一ケ月十五圓の陋屋としても、一日の家賃は五十錢に當る、米と家賃とのみで既に一日一圓二十餘錢を要するのである。其他の生活に絕對的必要なる費用を合算する場合には、最小限度に於て、一日二圓を要するであろう。然るに彼等の多くは一日僅に一圓內外の薄給に甘じて居る。大正七年刊行の東京市統計年表に依ると熟練勞働者に屬するものでさへ「普通」日給一圓以上のものは石工、煉瓦積、大工、佐官、家根職、經師、馬具職其他の數職のみで大多數は一圓以下である。不熟練勞働者の賃銀の低きこと推して知るべしである。其後假りに二倍に增給されたるものとしても到底生活を滿足に營む事の出來る額では無い。之を官吏の俸給に就て見るに大正七年に於て判任官の平均年俸は僅に五百八十一圓(增給割四割を加へて)で一日當一圓六十錢の少額である、官吏の體面は勿論の事、人間としての品位さへ保つことの出來るものでない。古來我國の俚諺に、稼ぐに追付く貧乏なしと云ふ事があるが、之は現代に於ては眞赤な噓である。勞働者は終日孜々として働いても、貧乏は絕えず彼等に附纏ふて、生涯悲慘なる境遇より脫する事は出來ないで、其結果勞働者と貧乏とは殆ど同一義になつて居る。斯くの如く經濟上の壓迫が、烈しく彼等の上に襲來して居るのであるから、彼等の天授の自由の精神は蹂躪され、其人格は認められず、資本家の下に立つて、恰も暴君の下に在る人民の如く、全く奴隸と同じやうな生活を經濟的に送つて居るのである。

經濟學者シーガーは、經濟人の特性として(一)利己心、(二)團體を愛する心、(三)獨立を愛する心、(四)實業道德心の四者を具備するものとして居るが此等の四者が、經濟主義に基いて活動する事により初めて經濟生活を完うする事が出來るのである。若し此の活動を永久的に抑壓された時には、經濟界に於ては自由人でなくて奴隸である。

而して第一の利己心の發現に就て考ふるに、勞働者は決して自分の利己心を合理的に充分發達させ得るやうな境遇に置かれてはゐない、利己心の最も直接的で又實際的の現はれであるべき自己の自由生活の事すら、滿足に行はれてゐないから、彼等の利己心は根本的に破られてゐるのである。第二の團體を愛する心に就ても、自分一個の幸福さへ自己本來の地位相應に增進する事の出來ない境遇に在るのであるから、彼等は到底家族、

組合又は國家等の團體的利益增進の實を充分に擧げる事は望んでも出來ないのである。今日の經濟界に於ては、如何に偉力の人でも到底孤立することの出來るものでないから、人類は先づ家族といふ團體を作り、進んでは同業者の組合其他色々の會合を作る事に依て、初めて自らの利益を增進し得らるゝのであるが、之等の特權は我國現代の社會に於いては未だ充分に認められて居ないと云はねばならぬ。第三の獨立を愛するといふ事は、經濟人の天性であるが、獨立をするには、少くも一家の生活を完うする事の出來る賃銀を受けなければならない。然るに今日の勞働者は、自分の賃銀だけでは、生活を支へる事が出來ないのみならず、屢々仕事を得る事の出來ない場合さへもあるのだから、獨立を愛する念慮の如きは彼等に取りては餘り實際的の問題では無い。最後の實業道德を守る事も、屢々實行の不可能なる場合も少なくない。彼等の道德心は必しも餘り堅固でないから衣食足らずして、禮節を守り得ず、即ち貧して貪する所の憐れな境遇に處して居るのである。彼等の上に絶へず襲擊して止まない經濟上の壓迫が、彼等の道德心を痲痺させないやうにするのは困難ではなからうか。彼等は如斯不幸なる境遇に在るが故に益々逆境に立たねばならず、現代彼等の經濟的地位は一種の奴隷と同様な程度まで引下げられたのである。

要するに今日の勞働者は、經濟的に人權を禁制され其人格を認められて居らないのであるから彼等は奴隷であると云ふ事は必しも過言ではあるまい。

(三)　勞働者の覺醒

世人文運の隆盛を賞讃して止まない今日、殊更らしくも勞働者と奴隷とを同一視して、其解放を叫ぶのは決して好奇心から起つたのでもなく、又偶然でもない。勞働者は貧困に責められて其精神は痲痺して居るから玆に勵聲一番彼等を奴隷呼ばはりをして彼等の覺醒を促がし彼等の經濟上の位置を明にし彼等の向上をはかるにあらざれば健全なる經濟的進步は望まれないのである。偉人シュアブが將來勞働者のアリストクラシー（貴族政治）が行はれはせぬかと云て居る程米國では今日勞働者の地位が向上して居るにも係はらず、我國では彼等は未だ智識低く思慮淺き社會の弱者である、デモクラシーの精神は未だ此階級には徹底してゐない故に、勞働者が大切な人間であり乍ら、經濟界に於ては人間扱をされないのである。此重大なる事實を彼自身等をして自覺せしむる事が人類社會の眞の幸福の爲に根本的に必要なのである。若し彼等が今日經濟的に自由を奪はれ、奴隷化せる事を、自覺しなかつたならば、如何に我等が解放運

動の聲を高くして色々の社會政策を講じても、結局それは無效に終るのである。

政治的奴隷が解放されたのは、比較的近代の事であつて、グリース時代から奴隷は存在して、奴隷自身も社會も亦當然の事と考へて居た。アリストートルの如き賢人すら、奴隷は必然的又は自然的必要なりと云ふ事を認めた位である。蓋し往昔の經濟界は、奴隷制度の上に築かれたものであつたから、若し其當時奴隷解放を主張した時には、恰も二十世紀の今日經濟的奴隷解放論をなすと同樣に、社會の嘲笑又は叱咤を買ふたに相違ない。併し事實は事實である。勞働者の經濟的地位を論議する時には決して樂觀は出來ない。今日經濟的奴隷が多數存在して居るが故に所謂文明の進歩と人類の幸福とは歩調を共にしないのである、彼等は盲目的に文明の進歩を謳歌するであろうが、彼等自身の經濟生活及其境遇は、決して文明の自由民と云ふ事は出來ないのである。「汝自身を知れ」（Knwo thyself）之れ智識の初である。

我國に於て國民の多數を占むる農民に於ても、彼等は所謂水吞百姓的の狀態を以て、自分の運命と諦め、下級官公吏に於ても、生活賃銀以下の俸給に甘じて勞役に從事するのは、彼等の本分と諦めてゐる。肉體勞働者に於ても、自分の勞働條件に就て、何等怪むことをしない者が未だ數多に存在して居るのである。然しながら時代の精神は偉力を有して居る、デモクラシーの世界的運動は我國民のみを除外するものでない、早く我國下級階級の者を經濟的壓迫より解放する事が出來ないならば、世界經濟時代に處して落伍者の悲運に因はるゝのみである。

現代經濟的奴隷の著しい特徴は貧乏な事である。資本家は勞せずして多くの收益を得てゐる。會社の株主にして五割乃至十割以上の配當を受けて居る者が甚だ多く、所謂大小成金が、社會の手前も憚る事もなく、憎むべくして嘲笑すべき奢侈的生活を送るに反し、一方肉體的勞働者及び下級俸給生活者は終日單調にして苦しい勞役に營々として働くにも拘らず、彼等は所謂生活賃銀以下の報酬しか受けないのである。如斯き事は甚しき矛盾であつて、現代の經濟組織に何等かの缺陷があつて生ずる現象でなければならぬ。近來科學の發達に伴ふて勞力を省くべき種々の精巧なる機械が盛んに發明されて、分業は益秩序正しく行はるゝに至り、産業界は驚くべき進歩發達を見るに至つたのである。然るに貧富の懸隔は益々著くなつて、貧困者の境遇は、國史あつて以來未だ曾てなき程憐れな狀態となつて居るのである。

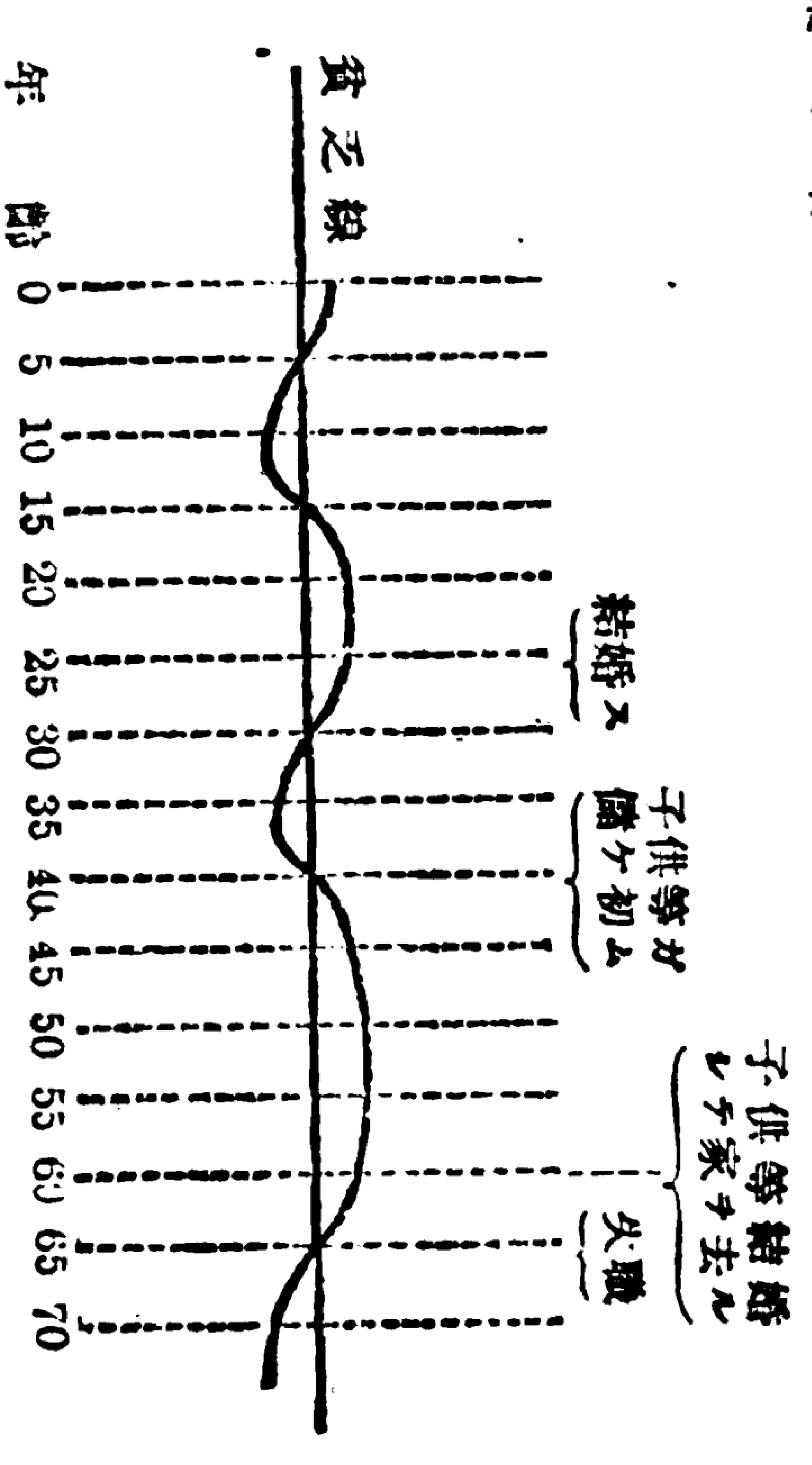
近代産業の發達は、經濟的奴隷を解放して彼等の地位を向上

せしむるに何の役にも立たない事は、ジョン・スチウアート・ミルやヘンリー・ジョージの論ずるが如くである。年々歳々社會の富は増善されたと云ふ事實は不思議にも貧乏救濟と云ふ大事業に餘りに關係が少ないのである。我國に於て戰前に比較すれば、其の通貨の増加は實に著しい。其流通高は戰前に在ては約五億四千萬圓のものが現在は十五億萬圓を超えて居る。即ち日本の經濟界は戰爭の爲めに、著しく富を増加したのであるが、多數の貧窮者は、其恩澤を受ける事が出來ないのみか、却て貨幣の多くなつた事が第一の理由となりて貨幣價値を減じ物價騰貴の惡影響を受けて、經濟上の地位は益々動搖しつゝあるのである。不思議な事ではあるが我國では、國富んで民貧すと云ふ逆理が今顯實されて居る、何たる矛盾であろう。

ローントリーは、英國の勞働者を研究して曰く、勞働者は幼年時代に於て一般に貧乏で、自分又は自分の兄姉が賃銀を得るに至る迄は、憐れむべき貧困の狀態に在る。それが十四五歳になつて、自分が賃銀を受けるやうになり、父と共に住居して居る間は家計が稍良好である。けれども二十五歳前後になつて結婚し、父の家を去つて獨立して、家計を持ち二三人の子供が出來るやうになると、再び貧困に陷り約十ケ年間は貧に苦みて、自分の子供が十四五歳になつて、金を儲けるやうになると、幾分家計が豐かになる。然し乍ら自分が六十歳位になつた頃は、子供は結婚して家を去り、再び憐むべき貧乏に陷る。其の時は既に老年の爲めに、働く事が出來ず遂に貧乏の中に死ぬるのであると。

即ち勞働者は、一生涯中に三期に貧乏の打擊を著しく受ける。第一期は生長に最も大切な幼年時代、第二期は最も活動すべき壯年時代、第三期は平安なる晩年を樂しむべき老年時代である。

今曲線を以てこれを示せば或時期に於ては、貧乏線の下に降りて貧困の苦境に陷り、又或時期に於ては貧乏線の上に出でゝ生計稍良好になるといふ樣に、貧乏線（ポヴァーティーライン）を中心として其曲線を絕えず上下し、人世の運命を語るのである。



斯の如く悲惨なる運命を持つて生れて居る。彼等勞働者の經濟生活は、到底自由の民として競爭場裡に立つ事は出來ず奴隷と同樣に絕へず壓倒されて居るのである。勞働者は個人としては甚だ弱いものである、資本家の樣に强力な武器即ち資本を有して居ない。其代り彼等は合力して偉大なる勢力を獲得し得る天賦の能力を有して居る筈である。併し憐むべき哉我國では一方では未だ勞働者自身が組合を造るだけに智力が進歩して居ないが上に又彼等を能く指導し得る先覺者に缺いて居る、夫れと同時に治安警察法十七條の如き制裁があつて組合をつくる事が出來ない樣に成つて居る、我國の勞働者の現狀は歐米の先進國のものに比すると確に一世紀位は後れて居るのである。宜しく彼等は覺醒して自己の修養を行ふと同時に合力して優勢なる地位を得る樣に努力すべきである。勞働者の地位を向上する事は彼等自身の利益であると同時に社會一般の幸福となるのである。

幸に今日勞働問題が社會の大問題となつて盛に論議される樣になつた、けれども現時の勞働問題は主として肉體的勞働者の運動である。不幸にも知識階級に屬する精神的勞働者は餘りに關係して居ないのである。前者は組合の公認を叫び、賃銀の値上げ、勞働時間の短縮、勞働條件の改善等の運動を熾んにして、屢々同盟罷業（ストライキ）を起し、其結果彼等の經濟的地位は、次第に向上しつつあるのである。然るに後者に屬する勞働者即ち官公吏其他の下級俸給生活者は、其經濟狀態が筋肉勞働者に比べて、一層劣等なるにも拘らず、彼等は自己の經濟上の眞相を自覺する事少なきかの如く、生活賃銀以下の俸給に甘んじ貧窮と奮闘しながら勤務に從事して居る。一方より云へば知識階級者として體面を重じ、苦痛を忍ぶ美德の然らしむる處ともいへ樣が、他の方面より考ふる時は、彼等が經濟的刺戟を感ずる事が鈍いことを示すものである。彼等も宜しく合理的に秩序正しく適當なる方法を講じて、先づ自己の能率の增進に努力し進んでは地位の改善を圖り、經濟的奴隷生活より脫して、自由の國民となることに奮勵する事が必要である。

（四）「現代奴隷解放」の根本義

物價の騰貴、殊に生活資料の騰貴に伴て、近來益々勞働者の地位が下向して彼等は到底能率多き生活を營む事は出來ざる境遇に處するが故に、文化の恩惠に浴する事少なく彼等の經濟生活は全く奴隷と異ならない樣になつたのである。然らば如何にして彼等を解放し得るか、此問題の根本義は勿論彼等の經濟的地位の向上であつて、之が爲には彼等の特徵である貧乏より救出す事が第一に必要である。而して救貧の先決問題に貧乏の原

因を明白にする事である。此問題に關して色々の研究説があるが今玆にはローントリーの研究の結果を借りて以下之を論ぜん。彼は英國民が貧に陷つた直接の原因を百分率で次の如く示してゐる。

一、規則正しく勞働に從事しても賃銀の少ない爲……五一・九六（パーセント）
二、家族の大なる爲、即四人以上の子供ある事……二二・一六
三、勞働主の死亡せし爲……一五・六三
四、勞働主の老衰又は死亡せし爲……五・一一
五、仕事の不規則なる爲……二・八三
六、勞働主の失職の爲……二・三一
計……一〇〇・

（ローントリー貧乏論百二十頁より）

ボウレー著「生活と貧乏」に記載せる貧の原因も大體同樣で、例へばレデイング市の調査は、「賃銀の少き爲」は四八パーセントで、「家族の大なる爲」は二二％「勞働主の死亡せし爲」は一四％で此三つが最大の原因である。

即ち第一は賃銀の安いこと、第二は家族數の大なること、第三は所帶主の死亡、此の三者が貧乏の最も有力なる原因で、其他の事は多くは之等に附隨して起り直接原因としては甚だ力弱きものである。故に現代奴隷解放の方法として執るべき手段は、以上の三つの原因を除去することを主眼とせねばならぬ。然し第三の勞働主の死亡は人爲的には健康狀態を改善するより他に良法なく、つまり第一及第二の原因に伴ふて起る場合が普通なのである。夫れで第一に賃銀を高めること即ち收入を增すこと、第二に勞働者の家族の員數を少くして健全なるものにすることの二點を目標として我等の解放運動を進捗すべきである。

（五）生活賃銀

經濟問題の根本となつて居るのは生活問題である。經濟生活を全ふするに最も肝要な事は一家の生活を支へ得るに足る收入を得る事である。故に生活賃銀に達して居ない勞働者の收入を增加する事は、解放運動の先決問題である。此問題が解決されなければ幾ら他の方法を講じても效果は少ない。今日の賃銀制度には缺點があるが故に、富の分配は資本家に厚くして、勞働者には薄いのである。如何なる階級の人でも若し忠實に勤務するならば其報酬として少なくも生活賃銀（Living Wage）を受くべき特權を有して居る。之は生れながらにして天より授かつた人權である。此人權を踏み潰されるから奴隷化するのである。

然らば生活賃銀は幾何であるか、何程の收入があれば人間らしい生活を營む事が出來るか、之等は非常に重大な問題であるにも係はらず不幸にして我國では未だ充分の調査がない、不完全ながら自分の研究に依ると、一家五人暮で必要な最小生活費は、東京市で（大正七年一月—九月）一ケ年二千七十六圓である。勿論夫以下でも生存は出來るが能率多い生活は營まれない。而して最小生活費の半分即ち千圓以上の收入を受て居るものは我國家族總數の二パーセントより無い。然らば勞働者が一日の勞働に對し當然受く可き生活賃銀は幾何であるか、之は他日詳論しなければならぬが、大體に於ては不熟練勞働者は二圓、熟練勞働者は三圓、俸給生活者は月六十圓を以て最小限度とすべきである。勿論此額で能率多き生活が營まれるとは云はないが家族二人（夫婦）として現在の我國經濟事情を斟酌して最小限度の生計費と假定するのである。之等を大體の標準として夫々職業に依りて適度の賃銀を定め、特種の職業に對しては我國でも歐米先進國に傚うて、法律を以て最小賃銀法即ち生活賃銀法を規定して、勞働者の收入を增加する事が目下の急務である。勿論此收入增加を實行する場合には必ず自己の勞働の能率を增進する方法を講ぜねばならぬ、若し二人分の仕事を一人でする事が出來るとすれば、此增給は當然の事である。蓋し勞働非商品論が認められたなら、當然の結果として、勞働者は生活賃銀を受ける權利を認むるに至るであらう。

繰返して云ふが人は生を此世に享けて、自己の力に應じて眞面目に働く時には、人間として當然の生活を營むべき天賦の權利を有するのである。故に勞働者は生活賃銀を受ける權利を有することは、ライアンの著書に俟つまでもなく明白なことである。根本問題としては、生產資本の私有を禁ずると云ふ事は、最終の眞理かも知らんが、到底今日の經濟界に於ては望む事の出來ない問題であるから、宜しく資本家勞働者雙方の眞面目の理解を得て賃銀を增加する事を努めなければならぬ。

今日社會の弊害は、物價騰貴の爲め、生活に不安を來すと云ふことであると論ずる者は多いが、生活の不安は必ずしも物價騰貴のみに依りて起るものでない。經濟力が乏しくして物資殊に食糧品の缺乏を來した事が主因となつて物價の騰貴を來したのであるならば夫れは甚だ惡いこと恐るべき事である。併し現今我國の經濟界は戰爭前に比べると、富が非常に增加して經濟力は豐かになつたのである。成る程我國民の主食物である米は缺乏を告げて居るのであるが、米の代用食品は豐富である、生活の資料は少しも缺乏して居るのでは無い。つまり經濟界が好調で輸出超過の結果澤山に金が出來たから貨幣の價値が下落して

物價が騰貴したのである。だから物價騰貴と云ふ事は一方から考ふると悦ぶ可き現象である。若し過激な人爲的の方法で物價を下落させると、折角築き上げた富力を破ることになるから、大に注意して調節を圖るべきである。勿論現今の如に激烈なる物價暴騰に對しては通貨縮少策を講ずる事も目下の急務であらうが其程度は緩漫の嫌ある位のものでなければならぬ。根本論としては物價騰貴は經濟進歩に益あるのである。現今社會の缺陥として物價騰貴よりも遙に恐るべき重大問題がある。夫れは富の分配が不正當である事である。故に我國に於て戰爭の爲に著しく增加した富の行先を明にして、國富んで民貧すと云ふ矛盾な事實を矯正する事が最も重大事件である。然らば如何にして富の分配を公平にし得べきかと云ふに、先づ第一には前述の生活賃銀法を制定して夫に準じて一般に賃銀を高むる策を講じ根本的に勞働者の經濟的地位を上進せしむこと、第二には稅制の改革其他社會政策的施設の普及發達等を數へなければならぬ。稅制改革に於ては、先づ所得稅及營業稅法を我經濟事情に能く適應せしむるものとし、累進稅法を今一層强くして、納稅能力の大なる富者より徵稅することを益々多大にし、遺產稅、相續稅の稅率を著しく高くして殆んど禁止的のものとし、奢侈稅を一層有力なるものとし、新たに土地增價稅の如き、無勞力的價値の增加に對して、重稅を課くるが如き、其他地租、造酒稅等の稅率を高くする事、更に進んで生活に絕對的必要なるものに課せる消費稅の廢止等。要するに富者に重くして貧者に輕くする程度を一層大にする事を主眼として稅制の改革を行ふの必要があるのである。

(六)　勞働能率の增進

勞働者の地位を高めて、奴隷の狀態より自由の經濟人に進める爲には外的手段と共に內的手段が更に肝要であるから、勞働者自身の改善を行ふ事が何より必要である。元來內的改善が或程度まで行はれて後外的改善に着手すべきものであるが故に此點に於て我國現今の勞働運動は幾分か本末を誤まれるに非らざるかを疑ふのである。奴隷の勞力と經濟人の勞力とを比較すると、前者は其能率に於て、著しく劣るのである。奴隷勞働は勿論廉價であるが廉價勞働（Cheap Labor）は却て非經濟的の高價なものである事は經濟學の示して居る事實である。故に一方で外的手段を用て經濟的奴隷を解放して、勞働者の地位を高めたにも拘らず彼等の能率に於て、增加することがなかつたならば、經濟界は退化して却て社會の不幸を來すのである。勞働問題の喧ましい今日、或は八時間勞働、或は幼年勞働の禁止、或

は日曜日の休日、或は勞働組合の公認等の問題を解決するに當つて、根本問題となるのは勞働者の能率である。若し勞働者の能率大なる時は最近英國でレバーフルム卿 (Lord Leverhulme) が主張する樣に一日六時間制或はノルスクリフ卿 (Lord Northcliffe) がロンドン・タイムス其他の出版業に實行せんとして居る一週五日制等は却て利益多き制度であらう。併し現在我國の勞働者の能率を外國の夫れと比べると　大體に於ては其の低い事恰も奴隷の勞力と自由人の勞力との能率の相違のやうに我國の夫れは甚だ低いのである。かゝる狀態に在るものに對して、歐米の勞働能率の大なる者の例を眞似て突然解放を行ふて、急速に勞働時間の短縮、休日の增加、賃銀の割增其他の改革を行ふ時には、我經濟界は攪亂されて生產力は著しく減ずる事明白である。故に此解放運動は合理的に秩序整然として行はなければ效を奏さない事を記憶せねばならぬ。此點から考ふるも我國に於ても速かに勞働組合が公認されて適當なる指導者の下に健全なる發達を來し內外相俟つて解放の實を擧げたいものである。

勞働者の勞働能率を增進するには、第一に健康及勞働力を改善する必要がある。之が爲めには勞働者の食物、住居、衣服等の生活の要素を改良しなければならぬ。次に勞働者の知識の程度を高むるが爲に——今少しく義務敎育年限を延長して經濟的及技術的知識を涵養し、世界の國民としての常識を發達させる事が大切である。尙精神的の進步改善を圖り單に利己心を發達させるのみならず、家族の一員とし、組合の一員とし、又社會の一員として必要なる道德を守るに非らざる限りは如何に自由の境遇に引上ぐるも其心事は奴隷と同一であつて解放の實を擧げ得可きものでない。

如斯一方では勞働者自身が、此等の點に注意すると同時に、他の方面に於ては、勞働の社會的條件を改善することゝ相俟つて、初めて勞働の能率を大にする事が出來るのである。

勞働の能率が增進する時は、彼等の收入は自然に增加することは當然である。シドニー・ウエブ等が勞働者の賃銀を生活賃銀まで高めることは、結局生產の實を大にするのであると云へるは、詰り以上のことを意味するものである。今日我國に於ける勞働問題に關して、改革的の社會的運動が必要なのは勿論であるが、それに勝りて勞働者の內容を改善する着實なる運動が大切であるといふことは、勞働者も社會も共に認むべき事柄である。若し此點に留意しない時には、解放運動も却つて國家を害するものとなるのである。

(七) 産兒制限

前に述べた通りローントリー其他の學者の研究によると、貧乏の原因の第二として家族の大なることを擧げて居る。古來我國にても貧乏人の子澤山なる句があつて、子供の數の多いのは、確かに生活を困難ならしめて、經濟上の地位向上に弊害のあることは、世界に現れて居る事實である。一七九八年にマルサスは人口論を著して、人口は少くも二十五年毎に倍加するが、食物はそれに伴はない、從て人間の生活が次第に困難になるから人口增殖を制止する事が必要だと論じた。其後マルサス協會が設立されて、今日盛んに新マルサス主義が主張されて居る。此主義によると、(一)産兒の數を人爲的に制限するのは、母體及産兒の健康の爲めに必要なること、(二)自己の經濟事情に應じて産兒の數を制限するは、自己及家族の幸福なるのみならず、社會の經濟狀態を改善して大いに國家を益するものであるといふこと等を主張して居る。此主張には我國民が大に味ふ可き眞理が存在してるのである。

舊式の人口論者によると、(現在我國には未だ隨分あるが)人口の多いことを以て何より喜ばしいこととして、人口の質と云ふことは餘り注意を拂はないが、我等は下等動物の樣に子供を生み放しにする譯には行かぬ、親は子供の養育に對して社會的にも大なる責任を有して居る。此責任を全ふするが爲には多大の犧牲を拂はねばならぬことを豫め承知して居なければ粗製濫造の弊害が起る。今日のやうな經濟壓迫の旺盛な時代には、中産者以下の者はどうしても自分の經濟狀態と産兒の數とを調和させることは自己の爲にも子供の爲にも、社會の爲にも亦國家の爲にも是非必要なことである。勿論富者には産兒を制限するが如き所謂不自然なる事は不必要であるかも知らん。併し我國の中産者以下の狀態を見ると、子供の數の多い爲めに、兩親の能力は阻害される場合が著しく現はれてる。それのみならず子供の方にも、第一に死産多く、第二に乳兒の死亡率其他一般の死亡率が多い。生存して居るものでも子供の數の多い爲めに、親の保護が不充分となり、發育不完全で病に罹り易く、一般に健康狀態が劣等となつて居るのである。

それで勞働者は自分の地位を向上して、奴隷の狀態より解放するには先づ其産兒の數を自分の經濟生活に適應する程度に止める事を社會的習慣として尊重する樣にしたいものである。我國は外國に比べると非常に多産である。然し乍ら同時に死亡率も甚しく高い。詰り多く産んで多く殺すといふ頗る非經濟な行爲が行はれて居るのである故に、之を改善して人口の量よりも

寧ろ貧が好いといふことを、一般に知らしめ同時に人口增加に對しマルサスの所謂「道德的抑制」、或は避姙と云ふやうな問題が眞面目に研究されなければならぬ。然らば今日中産階級者の經濟狀態に適應する産兒の數は、幾人なりやと云ふに、勿論かかる事は正確に決定し得る性質のものではないが、特別の事情を有するのでなければ、約三人以上の子供を、親と子と双方の能率を低くしないで養育する事は困難であらう。故に經濟的壓迫が甚だしい今日、「三兒制」が中産以下の社會に於ける、理想と認むべきものと考へるのである。即ち中産者の最小收入即ち最小生活費を、一ケ年二千圓として其經濟力で兩親の能率を低くする樣な事なく、滿足に成育し得る子供の數を二人乃至三人であるといふ事を明白に記述して置く。

斯の如き主張に對して、全然反對の意見を有して居る人が多數である事を能く承知して居るのであるが、自分を肉體的勞働者及び下級俸給生活者に非常に厚き同情を有するが故に、彼等を眞に解放するには、産兒制限といふ事が、死活の問題であると信ずるのである。

以上は解放に必要なる項の全部を盡したのでは勿論ない。然しながら收入を增加して少なくも生活賃銀程度まで高める事は根本的に必要な事である。之が爲めには國家は必要なる職業に對して生活賃銀法を制定すべく、或は稅制の改革を斷行すべく、勞働者は進んで自己の能率增進に努力すべく、或は産兒制限の問題に對して責任を以て解決すべく、如斯にして勞働者の地位を次第に改善されるのである。幸に我經濟界は現時好況であつて、資本家は勞働者に生活賃銀を支拂ひ得る富力を有して居る事を信ぜざるを得ない。國家又は地方の財政に於ても一般官吏殊に下級官吏に少くも十五割位の增俸を決行するに必要なる財源を見出す事は必しも至難の業でない筈である。歐洲戰爭の結果我國では、著しく富力を增進した、國が富んだ以上は、國民はすべて其恩惠を受くべき權利を有して居る。其增加額を少數の成金連や、富豪のみの浪費の資に供するが如きは斷じて許すべからざる事である。要するに今日我經濟的奴隸を解放するに必要なる財源は存在して居るのであるが、其財貨が正當なる所に分配されて居ない迄の事である。「富の公平なる分配」(Distributive Justice)之が刻下焦眉の問題である、我等は之れが爲めに努力して以て經濟的奴隸解放と云ふ、大使命を二十世紀に於て完成しなければならない運命を有して居るのである。(終)

(八年十月十日)

支那に於けるA.B.C同盟

日高進

一

十月二日上海に Union Club of China ―聯華總會―と云ふ一倶樂部が出來た。之れは支那に居る英米人が支那人との親善提携を圖らふと云ふ考から組織したもので、英米支三國人の共同卽ち The American-British-Chinese Corporation であると言ふ所から一般にＡＢＣ倶樂部とも呼ばれて居る。此の倶樂部の會員は英米支三國の銀行商事會社の社長や支配人で三國の商業會議所から推薦した候補者中から倶樂部の委員會で決める仕組になつて居るので、倶樂部の委員と云ふ者にも三國それ〲同數の三名づゝを選任することにしてある。そこで上海で相當勢力ある英米支三國の實業家は勢ひ此の倶樂部に集ること〻なり、それに三國の外交官、領事、法官その他陸海軍の士官は名譽會員として加はる事も出來、又上海以外の人でも visiting member として時々出席する事も出來るとになつて居るから、將來之れが三國人の社交的中心ともなつていろ〲の方面へ活動するとなると、英米の支那に對する政治的經濟的發展に餘程貢献するところがあらふと想はれる。The North-China Daily news 紙は此の倶樂部が成立した當時『世界大戰が生んだ共同危險及び共同利益の意味から出來たもの』と賞めそやした位である。ヤレ同文同種だとか、ヤレ脣齒輔車だとか、陳套な字句を連ねて我が國人が僥倖的な日支親善を考へたり、コンマンダア・ペルリの舊恩を說いたり、日英同盟の空文を唱へたりして居る間に、英米人は日本に冷たい一笑を與へつゝドシ〱實行的方面に向つて支那と提携し對支發展上血よりも濃い水の流を開拓して居る。此の事は吾々の大いに注目せねばならぬ事と思ふ。

元來國ジアングロ・サキソンたる英人と米人とが協力して世界に雄飛せねばならぬと云ふ議論は古くから唱へられて居る議論で、歐洲戰爭と云ふ大事變が勃發してから一層熾んになつた。殊に支那問題に就いても英米の提携共同の必要な事は在支英米人が絕へず繰り返して居る所で North-China Daily News.

Shanghai Gazette. Peking Time.s Millard's Review. 等英米系の新聞雜誌は機會ある每に之を提唱しその他兩國人が交懽會合する場合には必ず American-British corporation の必要を說かぬ事は無い次第である。が其の內でも一番之れを主張し熱心に宣傳して好く支那の好感と結び付ける事に努め來つたものは米國である。

二

何故米國がＡＢＣの提携にそれ程熱心であるか。是には大いに理由がある。米國は歐洲戰亂の續いた間半ば戰ひ半ば商ひて、其の國力は非常な膨脹を告げた。何處かにその偉大な經濟上の餘力を伸ばさねばならぬと云ふ勢になつて眼を極東の大市場に注ぐに至つたは固より當然のことである。處が對支發展と云ふ問題に懸けては米國は二十年前米西戰爭の頃までは全く支那と云ふ者に指を染めなかつた位で、英露佛などの列國に比べて著しく起遲れである。米國が初めて眼を支那の市場に向けた時には支那の各要域は皆列國の勢力範圍と云ふ名の下に分野され、凡ゆる投資や通商の目的に必要な利權もソレ〲の色分が定まつて居た。ソコで米國は一策を案じ出した。即ち一八九九年十二月國務卿ジョン・ヘイが發表した門戶開放機會均等の宣言が是である。『列國が勢力範圍だとか優先的利益だとか云つて他國の平穩な商工業的發展のために支那の門戶を閉鎖したり、機會を壟斷してはイケない。何國と雖も支那に對する發展は自由である』と米國は此の金看板を眞向に揭げてドン〱從來の先進列國の繩張りに喰ひ込んで、思ふ存分米國勢力の扶植を圖らふと考へた。一九〇九年の滿洲鐵道中立の提議、錦愛鐵道の問題、一九一〇年の幣制實業借款など皆異曲同工の對支政策ではあつたが、サテ列國が以前に扶植して居る勢力は案外堅固で、此の既定の事實は仲々米人一流の計略では覆へされさうには見えぬ。粵漢鐵道問題でも矢張り英佛獨三國の割込を餘儀なくされ、一九一七年シームス・カレー會社が締結した鐵道借款となつては英佛の抗議に遭つてワザ〱決めた線路の變更をすら餘儀なくされた。

以上述べる樣な事情からして米國は近時支那に發展するには矢張り先進列國と共同すると云ふ事にして、努ら熱心に支那に同情を示して之を懷柔し、其の間自國の威力に任かせて其の雄圖の實益を收むるに如くは無いと氣付いて來た。彼の大袈裟な米國の對支學校病院政策や、列國に對する支那鐵道の國際管理的統一や、新借款團組織の提議なども皆斯う言ふ處から割り出されて居る樣に見える。處が現に事實が示すやうに、關係の列國が全部米國と利害を一にして共同すると言ふことは到底望み

難たい相談なので米國はその內でも比較的利害感情の近かいものと接近する外はないことになり、其の格恰の提携者を英人に見出したのである。

三

『支那の對外貿易の八割は英國商人の取扱ふ所である。就ては總稅務司の一職は英人に收めて、事實上英國が支那の海關を管理するのは當然である』と誇語しつゝ自ら東洋貿易の主人格を氣取つて居た頃の英人には、米國の發展などは殆んど眼中に無い勢であつた。が年は遷つて時代は變化した。其後後進の日本や米國の商勢が伸展した割には英國の勢力は增大しない。戰前迄は英本國の對支貿易は輸入一千六百萬兩輸出九千六百餘萬兩合計一億千二百餘萬兩であつたが、戰時中年々減退して昨一九一八年には輸入二千五百三十萬兩輸出四千九百九十萬兩合計七千五百二十萬兩に下つて居る有樣である。殊に英國が久しい間自國の勢力範圍と稱して全く獨占的勢力を恣にして居た揚子江流域に於ても、我が日本の通商貿易は勿論種々の經營は驚くべく伸展して來たので支那に居る英國人は聊か其將來に危惧を抱き出して、戰時中の疲弊を受け、支那貿易に關する對日嫉妬はヒステリー的に昂上して東西の大勢も日英の同盟關係も顧慮するに違なく、我が國の對支發展を排斥する樣になつた。此時に當つて米國の野心家が亂打するアングロ・サキソン聯盟の宣傳的警鐘が英人の耳朶に快く響いたのは固より自然の歸結である。

一方支那に於ては日露戰爭後一時日支の感情は非常に濃厚であつたが其後日本の在支勢力が次第に加はつて來るにつれて支那人の間には早くも日本に慊焉たらざるものが生じ、殊に歐洲戰後に至つては、歐洲の列强が深く極東の時局を顧みる餘裕のない間に日本が樣々の專肆橫暴を振舞つたと言ふ誤解が支那人の感情を一層冷却した。其間に我が歷代內閣の對支外交が何時も支離滅裂を極めたので、支那は何時ともなしに日本は野心を藏して居る。彼國の目的は支那の內政を攪亂して竊かに漁夫の利を占め遂ひには支那の領土をも侵略せんとするものである。日本が前に二十一ヶ條の要求を提出したのも、望み無い北方軍閥の武力解決を援助して種々の利權を收めたのも、皆支那侵略の下拵へであると、我朝鮮の併合や滿洲の經營迄も引合に出して事毎に反對思想で日本の態度を解釋する樣になつた。斯う言ふ場合に支那が忘るゝ事の出來ないのは彼の以夷制夷の政策であつて此の機を看て取つた英米は時乘ずべしとなし、凡ゆる宣傳の手段を盡くして日本の野心を吹聽し、支那が此危機を免るゝには唯支那に同情ある英米に依る外はないと言ひ布らしたので支那の排日親英米の感情は何の事もなく今日の頂點に達した

のである。

四

斯くして出來上つたＡＢＣ三國の接近が其の後に顯はした提携的運動は(一)政治的(二)經濟的(三)社交的其の他の方面から觀察する事が出來る。

第一、政治的方面で先づ米國が著手した事は久しく陰忍雌伏して居る親米的支那政客を援助して彼等に支那の政權を握らして之を利用しやうと云ふ事であつたし、次に計劃した事は支那の排日分子を煽動して排日運動を日貨排斥に導き、一擧にして日本對支商勢の伸展を抑制し自ら取つて代らふと言ふ考であつた。在支米人の新聞通信機關は巧みに之を指導し、支那の歐米留學生米人經營の學校の教師學生及び支那各地の宣教師などは、有識無識皆之れが手先に使用された。而して其赴く所は山東問題を導火としての此度の彼の排日騷擾であつて、之がため在留邦人ばかりでなく北方の親日政客も南方の親日商家も非常な窘迫を被つたのに日本の政府は之を見殺しにしたから日本は今や全く Friendless Japan となつてしまつた。北京英米協會、上海米人商業會議所、上海の米人市參事會員、辯護士連いては在支米國官吏の一部までがその本分を忘れて排日宣傳の總動員を敢てた不穩當の實例を擧げ出したら表面の事實丈けでも際限はない。

第二に經濟的方面に就いてのＡＢＣ三國の提携は戰時中から企てられて居た。卽ち一九一七年の暮頃から、上海でも英米支三國商業會議所はパレース・ホテルや、上海クラブに相互の幹部を招待し合つて交懽を催し、支那輸出貿易奬勵の名に托して一委員會を組織して接近を圖り、又北京でも同樣英米支三國商人の交懽を重ねて以心傳心戰後三國が提携して經濟發展を圖る默契に暗合して居た。果せる哉戰後講和會議の開始せられて間もなく本年五月早くも天津では英米支三國の實業家が聯合協議會を開催した。而して其の目的に就いては『從來直接獨逸人の手によつて取扱はれた支那の貿易は先以て英米の掌中に收めるが至當であるのに、動もすれば地の利を占むる日本に奪はれる虞がある。就いては英米と支那との間に密接な聯絡機關を作るがいゝ』と云つて居る。本文の初に述べたＡＢＣ倶樂部が成立大會を開いた時にも英國公使 Sir John Jorlan は祝詞を附つて『支那に於て互に相信ずるの厚き英米支三國人に比すべきなく本倶樂部の成立を以て三國親善幸福關係永久の歷史に於て更らに新たな一頁を劃出せんことを望む』と言つた。其の外英國商業會議所が其の經營して居る支那語學校を米國青年のために開放したりして英米の接近に努めて居るが、曾て米國の機關新聞 China Press

紙が『支那を援助して日本を排斥するは支那に對する友誼であつて同時に英米人の自衞策だ』などゝ露骨な評論を掲げたなどは語るに落ちた部類である。

五

第三、社交的その他の方面に於て英米が日本を排斥して支那に同情を賣り、其好感を買ふ場合に巧みに支那の靑年學生に着眼して彼等を籠絡し得た事は慥かに一種の成功である。之れには米國が多年多大の資金と努力とを竭くし來た對支學校病院政策や留學生の優遇、宣敎運動等の所產が與つて力ある事は勿論であるが、駐支米國官憲及び英米煙草會社其他民間の商社などが熱心援助を與へた效果も看過してはならぬ。六月上旬上海に排日學生が學生聯合大會を開催した時の如き、米國副領事 A. G. Loehr を初め英米兩商業會議所會頭米國武官、China Press. Shanghai Gazette の代表なども出席して大いにＡＢＣ提携の氣勢を添へた。前米國公使 Dr. Paul S. Reinsch の如きは在支六年の間支那學生の會合等には努めて出席し極く氣輕るに支那の靑年と接觸して Western returned Students and China" なる好題目の下に『東西二大民主國の提携』を皷吹し支那靑年の血を湧かす程の共鳴を得た。支那の學生が近來支那の政治上社會上重きをなし來つたのも一理ある次第で、彼等は益其の結束を固めて遂に最近に全國歐美同學會と稱する一大團結を組織するに至つた。上海の Shanghai Gazette は此の運動に最も力を藉すので恰度學生團の總參謀本部の觀を呈し公然とＡＢＣ同盟の成立を提唱して居る。

固よりＡＢＣ同盟と言つても玆に英米支の三國が彼の日英同盟や三國同盟のやうに國家の外交手段によつて正文の條約を締結しやうと言ふ計劃ではない。然し現代に於ては列國の對支發展は官僚外交や軍國的政略の成果によつて期待せらるべき時代ではなくて兩國民の實業的接近、商工業的提携を主として企圖せねばならぬ時代であるから兩國民間の友情關係が何よりの先決問題であつて見れば、支那に於けるＡＢＣ同盟の唱和と排日の宣傳に就いては日本として此の際大いに考慮する所が無くてはならぬと惟ふ。

六

夫れならば日本としては此の際一體如何したら好いか。是最も緊要な問題である。が今日のやうに支那の朝野擧つて一般ＡＣＢの宣傳に心醉し、一にも英米、二にも英米と、ＡＢＣ同盟に感情を燃やして居る時機には到底尋常一樣の政策では新らしい進路の開拓は覺束ない。須らく我が對支政策の上に根本的刷新を加へねばならぬ。是がためには今政府も國民も一度從來の

行懸りを一切蟬脫して、新生面を展くの覺悟が必要である。彼の北方一部の軍閥と結んで非事を遂げたり、一部の腐敗官僚と結托して利權を漁る種の政策の不可なるは勿論、因緣に繫がる情實に泥んで居ては我が對支政策は幾度內閣を更へても走馬燈の活畫である。遂ひに刷新の日無く日本は期せずして國際の孤立に陷る外はあるまい。

故に今日の時は日本が從來の行懸りを綺麗瀟洒と些の未練なく放擲して支那の領土保全、門戶開放機會均等の三大主義に根基した而かも之に徹底した拗はれぬ新對支政策を確立して局面開展の第一步を踏み出すべき時である。此の意味からみれば彼の滿蒙除外の主張や軍事協約の存續、靑島專管居留地設定の固執などは寧ろ考へものである。前者は大勢に逆行し後者は大勢に落伍する虞があるからである。

斯うして我が國の大策が確立したならば進んで之を內外に闡明し更らに事實に徹底せしむる手段が必要であつて之がためには古い政策ではあるが我が新聞、通信等の宣傳機關を整備し尙學校、病院の設置留學生の優遇等の文教救濟的方面から在支商業會議所の活動、商工業者の提携、官民の交驩等に亘つて日支親善關係の建設に努力を竭さねばならぬ。而して此等の諸政策の成果をして永遠の生命を保たせるには何としても支那に於て比較的新智識を有し將來必ず支那の政治を左右すべき階級なる彼の靑年學生所謂 Young Chinese をして何等かの共鳴點を發見せしむることに努めねばならぬ。我が國にして此等の諸點に就き充分遺漏なきを期するに於ては支那に在て如何に英米人がＡＢＣの提携を宣傳し排日的運動を計劃して我が國の發展を窘迫しても我はチツトも氣に病むには當らない。何となれば英米の活動がたゞ一片の射利的打算から來たものであるならば終には其の衒耀的同情の無力を暴露し終るであらうし、若し然らずして我と等しく飽くまで公正な政策に基くものであるならば、日本は懽んで彼等と共同すべくＡＢＣの提携は玆に日本を加へ世界の三大强國が相協同して支那の開發發達に貢獻し得る日を迎へ得るからである（大正八・一〇・八）

檢事論告の際に於ける被告人の起立問題

辯護士　松谷與二郎

一

社會主義者大杉榮が船橋警察署の尾行巡査を毆打して傷害罪に問はれたる控訴裁判の第二回公判が、本月二日東京地方裁判所刑事第二部田山裁判長係り岩松檢事立會の上開廷せられ、審理の後將に檢事の論告に入らんとせし際、田山裁判長は大杉に對し檢事の論告があるから起立せよと注意をしたが、大杉は起つ必要はありませんと云つて之れに應ぜず、裁判長は更に「それは法律に規定して居ないが檢事は國家代表の機關である、其國家の機關に對して敬意を表すべく起立してもよいではないか」と云ひ二三押問答の末裁判長は

「どうしても立たんか、裁判所は改めて起立を命令する、斷じて着席の儘にては許さんぞ、それでも應ぜんならば勝手にせよ」と怒氣を含んで命令したが大杉は遂に起立せずして檢事の論告に入り、檢事は事件に對する論告の末起立問題に論及して

「被告は裁判長の注意をも斥け本職の論告に起立せずとは禮儀を解せざるものである、成程檢事は原告官として被告と對等の地位にあれば起立する必要なしと信ずるものならんも、檢事の論告に對し被告人の起立するは裁判所開始以來の古き禮儀である、且檢事は裁判所が被告の爲めに不利益なる判決を下せば被告の利益の爲めに控訴上告する場合もある故に被告は檢事の論告に敬意を表して起立すべきものである」と云つて居る。

此記事は其翌日たる本月三日の各新聞紙に掲載せられ就中大阪毎日は比較的詳細に記載せられてあるので自分は此記事を論據として少しく自分の意見を述べて見たいと思ふ。

勿論此被告人起立問題は此日に始めて起つた問題でなく、第一審の東京區裁判所でも大杉は遂に起立せず、檢事の論告を聽き、又先月二十日東京地方裁判所第一刑事部神谷裁判長係り瀧川檢事立會の雜誌法治國の新聞紙法違反事件でも、矢張り被告荒畑勝造外二名が起立を肯ぜず其儘檢事の論告があつたのである。

今後も國民思想の變遷と檢事の地位に對する被告人の理解に

より益々此種の問題が頻出することゝ信ずる、故に此際裁判所は勿論在野法曹たる自分等に於ても互に之を研究し徹底的に之を確定して置く必要があると信ずる、故に左に自分の所信を述べて識者の批評に俟つ次第である。

二

本問題を論ずるに當つて第一に決定すべきは原告官たる檢事の地位である、而して其檢事の地位を論ずるに先ちて刑事訴訟の方式に就て一言する必要がある。

元來刑事の裁判は民事の裁判と異なり必らずしも原告被告の兩地位を必要とするものではない、國家の或る機關に刑事の裁判を一任し犯罪の探偵捜査より之れが審理、裁判及其刑の執行迄一の機關に一任し　他の機關の干與を俟たず處理せしむる主義と、又原告官なる特種の地位を認め其機關が犯罪の捜査探究を爲し犯罪ありと思料せし時は、之を他の機關即ち裁判所に起訴し、自から原告の地位に立ち其の犯罪を訴追彈劾する主義の訴訟とである、前者を糺問主義と稱し、後者を彈劾主義と稱するのである。

而して此彈劾主義にも又二個の主義があつて此彈劾權を國家の機關に一任する主義と、又個人自から原告となり起訴を爲し法廷に立ち被告を訴追彈劾する主義とで、前者を國家訴追主義と稱し、後者を個人訴追主義と稱して居る、往古は何れの國に於ても彈劾式訴訟行はれ英國に於ては古來より引續き彈劾式訴訟行はれたるも、歐洲大陸に於ては十三世紀末より漸次糺問主義の訴訟行はれ十六世紀頃には概ね此制度が行はれたるも、佛國の大革命と共に此主義は廢れ、再び彈劾式訴訟が行はるゝ樣になつたのである。

吾國の沿革に就ては深く研究する所なきも大體に於て糺問式訴訟行はれ幕府時代の町奉行なるものは専ら此糺問主義に依て裁斷せられたのである。併しながら例外とも見るべきは彼の伊達評定に現はれたる伊達安藝が仙臺四十八館を代表して原告となり、後見役伊達兵部及家老原田甲斐を被告として時の將軍家に裁斷を仰いだ事がある、是れは彈劾主義中の個人訴追主義に合致するものである。

而して吾國及歐米諸國に於ても現在では皆糺問主義を止め、彈劾主義を採用し、彈劾主義中で大體に於て國家訴追主義を採用して居るのである、只例外として英國は此國家訴追主義に多大の例外を認め、或種の犯罪に就ては個人にも又原告として犯罪を訴追し彈劾することを許してあるのである。

三

以上論述した如く何れの國に於ても大體に於て犯罪あれば國

家が檢事なる制度をして被害者に代り起訴を爲さしめ、此起訴なき以上は裁判所は自己の意見を以て犯罪を審理裁判することが出來ないのである、不告不理の原則とは是である。

只玆に一言注意すべきは、元來犯罪があれば其被害者が裁判所に訴へ、自ら原告となり訴追彈劾すればより以上に犯罪事實が明確となり、適切なる判決が下し得らるゝを以て、檢事なる制度を認むる必要がない樣に見える、乍併若し被害者自身が裁判所に出頭して犯罪を訴追しなければならぬとなると種々なる弊害が之れに伴ふて起るのである。即(一)被害者は被告が更に大なる復讐を爲すを恐れて起訴せざることがある、此等の場合に於て之れを其儘に放任せんか彼等奸曲の徒をして益々跋扈跳梁せしめ社會の秩序を全然破壞するに至るのである、又(二)時間と勞力の徒費を恐れ若くは煩瑣なる手續を厭ひ起訴せざる事あり、(三)或は前二者と反對に或人に不實若くは過當の訴追を爲し其人の名譽を毀損せんとする者ある場合に於ても、裁判所は之を審理せざるべからざる結果、裁判所が却つて彼等に利用せらるゝ事となる場合がある。(四)又個人に於て別に大なる被害なしとするも之れを放任するときは社會の公安を害する場合に之を訴追するものなき狀態となる等、種々の弊害が起るを以て玆に國家が檢事なる制度を認め是等被害者に代り起訴を爲さしむる樣になつたのである。

次に訴訟の方式につき何故に糺問的訴訟の方式を採らずして彈劾的方式を採つたかにつき一言する必要がある。

前述の如く犯罪の訴追は個人に一任するときは種々なる弊害あるを以て、之を國家に一任したのである、已に國家に一任せし以上は、裁判機關に於て自から犯罪を探査し自から之を起訴裁判するは自由である、否寧ろ此方が簡單であつて且便利である、從て糺問主義の方がよい筈である、然るに吾國及歐米多數の國家が此の主義を排して彈劾的方式を採つたと云ふことは大いに理由のある所である、即ち左に此の兩主義が比較を爲さんに。

(一)糺問式訴訟にあつては國家の機關が自から犯罪を搜査し探究して裁判するが故に、假令後日被告より其犯罪につき種々の立證を爲し十分無罪となるべき事件でも犯罪ありとの先きの見解が先入主となり、容易に無罪の判決を與へず、不識々々の間に無辜を罰する結果となるに反し、彈劾式訴訟にあつては此裁判官は原告官たる檢事の起訴意見と被告の主張辨解とを聽取し、其中間に立ちて公平に裁判し得るが故に比較的人權蹂躪の弊を聽くことが尠ないのである、(二)且又此主義は被告人の地位に保障を與へ原告と對等の權利を附與して十分自己に對する

訴追事實につき防禦權を行使し、反對の證據を提出し、無罪を主張し得るのみならず、辯護の制度が設けられてあるが故に原告官たる檢事と相對待して十分權利の擁護が出來るのである、反之糺問式訴訟は嫌疑者を訴訟手續の目的として是れに何等の權限を與へず、故に一度嫌疑者とならんか、其利益を擁護するの途なく、極言すれば生殺與奪の權は一に裁判機關の手にありと云ふべく、其地位の危險なること想像の外にあるので、到底個人の權利を尊重する近代の思想に適合しないのである、之れ近世に於て何れの國家も糺問式訴訟の方式を捨て、彈劾主義の訴訟方式を採つた所以である。

四

以上論じた處で吾國及歐洲大陸並英米諸國が彈劾式訴訟の方式に則り原告官たる檢事と被告とが對等の地位に立ち、原告たる檢事は犯罪事實を立證し、被告に對し求刑を爲し、被告は之に對抗して無罪若くは檢事の求刑の不當なる所以を辯解し、檢事の攻擊に對する防禦を爲すのである、而して裁判所は其中間に立ち此兩者の陳述を聽き、何れの主張が正當なるやを公平に判斷するのである。

卽訴訟の方式に就ては刑事訴訟は民事訴訟と少しも變る處がないのである、只民事の裁判と異なる點は民事の裁判は被害者自身が原告となり被害事實を立證し、攻擊を開始するに反し、刑事裁判にあつては檢事が被害者に代り原告官として被告に對する攻擊を開始するの差異あるのみである、依之觀是ば檢事は訴訟法上被告人と異なりたる特種の地位にあるものではなく、全く被告人と對等の地位にありて裁判所の判斷を俟つものであることが明である。故に法廷に於ける席次に就ても多年吾辯護士界の問題となりつゝあるものであつて、檢事の席次は民事の法廷に於ける原告の席次と同じく被告と同一の場所に並行して列ぶべきである、然るに現在の吾國の刑事法廷にあつては檢事は裁判官と同列に席を占め、被告人を下瞰し、裁判官と同等の地位にあつて裁判所と共同して被告人を裁判するものなるかの如き感を抱かしむる樣な設備になつて居るのは少なくとも刑事訴訟の神髓を解せざるものであつて、是れ全く官尊民卑の餘弊とも見るべきである。

尙玆に一言注意して置きたいのは刑事被告人に對する世人一般の心理狀態である、卽一旦刑事被告人となりて法廷に立たんか世人は直ちに之れを眞の犯人なりとの獨斷を懷き之に對して憎惡侮蔑の眼を向け、之を卑下する傾きあることとである、併しながら之れは間違つた考であつて、眞に犯人なりや否やは犯罪が確定して始めて言ひ得るのである、未だ判決の下らざる內より

之に擬議を挟つが如きは間違つて居る、少くとも未だ確定せざる被告人に對しては一個の善良なる國民を以て之に臨む必要がある、况んや其職に與る裁判官檢事辯護人等に於て最も注意すべきことである、

斯ふ云ふ心理狀態が不識々々の中に被告人の地位を卑下し、檢事對等の觀念を裏切つたものであらうが、之れ全く訴訟法の精神を解せざる不當の見解である。

五

既に檢事の地位が刑事訴訟に於て原告官であつて被告と原則上同等と決定せし以上は、之れと對等の地位にある被告が檢事の論告に對し起立して敬意を表し謹聽せざるべからざる理由は何處からも發見することは出來ないのである、又被告の心理狀態から考へて見ても自己の犯罪を指摘し彈劾する檢事の論告に對し敬意を强ひらるゝことは眞に慘酷であつて情に於て忍び得べき事柄でない、然るに田山裁判長は被告が起立を肯ぜざるに再三之れに注意を與へ尙應ぜざるや、怒氣を含んで起立を命じ勝手にせよと放言せりと云ふに至つては、實に不當の甚だしきものにして斯く起立を命じたる法の根據如何を質したいのである。

反對論者辯じて曰く、檢事の論告に對して被告人が起立して敬意を表するは裁判所開始以來の古き慣例なり、即檢事は自己の論告の際被告人を起立せしめ敬意を表せしむべき特權を此古き慣例に依て得たるなり、換言すれば民法上古き慣例により權利を取得することあるが如く公法上に於ても亦慣例により其權利を取得することあり得べきなり、田山裁判長が此古き慣例に基き檢事の取得せる權利に因り被告人を起立せしめたるものにして決して不當にあらずと言つて居る。

自分も亦此見解の如く檢事論告の際に於ける被告人の起立は刑事法廷に於ける古き慣例なることは之を認める、併しながら此古き慣例により民法の慣習法の如く公法上の慣習により此特權が檢事に附與せられたりとの議論には贊成が出來ない、何故なれば公法上慣習法なるものを認むるか否やについては學界未定の問題と云つてよい、假りに慣習法なるものを認むるとするも慣習法なるものは法令により認められたるもの及び法令に規定なき事項に關するものに限り法律と同一の效力を有するのである、換言すれば現存の法令の主義精神に反する慣習法なるものゝ存在を認めないのである、從つて刑事訴訟の彈劾主義たる當事者對等の原則を破壞する檢事の特權を認むる慣習法なるものゝ想像し得べき筈がないのである。况んや本問の如きは法廷禮儀の問題にして權利の問題でない、故に慣習法の理論を以て

之を律するは已に失當であつて多く反駁するの要を見ないのである、次に反對論者の意見として主張せらるゝ議論は、檢事は公益上認められたる國家の代表機關である、其國家の機關に對して敬意を表する爲め起立を命ずるに何の不可があらんと云ふのである、是れは田山裁判長が被告人に對して再三注意した時もそう云ふて居る、成程一應は斯う云ふ議論も立て得らるゝ、併しながら已に訴訟法上檢事と被告人とを對等と見做し凡ての權利を被告人に附與せる以上は特に國家の機關なるが故に之を尊重し敬意を表すべしとは理論の矛盾である、假りに理論上の問題を別とするも國家の機關なるが故に敬意を表せざるべからずとせば、國家の代表機關を相手とする民事の裁判に於ても起つて相手方に敬意を表し其主張を拜聽せざるへかざることゝなる譯である、是れは民事法廷の例であるから別として刑事法廷に於て裁判所書記が發言する場合（刑事訴法法第四十四條同四十五條參照）に於ても被告人は一々立つて之れに敬意を表せざるべからざる譯である、即ち裁判所書記も亦裁判所構成法に認められたる國家の機關である以上は同一に論ぜらるべき結論となる譯である、如何に反對論者と雖も是程迄に極端に論ずる勇氣はあるまい。

次ぎに反對論者は檢事は公益上の代表機關である故に被告に對し其利益の爲めに控訴上告する場合がある故に、強ち被告人を攻擊するものなりと斷ずるところが出來ない、故に此點から見ても檢事に相當の敬意を表するが當然であると云つて居る。

成程檢事には法規の上よりすれば被告人が裁判の結果不當に不利益なる判決を言渡されたる場合には、被告人の意思如何に拘らず訟訴上告する場合がある、併しながら是れは絕無に近き稀有の事實である、所謂紙上の美果であつて之を味ふた者のないのを遺憾とする、假りに此法條が法律の精神通り遺憾なく活用せらるゝこととありとするも、夫れは其恩典に浴したものゝみに云ふべきことであつて、此法律の適用せられさる被告人に之を强ふるは見當違ひである、若し此議論の如くせば辯護人の辯論に對しては被告人は最大敬禮を爲してよい筈である、然るに裁判所は檢事の辯論が終り辯護人の辯論に入るや特に座つてよろしいと注意をして着席せしむるのが例である、何たる皮肉の矛盾であらう。

六

以上論じた如く何れの點より觀察するも檢事の論告に對し被告人に起立を命じ、敬意を强要するは法律上實に不當の甚だしきものであつて刑事訴訟法の精神を解せざるものである。

元來敬禮の問題は信念表彰の問題である、故に恭なり、禮記に

「心肅なれば則容恭し」とあり、心に憎惡不滿の念を抱き居る者に向つて敬禮を强要するは已に失當なり、況んや之を强要するに何等法律上の根據なきに於ておやである、自分の考では田山裁判長の今度の行動は此點に於て二重の錯誤に陷つて居ると思ふ。

乍併是れは田山裁判長のみを責むるは酷である、田山裁判長は此間違ひたる古き慣例を忠實に遵奉したに過ぎない、間違は日本の刑事裁判所全體の間違である、田山裁判長のみの間違でない、只田山裁判長に相當の見識があつたならば此際斷然今日迄の因襲を打破すべきであつたが、此處置に出なかつたのを吳れ吳れも遺憾とするのである。

要之本問題は檢事の論告に被告人が起立して敬意を表すべきや否やの問題のみではない、更に遡つて訴訟の當事者たる檢事と被告人とが對等であるか否やの問題である、否司法事務に干與する何人と雖ども原告官たる檢事と被告人とは對等の地位にあるものなりとの理論に對しては一人の反對もあるべき筈のものではない、然るにも拘らず刑事法廷の實際は檢事は勿論裁判所に於ても被告人を一個の罪人として取扱ひ少しも其人格を認めて居ないのである、是れは色々の原因もあらうが結局日本古來よりの糺問主義と、又被告人を罪人なりとし之れを憎惡卑下する觀念と、官尊民卑の陋習が原因を爲して居るのである、從て裁判を爲すに際しても何等かの機會に此陋習が顯はれ裁判の神聖を害することが往々あるのである。

既に吾刑事訴訟法が被告人の地位に保障を與へ、一個の人格者として之れを遇し、檢事對等の制度を採つた以上如斯陋習は一日も早く之れを改め、吾刑事訴訟法の主義精神の發揮に努めたいのである、夫れには先づ本問題の檢事の論告に被告人を起立せしむるが如き行動は絕對に止めて貰ひたい、且又檢事の座席に付いても彼の英米其他の先進國の如く全く被告人と同列場所に着席せしめ、今日の如く裁判官と同列に置き共同して裁判するものなりとの觀念を一掃して貰ひたい、居は性を移し席は心を移すのである、如斯にして順次之れを改善して行つたならば現在の法廷の空氣を一新し吾刑事訴訟法の主義精神に庶幾きものになり得るであらう、何れにしても現今の刑事訴訟の遣方につきては種々の缺陷がある、之等を改善するには互に忌憚なき意見の發表を爲し、之れを研究するを尤も適當と信ずる、敢えて苦言を呈して反省を促す次第である。

與謝野晶子夫人著

短歌作法新著

晶子歌話

中澤弘光畫伯裝幀

四六判箱入美本
定價一圓五十錢
送料八錢

與謝野夫人其熱と香味に富む才筆に由り新たに短歌の作法を細叙して、特に象徴的短歌を鼓吹し、併せて師友及び夫人自身の優秀なる作例を講じて、歌壇近時の常識主義、客觀主義、擬古主義の流行に反對し、專ら新理想主義、新熱情主義、新浪漫主義の創造を高唱せらる。大正の短歌之に由つて再び純正叙情詩の花園に四秀永芳の薔薇を開かんとす。世の短歌の作者と讀者速かに『晶子歌話』一册を手にせられよ。

萬造寺齊氏新著

小說 颱風

（中判四百三十頁新裝幀 定價一圓八十錢送料八錢）

見よ、驚くべき新人の新篇、突如として出現するや颱風の如し、收むる所の五篇薩南の海南に育つて都門に學び、多感多熱、早く孤獨の生活に飜弄されたる一青年の自叙傳なり、愛と憎みと、牽引と反撥と、何ぞ此人間性の矛盾の悲痛苛酷なるや、屢々蹉跌と絶望とを重ねて、而かも調和統一の境地に憧かれて止まず、既に微か乍らも美くしき平和なる生命の曉色を遠望す。如此きは實に現代の青年に共通する自己改造の苦悶動機にあらずや。

東京市飯田町一丁目二番地 株式會社 天佑社
振替東京一〇一二八番
電話番町一一七九番



獄を出て

山中峰太郎

今、この一文を草しつゝある、私といふ一人の男が、この國の法律に觸れて、刑に服したのは、昨年の三月の末であつた。「懲役二年」といふ刑であつた。それが、

其方儀、受刑以來、作業ニ勵精シ、改悛ノ狀アルヲ認メ、

其筋ノ允許ヲ受ケ、本日釋放ス。

との言渡を、典獄から受けて、この九月の中旬に、獄を假りに出ることができた。獄の正門の鐵の扉から放たれると、自分の姓名を誌るした標札が掛かゝつてゐる家に、眞直ぐに歸つてきた。獄の中に、生きてゐた時間は、一年半ほどであつた。

一年半の獄中生活。その時間が、長かつたか、短かゝつたか。その長短の量に、値は全く無い。たゞこの自分が、現世における此の生涯のうちに、「獄」と名づけられる特異な境遇に身を措いてきたといふ事は、他ならぬ自身が違法の罪を敢て犯して了つた爲の、必然の果を結んだ一事象であるとはいひながら、それが我れながら全く意想の外に超越した永遠より永遠へ通じて眞に稀有な、猶ほ或ひは何としても有り得べからざる一事であつたやうに、思ひなされてならない。それだけに、わたくし自身にしてみれば、さながらに一時の幻想に肖て、然かも最も顯はな特異な現實に他ならぬ既往最近の獄中生活の始終を、その印象が未だ新しく歷々と、貽されてゐる昨今のうちに、縱ひ一わたりでも如實に回顧して纒めてをくことは、只だ其れだけの思索に耽つてみることばかりでも、試みてみたいとおもふ欲求が、出獄後の半月前から、既に頻りに萌しつゞけてゐる。

この欲求に、そゝられて居るけれども、これは、おそらく臨

時に殘存する衝動的な且つ暴力的な氣分であらう。この氣分を滿足させる爲に、多くの時間を費したくない。唯だ此の兩三日を、最大限として遣ひたい。その回顧の浮いてくる過程を、猶ほ書きのこしてをきたい。書いたものを、更に一つには自分の生活費にあてるやうにしたい。又、斯うした眼前の方法に依るのでなくては、獄を離れてきたばかりで、殆ど衰ろへ疲れてのみゐる目下の私にとつて、獨りで自分の肉身を保ち養ひ得る策を、遽かならうちに發見することはできない。

あだかも幸ひと思つて好いことには、中央公論の主幹記者、瀧田樗陰氏から、私の獄中の感想を書くやうに、ゆくりなくも希望されてきた。瀧田氏よりの此の申込みと、わたくしの現に懷いてゐる欲求とは、良く相協つてゐる。私は、この一文を、中央公論のうへに、敢て公けにすることにして、こゝに書きはじめてゐる。

獄のなかに、囚へられてゐた時の、自分の感想を、公けにすることとは當然、愧づべく、恥づべきことに、違ひはない。然しその種の辯解をなし得るだけの餘裕が、現在の私には、心にも、身にも、内外ともに同じく喪はれてゐる。また、此の一文が、讀者諸氏に、何等かの興味を供し得るか否かに就いても、私は、[illegible]はずにゐる。只だ、自分の[illegible]一年[illegible]特異な生活の、縦ひ外容だけなりとも、こゝに獨り自由に回想してみたい。同時に、その一場の回想を錄したものに依つて、獲られた金が、今後しばらくの、自分の肉身の糧に代はり得ることを、全く背案に中つた一齣の幸福事であると、思つてゐるばかりなのにすぎない。

只だ、夫れ、是れだけのことである。現在の私には、この他に、殆ど何も無い。今、こゝに、わたくしは、唯だ一人だけでゐる。

——一九一九・九・二七・午後——

——東京市郊外の寓居にて。——

熱帶の中心にある赤い泥沼のふちの、どろ／＼した粘土を、溶けるだけ濃く溶かして、飽和しきつた其の液の底に、數年月にわたつて、長く、幾晝夜も浸し漬けてをいたのを、更に復た赫々たる炎日の直射光に、幾日か曝らしつゞけて、漸く乾いたのを持つて來たやうな、あの赭い獄衣。

あの赭い獄衣を、自分の肉のうへに、纏ひ着けること。この赭さと肉身の皮膚とが親しむこと。この一事を、未決囚として[illegible]受けるのについて私

い前途に想像せられる獄中の何事よりも、最も強く忌み嫌つてゐた。果ては其の濃い濁つた赭さを、單だ想つてみるだけでも、心の隅から、殆ど本能的にといつても可いほどに、怯え慴へてゐた。

既決囚として、囚人自動車に乗せられて、私は、新しい監獄に、護送せられた。私の他に、五人ばかりも、同じ日に刑を受ける人たちがゐた。

入獄の第一日。

眞裸になつた。體量をかけた。十七貫ちかくの重さを、私が具へてゐた。兩手の十指の指紋を取つた。その油墨に穢れた指さきを、脚もとに置いてある小さなバケツで洗ふやうに命じられて、うつむいて洗つてゐると、直ぐ横の、木か鐵かの扉が、がら〳〵と高い響を卒かに起てゝ、兩方に開かれた。扉の間から、古く穢れてゐる赭い獄衣の半纏を着て、赭い扁平な帶を締めて、赭い股引を穿いてゐる囚人が、三人、どや〳〵と前後して現はれた。その三人が、いづれも赭い獄衣の襟もとに、白い短冊のやうな、布片を縫ひつけてゐる。それに墨で、「第――號」と、番號を、はつきりと濃く捺してある。その番號札の直ぐ下に、眞鍮の黄いろい楕圓形の小さな金具を貼り着けたやうに附けてゐる。三人ともに、皆が兩肩を振つて、ぎろ〳〵と逞ましさうな瞳を閃めかしつゝ、檢査場に堂々と入つてきた。その全部の氣勢に押されて、わたくしは、一時に少からず怯えた。荒びた感じが、暫くのあひだ消えずにゐた。

赭い三人は、手に〳〵、別の赭い獄衣の塊を、幾つも提げてゐた。それの赭い塊を、漆喰の冷たい床のうへに、默つて抛り出して了ふと、直ぐに復た踵を回へして、扉の外に、前後して出て去つて了つた。扉の外に、黑羅紗の官服を着けた、全身の漆黑な看守が一人、靜かに佇むでゐた。扉が左右の兩方から再び閉ぢられた。淡黃いろに塗られた扉であつた。

一擧、一動、その總べての一つ〳〵を、直ぐ傍に立つてゐる看守の命じるとほりに、私も、他に一緒に來た人たちも、皆が、成し得るかぎり忠實に、唯だ默りに默つて行つてゐた。小さな古いバケツの底の水で、指さきの油墨を、漸く洗ひおとしてしまふと、床のうへに轉がつてゐる赭い獄衣の塊を、解いて直ぐに着るやうに命じられた。

赭い獄衣の塊を、手にとつて解いてみると、それは、綿入れの着物、單衣の襦袢、越中褌の三つが、一纏めに疊めてあるので、更に其の廻りを三尺あまりの細い扁たい帶で、緊しく結むであるのだつた。その總べてが悉く古い赭い色に染みてゐた。襦袢にも、褌にも、薄い單衣の其れには、大小の無數の汚染が、

ところ／＼に、聚まつたり散つたりしてゐた。襦袢の汚染は、遺傳性の皮膚病に久しく罹つて斃れた行路病者の膿み爛れた肌を、想ふに十分であつた。褌の斑點は、最惡性の痲病患者の惱みを、直ぐに聯想させた。

單だ赭い色を、想つてみるだけでさへも、あれほどまでに激しく其れを忌み嫌つてゐた私が、然し、いよ／＼其の實物を、自分の溫い軀のうへに纒ふ時になつて、然も、それが猶ほ自分の想像以上の穢なさと不氣味さとを、眼の前に披げ出してゐるのに關はらず、わたくしは、全く何の躊躇もなく、また毫しの嫌厭も憎惡もなしに、その襦袢に兩腕を通し、褌の紐を結び、襟垢の厚く黑く着いてゐる綿入れを着てしまふと、鄭重に襟まへを整へて、手迅く帶を締めた。その外の動作の總べてが、自分の裝のこゝろと、聊かも牴觸することなしに、一切が極く容易に濟むでしまつた。私は、その際に、自分の胸のあたりを、あらためて視なほした。そこで兩乳の全面を掩ひ、軀の全部を今や圍繞して餘すところの無い赭い色を眺めてみても、私は少しの動揺も矛盾も感じずにゐた。むしろ泰らかな氣もちを、靜かに寛やかに湛えてゐた。自分でも不思議なほどに、豫想と反對して、猶ほ餘りある毅く剛い氣もちが、そこに何時の間にか、我れ知らぬうちに顯はれてゐた。同時に一方には、慄えたり、怯へたりしてゐたのであるけれども。

最初の苦痛は、刑の前途を、ぢつと眺めてゐることであつた。「懲役二年」、二年といふ月日の長さを、前に展望しつゝ、その時の流れのうちに含まれてゐる自身の境遇が、始終を通じて現に獄中に在る其れと、常に恆に同じでゐて、聊かも變化し得ないことを、既に現在のうちから如實に感じてゐなければならぬ。其の全く必然な、何とも爲し得ない「なければならぬ」脅迫が、私を、いたづらに强く苦るしめた。同時に、それに加へて、現在の孤獨そのものが、ひし／＼と與ふやうに、私を、拒ひがたく深く取り圍むで、底の測りがたい哀傷の渦の奥に、惘く昏い氣もち其のものばかりに化りきつてゐる自分が、否應なしに强いられる「なければならぬ」の下に喘ぎつゝ、偏たく服從してゐた。

監房の錠を開かれて、他の囚人たちと共に運動場に出ると、自由そのものを默つて啓示してゐるやうな蒼々した大空を、何よりも直ぐ仰いだ。それと共に、赤い煉瓦の壁が、際だつて毅く風景に聳え立つてゐるのが、忌やでも瞳のなかに隕ちてきた。蒼い空と、赤い煉瓦の壁との、兩つが、强い對照を、おのづか

ら作つてゐた。その對照の間に、わたくしは自身の現在に對する「服從」を、しみ〲と餘儀なく感じた。未だ一部の服從を感じてゐる最初のうちは、その度ごとに、私は何に弱かつた。直ぐにでも倒れてしまふかと想はれるほどに、弱く脆かつた。同時に、畏れが、そこに伴なはれてゐた。然し、そのうちに、すつかり服從しきつてしまふと、私は強いものに化つてゐた。同時に、何等の畏れも、暫く消えて無くなつてゐた。刑期の二年が、或ひは三年になり、或ひは其れ以上に、延ばされるものと、假りに想つてみても、その强迫的な苦痛に、毫にも抗することなしに、然も靜かに默つて羔のやうに其れを耐え忍び得べき確信さへも、全き服從の奥に、潜在してゐるのが、自分に是れと確かに捕捉されたりした。運動場に出て、獄の高い甍と、煉瓦の壁とを仰いでみても、また同時に、今後の刑期の未だ未だ長いのを想つてみても、そこに前とは違つて、何等の痛痒をも感じることなしに、却つて悠舒として、平靜に自分を保つことができた。省みると、其の際の私は、現在する自身の雰圍氣に、全く服從しきつてゐて、その爲に、それ以外の餘念の起こり得ない狀態に在るのであつた。

斯うした自分の一部の服從が、やがて强いられて、遂に全部の服從を餘儀なくされて了ふと、そこに、心理上の化學的變化が、忽然として倂存するものゝやうに、私は、それを每に自覺してゐた。脆弱な自分が、剛毅なものに、努力なくして忽ち變化してゐることは、決して稀れなことではなかつた。素より豫測し難い間歇的な心象であつたけれども。

「全き服從」これが、獄中における私の、寧ろ生命であつた。そこに始めて、獄中の平和が有つた。眞の服從は、眞の抵抗と同一の價値を、有つてゐた。

獄に入つて三日めの夜であつた。わたくしは、深夜に、眼を覺ました。月の光が、窓を透して、私の仰臥してゐる右手の壁に、長方形の窓の輪廓を、明かるく斜めに映してゐた。窓に穿めてある縱橫の鐵格子も、その眞直ぐな濃い影を、くつきりと壁のうへに印してゐた。蒼白い淡い光が、天井の高い監房の内の全部に、柔かく瀰漫してゐた。私の神經が、漸く冴えてきた。そのまゝ仰臥しつゞけてゐられないほどに、亢ぶりはじめた。然し、監房の直ぐ外の、長い廊下のうへに、夜を徹して勤めてゐる看守が、徐かに往來してゐる硬い短かい靴音を聞くと、私は、監房の扉に穿つてゐる小さな看守窓から内部を覗察されることを危ぶみ惧れた。夜中に、坐つてゐたり、立つてゐたりするならば、それは直ぐに犯則行爲として、何等かの懲罰に處せられるのだつた。私はそのまゝ仰むいて、月明かりを、

ある時は凝然と、ある時は漫然と見まもつてゐた。何時ごろであつたらうか。夜は、確かに闌けてゐた。

壁に斜めに流れてゐる窓の月影は、月の移るのにつれて、更に靜かに長く壁の裾まで斜めに伸びきつてしまふと、下の床の板のうへに、しのびやかに匍ひさがつてきた。わたくしは、板床のうへに、薄い繭の筵を敷いて、そのうへに只だ一枚の藍いろの布團の間に、全身を介んで仰むいてゐた。布團のなかの綿が、ところ〴〵に團まつてゐた。少しでも軀を搖かすと、肩のあたりや脚のあたりに、ごろついてゐる綿の團塊が、布團の中で、いろ〳〵の方向に不規則に轉げまわるやうに思はれた。月影は、床の上から、布團の裾の方に、ます〳〵寂然と移つてきた。やがて、私の腰のあたりから下が、月の光につゝまれてしまつたやうに思はれた。それが、生來未だ曾て覺えなかつたほどに、極めて冷酷な感じがせられた。私は、兩脚を竦めて、全身の輪廓を、小さく縮めた。同時に、烈しい哀愁感が、何の餘裕も措かせずに、私を咄嗟に捉へてしまつた。

何ものかゞ自分を弄んでゐる。その何ものかゝら受ける極めて冷酷な感じ。そこに湧く深い烈しい哀愁の動搖。あくまで他から餘儀なくせられる強い諦らめ。嘆きつゝも果ては底まで墮ちて漸く得心させられるやうな深い服從。外から強迫せられて催しはじめた諦らめと服從とから來る覺悟が、自分の内の何になつてしまふ其の弱きより強きに移る全體の過程など。これらの一一を、若しも秩序だてゝ書くならば、最初から嘘になつてしまふ。たゞ是れらの諸々の雜多な感覺や概念が、互ひに交錯し結解して、月あかりの下に仰臥してゐた私を、さん〴〵に樂し刻み苦るしめた。布團のうへを過ぎて、更に左の方の壁のうへに、冷たく匍ひ登つていつた長方形の月影は、やがて横に短かく縮まりはじめた。それと共に、空が濁つた白みを帶びてきた。夜が明けてきた。この一夜の、苦るしかつた始終を通じて、常に私を離れ得ない二つの顔が有つた。その一つは小さく、一つは白かつた。わたくしは、二人の男の兒を、もつてゐる。その弟の方の五歳になる幼い小さな顔が私に絡みついてゐた。猶ほ別の一つの顔は、十年ほど前に初めて會つて、その後に暫く交際を中絶し、私の犯罪によつて、復た其の厚い友愛を、再び新しく受けるやうになつたアメリカの一婦人、ミリケン先生の白い顔の、碧いろの雙つの瞳が、いつも私を視つめてゐたのであつた。

その夜の私が、小さな顔を、最も深く愛してゐた。白い顔が、その夜の私を、最も良く愛してゐた。この二つの顔のみが、まことに親かに、私を慰めた。

我々に命じられた作業の種類は、麻絲を繋ぐのであつた。一時間のうちに、一匁だけを繋ぐのでなければ、普通の作業量を了はつたものと認められないのだつた。指さきの不器用な私は、定められた其れだけの量を仕あげることが、なか〳〵出來なかつた。

『成績は作業本位と謂つて規定の科程を上げなければ、だめだ。行狀の良いことは、勿論必要だけれども、それよりも成績は、作業本位なのだ。精をだして勉強しろ』

一般の囚人たちに注意を與へる看守の此の種の語を、私は時時に聞いた。廊下の雜多な用を勤めてゐる囚人の噂からも、同じく「作業本位」といふ語が、際だつて聞こえた。私は、薄い布團を敷て、薄い股引を穿いて板床のうへの圓座に箕坐を組むで、小さな鋏を片手に、兀々と切々と、麻絲を繋いでゐた。しかし「科程」といふ一時間に一匁づゝを繋ぎあげたことは、極めて稀れであつた。仕上げた作業の量を、毎日の正午ごろに検査され記入されるのだつた。

その正午ちかくになると、前の日から卷きあげてきた麻絲の少量なことを知つてゐる私は、その爲に一場の輕い苦悩を、日ごとに感じてゐた。作業量の検査に來た看守から、叱責か或ひは叱責などを、特にうけるといふのではなかつたけれども、自分ばかりで氣兼ねと苦悩とを感じて、辛い重い氣もちに捲はれてゐた。然し、その検査が濟むで、別に何等の戒告をも受けることなしに、扉を閉ぢられて、外から鍵をおろされると、其の日の作業量が、いかに少額であつたのにしても、今までの重い辛い氣もちは、忽然と消えてしまふのだつた。安易な氣分が、直ぐに代はつて私を寛ろげ柔らげた。

ある日の夕食の分配の折であつた。看守は私に、

『作業の科程があがらないと、懲罰だよ』

と、意味のない笑ひを少し含みながら言つた。私は、その笑ひに惹かされて、何とはなくをかしかつたのと、作業の量が少い爲に處罰されるといふのが、有り得ない不當な事であると思はれたので、看守の語を聞くや否や、直ぐに、

『ほんとうですか。冗談でせう』

と、自分も笑ひながら言つた。

『うゝむ。ほんとうだ。ほんとうとも』

看守は、私の推測を、明きらかに否定して、最後の『ほんとうとも』に、それが眞實な根柢を有つてゐる力をこめて、はつきりと言ひきつた。私は刺されたやうに驚いた。顔の全面が、我れ知らず顰むでしまつた。いかに醜い顔をしたことであつた

らう。すると、夕食の食物――麦六分と米四分の一合四勺の飯と、一撮みの生まの胡麻鹽とを、分配してくれる囚人が、私の背なかの後の方を、覗き込むやうに眺めて、そこの床板の上に麻絲の屑が、散らばつてゐるのを見とめると、

『なあに、麻ならば、二倍ぐらゐ、何のわけも無い』

と、それは其の人自身の獨言のやうに、また私が惱き苦るしむでゐるのを、慰め勵ますやうに、ゆつくりとした口調で言つた。それと共に、看守が、復た意味の無い笑ひを浮かべた。私が差出した小さな土瓶の底に、ぬるい白湯を、杓子に一杯、手桶の中から汲むで渡すと、そのまゝ笑ひながらに扉を鎖ぢて去つてしまつた。

その頃の作業する時間は、晝に十時間、夜に二時間であつた。晝夜を通じて、十二匁だけの麻絲を繋ぎあげるならば、それで始めて「科程」を全うし得るのであつた。わたくしの仕事量は、八匁か九匁かであつて、それも辛うじて成し得る最大限の額であつた。「科程が上がらなければ懲罰」縱ひ輕微な一回の懲罰にしても、若し其れに遇ふならば、將來に假出獄の福音に接し得べき、至つて切なる唯一の期待は、一朝にして假紙から全く瓦解されねばならないのだつた。それを既に良く知らされてゐる私にとつて、[illegible]ても、科程の額に達し得ない自分の不器用さに照らして、夕に分配の折の看守の笑ひながらの豫告は、私に、また[illegible]なかつたほどに異常な、底力のある反撥性を、却つて密かに湧きたゝせ、且つ其れを至つて固いものに決定させた。それは、天に唾して起つと言ふ類の、脆く亢奮した性のものでなく、寧ろ先づ一歩も二歩も或ひは數歩も退いてから、凝然丹田の下より徐ろに錬りかためてかゝるともいふやうな、極めて執拗な精力を具へてゐる類の反撥性であつた。そこに私は、「牛」を想つた。

その夜の、夜業から、翌日の正午までの、其の作業にかけて、私は殆ど麻絲そのものに成りきつてしまつてゐるかと、自分でも然う思はれるほどに、繋いでは繋ぎ、繋いでは繋ぎ、閉座のうへに、どつかりと臀を低く据えきつたまゝ、また眼の前に三尺たらずを隔てゝゐる壁に向つたまゝ、そのうちに漸く疲れてきて兩肩が狹く窄まり背筋が著るしく前に曲かつてゐるのに氣がつくと、その時ごとに、胸を眞直ぐに起こして、肩を引き背筋を伸ばし〳〵しつゝ、緩るます急がず麻絲を繋ぎに繋いで、倦まなかつた。

午前十一時になると、大きな鈴の、澄明な響が、廊下に鳴[illegible]

その間に午食を了はるべきことを知らせる、一つの命令であつた。

その鈴が鳴つた。私は、麻絲から離れた。三度ともに同じ一合四勺の麥六分米四分の飯と、午は概ね豌豆を煮た菜との、午食をすまして、扁たい飯皿、丼のやうな椀、小さな飯椀、その三つが何れも薄い鐵で出來てゐる食器を、木の長い箸と共に、監房の一隅に取りつけてある細い鐵管の栓から冷水を受けて、手ばやく洗つてしまふと、朱塗りの箱膳の中に、其れらを藏めて、さて圓座のうへに、暫く寛ろぐのだつた。寛ろぎつゝ、私は十日に一回づゝ新しく換えて貸される書物に讀み耽つてゐた。そこに再び鈴が鳴るのは、直ぐに作業に就かせる命令であつた。その鈴が鳴つた。

私は、讀むでゐた「一冊の書物」を閉ぢて、壁の一方に高く取りつけてある吊網の端に、手を伸ばして其れを載せた。布團、枕、作業をしない時に着る袖附きの長い獄衣などを、吊網のうへに、一々盡く細かに定められてゐるとほりに整のへて、總べて端正な容を作らせて載せてをくのだつた。その吊網の中央の下に、小さな黒板が掛かつてゐた。それには「勤勉なる人は、能く時間を儉約し、金錢を節用す。斯かる人は、勤勉の性質と共に、忍耐、克己、向上等の良好なる品性を併有し、喜んで勤勉に服し、其の勞働より得たる報酬の高價なるを、貯蓄するに至るべし」と、振假名をつけて誌るしてあつた「喜びて」が、「喜んで」に誤られてゐた。その文體が、あたかも拙い翻譯のものを見るやうに思はれた。私は然し度々この一文を、讀経のやうに繰りかへして默誦しつゝ、その黒板の掛かつてゐる直ぐ下の壁に正面して、麻絲つなぎに取りかゝつた。直ぐに作業に就かせる鈴の響は、猶ほ暫く長く鳴りつゞけてゐた。

間もなく正午が來た。作業の量を査べて記入する看守が、監房ごとに扉を開閉する硬い響を、彼方のはうから、どたん／＼と荒々しく起てながら、私の入つてゐる監房ちかくに、漸次に近づいてきた。

『幾らだつて？　千百か』

看守が斯う言つてゐるのは、マッチの箱を造つてゐる囚人の作業量を査べてゐる聲であつた。

『何、三十？　少いぞ』

など言つてゐるのは、網を綯つてゐるのに對する其れであつた。

前の夜の、夜業から既に最良の努力を、勵みつく繼續し得た結果として、その日の私の作業量――長さが四寸ほどの紙筒の外部に幾重にも卷きつけてある麻絲の太さは、入獄以來、既に

數千本を作つてきたものに比べて、確かに大きく丸々と豐かに肥つて出來てゐた。それを眺めては、氣丈夫に毅い手應への有る氣もちが、快く湧いてくるのを感じてゐた。猶ほ其の他に、未だ卷きあげてない中途の紙筒が別に一本だけ有つて、それには紙筒の表面を漸く隱し得る程度に、麻絲を薄く卷きかけてゐるところであつた。以上の二本の紙筒に卷いてある麻絲の重さが、私の最良努力の全量なのであつた。

監房の扉が、戞然と錠を解く響と共に、外の方に開かれた。鍵と鉛筆と紙盤とを持つて佇むでゐる看守の横に、廊下の掃除や食事分配などの雜多な務に服してゐる囚人が、秤を提げて立つてゐた。彼れは「第二百八十二號」といふ番號を有つてゐた。私は、いつもの氣兼ねと苦惱を覺えることなしに、それとは全く反對な能動的な氣勢を、裏に強く然も欣然と感じつゝ、二本の紙筒を、右の掌の上に並べて載せて、進み出るやうに第二百八十二號その人の前に差し出した。それを、看守が、ぢつと視てゐた。私の最良努力の全量が、秤の皿の上に載せられた。片方に分銅が上下して揺くのを、私は凝視してゐた。直ぐに、

『十三匁』

と、第二百八十二號氏が言つた。それに續いて、

『えゝと、昨日の殘が、三匁あつたから、それを減いて今日の出來だかは十匁だ。いゝか』

と、看守が、私に言ひながら、紙盤のうへに其れを記入した。

『はあ』

と、私は應へながら、「十匁」と、胸の裏に繰りかへしてゐた。それは從前の額にくらべては頗る新しい記録であつた。然し、科程の定量には未だ二匁も不足してゐたのであつた。私は一時に落膽した。兩肩のなかに我れ知らず入つてゐた力が、卒かに萎むで亡くなつてしまふやうな氣がした。

第二百八十二號氏は、既に仕上げずみになつてゐる太い方の紙筒を、自分の右横に曳いて來てゐる車の上の葛籠の中に、手ばやく抛り込むと、別の葛籠の中から、新しい一本の紙筒を取り出して、座つてゐる私の膝の前に投げ出した。その紙筒の中には麻絲の素材が入いつてゐるのだつた。紙筒一本づゝの素材の重さは、何れも必ず十二匁ある筈になつてゐた。そのうちから十匁を、たとひ素材の粗惡な時にしても、少くとも九匁は、必ず繋ぎ出さなければならぬことに定められてゐた。それで三匁以上の絲屑を、一本の素材から出すことは、嚴禁されてゐた。太くて繋ぎやすく、乾いてゐて一條々々に解きやすいのばかりを選び繋いで、その他を自由に棄てゝしまふことなどは、到底できないことであつた。從つて素材の良否は、直ぐに其の日の

作業量の多寡に關係するのであつた。一本の素材から繋ぎ得る重量が九匁に足らぬところから、其れを次に漏らして重量を殖やさうとしたり、或ひは二個ごとに絲を繋いでゐたりしてゐるのを何れも發見されて、懲罰――飯の量の二分の一、或ひは三分の一を少くせられる「減食」の罰責に會つてゐた者も、少からずあるのだつた。

膝の前に轉がつてきた新しい紙筒の、中に收められてゐる素材の良かるべきことを、ひたすらに念じながら、私は其れを拾ひあげた。第二百八十二號氏は、秤の皿のうへに殘つてゐる未だ仕上げ濟みになつてゐない方の重さを、更に測つて、

『四匁』

と、言つた。

『殘が、四匁と』

看守が復た言ひながら紙盤の上に記入した。その「殘」を、第二百八十二號氏が、秤の皿から私の膝の前に、輕く投げだした。

「四匁と科程の十二匁とを合はして、明日は十六匁を、秤のうへに上げなければ、科程の定量には成らない。――懲罰だ」私は斯う思ひつゝ、そこに萌してくる憂惧を竊かに制へながら、四匁の「殘」が既に卷いてある紙筒を、拾ひあげた。前後二本の紙筒の、右の掌の袖に握られてゐるのが、宛かも自分を責めさいなむ陰險な利器であるやうに思はれてならなかつた。

扉が重い響と共に鎖ぢられた。

前夜以來、切々と繋ぎ且つ卷きあげて、今までになく大きく丸々と出來あがつてゐた仕上げ濟みの其れが、豫想外に、やはり從前に仕上げて來たものと同じやうに、僅かに九匁の重さしか有つてゐなかつたことを、私は、暫く怪しまでゐた。「あんなに、太く出來てゐたものが」と、猶ほ訝かしく思ひつゞけてゐた。最後に、第二百八十二號氏が、故意に、一匁か二匁かを、輕いものにして言つたのではないかとまでに、私は、猜疑しはじめてゐた。嘗て未決囚としてゐた時に、囚人の特徴する通有性のうちで最も忌避すべきものは、猜疑心の增長するのが常に第一である旨を、若し私が教へられてゐなかつたならば、私は、第二百八十二號氏に對する自身の猜疑に、自ら縛られて、其の爲に更に幾重にも苦るしむのに、違ひなかつた。幸ひなことには、以上の其れ是れを反省する餘地を尚ほ剩してゐた。それに加へて、前の日の夕食の後に、「牛」を最後に聯想した底力の靭强な粘ばく〳〵した反撥性が、私の底に凝然と決定してゐるらしく、其れが私を徐かに立たせた。私は脣を横に固く締めて、上下の奥齒を嚙み合はしてゐた。幾重な、然し、實に强い氣力が、甚に忍びやかに、巖をたゝみあげる如くに、累ねられ積は

れてゐるのを感じた。

その日の、夕食の分配される時であつた。私は、看守の顏を見ると、

『どうも科程が上らなくつて困りますが、懲罰でせうか』

と、我れ知らず脣が解けて、たゞ訊ねてしまつた。看守は笑つた。笑ひつゞけて、

『お前は、今日は科程を上げたぢやないか』

と、言つた。何かの興味を、獨りで匿してゐるやうに、ますます笑ひつゞけてゐた。

その語を聞くと、一時に大きな悦びが瀾のやうに躍動して、私の裏に卒然と漲り溢れた。忽ち貌を崩して私は悦んだ。脣を衝いて、

『え、さうでせうか』

と、言つた。

『うむ』

笑ひながら看守は頷いて、扉を鎖ざした。

一日に十二匁、それが昨今の科程の量なのに、私は、然し十匁を繋いでゐるのに過ぎなかつた。科程を上げてゐる筈が無かつた。それでも、看守から、「お前は今日は科程を上げたぢやないか」と言はれると、其れを毫しも訝かりもせずに、唯だもう眞に底から嬉しく思はれる自分の矛盾した、また餘り輕率に勃發する感情が、私自身で不思議なことに思はれた。然し、強い大きな悦びは、なか／＼治まりもせずに、打ちかへし／＼私の裏を動かしてゐた。

その後に、くわしく訊ねてみると、作業の額は、科程の定量の十分の七だけを仕上げるならば、それで先づ可いことに成つてゐるのだつた。それを「七分科程」と稱へるのであつた。作業量の少いために、處罰されるやうなものは、七分科程よりも、遙かに少量なもので、猶ほ明きらかに「作業怠慢」と視なされ得る者に對する制裁なのに他ならないのだつた。

今年の二月の下旬まで、十一ケ月の間、私は、麻絲を晝に夜に繋ぎつゞけた。二月の下旬から三月下旬まで、寒さの爲に健康を害ねて、休業して床に就いてゐた。三月の下旬から九月の中旬に獄を出てくるまで。マツチの箱を拵らへてゐた。以上の一年五ケ月の間の作業によつて、出獄の際に與へられた金額が、七圓二十八錢に成つてゐた。

長く着慣れてゐた赭い獄衣を、人並みの黑いセル地の單衣に着換えて、状袋に入つてゐる作業賞與金七圓二十八錢を受けとる時に、私の兩頰が、竊かに顫へた。

この「七圓二十八錢」を、私は、數日前に、郵便貯金に、新し

く預けてきた。

一日の行事のうちで、常に、最も樂しく期待されてゐたのは、先づ第一に「食事」であつた。第二には休憩時間の中にする「讀書」であつた。第三には「運動」であつた。

刑期の長い短いに關はらず、その始終を通じて、日ごとに全く同じ一つの仕事ばかりを、極めて單調に反覆してゐる獄中の生活に、何の彩りも有りようがなかつた。皆無なのが當然であつた。太陽が東から西へ出沒してゐるのに委しきつて、そのまゝ茫々と日を送つて往くのだつた。大きな沙漠を横ぎつてゆくやうな、その朝夕が、刑期の經つのにつれて、まことに悠舒な、猶ほ一切の事象から優に超脱してゐるやうな氣もちを、十分に養つて餘りがあつた。こゝにも私は、「牛」を折り〳〵に聯想しつゞけてゐた。

何等の變彩もない其の同じ朝夕のうちにも、監房を出て「運動」する時ばかりが、それでも纔かな變化を齎らすのであつた。運動場に出てくる囚人たちの顔が、その出獄と入獄とにつれて、時々に變はること、また「運動」に立會ふ看守によつては、殆ど默認して宥してゐる囚人どうしの密かな會話が、殊に大きな慰藉と氣分の變化とを、囚人たちの誰れにも與へてゐた。雨が降つて、運動場に出て行かれない日には、高い窓の鐵格子を透して、灰白色の空を、私は、屢々「運動」を慕ひつゝ仰いでみた。殆ど誰れもが、同じやうに各自の監房の中から鐵窓を透して空を仰いでゐるのであつたらう。「衆と與に之を共にす」の恣が「運動」の無いときに、いつも懷ひだされるのだつた。同時に、衆と與にするそこに慰さめも有つた。

運動場に出て、囚人たちが、看守の視聽を偷みつゝ、互ひに談りあふ話材は、各自の假出獄に對する豫想を、徒らに忖度しては論じあふのが、いつも最も多かつた。また、各自が教誨師に願つて貸與されてゐる書籍に就いて、其のページ數の多寡や、また内容の概略などを、誰れもが、互ひに問答しあつてゐた。ページ數の成るべく多くて、その内容に變化の有る書籍に接し得ることを、總べての囚人たちが切りに渴望してゐた。監房の中に携へ得る書物の數は、經典の類を除いて、三冊に限られてゐた。其れを貸與せられるのは、十日に一度づゝなのが、常規の回數になつてゐた。ある時は、一ケ月に亙つて全く新しい書物を見ずにゐたこともあつた。

『何か好い本が入いりましたか』

『それは何ページぐらゐあります。厚いですか』

『内容は何うです。好いですか』

『その著者は誰れです』

などの言を、私は一年半の間を通じて、運動場で聞かない日は殆ど一日も無かつた。もとより私自身にしても同じ種類の質問を、對手を選ばずに、誰れにも彼れにも毎も訊ねてゐた。待ちこがれてゐた書物の貸與日が來た時に、讀みごたへのしない薄い小型のものが唯だ一冊だけ渡されることがあつた。すると其れを受けとる時には、一場の新しい苦痛が、俄かに湧きあがつてくるのだつた。

私の入いつてゐた監房の隣りに、「第六十五號」といふ囚人が、新しく入つてきた。その番號札の下に附けてゐる眞鍮製の小さな隋圓型の金具に「參ノ四」と記るされてゐた。

犯罪の性質の如何によつて、囚人たちは、第一から第三までの「類」に別けられてゐた。第六十五號氏が附けてゐる金具の「參」の字は、その犯罪の性質が、「第三類」の種類に屬することを現はしてゐた。「第三類」には、破廉恥罪を再犯以上に敢てした囚人が屬するのであつた。

猶ほまた、入獄後の刑期の經つのにつれて、囚人たちは、第一から第五までの「期」に漸次に進むでゆくのであつた。入獄すれば第一期に屬し、猶ほ三月過ぎると第二期に進み、更に三月の後に第三期に進むのが、常の規定になつてゐた。特に操行の狀があつて作業に精勵する者は、右の三月以内のうちにでも、それぐ特に「進級」することができるのだつた。私は、第一期より第二期へは一月の後に第二期より第三期へは一月半の後に、「特別進級」の恩命を下された。第三期より上に進むのには、「特別進級」の規定は設けられてゐなかつた。第三期に入いつてから少くとも全一ケ年を過ぎるのでなければ、第四期に進むことは出來ないことに成つてゐた。第六十五號氏が附けてゐる金具の「四」の字は、同氏が既に第四期に屬してゐることを現はしてゐた。「參ノ四」は第三類の第四期を示してゐた。そこに第六十五號氏自身の犯罪性の大概と、猶ほ同氏が刑に服してから既に少くとも一年半以上を經過してゐる故參者であるのを、私に其の金具の上の數字から直ぐに知ることができた。私は、其の時に「參ノ三」の金具を附けてゐた。

第六十五號氏は、小男であつた。がつしりした小型な骨格に、直ぐ彈きかへすやうな頑強な筋肉を具へてゐるやうに見えてゐた。膚は白かつた。練りあげた小さな白いゴム鞠を見るやうな第一印象を、私にあたへた。氏は、私を初めて見た時に、白い纖い一重瞼の上に皺をよせて、そこに隔てを措かない好意を見せた。年のところは、私より二三歳上の、三十五六に見えてゐた

いつも微笑してゐるやうな小型な白い顔の優しさが、氏に對する私の初對面の感觸を、直ぐ快く柔げた。その私の感じと獰惡らしい「參ノ四」とが、互ひに著しく牴觸してゐた。

運動場に出てみると、第六十五號氏の歩きかたが、異彩を放つてゐた。小さな體格の全體を擧げて、大地を一歩々々に堂々と踏みしめつゝ、同時に兩腕を交はる〴〵踴々と高く振りあげつゝ、あだかも曳々と氣合ひでもかけてゐるのかと想はれるほどに、勁い氣勢を四邊に横溢させて、然し、その歩調は、强いながらに、のそり〳〵と、私の直ぐ前に進むでゆくのだつた。初め二三日のうちは、氏からも私からも、何とも聲をかけずにゐた。そのうちに、

『刑期は幾らです』

と、氏が私に靜かに訊ねた。聰明さうな口調であつた。

『二年』

と、私が直ぐに應へた。

十五六人が、一列になつて、長方形の運動場の周圍を、歩き廻はるのが、私たちの「運動」であつた。囚人たちが苟しくも話を交へることは、もとより嚴禁されてゐた。然し、前後に一列になつて歩いてゐる二人が、顔を正面に眞直ぐに向けたまゝで、小聲で意思を通ずることは、さして困難なことでなかつた。

『二年ならば、一年と四五ケ月ぐらゐすれば、きつと出します。犯則しても決して發見されないやうになさい。馬鹿になつて默つて仕事をしてゐれば好い。その他に獄内の祕傳は有りませんよ。氣をあせると痩せますよ』

第六十五號氏が斯う言ひながら、やはり堂々と踴々と全身で歩いてゐた。

『あなたは假出獄は何うです』

と、私は返辭の代はりに訊ねてみた。

『僕は惡黨ですよ。前科が十四犯。假出獄どころの話ぢやない』

斯う言つた氏の口調のうちに、笑聲が含まれてゐた。「十四犯」が、私を少からず愕かせた。殆ど正圓形に殆しいと思はれるほどに好い輪郭をもつてゐる氏の頭顱の外線を、私は、その直ぐ後から「十四犯」に愕きつゝ視まもつて歩いてゐた。

『來年の二月の八日が放免です。寒さを、も一つ越さなければならない』

氏が、やがて斯う言ふと、短かい兩腕を更に高く、更に强い勢で振りはじめた。

『あなたの事件は何です』

と、私は訊ねてみた。「十四犯」が、何としても氣になつてならなかつた。

『僕は商賣が泥棒なんです。十三の時から始めたのです。監獄に入いるのは、所得税を納めるのだと思つてゐるんですが、なに、檢擧される犯罪の數は、實地に行つたの丶百分一ぐらゐのものですから』

氏の口調は、ます／＼笑つてゐるらしかつた。その話を聞きつゞけることに、眞新しい興味が私の裏に湧いてきた。すこし亢奮しつゝ、

『泥棒つて、強盜ですか、竊盜なのですか』

と、訊ねると、氏は小さな圓い頭を横に激しく振つた。

『強盜は慘酷ですからな。僕のは竊つと貰つてくるんです。枕一つありさへすれば、どんな錠前の錠でも開けてみせますよ』

と、悧發さうな聲で、ゆつくりと言つた。

その日の運動時間のうちに、私は、是れだけのことを第六十五號氏と話すことができた。監房に還つてきた後に、凡そ私が嘗て知つてゐる限りの枕の有らゆる種類を、眼の前に想ひ並べてみた。その各々の輪廓や構造などを考へめぐらしてみた。然し、それらと錠前の錠そのものとは、兩者の關係が如何にしても全く沒交渉なものに終はらなければならなかつた。

次ぎの日の、運動の時間が來た。それを待ちかねてゐた私は、第六十五號氏の直ぐ後から、復た跟いて行つた。歩きはじめるや否や、

『枕で錠前を開くつて、どうするんですか。わからない――』

と、言ひかけると、氏は忽ち、

『商賣ぢやありませんか』

と、強く言ひきつてしまつた。枕で錠前を開き得る事實が、あたかも世界の何事よりも當然な事であるやうに、斷定的に強く言ひきつてしまつた。

それから後の日の運動時間ごとに、竊盜犯の實經驗のうへの談を、私は、第六十五號氏の脣から、多く朗らかに、また興味ふかく聽きつゞけた。氏は極めて話ずきな人であつた。ある時には、

『然し、僕も、もう齢が齢ですからね。今度は好い加減に改心しますよ』

と、自分の意思ばかりで全く隨意に造作なく改心するやうに言つた。「改心」を全く自由に取りあつかつてゐた。

『改心するのならば、いゝ加減にせずに、きつぱりとしたら、どうです』

『いや、何をするにも資本がいりますもの、出てから大きいところ二三度やつてから、改心しませう。仰せのとほり、する時には、きつぱりとします。資本をつくる迄で、それからさきに

復へつて、大いに努力しやうと覺悟してゐるんです。もう大丈夫です。確かですよ』

『發見されないやうになさい』

私は、斯う言つて、忽ち獨りで愕いた。前科十四犯の竊盜罪を累ねてきた謂はゞ極惡なる囚徒その者が、出獄後に更に敢てすべく企圖してゐる新しい犯罪に對して、「發見されないやうになさい」などゝ、何の矛盾も感じずに平然として、それが自分にとつて宛かも一つの平凡な日常事でもあるかのやうに應對してゐるばかりか、如實その私自身の裏には、直ぐ前に歩いてゐる一人の惡徒の企てゝゐる新犯罪が、永く發見されずにゐて、其の惡徒の身のうへに何の別異もなく無事に濟むべきやうにと、まともに希望してゐるのであつた。そこに自分も其の對手と同性の惡徒でなければならぬことに、私は、ふつと氣づいて我れと愕いたのであつた。「發見されないやうになさい」竊盜十數犯といふ賤劣な極惡人と共に協調して、斯かる言を口にするまでに、自分の本性は、同じく賤劣に、同じく極惡なものである――？

愕きが慨きに直ぐに變はつた。憤りも、畏れも、その他の何も・別に起こる餘裕の無いまでに、私は唯だ悵然とした黯鬱な氣分につゝまれてしまつた。切りに「あゝ獄だ。獄だ」とのみ、くりかへしつゝ――。

『發見されぬやうになさい』

と、私が言つた時に、第六十五號氏は、それの反響のやうに、直ぐに、

『えゝ、ありがたう』

と、それは、まじめな謝意を十分に含むでゐる强い聲で言つた。

私は默つてしまつてゐた。

また、或る日の運動の時であつた。第六十五號氏との話のうちに、

『あなたの持つてゐる紙の表紙の本が有りますね。何ですか』

と、氏が私に訊ねた。

『あれは「恩寵溢るゝの記」、翻譯ものです』

『あゝさうですか。何でも確かバンヤンが書いたのですね』

十三歳の時から竊盜犯によつて生きてきたといふ人が、バンヤンの名を知つてゐた。それを私は意外に思つてゐると、

『――あふるゝ愛』

第六十五號氏が、細い微かな小聲で、讃美歌の一節を、巧みな抑揚をつけて歌つてゐた。

『あなたは、キリスト教を信じたことがあるのですか』

私が斯う訊ねると、氏は其の恰好のいゝ顔を、復た横に傾し

く振りつゝ、
『いゝえ。偽善者ですよ、大概のキリスト信者は』
とだけ言つて、そのまゝ暫く黙つてゐた。
次ぎの日の朝であつた。何時ものやうに、起床と共に、看守が、監房の扉を順次に開いて行つた。其の後から「雑役」の囚人が随いてきた。それは小さな浅い木箱を携へてゐた。その中から、嗽ひをするための生鹽を、細い木片の端に抄つては、監房の中の囚人たちが差出だす隻手の掌の上に、ひよい／＼と一々載せながら、看守の後から随つて往くのだつた。囚人たちは、隻手に鹽の少量を載せたまゝ、別の隻手を働かして、監房の中の塵を、外の廊下のうへに、すばやく掃き出すのだつた、私も然うしてゐた。そこに隣りの監房の、半ば開かれてゐる扉が、内側から、音もなく静かに押されてきたのを、私が訝しく眺めてゐると、扉が漸く開かれて、そこに、第六十五號氏の痩い小さな立姿の全身が、飄然と現はれた。すると氏は長い廊下の全面を、鋭く見亙すや否や、忽ち燕のやうに身を躍らして、私の監房の中に颯と飛び込んできた。その異常な大膽な振舞が、私を一時に慌てさせた。全く意外な急激な行動に撲たれてゐる私の其の際の存在を、氏は然し毫しも與り知らないもののやうに、颯と飛びこむと復た私の頭[illegible]を掠めて、氏自身の監房の中に、翔しく弾かれた何物かのやうに、はつと思ふ隙に迅くも姿を消して還つてしまつた。その扉が再び内側から引かれて、元のとほりに半開のまゝの態に復へつた。私は隻手に鹽を載せて、隻手に短い箒の柄を握つたまゝ、暫く惑ひつゝ立つてゐた。
さうしてゐるうちに、各々の監房の扉を、看守が、廊下の片側から、やがて一つ／＼鎖ざしながら近づいて来た。私の監房の扉も鎖ざられた、次ぎに隣りの第六十五號氏のも鎖ざられた。第六十五號氏の極めて突飛な非常な所作を、未だ疑つてゐる愕きと共に更ためて疑ひ惑ひつゝ、私は監房の奥の一隅に来た。そこの栓から水を受けて面を洗はうとした。隻手の掌のうへの粗い生鹽を指端につけて、ふと瞳をあげると、吊棚のうへの片端に、厚い大きな一冊の書物が、思ひがけなくも新しく載つてゐるのを見た。その代はりに、赤い表紙の「恩寵溢るゝの記」が消えて無くなつてゐた。
私は急いで口を嗽ぎ面を洗つてしまつた。今は疑ひもなく第六十五號氏が持つてきた厚い大きな新来の書物を、棚のうへから取り卸して見た。その時の私は、久々新しい書物を讀むことになつたことを少からず喜んでゐた。第六十五號氏が直ぐ前に敢てした決して小さくない犯則の行爲などは、それに由来した驚愕と疑惑と共に、全く忘れはてゝ、私は唯だ喜びに充ちつゝ其

の書物の表紙を急いで披いた。それは「處世之道」といふ本であつた。

その日の運動に出ると、第六十五號氏は、

『あれで好いですか。あの本のなかの「弘法大師」や「陰陽道の害」なんか、ちよいと面白いですよ。でも不意だつたから、愕いたでせう。若し發見されたらば、あなたは實際に知らないのだから知らないと言ひなさい、處罰されるのは僕ばかりで濟む。二人で罰せられるのも一人で濟むのもめい／＼にとつては同じですからね。だから、あなたには故意と知らさずに、僕一人の獨斷で失敬しました。監房を搜檢されて見つかつたら、減食一週間ぐらゐの所は確かですね。二三日のうちに、機會を見て返しにゆきます。安心してゐらつしやい』

と、怜悧さうに笑ひ／＼言つてゐた。囚人たちに貸與されてゐる書籍の表紙の上には、どれにも「書籍貼用券」と印刷した小さな紙片が貼りつけられてゐた。書籍の名、囚人の番號、貸與と返納の年月日などが、その書籍貼用券の上に記入されてゐた。看守から、監房の中を「搜檢」せられて、その視察眼が、當然に書籍のうへに及ぶならば、第六十五號氏と私とは、書籍を交換してゐる犯則の行爲を容易に發見せらるべき筈であつた。それは確かに一場の危險な事に違ひなかつた。私は自分に責任の有る無しに關はらず、根柢の不安な動搖的な憂ひと惧れとから、全く脫れることができずにゐた。然し、その憂惧の原に成つてゐる一冊の「處世之道」を繙いて讀むことは、常に猶ほ愉しく悦ばしいことであつた。その六百ページ餘りを耽讀する度ごとに、第六十五號氏の決行した所爲に、對して、却つて淺からぬ好感を新しく湧きたゝせてゐた。延いて氏その人に對しても、同じ好意が著るしく增して來るのを覺えた。

それから二三日の後の朝に、第六十五號氏は、前と全く同じ冒險を再び敢てした。それが首尾よく終はつて、「恩寵溢るゝの記」の表裝の濃い紅色が、再び舊のやうに自分の監房の中に還つて來てゐるのを、吊網の上に仰いだ時に、私は、そこに小さくない平安を明きらかに覺えた。

『なか／＼敏捷にやりましたね』

と、その日の運動の時に、私がその事の同感と同意とを併せ氏に言つた。

『えゝ、でも、あの厚い「處世之道」を懷中に入れて、あなた、隣りの監房に入いつて來いと言つても、ちよいと能きないでせう。能きますか』

『到底、できません』

と、私が答へた。それは眞實に然うであつた。

「おもしろいですな」

と、氏が短かく一言に言つた。それが如何にも全心を傾げて十分おもしろく思つてゐるやうに、私は聽きとつた。この言ばかりでなく、第六十五號氏は、自分の言を、全く自分の有にして、言と一つになりきつてゐる人のやうに、前から私に思はれてゐた。私は其れが美しかつた。同時に、その人の内部の然うした單一な眞實性に、純な親しみを、私自身の底に感じてゐた。言に、動作に、表情に、自分の根柢を其のまゝ、自づから露はし出してゐる第六十五號氏は、私の内部を性格的に強く牽き着けていつた。氏と私との仲が、すつかり善くなつて了つてゐた。氏の前科幾犯に對照して、私は時々に既往の自分を顧みさせられた。然し、現前する事實として、第六十五號氏——それが強盜であらうと竊盜であらうと將た何であらうとも——その人との深い親しみを累すことは、不自然な謀叛を敢てする類の試みであるとしか思はれなかつた。また兩者の根柢を互ひに結びつけてゐる快い愛着を壞さうなどゝは、最初から到底行はれることでないのに違ひなかつた。

　獄中の生活上の心得かたに就いて、如實に精細な良く肯綮に中つてゐる注意を、氏は私に順序よく周到に教へてくれた。猶ほ其れらの多くの注意のうちに、狡い類のものは、その分子すらも些しも含まれてゐなかつた。その盡くが純眞な的確な事がらばかりであつた。長きに亘つて健康を保つべき第一の衞生法に就いては、食物の咀嚼法や汁の吸ひかたなど。作業を捗どらせる秘策としては、仕上げ額の多少は寧ろ忘れて、唯だ徐かに急がす順序よく、朝も晝も夕も等齊な氣もちで悠然と作業しつゞけるやうにすることなど。役人に對しての第一義としては、飾らず衒はず然も成し得るかぎり默つてゐるべきが得策であることなど。手紙の書きかた。面會の際の心得。凡べて私の上に假出獄の時が一日でも速く來ることを目的として、其の爲の注意を選んで第六十五號氏が、他の囚人たちの幾多の例證と共に、懇切に着實に教へてくれた。

『司獄官は、もう多勢の囚人を扱ひなれてゐるのですからね。すつかり眼が長けてゐます。此方で飾つたり、ごまかしたりするのが、却つて一番不利益ですよ。あなたは、たゞ默つてさへすれば、それで、もう澤山です。きつと速く出してくれます。何でも、あせつて無理をすると、きつと、失敗しますよ。うるさい世の中の有象無象を離れて、腦を休めに來たのだぐらゐに、思つてゐらつしやい。』

などゝ言つてゐた。また、

『着物を換へる時の[illegible]には、あれきり一回で[illegible]めますよ。』と

こに眼が行るかもわかりませんからね。あんまり讀りすぎるのは良くない。あの時は、とにかく「囚籠溢る〻の記」が、むやみに讀みたかつたもので、つい讀つてしまつたんです』

など〻も言つてゐた。その時に、私が、

『あれは面白かつたですか』

私が訊ねてみた。

『え〻、何しろ暇が有りませんから。だから僕はパンヤンが好きです。キリスト信者も、あのくらゐになると、ほんものでせうね』

『キリスト教の書物は、パンヤンの他に、どんなのをお讀みでした』

『なあに』

氏は此の時に、頭を復た横に激しく振つた。それは一事を當面に否定する折の、氏の習癖らしかつた。

『なあに、僕は學校に昔の高等一年まで通つたきりです。實に無學文盲なんです。後は、まあ圖書館勉強と言へば、謂へるやうなところなんです。晝は圖書館。夜は泥棒――』

二十分間前後の運動時間が終はりかけて、氏との話の最後になると、私は何時も笑はせられた。

二月の初旬になつた。氏の放免の日が近づいて、二人の別れる時が來た。その離別が、私に如何にも惜しかつた。

『いよ〳〵近くなりましたね』

私が斯う言ふと、氏は際だつて大きく頷いた。同時に、

『初めが有れば終はりが有るんですから、あなたも速くお出なさい』

と言つた。

第六十五號氏が「滿期放免」になる日の前日であつた。囚人たちが運動場から監房の廊下に還つてきた時に、氏は前の方の二三人を追り越して自分の監房に逸く入いつて往つた。其の監房の前を、やがて通りすぎる私を、氏が扉の影に佇むで待つてゐるのだつた。その小さな白い顏と赭い獄衣の立姿を、一瞬でも長く覗つめてゐたかつた私の瞳を、同時に確と捉きとるやうに氏の瞳も私を覗つめながら、

『では、もう會ひませんから』

と、その小さな下唇を強く締めて押さへるやうに言つた。常に優しい笑を含むでゐた氏の少さな白い顏が、慘ましい氣色に染められてゐた。私は默つて頷いた。言ひだすべき詞が、その時に何も無かつた。二人の間の、おそらく永い別れが、斯うして濟むだ。監房に還つて來た私は、索然とした虚しい氣もちの内に、別離の哀しい苦痛が滲みだしてくるのを、制さへることも

できなかつた。その爲に獨りで長く悩まされてゐた。自分でも想ひの外の深さをもつてゐる悩ましさが、そこに潜むでゐた。

――今、この稿を書きつゝ、私は、今まで書いてきた第六十五號氏の、ありし面影を、世を隔てたものを見るやうに偲んでゐる。牽かれてゆく懐しい氣もちのうへに、浮標のやうに當てもなく漾ふてゐる。「杳として」といふ語を思ふ。氏の現在の消息を、たとひ無理にでも考へてみやうとしても、それは私の想像の環の全く外に、鳥が遠い雲の中に飛び去る如くに超逸してしまつてゐる。總べてが、さながらに「杳として」の一語の感じに盡きてしまふ。二月の八日に放免されてから、氏自身の謂はゆる『何をするにも資本がいりますもの、出てから大きいところ二三度やつてから』を、畏ろしくも敢てしたのであらうか。きつと、さうであらう。猶ほ『二三度やつてから、改心しませう』の改心をして、『それから正業に復へつて、大に努力』を實行してゐるのであらうか。然く行れかしと、私は人しれず今も望むでゐる。『圖書館勉強』をする氏に、その圖書館の中にでも若し再會することになるならば、いかに興味の饒かなことであらう。――江湖――流離――攝理――因果――浮沈――紫紺――――、などの文字が、今、私の前に散り／＼に動いて、閃めくやうに現はれたり隠れたりして彷徨してゐる。

それにしても、私が、若し訪れないからでも、『それでは、おまへも、やはり其の男と同じ運命だな』との意味を、語られたとするならば、これに對して、自分を辯護すべき辭句を、私は實のところ全く知らない。

「惡運」さうだ。私は、どうしても此の現世の生活を前にしては、生涯のあひだ、常に惡運であるらしい。それを否むことを知り得ないだけに、自分は確かに一人の惡運である。俯づくも抗ふべきことではあるけれども、天が高く地の厚きが如く、私に、――この上に、何を思ふ必要も、書く必要も無い。最も明けな明々白々な事實である。と共に今こゝに、我れならぬ眞實な微笑が、裏から、ゆつくりと大きく催してくるのを覺える。この微笑の尊い内容を、誰れに語らう――。

運動場の中央の棄きゝつてゐた空地は、囚人たちの手に耕されならされて、やがて還く豐饒な畑になつた。秋にちかづく一雨ごとに、黒い土を抽いて眼を瞠らせるほど竒かに大きく育つてくる新しい莖と葉の、爽そかな力の漲らつた瑞々しい鮮かな緑いろを、私は、いつも快く眺めた。この明きらかな冴い力を盛つてゐる緑いろを、可愛いと思はずにはゐられなかつた。

看守の一人が、看守部長に昇級した。この新しい看守部長は、時々に運動場に出てくると、大根畑の中の細い畔路が、十字に交叉してゐる邊に佇んで、畑の周圍を步き廻る囚人たちのうへを、ある時は殊のほか厳めしく貌を顰めて、ある時は悧い面をして、うつとりと眺めてゐた。肥滿した體格の大きく背の高いのにくらべて、人の善さゝうな小さな織い眸を、眩しさうに動かしてゐる人であつた。

まことに佳く晴れた、秋の半頃の朝であつた。爽かな光のなかを泳ぐやうにして、囚人の私たちが黒い土を踏んで大根畑の緣を運動してゐた。やがて新しい看守部長の大きな高い軀と、其の顏の上方に貼附けてあるやうな小さな瞳が、秋の光の下に、のつそりと現はれた。その日の看守部長は、餘裕のある明るい面をしてゐた。そのうちに、私たちの列の後の方から一人の囚人が、襟もとの番號數字を看守部長に呼ばれて、畑の眞中の方へ步いて往つた。

その囚人が、看守部長のそばに立つて、しきりに啜泣きしてゐるのを、やがて私は見た。その人は、極く狹い幅の小さな額をもつてゐた。赭い筒袖の右腕を、横に擧げて兩眼にあてゝ、こぼれてくる涙を抑へながら背なかを顫はせて啜泣いてゐた。看守部長が、その傍から徐かな聲で、

『何だ。何だ。泣くな。泣くな』

と、言ひなだめてゐるのが、はつきりと聞こえてゐた。畑の周圍を廻つてゐる皆が、その方を振りむきつゝ、そのまゝ步いてゐた。列のなかの誰れかゞ、

『あれは低能兒なんだ。もう直きに滿期なんだらう』

と、迅い口調で言つてゐた。その「低能」と、啜泣いてゐる極く狹い幅の小さな額とが、一つになつて私の胸に映つた。啜り泣く切れ〴〵の咽び聲が、卒かに烈しく顫へて、赭い筒袖の蔭から高く洩れてきた。看守部長は、たゞ仕方がないものゝやうに、

「泣くな。泣くな」

とだけを、同じ徐かな聲で、言ひつづけてゐた。

肥つた高い看守部長と、低い小さな囚人との二人が立つてゐる傍を、私たちの列が、通りすぎて往つた。その時に、看守部長の、栗鼠の有つて居るやうな瞳は、私たちのうへを漫然と眺めながら、誰れに言ひかけるのでもなく、

『自分の刑期も放免の日も知らんのだもの。可哀さうだ』

やはり徐かに、斯う言ひながら振りかへつて、僅に泣いてゐる人を瞰おろしてゐた。

泣きつゞけてゐる人の、赭い筒袖の上に現はれてゐる狹い額

を、私は、何か新しいものを見るやうな氣もちで、あらためて眺めた。しばらく歩いてゐるうちに、「——はてな」と思つた。脚下の直ぐ横に、青々と茂りあつてゐる濃い緑りの、多くの大根そのものも、自分が何時その大地から取り離されて、引抜かれてしまふのかも、同じやうに知らずにゐる。それは全く無知のまゝに、光を吸ふて、青々と生き〳〵と茂りあつてゐる。その「全く無知」な心象が、更に強く内省的に、私の胸を遍く掩ふた。私自身も、自分の死期を知らずに斯うしてゐる。自分が何時この現在する世から取り離されて、引抜かれてしまふのかも知らずにゐる其の「全く無知」。トルストイ氏の「三つの死」を、

私は此の時に、ゆくりなく憶ひだした。同時に、脚下の大根の葉を再び視た。啜泣いてゐる人の狭い幅の小さな額の輪廓を復た視た。全く無知な自分を猶ほ明きらかに内に視た。美しく高く澄むでゐる大空を仰いでみた。この大空の壽命は何年、續くのだらう。などゝも思ひついたりした。「全くの無知」が、私を全く掩ふてゐた。

列のなかの誰かゞ言つてゐた『あれは低能兒なんだ。もう直きに滿期なんだらう』の語と、看守部長の獨言のやうな『自分の刑期も放免の日も知らんのだもの。可哀さうだ』の語とが、今も此の原稿を書いてゐる私の裏を新しく掠るかしてゐる。低能兒」の自分を、私は現に惑しも否[illegible]はない。[illegible]に滿期なんだらう」に私は悚然として烈しい恐怖から時々に襲はれる。「自分の刑期も放免の日も知らんのだもの」可哀さうだ[illegible]同じく或ひは猶ほ其れ以上にも、哀れむべき一個の存在せる[illegible]を、私は現に全く是認しなければならぬ。これは事實らし[illegible]しい事實である。今、これを書いてゐる自分の額と、大根の[illegible]上に啜り泣いてゐた人の狭い幅の小さな額とが、互ひに一つに重なつてゐるやうな氣もちに迫られてゐる。今、府中[illegible]ゐたこゝろをも思ふ。私は何も知らない自分の刑期さへも、從つて放免の日も。

わたくしに對する刑期の二年が、あたかも滿一年、過ぎ去つた日であつた。「醫務主任」の人から「健康診斷」を私は受けた。その際に、全身裸體の私を載せた體量器は、私の肉の纖削が十二貫五百匁の重さに當たることを、正直に示してくれた。「四貫目、減つた」と、足の裏に體量器の鐵の冷たさを感じつゝ、[illegible]されるやうな慘ましいこゝろに私は[illegible]てしまつた。四貫の減量そのものが、滿一年の間の[illegible]の[illegible]々を[illegible]にして、私自身の眼の前に否をなしに[illegible]

怪鳥な黒い手が、錆びきつた鐵身の長い刄を高く振り翳げて、一日に平均十匁あまりづゝの私の肉を、日ごと／＼に私の體から斷えず剝ぎ削いでゆく獄の中の象を、私は暗い憂欝の氣分のうちに我れ知らず想ひ描いてゐた。

聽診器の嘴のうへから降りながら、自分の兩腕が、疾くから纖々と、腕といふ形ばかりを纔かにとどめてゐるばかりで、そこに肉らしいものは殆ど殘されてゐないやうな左右の蒼白い上膊部を、私は交る／＼眺めた。餘ほど前から既に露はに波を打つてゐる肋骨が、觸はれば慘々と鱗を起てさうに、其の輪廓を昨今は殊に歴々と現はして、腋の下から胸を圍む蒼白い膚の直ぐ下に、うね／＼と横に梯を渡してゐるのを、私は續いて寂しく眺めた。

「醫務主任」の人が、聽診器を兩耳から離すと、赤い罫紙を綴つてある帳簿の中に認されてある、私の姓名のうへに、鉛筆で淡く「衰弱セリ」と書いた。この人は、私に、二月の中旬から三月の下旬まで、監房の中に床を敷いて寢てゐることを許してくれた。骨の髓まで冒してくると思はれるほど、激しくも烈しかつた獄中の沍寒が、いかほどまでに私の肉を苛み責めつくしたか、それを私は此處に書き叙べることができない。假りに十[illegible]ても、その寒さの苦[illegible]を讀む人々の想像に訴へることは全く期し得べきでない。私の左右の膝骨を包んでゐる皮膚の色が、今も現に尚ほ黝く濁ずんで、大きな痣のやうな跡を貽してゐる。それは硬い床板の上に凡そ十二月の中旬から二月の上旬ごろまで、夜もすがら寒さに冒されつゝ、僅に入れば膝の窪の内なまで左右に轉輾と寢がへりを打つてばかりゐて、石のやうな床板の上に膝骨が[illegible]へてゐた罰跡である。また總べての指の爪の端が伸びるに從つて、ぼろ／＼と直ぐに剝落してしまひ、動もすれば縱にも割け易いまでに乾いてゐる。それに深い皺が幾つも爪の上に横に刻まれてゐるほどに萎びてしまつてゐるのは、全身の營養不良が今もまだ回復されずにゐる一つの徴である。五六町を歩むうちに、左右の膝頭が、ともすると容易かに力を失つて、我れにもなく唯だ大地の土そのものに躓づいては、そこの街の上に暫く俯向いて膝頭を撫でゝみたり、家に在つて座つてゐれば脊椎の直ぐ下から背に添ふて、惱むだやうな鈍い疼痛が、縱に長く上から下に流れて來るのを發作的に感じて愕いたり、獄[illegible]が咽頭に塞まり浮いてくるのを[illegible]せられたりしたことし[illegible]てゐるのは、殊に寒さに冒されつくした私の肉の内に深く刻みのこされてゐる獄の跡である。

枯れた衰ろへた[illegible]

い布團の間に獨り横になりながら、私は、そこに不可抗な日々に浸潤してくる衰憊そのものゝ底に、それを其のまゝ默惜して、冷たく寂しく浸かつてゐなければならなかつた。それが獄中の自然であつた。

音信の往復と、面會とは親族の者に限つて、何れも二月に一回づつを許されるのだつた。昨年の十二月上旬に、妻から受取つた手紙の最後に、一月の下旬までに妻自身が面會に來ることを報らしてきた。私は、その面會の時の話の内容を、さま〴〵に工夫したり取捨したりしつゝ、猶ほ寒さに凍えつゝ脈絡を切々と繋いでゐた。何を第一に妻に訊ね、其の應對の如何によつて、彼の用作に關する注意を斯く與へ、など、一回に三十分間を最大限とする二月ごとの面會の目的を完うする欲求を、私は、引き伸ばすやうにして樂しみつゝ握つてゐた。

元旦の朝が來た。二片の小さな角餅を、端の一隅から千斷り〳〵して、小さな幾つもの塊りに作りながら、能きるだけ悠つくりと其の一つゞゝを十分に長く咀嚼して、そこに餅の味覺を、味はへるだけ味はひつくして、殘り惜しく鯰で嚥く喫べてしまつた。晝が來た。ほろ〳〵に崩れてしまつて粥のやうに、なつてゐる數の子を、一箸ごとに、そつと抄ひあげつゝ、そこに少しでも齒の間に含まれてくる脂い肉食の臭を悦な食つて、その一抄ひごとに、嗅覺の鋭くなつてくるのを、そのまゝ耐え忍んでゐた。夕になつた。三匹か四匹かの小さな二寸ばかりの鰯か、碗の底に投げ入れられた。頭と尾とを具へてゐる魚の全部の形を、私は少からず珍重して暫く見つめてゐた。頭の方と尾の方との味に、やはり差異のある其れでも魚らしい香格をもつてゐる一事が、私を密かに悦ばした。元旦と、二日と、三日と、大晦日から續いてくる新年の休業日を、冷たい噯を吐いては股も凍つてゐるのかと思はれるばかりの寒さのうちに漸く濟まして、新しい歳の始めが、私の頭の上を、監房の高い天井の上を、むなしく過ぎて往つた。

一月の下旬が來た。雪は、窓の鐵格子の裡を、外から幾度か厚く掩ふた。「この雪が晴れるときには、來るにちがひない。必ず來るにちがひない」と、窓を仰ぎ〳〵しつゝ脈絡を繋いでゐた私の、日ごとに強くあせつてゆく妻との面會に對する期待は、然し空しく外れてばかりゐて、當然に來るべきはづの妻が、遂に面會に來ないうちに、一月は、徒らに過ぎてしまつた。二月に入つた。

十二月と一月とには、午後の三時二十分に、晝の作業を終はるのだつた。それと同時に、夕食が分配せられた。それから五時になるまで休憩すると、更に八時半まで夜業しつゞけた。恐

い壁の下の板床に蹲まるやうに座つて、仄暗い電燈の光が薄く降ちてくるのを、凍えきつてゐる指さきに弱々しく受けて、あるかなきかを見わけがたいまでに細白い麻絲の端と端とを辛うじて繋きあはせてゆく厳冬の夜業の三時間半が、嘗て聞いてゐた冬の獄の苦るしさを、私にあくまで十分に、猶ほ其れ以上に確かに思ひ知らせた。

まことに名ばかりが綿入れと言ふのにすぎない薄々しい半纏と囚衣の襦袢とを上半身に着てゐた。下半身を包むのは、袷の股引一枚だけであつた。裾を其の下に結むでゐた。細帯を外に締めてゐた。只だ其れだけが膚を掩ふてゐるばかりであつた。

そこに「寒い」と思ふのは余ほど贅沢であつた。腋の下から胸にかけて、いつも刻まれるやうに「傷い」のであつた。殊に深夜な一條の挿みこむごとき強い傷さが、後から襲ひかゝつて来て、脊梁を掴み挫さへてゐた。息を吐くと、唇から二尺あまりの仄白い柱が噴きだされて、その白さが電燈の薄い光に寂しく睡つた。小指――無名指――中指――拇指、最後に食指が動かなくなると、小鋏を膝の裏に深く挟むで温め、両手をあげて、頭の全面を、左右前後に激しく撫でまはしてゐた。頭には温かみが残つてゐた。それとの摩擦から纔かに生まれてくる微かな温度が、その後の十分間内外の間だけ指さきの自由を保たせてゐた。

殆ど十分間ごとに頭を撫でつくし擦りまわしては、膝の裏に挟むでをいた小鋏を再び取りあげて、ほゞ白い長い息の柱を吐きながら、復た麻絲の端と端とを繋ぎはじめるのだつた。一日のうちに遂に面会に来なかつた妻と、彼女を中心にして漸く生きてゐる留守宅の内部を、私は、ひたすらに念じつゞけてゐた。妻と、八つになる長男と、六つになる次男と、たゞ三人の女と幼児ばかりの一家内が、都の郊外の、小鳥の巣のやうな家で、微かに、生きて息をしてゐる――たゞ其れだけの事さへ、然し、獄中の私には、其の現状の如何が少しも分からぬまゝに全く想案してなかなければならなかつた。

「来るべき妻が来ぬ――」殊に三時間半の夜業のうちに、私は、この一事を、幾度か反復しつゝ白い冷たい息を吐き、両手で頭を撫でゝゐた。

「――妻その人自身が、遂に病むで床に就いてゐるためなのか。あの幼い両児の世話を、誰れの手が始末してゐることであらう。あるひは両児の何れかゞ病むで、それを介抱してゐるのか、片時も放されずにゐるためなのか。いづれにもせよ、そのために面会に来れないとすれば、この病気は必ず重病――」

これ以上に、更に深い因事を想ひつゞけやうとする苦い思案の働きを、裏に潜むでゐる本能が、忽ち断り止めてしまつた。

りノ＼と長々と隙なく紡いてきた闇い聯想の場面が、一時に全く中断せられて、氣がついてみると、そこの全面に強い否定の幕が一面に展べられてゐた。藥の香ひ、湿めてゐる妻の蒼い兩頬、體温表、氷枕、吸入器、渇いた脣から洩れ騰る熱の息ひ、小さな枕、あるひは大きな花、白い百合、苦悶のあまりに握りしめる小さな拳。痙攣する額。何かを訴へてゐる沈むだ潤い眸。醫師の奥ふかい表情、障子の桟の曲り、――などの片々が、さまぐ＼に織り交ぜられて、最初から哀しい場面を組みあげてゐるうちに、それが益々凶く哀しい方に惹かれ流されて、すでに取り回しのつかぬほどの厄難に、會つてゐるまでに陥つてゆかうとすると、その刹那に、其れ等の一切を否定する真黒い厚い幕が、喪の本能の手に引かれて忽ち滿面に降ちてしまふのであつた。同時に、私は俄かに我れに歸つて白い冷い溜息をついた。然しながら、其の黒い幕は、我れ知らぬうちに、何時の間にか、何の動機もなく、度々屢々開かれてゐた。氣がついて観ると、その度ごとに、場面は愈々濃い哀しさを帶びてきてゐた。終に妻の死を想ふまでになつた。その大きな傷痕を少しでも想つてみることは自分でも確かに烈しく怯まれてゐた。而も陰惨なく否應なしに牽かれてゆく避けがたい聯想の果てに、妻の冷い死貌だ、まざ＼／と向うの方から現はれてきた。

自分が斯く囚へられてゐるあひだに、妻の死がもたらす一家の壊滅、其荒涼たる廢墟の如き跡に小さく孤り遺された幼い肉兒の上を、私は兩手で顔を掩ひたいばかりの痛々しい氣もちに責められつゝ、凝然と眺めてゐなければならなかつた。さうした痛々しい幻象が、自分の生きてゐる此の世の人事のうへに必ずしも有り得ないのではないのを、私は更に竦然として明白に思ひかへした。曾て見もし聞きもした其の惱ましい實相を顧みる時に、其は只だ暗憺たる長夜に、漆黒な大浪が、岸ともいはず沖ともいはず一面に蛇の様な盤紆を打つて動いてゐる大海原を、自分も其のうちの一つの浪がしらの頂上に浮きつ沈みつゝ纔かに眼ばかりを出して、畏る懼る四邊を眺めまはしてゐるのに似てゐた。その闇々たる暗の中を縫ふて、「無明」――「迷」――「流轉」――などの字が、前からも右からも左からも、私の胸さきを一つの的にして、箭のやうに遠くから流れ寄つてきた。その下に射すくめられて、私の外の姿は背なかを低く曲げ歪く傴まれ、首すぼめて胸を壓されつゝ、亢々と孜々として靡絲繋ぎの夜警に從つてゐた。さうしてゐる胸の内の暗闇の回に、または其暗闇の彼方に幾らかの隔たりを措いて、妻の極めて靜かな死貌が、ある時は濃く、ある時は淡く、遠さかつたり直ぐ近くにたつたりして現はれてゐた。同時に其すぢが優く凍りきつてたて、そ

こに街の水柱でも當てゝゐるやうな脊梁の髓の中に深く徹つてくる其爭ひがたい肉の苦るしさが、後から私を常に惱ましてゐた。

聯想——妄想——幻想。私に與へられてゐる殆ど有らゆる其れらが、悲く哀しい場面を描いては互ひに縺れあつて、冬の夜の長いあひだを、夕から朝にかけて、常に私自身を執らへて苛しくも離さずにゐた。幾重の網をかぶせられて、その底に踠き溺れてゐる自分を、私は喘ぎつゝ恐れますにゐられなかつた。

妻の亡くなつたあとに、獄を出た自分が、幼い二人の子どもたちを連れて、幽邃な大きな禪寺の奥の極く閑寂な一室を借り、子供たちは其處の寺院から學校に通はせ、さて自分自身は世と隔て離れて梵唄を友とし法味を愛樂し、この既往二年ほどの間に相繼いで世を辭した私の母、妻の母、私の養父、妻の父、さては更に遠き過去に亡き數に入つた私の姉、妻の兄——などの有縁の人々の菩提を弔ひつゝ、元より嫌ふべくも忌むべき醜悪な邪僞な此の自分の、現世に於ける今後若干の是れからの生涯を、全く出世間的に罪はるべき淸々しさを出獄後の將來に豫想じてみることが、現に跪き傾れてゐる私を、寂しく幽かに新しく慰さめはじめた。私は西行法師其人のうへを羨はしく憶つた。稚臭らしい石童丸の苅萱のこゝろにも偏れ得たやうに思ひこまれた。更に、世に唯だ一人だけ自分を眞に愛してくれた亡妻の測りがたく深かゝつた情愛を偲びはじめて、そこに其の人の戀ひしさに包まれてしまふと、我れにもなく何時しか涙ぐむ計りしてゐた。ニッケルの縁の小さな眼鏡、その左の蔓が直ぐ折れたのを、麻絲の屑で幾重にも結びとめてをいたのを、私は相の作りし面影を偲びつつ凍えきつた指端をあげて脫しとつた。寒さに麻痺してゐる兩頬のうへに、斷れ〳〵に降ちてくる涙を、紺い筒袖に急いで拭きとつた。作業の手を少しでも休めてゐるのを、それが縱ひ數分時間のことであつても、廊下を歩いてゐる看守の眼に、監房の扉の「視察窓」から見つけられることを、私は一方に鋭く氣づかつてゐなければならなかつた。

「厭離」——「隱遁」——、などのこゝろが、ます〳〵強く私を惹いていつた。殊に、親鸞聖人の「離山の御文」の最後に、「遁世の袖に隱れ畢ぬ。今生の拜謁是を限りに候。以上」とある條を、私は、屢々憶ひだした。そこに衷から催す眞に深い懷しさが、私の中心を犇と執らへて放さなかつた。また「狐は穴あり、空の鳥は巢あり、されども人の子は枕する所なし」——「若し我れに從はんとおもう者は、己れを棄て、その十字架を負ひて、我に從へ」——「汝等その所有を盡く捨てざる者は、我が弟子と爲ることを得ず」——「凡べて我が名の爲に、家宅、あるひは兄弟、

るひは姉妹、あるひは父、あるひは母、あるひは友、あるひは子、あるひは田疇を棄つる者は、百倍を受け、かつ窮き生を嗣がん」などの、キリストの語も、眞新らしい懷しさを帯びて、私の衷の奥の方に響いてきた。手術臺の上に生を賭して仰むいてゐる外科患者の、膿みたゞれてゐる遺傳性の致命的局部のうへに、大手術の端緒として、切開の鋭い第一刀を下さうとしてその道の第一流の權威に屬する名醫が、絶大な自信と沈默のもとに、冴えきつた腕を今まさに振翳してゐる――其の輝々した三日月形の纖長く曲つた解剖刀そのものに、「遁世の楯」あるひは殊に「十字架」などいふ語のこころがよく肖かよつてゐると想ひなされる旨趣を、私は其の手術臺の上に横になつてゐる外科患者と自分とが同一人でゐる氣もちのまゝで、其の間の消息を、内に或ひは外に、徐かに味はつてゐた。そこに一道の酸味が有つた。猶ほ、一條の超脱的な愉悦が、その酸を嗜む裡に始終を貫いて含まれてゐた。

「妻の死」それを既定の第一前提にとつて、さま〴〵の哀しく慘ましい宛かも現實らしい場面が、それを見るごとに毎も創造されてゆく多趣多樣の新しい變化を映して、際限なしに展開されて進むで行つた。けれども、まだ曾て一度すらも、子供の死そのものを聯想することは、まことに少しでも片時でも、私の心意の末梢すらも、其の方向に傾いたことは全く無かつた。全無であつた。そうした微かな感覺すらも、催すことさへなしに過ぎてゐた。

必ず面會にくるべきはづのもが、その期日が既に過ぎさつても未だ來ない妻の現在に對しは、「生死事大」――「無常迅速」などの、從前には宛も少年が骨董品でも眺めてゐるやうに無關心に看すごしてきた文字が、今は眼のあたりに爭ひがたい現前の事實を表はしてゐる語として、其の語の味を縦ひ少しでも嘗めさせられてゐるものが、猶ほ動き移つて、その同じ味覺が、更に子供たちの上に轉じてゆかうとすると、然うするかしないうちに、自から意識し得ない私の衷の深くに居る何ものかゞ、私の然うした聯想味を遮らうとする壺の上に、忽ち完全に蓋をしてしまうのであつた。この完全な蓋――否定の黒幕は、私が獄を出てくる最後まで、遂に一度も猶ほ一尺の隙さへも開かれることがなかつた。

辣薤、珠葱、などの類のやうに、幾ら剥いでも剥いでも、皮ばかりか、下から下からと、現はれてくる。終に剥ぎつくせば、そこに身は無くて、存在の本體が皮ばかりに始終する。斯かる

類(たぐゐ)のものが、他(ほか)ならぬ私自分を、そつくりと其のまゝ縮微してゐる。自分を觀(み)るたびごとに、私は、蒺藜のごとき自分、珠窓のごとき自分、が落ちて轉(ころ)がつてゐるのを、確かに明(あ)きらかに觀る。

獄を出てきた私の顔を、正面に對座して暫く眺めてゐた一人の良い親友が、兼ねてから思つてゐたことを今言ふ時が來たというやうに唇を力づよく動かして、

『精神的絶食療法をやつてきたのですね』

と、言ひつゝ、私の瞳を瞬(また)きもせず覗つめてゐた。その言のそとに、『絶食の療後の養生こそ、却つて猶大切ですよ』との意味が含まれてゐるやうに、私は親友の言を承(う)けた。その親友の謂ふ「精神的絶食療法」は、猛々しく臭い生々(なま)しい蒺藜、珠窓の、幾枚かの皮を、強迫的に無理に剝ぎとり剝ぎとりした。元來、その奥に實(み)の一つも無いのが本當でありながら、それでゐて極めて執拗に脫(ぬ)ぐまい脫ぐまいとばかり、寧(むし)ろ皮そのものに本能的な粘(ね)ばりづよい執着を知らずに浸(し)みこませてゐるのが私の欲求の殆ど全部である。然(さ)うした皮ばかりの私から獄の眞黑な鐵のごとき雙腕(うで)が、表皮の方(ほう)から一枚一枚づゝ、執着の濃い粘(ね)はり氣と日夜に奮鬪して、否應なしに無理強(むりじ)ひに、剝ぎとり剝ぎとつていつた幾枚目かの皮の次ぎに、其の下から新しく表はれ[illegible]一枚のうへに、妻の死貌が、蒼白く浮彫(うきぼ)りのやうに映(うつ)つてゐたのだつた。一年半の獄のなかの生息が、私から幾枚も剝(は)がしとつていつた最後の皮が、妻の死貌を映してゐた皮であつた。猶ほ此の一枚を更に續いて剝がし蕩(と)らうとする黑い鐵の腕の力を皮の奥深くに小さくなるに從つて益々濃厚に臭く粘ばつてゆく執着は、まさに必死になつて支へつゞけてゐた。次ぎの下層に未だ現はれずに隱れてゐる皮のうへには、子供たちの小さな死貌が彫(ほ)られてゐたのに、確かに違ひなかつた。私は其れを豫想しつゝ慄へてゐた。然し、そのうちに、二月に入つて、妻からの手紙を、私は漸く受けとることができた。

「すつかり御無沙汰いたし、申しわけございませぬ。私も心にかゝりつゝも、いろ〳〵と要用かさなり、私の用なき時は、田村十志子樣御忙しくて、つい御留守もおたのみ申しかね、なか〳〵と相成り、然し全く大した病氣と申すのではこれなく、くれ〴〵も御安心あそばして下さい。

主は一度びとらへ給へば、なか〳〵離したまはず。昨年の秋以來、種々なる事々に依り、少しは私も信仰をのぞきました。只今おそろしく、主よりほかに、たよる方はなし。

只今、家中にては、例の流行性感冒におかされまして、長男は十日ほど發熱、咲は一日半ほど、非常に困りましたけれども、

手當の早かりしため、就床も四五時間にて、目下は元氣に遊んでをります。續いて、次男が昨日より咳多く、發熱いたしてをりますが、これもあらかじめ手當をいたしてをきました爲に、只今は熱ひき、元氣にて、咳も減じ、起きたがるのを、無理に寢かしてをります。今度の風邪は、前のより猶ほ激しきよしにて、一度此の風にかゝれば、必ず餘病が發するやうに、皆樣が申してをられます。また近所の誰れ彼れも、ころ〳〵と永眠せられ、まことに氣みわるく思つてをりましたのに、宅の子供たちのは、普通の風邪よりも未だ輕く、まことに感謝いたしてをります。私は至つて丈夫、ぴん〳〵いたしてをります。

この風邪が全快の後に、長男の登校の方も取りきめたく、何處へまゐりますのにも、三人づれでございますので、三人とも外出できねば私一人にてまゐるわけにゆきませぬのが、只おつくうに存じられます。然し、子供は實に〳〵たのしみなものでございます。

物價は未曾有の高さでございまして、只今の此の家にても、既に七圓ほど家賃あがり、日用品は殊に市中の倍ぐらゐでございます。電車賃などを加へますれば、市中も郊外も大した差は無いと存じられます。市中にても三十圓だせば、お留守のみならず御用品の直ぐ一二月ぐらゐの御用にあて得るほどの家はございませうと存じられます。只今の家では三十五六圓の家賃につきます。私も毎月の家賃を、送金の半分も支拂ひて暮しをるとは、まことにをかしく、妙な暮しかたもあるものと、つく〴〵をかしく存じられます。

大阪の皆々樣御丈夫。王樣御一家もおかはりなし。そのほか皆々樣おかはりなし。

植村正久先生、お正月に御來訪下さいました。くれ〴〵もよろしくと。其の他皆々樣より御同樣に。

今月のうちに御面會にまゐります。今度は、ほんとうに。

御身御大事に。神のみために御自愛あそばして下さい。」

この手紙が、既に剝ぎ落られて落ちてゐる皮を、辣旃に役た拾ひあげさせて、皮の上に更に皮を舊のやうに蔽はせた。同時に、妻の死貌を彫り映してゐた皮は、奥の方に遠く掩ひ隱されてしまつた。「子供は實に〳〵たのしみなものでございます」の一句が、私を殊に强く攫んで放さなかつた。妻自身が其の豫告どほりの期日に面會に來ないために、自分にとつては興ゆきの淺くない苦惱に塞ぢこめられてゐる此方の私の衷を察し得ずに、「たのしみなもの」の子供たちの傍に居て一つ家のうちに暮らしてゐる其の悦樂と暢氣らしさが、いかにも打ち寛いた氣分を添えて私を羨ましがらせた。同時に、然うした家中の摸樣を思

つて居る其れが全く別異の世界の行を遠くから眺め望んでゐるやうにも思はれた。現在の自分の苦を苦として、そのまゝ實感し得ないまでに幾重の皮に包まれてゐる、皮ばかりの自分を、私は此の時に復た觀た。「子供は實に〳〵たのしみなもの」か、實に譬へるほどに羨ましい。のと同時に、その一句が、私の空に隠して行つてゐる宛かも熟れた梢頭を見るやうな贋物――苦惱に爛れはてた贋物の表面を、痛々しくも然らく〳〵と嘲はるのであつた。その一句の鑢で、贋物の全面に當てられてゐながら、然し、それを其のまゝ感じさせずに、本能的に厭棄させて鑢の柄を握つてゐる「實に〳〵たのしみなもの」を、揮つて全く別異の世界の行であるかのやうに遠方に眺望させる自然の力――根柢を恒に流れてゐる其の力によつてのみ、私は辛うじて息をしてゐた。また今にしても同じ其れに依つて漸く生きてゐる。眞に現在する自分の苦を苦として、そのまゝ實感し得る境涯を、私は想像さへもなし得ない。若し其の境涯が實在するならば、それは吾れらの生そのものと最初から全く相容れない性質のものでなければならぬ。同時に其れは單に架空の消息であるのに過ぎない。と、私は今も獨りで斷定してゐる。苦々しく臭い皮ばかりの自分、辣殼の自分、珠数の自分、それこそ私の眞實なのだ。少くとも現在の私の眞實なのだ。猶ほおそらくは此の世の生涯を終はるまでの自分の眞實な姿は、苦々しく臭い皮ばかりであるのに違ひあるまい。然り、私は、今まで現在の消息ばかりに憧憬して、容を摑みつゝ其の無氣味の恐々から洩れてくる香ひらしいものに自から酔つてばかりきた。

實の無い自分ではないか。されば眠げよと言はれても、また精を盡くして努めても、未來が脱ぎ得べきものではなく、若し脱ぎつくせば、それに皮ばかりの私は無くなつてしまふではないか、たとひ一枚を脱がうとも、二枚を剝がされようとも、或ひは五六枚を拋擲し得ようとも、何れは畢竟するところ五十步百步のことなのに過ぎないではないか。獄の正門の、鐵の巨大な扉が、私を外に「さあ、出て往け」とばかり吐きだした時に、私は、肉の自由な二三步を步きはじめつゝ、自分も共に深く信じもし或ひは書簡に諸方に報じ、また友も兄も姉も[illegible]たちも同樣に各自に書いてきた出獄の「復活」又は「新生」などの字面を、個々憶ひだした。同時に滿面に漸く苦笑を覺えた。復活は、あくまでも辣殼であり、珠数は、遂に珠数であるのこそ、少くとも今の私には眞實である。

最初に、格い獄衣が、辣殼の皮の臭い一枚を剝ぎとつた。その直く下層に潜むでゐた私は、自分でも意外なほどに平氣で、新い褌、――襦袢、――着物、――帯を、手ばやく身に新しく着け

てしまつた。親友の謂ふ「精神的絶食療法」は、この赭い獄衣を第一回の手術刀にとつて、月の蒼い光、――麻絲の不足がちな十夕――竊盜前科十四犯の第六十五號氏――啜り泣いてゐた自分の刑期を知らぬ人の狹い小さな額、――嚴冬、――妻の死貌、――その手紙、――その他、此の稿に書いてゐない獄中の幾趣の有象無象に化つて現はれて、不斷に私を手術し、其の手術刀は、生々しく蔽つてゐる皮を幾重にも剝ぎ落つていつた。剝がれるごとに、奧に潜むで居る臭さは益々臭く、それは確かに髓まで腐爛しはてゝゐるものとしか他に思ひやうがなかつた。その臭さの一々を、更に慚づることを此の上に猶ほ得知らずに書きつくすことを、私は、やはり本能的に成し得ずにゐる。昔から、昔からとの欲求は確かに在つても、それは外に現はれてゐる表皮のうへに一つの淺い皺が蠢動してゐるのに過ぎない。いよく書き述べるペンの軸を握つてゐる裏の一物は、外の表皮の上の欲求を直ぐ裏から覆がへして、自身の臭さを隱蔽してしまうのに定まつてゐる。この表皮のおもての欲求と裏の本能との矛盾を制さへ制さへしつゝ、私は之れを書いてゐる。右も、左も、前も、後も、顧み盼ることなしに、只だ書いてゐる。

今年の三月二十六日に、私は、教誨所に喚びだされて、

「其ノ方儀、獄則ヲ遵守シ、作業ニ勵精シ、改悛ノ狀アリト認メ、賞表壹個ヲ授與ス」

との「言渡」を受けた。その後は左の袖のうへに、白い小さな布片を縫ひ着けてゐた。その「賞遇」のうちの一つとして、一月のあひだに、一回づゝの面會と書信の往復とを許さることになつた。そこに一月に二回の連絡を獄の外と通はせることができるやうになつた。從つて妻の死貌は、既に杳かに遠ざかつて私の表面とは殆ど絶縁されてしまつた。それに假出獄の確かな前兆として、囚人たちの間に遍く期待せられてゐる「賞表」を、自分が今や貰ひ得たことが、まさしく大きな悦びであつた。自我の現實の範圍が、いつの間にか其の圈を想像の上に次第に擴大して行つて、その周圍は時々に獄の外にまで溢れ始めた。時は仲春にちかづいてきた。贅澤な餘裕が、何處とも捉へがたい、間隙を伴なふて、私の裏の方どに巣くひはじめてゐた。

四月――五月――六月――、夏になつて、私は漸く窓の硝子扉を躊躇なく開き得るやうになつた。それほどに獄の冬の寒さの印象が、深刻に潜在してゐた。辣韮は、幾層の皮を、ますく厚く重ねに重ねてゐた。それは依然として元の態のまゝの辣韮でゐたけれども、また既に剝ぎ落られた皮を何時の間にか拾ひあげて、外から再び襲みかさねてゐたけれども、既に一度び剝ぎ曝されて、其の中味を眼の前に遂に現はした事後の淡路は、

辣蕀の奥に恒に懸々として消えがたく永く貽されてゐる。それだけが舊來の辣蕀の裏に加へられた前と後との性質的差異である。

七月に入つた。運動場の一方を繞らす赤い煉瓦の塀を越えて、眞夏の光に燃えさかる綠の陽炎を、塀の直ぐ外の近くに在る農家の椎の樹の頂きに仰ぎつゝ、私は、假出獄の期日の來るのを幾度か待ちわびた。既に已に、贅澤とは謂ひ得ない程までに、幾趣幾様の彩りを帶びてゐる餘裕が、裏の全面を蔽ふて瀰蔓し且つ飽和してゐた。出獄の後の夫れ／＼に對する豫想の圏が、日に／＼輪に輪をかさねて、辣蕀、球慾を外に／＼と膨らませてゐた。然し、自分の寂寥、自分の脆弱、自分の惡性、自分の無知、自分の無能、自分の虚僞の眞實——など、それは何れも嘗て剝奪せられた幾枚かの皮の裡から、やるせなく顯はれてきた自分の奥の實の態を、私は、遂に忘れはてることができなかつた。のみならず、それ等が既に一度び曝露せられてみれば、そこから自分の裏に必然に發作してくる人格的の默移と變化とを、苟しくも回避することは、今になつても、それは獄の内外を問ふことなく、時日の經るのに從つて、ます／＼不可能な事であつた。その人格的默移と變動は、延いて私に、自分の「寂寥」——「脆弱」——「惡性」——「無知」——「無能」——「虚僞の眞實」——などを、まことに無二に尊重させる程にまで迫つてきた。此れらこそ私の生命の生命——中心生命であることを、私は、七月の中旬に入つて、いよ／＼身にしみて良く知り得るやうに、漸く自然に馴致されてきた。七月二十七日に、妻にあてゝ書いた封緘葉書の最後の一葉が、あだかも餘白になつた。そこに、私は其の折の自警の一文を、出獄の後の日の爲に、書きのこしてをいた。

「全人類の永遠の問題は、恒に唯だ一つあり。同時に、我が一人の現在の脚下に融卽しつゝあるを自知すべし。されば一代の音色より努めて超越脱離せんことを要旨として、永遠唯一の問題を第一義たらしむると共に、苟も現實を高蹈し、若しくは一地に停滯することあるべからず。一切の論議と、一切の批判とを排去して、恒に純主觀の一白道の上に在り、創進と同化との一絶頂點に立て。

横傲と顧盼とは、共に魔路に通ず。宜しく裏の現實に鍬を舉げて、巖をたゝむが如き堅實なる一日一日を、牛の如くに進りゆかしめ、眞實の收獲を刈りとるべし。我れは是れ此の人生の流泊し來れる一介の巡禮者のみ。かりそめにも道を論じ法を説くの亞流に習はしめんとする誘惑に乘かるゝこと勿らしめよ。」

とまで書いてきて、すでに餘白が殆ど無くなつてゐる紙の端に

に、

「唯だ是れ畢命を期とせよ――」

との一行を添へてをいた。汗と共に共れを書きつゝ、「手を鋤につけて後を顧みる者は、神の國に當はざる者なり」とのキリストの語「吾が道は一もて之れを貫くにあり」との孔子の語「われは是れ加古の教信沙彌の定あり」との親鸞聖人の語。「今日ばかり、おもふこゝろをわするなよ、さなきはいとゞ、のぞみおほきに」との覺如上人の歌。――などのこゝろが、次ぎに〳〵にと私の裏に流れてくるのを明きらかに鋭く感じた。

寂しさは寂しいまゝに、脆きは脆いがまゝに、惡は惡のまゝに、無知は無知のまゝに、無能は無能のまゝに、虚僞は虚僞のまゝに、辣薤は辣薤のまゝに、珠愁は球愁のまゝに、ころ〳〵と圓く轉げて往きたい。その形體は、元より正しい球ではないけれども。――そこに、謎のやうな「任運無作」の四字が、眼の前に、光つて映つたり暗く消えたりしてゐるうちに、八月も過ぎ、九月に入つた。その十五日に、私は、假出獄を、遂に許された。

獄の庭の上を、正門の方に、一面に灰白い砂利を、足に重い草履の裏に踏みつゝ、一人の看守に伴ない送られて、黒いセルの單衣を着てゐる私が歩いてきた。凛として聳り立つ高塔の上の大時計の前を、眞後に振りかへつて仰いだ。十一時に、あだかも二十分すぎてゐた。白い大きな雲が、塔の尖頂の直ぐうへに、いつものやうに、ゆら〳〵と搖いてゐた。

獄のそとに、わたくしの肉身が、獨りで出てきた。

雨あがりの、濃黑な泥土、白い雲を底に映してゐる水溜が、私の薄い草履を、隨所に惱ました。雜草のうへに、ころがつてゐる切石の上に、私は到るところに憩み佇むだ。五冊の書物を厚く重ねて容れてゐる風呂敷包みを、片手から片手に幾度も持ち代へては俯向いて、鈍く痛む膝頭の上を暫く撫でたり押したりしてゐた。そのたびに背すじに添ふて、一條の疼痛が上から下に流れていつた。膝頭の後側を眞直ぐに押し伸ばして、胸を起すと、脚もとに近い泥土と水溜のうへを辛うじて避けつゝ、復た漸く歩きはじめた。重い山高帽をいたゞいてゐる蒼白い額に冷たい脂汗が、うつすりと滲みでゝゐた。身に着けてゐるものが、何も彼も總べて重かつた。

獄の門より、原の上に、村の中に、兵營の裏に、停車場の構内まで、三十分間あまりを、歩みつゝ佇みつゝ、私は蹣跚と辿つてきた。私を取り圍む四邊の遠近の風物が、自然も人事も是

れも彼れも疎しく、
『俺は、お前を知らないぞ』
と、皆が聲をあげて私を傍観してゐるやうに想はれた。
『沒交渉だ。沒交渉だ』
路に添ふて高く密生してゐる竹籔の緣を歩みつゝ私は呟いた。俯向きがちになつてゐた。喉が渇いてゐるのを知つた。
長い電車の一隅に、私は、靜かに愼ましく腰をおろした。見識らぬ人ばかりが、誰れも皆、是れから千年も萬年も生きつゞけてゆくやうな顔をして、疎らに點々と並んで腰をかけてゐた。私の雙方の膝頭が、わな〳〵と惰性的に顫へつゞけてゐた。その上に、重い風呂敷づゝみを載せて、兩手を添へて人知れず押さへた。
汽笛の、小短かい、一つの音と共に、車體が流れるやうに動きはじめた。私は、前面の窓を隔てゝ、監獄の在る方の空を仰ぎ望みつゝ、再び人知れず、重々しく一揖した。感謝と訣別のこゝろが、そこに恭々しく裏に充ち滿ちてゐた。「さやうなら、親しき獄よ」
電車は、初秋の氣を劈いて快く走つた。然し、私は淺い眩暈を感じはじめた。さしあたり眼をとぢて其れを紓ぎつゝ、
「あゝ動搖する。動搖する」
と、閉ぢてゐる眸の奥で思つてゐた。
事件が摘發せられた最初から、現在まで前後二年半の時間が一括されて、私の後頭部の方で、耀らりと一閃した。
東京監獄に、未決囚として、十一ケ月あまりを拘禁せられてゐた間に、「感想錄」を書くことを許されてゐた私は、九ケ月あまりの朝夕を繊い毛筆に親しみつゞけた。千二百枚あまりのものを、書いては綴ぢ、綴ぢては木の棚の上に堆たかく積みかさねて愉しむでゐた。感謝すべきことには、謂はゆる「感想」を書いてゆく範圍に就いて、嘗て毫しの拘束も加へられずに、私は全く自由に快く隨意に書いてばかりゐた。そこに様々の草稿が逐次に堆まつていつた。その中の短い篇の一つに、自分を蠶に喩へてゐたのがあつた。
「——自分は、今、未だ桑をたべてゐる。既決囚として自身の境遇が全く梗塞せられる時に、自分は繭の奥に、愈々眠る。願はしいことは、全く新しい蛾に化して、眠りから眼覺めて、其の繭を出てきたい。舊いすがたから全く解脱して——監獄を良い絲の繭にして」
などの意味を書きつらねてゐた。
蠶か。否、蠕動する頭尾の全身に毒汁を含み滴らしてゐる害蟲であつた。蛾にもなり得ず、蝶にも化せず、唯だ是れ一匹の

容器として、私は再び蠢き出てきた。

自分が常に一未成品に住まつてゐるのを、嘗て幾度も歎いては、「未成」と、私は自から名をつけてゐた。然し架空の蜃氣樓の内の消息を外から徒らに愉しみ嗜むでゐた自分のすがたが、今一時間足らぬ前まで住むでゐた監獄の彼方に流れてゐる白雲の、實際はるかに遠く隱れ去つて往つた。それと現在の電車の中にゐる自分との隔離の上に、二年半の時間が横に長く江のやうに介まつてゐた。大きな肯定的な氣分が、私をつゝむだ。

中野驛——東中野驛——大久保驛——。

「未成、未成、未成」

と、繰りかへしつゝ、私は大久保驛で電車と離れた。

瞼に重い眩暈を拂ひ棄てやうとしてはつきりと醒いた氣もちを喚び起こさうと努めてゐるうちに、下の方の膝頭が崩れさうになつて、滑つた柔い泥土にさへ躓つきつゝ、停車場から大久保町の通りのうへに私は出てきた。

「——未成」

と、尚ほ殘續してゐる後から、追ひかぶせるやうに、「我れ之れらの望を、既に得たりと言ふに非ず。また既に至らせられたりと言ふに非ず。或ひは取ることあらんとて、我れ只だ之れを追ひ求む。キリスト之れを得させんと、我れを捕らへ給へるなり。兄弟よ、我れみづから之を取れりと思はず。惟だ此の一事を務む。即ち、後に在るものを忘れ、前に在るものを望み、神キリスト・イエスに由りて、上へ召して賜ふ所の褒美を得んと、標準に向ひて進むなり」との、パウロの信書のうちの幾節かゞ私を前の方に、強い力で推し進めた。「進め、愛する未成品よ」といふやうに。

漆原藥局——小西酒店——大久保百人町巡査派出所——金龍寺——日の屋洋食軒——光月堂菓子舗——萬年湯——常陸屋雜肉店——武藏屋乾物店——。ます〱深く滲つてくる。町の泥のうへを跨ぎ〱往く一足ごとに、是れから住むべき家に歩々に近づいてゆく自分の現在の姿を、私は、眞にいおらしく、しをらしいものに歩きつゝ眺めた。パウロの信書の句が、すでに私を後から閲ひはじめてゐた。更に其れと一つに諧調して、「もしそのいのちのびなば、一期のあひだは、佛恩報謝のために、念佛して、畢命を期とすべし」との蓮如上人の御文のうちの德音の一節が、使徒の聖句と相和して、私の裏に朗々と讃詠の樂を奏ではじめた。

「おゝ歸つてきた」

充實した感激の聲が、私の裏の奥ふかくから迸りでた。よろ〱する跨興をあげて、黒い土を、力づよく蹈んだ。[illegible]

泥のうちにも、大きな温かみが、ふつくりと含まれてゐた。

「苦土、穢土、さうして、Mother earth 」

私は眉をあげた。

町の通りから、左に折れて、枳殻と杉との低い生籬に兩側を挾まれてゐる細い路の上に、私は、ますく力づよく進むできた。その左側に、二本の立樹を柱にとつた小さな門、そこが私の棲むべき巣、妻と子との息むでゐる家の入口であつた。少からず亢奮しつゝ。

「禍、禍、幸禍、幸福、幸福」

と、私は連呼した。

自分の姓名を掲げてある木の表札の、あまりに黝ずむでゐるのが、私を愕かせた。同時に、「落魄」そのものを默つて語つてゐる其の表札の色と、今、蒼白く痩せて戻つてきた私自身とが、私の胸のうへに一つに纏まつた。表札と其の下に立つてゐる私とが互ひに暫く上と下とから靜かに眺め會つてゐた。また、古い屍骸を眺めてゐるやうな氣もちで、私は、表札を仰いだ。そこに、

「山中峯太郎」

の五字の自分の名を、私は新しいものを見るやうに讀みなをして見た。空虛な洞穴を覗くやうな意識が、瞬間に私を涼めて去つた。

支那の第三次の革命の際に、中華革命軍海軍總司令の名をもつてゐた王統一氏が、この表札の字を、書いてくださつたのであつた。事件が摘發せられ、忽ち檢擧された私が東京監獄に囚へられた時に、從來の友といふ友が、當然に殆ど盡く背き去つた。憚いて、わざく支那から面會にきてくださつた王氏の愛が、その際に、いかに激しく私を動かしたかを憶ひだしつゝ、私は、漸く門の扉を横に開いた。

玄關の上框の前に、私が立つた。

輕[illegible]徐かな足音が、襖のむかうに聞こえた。直ぐに小さな足音が、はたくと亂れて續いてきた。

卒然として愕き佇む妻の兩脇に、袂の陰から、円い小さな顔が、二つ並んで現はれた。

泥まみれになつてゐる重い草履を、私は後に脱ぎ棄てた。

白い障子よ。黄いろい壁よ。低い天井よ。

「まあ、どうしたのでせう」

妻が先づ斯う言つた。

簞笥の上に載せてある、小さな佛壇の奥に、眞白な位牌が、新しく靜かに立つてゐた。

纖い麗はしい文字で、「新歸元　晴巒高風居士靈位」と、淺く

誌されてあるのを、私に靜に〳〵と心しつゝ視た。昨年の十一月二日に、聖路加病院で亡くなられた、妻の父の位牌であつた。私は合掌した。その位牌とは此の日が初對面であつた。

半身不隨のまゝに、言ひ得ず、寢がへりも得ずに、一年半あまりを常に古綿のやうに朽廢しきつて寢臺の上に倒れてゐられた其の人が、「晴雲高風」になつてしまはれた。晴雲高風、そこに彼方の岸を杳かに望む明かるい氣もちがせられるのを、私は何とはなく只だ懷しく、また「居士」などゝ未だ人臭い性質の字は無い方がいゝなどゝも感じたりした。その位牌の隣りに立つてゐる少し古いのは、其の葬ひを私が親しく營むだ「梅窓香英大姉」妻の母の其れであつた。私は再び合掌した。合掌しつゝ、これらの戒名をつけてくださつた吉祥寺の禪僧のこゝろを、單だ想ひはかつてみた。

その父の死の前後の委曲に就いて、妻は、一々具さに、私に話してきかせた。築地の聖路加病院から市街を貫いて北の郊外の日暮里の燒場に、父の死骸を送つて往つた折の妻自身の述懷をわけて哀しく私は聽きとつた。

そのうへに猶ほ私の耳に新しい訃音の幾つかを、妻は次ぎ〳〵に私に聞かせた。シベリアを横斷してこられた後で、私をも時々鎭靜にして下さつた稲島大佐も亡くなられた。私が聯隊旗手を勤めてゐた時に、其の近衞歩兵の第三聯隊に長として親しく私を薫陶して下さつた山田中將も亡くなられた。殊に私の胸を強く衝さへた悼ましさは、嘗て師事して居た與倉少將の逝かれた事であつた。少將が、

「山中は何ぶつて失策つた。まだ出てこぬか。まだ出てこぬか」

と、言はれてゐたことが、私の留守を屢々訪ねてくれた親々を通して、妻に幾度か傳へられてゐた。聽いてゐる私は瞼をふせた。騎將として少將と相見た、

支那の革命的擾亂の、第一次の時にも、第二次の時にも、私と最も密接な關係を保ちつゞけてゐた壯年の新田德兵衞氏が、廣東で俄かに亡くなられたとの黑い報知が、最近に來てゐた。氏を通して、李烈鈞氏が私の消息を常に求めてゐられたことをも、妻が語り添へた時に、「もう其れだけで澤山だ」と、私は言はうとした。死の香ひが、其の際の私に餘り強すぎた。位牌の上に靜かに記されてゐる「新歸元」然し、孰れも皆な俗名に、心に歸つて往くのだらうか。「當主、僕夫、さうして、以三三三〇三三」と、私は再び思ひかへした。

二階に登つていつた。

壁に、大きな「世界全地圖」が、ピンでとめてあるのを、私は

近よつて眺めた。ドイツが想ひのほかに小さくなつてゐなかつた。その南に、片假名で何やら長い名の、横に扁平な形の國が出來てゐた。黒海から地中海に連なる海峽の兩岸が、眞紅に染められてゐた。國際管理――委任統治――人民投票による統治――。

嘗て學校で敎はつた西洋史の附圖の幾葉の面を、私は、ゆくりなく聯想した。桃色や、萌黄色や、ギリシヤが大きくなつたり小さくなつたり、ローマか擴がつたり割かれたりしてゐた幾枚かの附圖のおもてを思ひ出した。

「あゝ、いつまで何をしてゐるのだ」

常に古く新しい地圖の上を、私は自分の全く外に然し温かく觀た。當時の戰局の推移してゆく日々の情勢を豫め判斷してみる爲に、朝ごとに幾種かの新聞を披げて、幾つも掲載されてゐる電報文の中の小さな都會や部落などの所在を、陸軍から出版された大きな精細な地圖の上に探しまはすことが、嘗て日常の仕事の一つになつてゐた。其の新聞記者としての自分の徒らに繁忙として、何ものかに追はれてばかりゐた萎れがちな氣もちを、更に憶ひあはせて、私は直ぐに苦笑した。「自分も何をしてゐたのだ」

――陸軍の幼年學校――士官學校――大學校――支那の革命――新聞記者――入獄――前科者。既に此の世に於てさへ、すこし流轉しすぎるではないか。「これから何をするのだ」

「犬かへり來りて、其の吐きたる物を食らひ、豕あらひ潔められて、復た泥の中に臥す」

ペテロが、其の信書のなかに引用した此の一つの諺を、私は屢々おもひだしつゝ、この原稿を終始苦るしく書きつゞけてきた。この一文は、まさしく私の嘔吐したものに他ならぬ。その腐れた臭ひに、みづから鼻を撲たれて、私は、今も「犬かへり來りて――」を、あざやかに憶ひだしてゐる。「吐きたる物を食ふ」自分を觀てゐる。

數日前の朝。六歳になる次男を、幼稚園の門まで父なる私が送つて行つた。家のなかにゐれば乳房を探る癖の未だ殘つてゐる全く甘へ坊にすぎない六歳兒が、幼稚園の門を入るのと同時に、俄かに兩手を高く振り力づよく足をあげて、砂利を厚く敷いてある勾配の緩い坂の上を、さつさと獨りで眞直げに登つて行つた。全身に黒い繻子の服を着て立つてゐられた婦人の先生の前を過ぎる時に、六歳兒は忽ち立ちどまつた。右手に制帽を器用に脱ぎとつた。恭々しく御辭儀をすると、再び迅く勇しく歩きだした。小さな肩に脚に、強い氣勢が漲つてゐた。やがて

中央公論

若い小杉の植込みの蔭にかくれてしまつた。その小さな後姿のまことに健氣に見える一々の所作を、私は校門のそばに佇みつゝ、餘念なく瞬きもし得ずに凝つめてゐた。父親そのものになりきつてゐた。同時に、

「この兒の將來に、願はくば幸ゆたかならしめ給へ」

我れ知らず黯然として私は深く默禱した。眼をとぢて首を垂れてゐた。そこに他の念慮が無かつた。

數秒時がすぎた。私は自分で涙ぐましくなつた。現在に然かく單純な氣分を湛へて默禱の界のうちに沈んでゐる自分の、まことに殊勝な態を省みた。そこに我れながら醇乎敬虔な素直なこゝろを具へてゐる、自身のいぢらしさ神妙さを思ふて、我れと涙ぐましいこゝろが共々に誘はれてきたのであつた。「かうした一つの自分も有る」自分のいぢらしさにつまされて、私は遂に愴として涙をこぼした。

「感傷だ」

叱咤する烈しい聲が私を咽喉に襲ふた。私は愕として首を擡げた。

「いや、眞實だ」

直ぐ前の聲に反撥して、更に烈しく矜しい聲が、私を嘲けるやうに叫んだかと思ふと、前のと同じやうに忽ち消えてしまつた。そこに二つともに何の餘韻も殘さなく、たゞ閃光のやうな叫びであつた。この二つの聲は、[illegible]ひにくゐ、殆ど常習的のものであつた。それを底の箱の中に收めずに措く[illegible]難かつたけれども。

「また來たな」

と、私は何の畏ひもなく獨りで直ぐに思つた。

「自分は唯だ歸つた。唯だ我れ知らず言つてゐた。何か、何か、それを誰れが知らう。また其れが何であらうとも、私は兎ても知らない。知らない」

二つの聲と沒交渉に、私は單獨に微笑しつゝ、校門の前から離れて、歸り途の方に足を向けた。「誰れが知らう」に、相對的な大きな實力が含まれてゐるのを覺えた。同時に、

「唯だ、唯だ、唯だ」

と、衷に迸りに湧いてくる極めて單純な「唯だ」といふ一意識を、私はますく微笑しつゝ肯定して受納した。

この原稿をも、私は、「唯だ」書きつゞけてきた――。らしく思ふ。それが火かへり來りて――」であるのに相違なくとも。

回想の緒は、手繰るに隨ふて、際限がない。

瀧田氏が示してくださつた概略の原稿紙數にも、すこし超過してきた。此の稿のペン軸を離さう。たゞ猶ほ小さな私事の一つを附け加へさせていたゞきたい。

來る十一月の上旬には、數萬の人々の眼と、この原稿の活字に刷られたものとが、何等かの交渉をもつことにならう。私は既往二年半の間を、社會の大方に對して全く阻絕されてゐました。嘗て辱知の人々のうちに、今、この私の嘔吐物——延いて私なるものに啻の如き一顧を賜ふ方が、若し在りまするならば、こゝに如何にも無慚無愧無謀のいたりには存じますけれども、猶ほ其の羞恥を覺えまするより以上の欲求——其の方々と再び手を握つていたゞきたい欲求を私は自から禁じ得ませぬ。その方々が、然し、曩昔の辱知のうちに誰方であるかを、私は今になつて、愈々識ることが出來ませぬ。猶ほまた、私自身の穢い手を方々のまへに私から先んじて差しのべることを、敢て爲し得ませぬ。私は東京市外西大久保九四に住むでゐます。若し、方々より先づ御音信を賜はりまするならば、私は元より面を赧くしつゝも、猶ほ其の辱づかしさよりも、唯だ悅びたいとの望みを、完く充たされるのであります。

この一文を讀みたまふ、大方諸兄姉の御健康を、唯だ猶ほ祈りつゝ、この稿のペン軸を差し擱きます。

借金の記

大町桂月

一

川柳子曰く、『踊るのを面白がつて座頭貸——』と。君よ、君は聰明の資、能く世態人情に通ぜるが、何不足なき家に生れて順境に生長したることなれば、或は踊るの意味は解するも、座頭に就きては、深き理解なからむか。金を貸すに、三箇月を期限とし、返濟せざれば、その月を加へて又三箇月を期限とし、三箇月目に毎に二重の利子を取る。之を踊と稱す。形の上に踊る

にあらざれば、目のなき座頭にも見ゆる也。而して江戸時代の人は律義なりき。目明きの冥利が盡くるとて、座頭より借りたる金は、必ず返したり。從つて座頭成金少なからざりし也。江戸政府は能くも不具者を保護したるもの哉。今や座頭成金の出來ぬ世の中となりぬ。踊ることを廢し、其代りに手數料と稱して、證書面の金額より二三割少なき金を貸し、證書面の金額の利子を取るを常とするが、結果は踊ると同じこと也。

御講義はこの邊にて切上げて、これより余が踊に苦みたる實例を語らむ。實例を語りたりとて、君の同情を仰がむとするに非ず。余の實例は七八年以前十數年間の事にして、今は全くアイスの心配なき也。唯秋の夜長の徒然に、思ひ浮ぶるまゝを書き殘し、君より多くの人々に傳はりて、前車の覆轍ともならばと思ふまで也。

二

余は十二歳にして、父を喪ひたるが、幸にも第二の父ともいふべき恩人ありき。その御陰にて、路頭に迷ふことを免れたりき。第二の父は友人の借金に連帶の印を押しけるが、友人零落してより、其借金を引受けざるを得ざることゝなり、利子が滯るまゝに、書を替へて、元金が多くなり、利子も多くなり、且つ借主も增して、一々應接に遑あらざるやうになり、大に苦しむこと久しかりき。第二の父は我兄に取りても、矢張第二の父といふべき恩人也。我兄は能くその爲めに奔走したりき。さるに如何ばかり奔走しても、恩人の收入には限りありて、負債は唯增すのみなりしが、幸にも官等・段上りて俸給增したり。それと同時に我兄は一計を思ひ付きたり。親戚に公債を有する者あり。頑固なる老人死して、其息子家を繼ぐ。我兄は恩人をして其公債を借りて、他の一切の借金を返濟せしむることに成功せり。斯くて恩人は毎月利子を拂ふと共に、元金の一部分を返しても、猶ほ少しばかり貯金するを得るまでの餘裕を生ずるに至れり。貸したる方にても、公債よりは遙に多き利子を得たり。所謂一擧兩得となりたり。斯くて十年を過ぎけるが、又も一友人の連帶の印の爲めに、新しき債鬼より攻はるゝに至れり。利子滯るまゝに、元金增し、債鬼も增して數人となり、如何ともする能はざるに至れり。二度までも友人の借金を引受けたるが原因となりて、終に我借金を連帶の友人に引受けさせざるを得ざるになれり。それにて少康を得たるかと思ひしに、長男大病に罹りて入院せざるを得ざるが原因となりて、又借金せざるを得ざるやうになりたり。而して今や連帶を頼むべき友人なし。我れも既に世にあらず二人の息子と余とが連帶の印を押さゞるべからず。余は

當時在學中なりしが、乞はるゝまゝに、連帶の印を押したり。而して數千圓の多きに上りたる也。

三

無一文のまゝ、否、マイナスの數千圓を帶びて、余は學校生活を終へたるが、思はしき收入なし。數種の雜誌に寄稿して、漸く生活したり。二人の友人と二年間の製作を集めて出版したりしに、原稿料は四十五圓、一人づゝに割り充つれば、纔かに十五圓なりき。研究に半年を要し、執筆に全一箇月を要したる一書を出版したるに、原稿料は纔に三十圓なりき。斯かる境遇なりしに、債鬼早くも押寄せたり。されど余は境遇上、如何ともする能はず。當時余にして月給取なりしならむには、月給を差押へられて、一生浮ぶ瀬が無かりしならむ。貧乏文人として世に立ち居りしは、却つて仕合なりし也。執達吏が行くかも知れぬぞと恩人より注意を受けたるが、家は唯四壁也。差押へられて困まるものとては、書物のみなるが、職業上に必要なるものは差押へられずと聞く。一着の衣服、夜具、食器など、日常生活上に必要なるものも差押へられずと聞く。外には何も目ぼしきものなし。來らば來れ、何時執達吏來るとも差支なしと、覺悟して居りしに、果して執達吏來りたり。されど差押へたるはぼろくたものを入れたる古簞笥一つのみにて、金額は十數圓に過ぎざりき。

四

余の財產を差押へたる債主は五六人ありき。而して僅々十數圓にては、九牛の一毛も啻ならず、競賣には付せず、差押へたるまゝにて、じりじり催促せり。余の力にては、とても巨額の元金を返すこと能はず。されど債鬼は元金が取れぬと見込を付くれば、取れるだけでも取れば得なりとて、減價るもの也。金の必要多き年末殊に然り。而して借金の分疏は女人に限る。余は義母に賴みて、余の窮狀を訴へたり。債鬼とても、まことの鬼に非ざれば、義母の分疏に動きたり。證書面の金額より三分一だけ少き金にて、證書を返して吳れたるもあり。半額にて濟みたるもあり。三分の一の額にて濟みたるもありき。恩人の長男は病癒えて、官吏となれるが、親友に財產家ありて、其厚誼にて俸給も差押へられざりき。

余は出雲の中學校に赴任することゝなりけるが、出雲の一豪家より金を借りて、漸く古簞笥の封印を解くことを得たり。これにて、余は余の財產を差押へたる東京の諸債鬼より解放せられたり。出雲にて新に負債を生じたるも、アイスを業とするに

あらざれば、利子は至つて低廉なりき。俸給の半分を割いて、利子と元金の返済とに充てたり。生活は苦しかりしかど、債鬼の襲來を免れて、やれ〳〵と一と安心せしが、恩人の息子が負擔する筈なりし一債鬼、思ひがけずも出雲の區裁判所にまで手を廻して、余の月給を差押へむとす。この不意討に一時は驚きたるが、先きに借りたる豪家より追借して、漸く難を免れたり。生活は益苦しくなりたれど、その苦は債鬼に責めらるゝ苦に比すれば、物の數ならず。東京にては到底生活する能はざる收入なりしも、物價、殊に家賃の低廉なる地方の事とて、どうにかかうにか、小さくなつて生活するを得たり。而して出雲に於ける新負債も無くなりて、これより生活が少し樂にならむとする處にて、余は上京することゝなれり。

五

五六年間連印に苦みたることゝて、今後は何人にも連印せずと自から誓へり。友人の連印を乞ふものありたるが、連印は斷りて、金を出したること少なからざりき。然るに久しく流浪せし一友人、記者となつて遠國に赴かむとす。與へられたる旅費だけにては東京を引上ぐること能はず。余に連印を乞ふ。余には融通すべき金なし。さればとて、余が連印せざれば、友人は折角の出世を棒に振る也。如何はせむと考へしが、余は終に誓を破りたり。而して恩人の轍を踏むやうになれり。

利子加はりて、書換ふる毎に元金増し、債主も一人増したり。余一人の印なれば、恩人のやうに、他に迷惑を掛くることは無し。その代りに連印なければとて、月一割といふ高利也。見る〳〵元金倍となり、三倍となり、五六倍となりぬ。

執達吏又も襲來するなるべしと覺悟したるが、其點は安心也。學校を出でゝ十年になるも、唯書物が少し増したるだけにて、目ぼしき家具なく、相變らず家は徒に四壁のみ也。果せる哉、A債主よりの執達吏來れり。職業用の書物は差押へられずと安心し居りしに、安外にも差押へられたり。床の間には、

故人贈ニ佳肴一。可レ無ニ一杯酒一。問レ婦婦曰無。
問レ有レ錢曰有。提レ樽夜自行。深巷聞ニ吠狗一。
得レ酒心未レ足。近路呼ニ吟友一。展盤相和高。
月下雙影走。春來久不レ逢。借問有レ詩否。

といふ自作の五古一首を最低額の三十錢にて紙裝したる一幅を掛け置きたるに、執達吏は、一圓の價を付したり。執達吏去りて後、余細君を顧み、これが一圓の價あるならば、數日にして負債を返し盡すを得べしとて相笑へり。

余は直に一方のB債主にも、A債主より執達吏を廻したること

とを報ぜり。B債主は余の好意を喜べり。而して執達吏の付けたる金額を貸さむと言ひ出したり、競賣に付する代りに、Aの分受すべき金をBより借りて與へたり。Aは己の外にも債主ありて、差押へても得る金の少なきに失望したりしならむ。余は之に乗じて、又も外交官に例の義母を頼み、大に減價て貰ひてAへの負債を濟ましたり。Bには少しづゝ返したり。而して數年にして、これも減價て貰ひて、余は全く債鬼より解放せらるゝを得たりき。

後に差押へられたる折の事也。地方の一新聞記者余に書を寄せ、新聞社より解雇せられて大に窮す。三十圓だけ惠與せられずやと云ふ。面識もなき人なれば、返事も出さゞりしに、其人來り訪ふ。余の弊服に驚きしならむ。襖も破れ、障子も破れて目もあてられぬ家の有様に驚きしならむ。更に道具に封印の付き居るに驚きしならむ。手紙にて失禮なることを申したるが、あれは取消すと云ひ起し、今は木賃宿にあるが、錢盡きたり。靴を賣らむとす。下駄一足だけ惠まれずやと乞ふ。三十圓の請求が下つて下駄一足になるとは、餘り情なき請求也。余は心中に涙を催したるが、與ふべき金なし。之を賣り給へとて、相識れる古本店への紹介狀と共は、數冊の書物を與へたるが、其人は其後如何になりたりけむ。憐れなる有樣、今もなほ目睫の間に存する也。

貴方は損な性分なり。饅頭持ち居れば、他には餡を與へて、自分は皮を食ふといふ人なりと、親戚の一老女より、評せられたることあるが、性分は致し方なし。親の財産を受續がず、社會立ちてより十數年、踊る金に苦みしは、余をして浮世の人たらしむる天の配劑なりし也。

江戸の侠客

笹川臨風

金平本を喜んだり、助六劇を喝采したりした江戸人士が、幡隨院長兵衛や新門辰五郎やらと共鳴するのは當然である。是一つには、戰國の血腥い餘習と、一つには關東風氣との然らしめた所である。支那にても游俠の風は戰國時代から起つてゐる。

任客を養ふの風、義を見て難に赴くの風は、漢に入つても[illegible]朱、郭解の徒を出した。燕趙は慷慨悲歌の士多し、荊軻となり、高漸離となり、屠狗者となつたのは、自ら風氣の因縁淺からずと謂ふべしである。六代御前の爲に一狂言を打つた文覺上人も俠雄であつた、死なば諸共と、家臣の身を庇つて一命を惜まなかつた新田義貞も親分肌であつた。けれど、江戸時代に至るまで俠客と云ふ妙な商賣はなかつた。其の之れあるは、戰國の餘習と關東風氣とが馴致した以外に、社會制度の缺陷が之をして然らしめたのである。

大阪の兩役には關ヶ原戰後の浪人が關かつて力がある。大阪戰後に於ける浪人には、江戸幕府も之が掃蕩に相當の苦心を拂つてゐたが、浪人自らが爆發して、慶安承應の二事件となり、遂に自滅に歸した。

むかし戰國の餘習は浪人ならざる武士階級にも平民階級にも游俠自ら喜ぶ一種不逞の徒を作り出した。初は之を歌舞伎ものとも云ひ、六方者とも云つたが、後には男伊達の稱で通つた。名は男伊達で、游俠ではあつたが、實際は良民を苦める無賴の徒も少くはなかつたらしい。江戸時代で俠客の名の最も早く見えてゐるものゝ一に夢野市郎兵衛がある。市郎兵衛の事蹟は近世奇跡考が市郎兵衛と明石志賀之助とのことを古今俠客傳に依りて載せてゐるが「市郎兵衛は老後剃髪して、由州田村の邊に隱遁しけるが、見放駒の四郎兵衛、身まかりしと聞き、今は世に思ひ殘すこともなしとて、佛間に籠り居て食を絶ち、念佛のみ唱へて死しけるとなん」と其始末を記してゐる。此志賀之助の話も奇跡考と正反對の事實を擧げてゐる書もあるし、又徳川實記承應二年閏六月の條には「又此程市井を騒擾せし俠客夢野市郎兵衛死刑に處せらる」とありて、市郎兵衛の最後は老死ではないらしい。實際此等俠客の傳記は事實よりも講釋師の作話が適に美化して傳へてゐるものであるから後世其史實を調べることは談固より容易ならずである。

市郎兵衛は市井の俠であつたが、江戸時代の游俠は旗本御家人に依りて其端緒を開かれたと云ひ得るであらう。所謂旗本奴なるものである。鶺鴒組、大小神祇組、白柄組、又は吉屋組の徒が即ちそれである。明暦二年七月二十八日には「今日諸番頭を召して令せらるゝは頃日御家人の子弟等鶺鴒組と號し、市井を横行し、縦逸の擧動するよし聞ゆ、これは實に御家人のしはざにあるまじけれども、猶又斯る無賴の擧動なすべからざる旨」の達しがあつた。同じ年の九月十二日には、先日品川の酒樓を閙せし小十人組永塩七郎左衛門某斬に處せしめられ、同遊の俠客皆死刑に處せられた。同じ明暦の三年七月二十二日には、近

日職野伎者と稱する游俠、或は半なでつけ、下ひげし、草履取に絹布の領袖帶などせしめ、徘徊するよし聞ゆ、さる風俗なすまじき旨」の令があつた。

無頼放恣の旗本奴に對して、市井の游俠が起つて之と對抗したのが即ち町奴である。一を官僚式游俠とすれば、一は平民型游俠である。旗本奴は武家を看板にして、横暴到らざるなく、少からず良民を苦めたものである。町奴に至りては赤裸々なる游俠で、頼む所は自家の力であつた。此等の徒も良民を苦めたことは少々ではなかつたが、弱きを扶け强きを挫かんとする原則に從ひ平民の味方として、旗本奴とは屢々相執りて下らす、平民の爲に、盛に氣を吐いたものである。であるから、旗本奴と町奴との出入いきさつは随處に起つてゐる。其の最も大なるものが水野十郎左衛門と幡随院長兵衛との衝突である。

此兩者の衝突に就いて、德川實記は日記、御側日記等に依りて、明暦三年七月二十九日の條に、「此十八日、寄合水野十郎左衛門成之のもとに、俠客幡随長兵衛といへるもの來り、强ひて花街へ誘引せんとす、十郎左衛門、今日はさりがたき故障ありとて辭しければ、長兵衛大に怒り、そはをのれが勇に恐怖せられしならんとて、種々罵り、不禮を振舞ひしかば、十郎左衛門も怒りに堪えず討すてゝ、其よし町奉行のもとに告げしかば、奉行より老臣に訴へしに、長兵衛處士の事なれば其まゝたるべき旨老臣より令せられしとぞ」と記してゐるが、水野と長兵衛とのいきさつは、森田座に於ての喧嘩が近因であらう。大小神祇組の領袖として、水野が横暴を極めたことは、久しく町奴の反感を買つてゐた。水野も旗本の勢を負つて、眼中に町奴なるものがなく、四天王に擬した無頼の徒を集め、好んで悪戯をなし、長夜の宴を張り、異裝異風をなすことをのみつとめてゐた。其衝突に就いては、元正間記が之を詳にしてゐる。果して實際であるかどうかは、明かではないが、多分は斯うもあつたらうと思はれる。之に依れば、森田座の喧嘩が近因となり、長兵衛は水野の邸に欺き招かれて、座間に殺れたのである。(此ことは先年游俠傳著述の折に詳にしたから、今は一切之を省略する)德川實記に云ふ所の如きは、水野が表向きの届出に依つたものであらう。「長兵衛處士の事なれば其儘たるべし」とは、武士の特權たる切捨御免の惡法から出たもので、階級制度が生んだ缺陷である。町奴たるもの、固より此片手落の裁斷に服すべきものではない。遂に吉原土手の暗討となり、水野の徒に對して少からぬ報讐をなしたと傳へられてゐる。

水野十郎左衛門も積惡の報が到來して、寛文四年三月二十七日に切腹を仰せ付かつた。德川實記に「小普請水野十郎左衛門

成之、無頼の聞えあるにより、昨日評定所に召して、松平阿波守光降に預られんとせしに、被髪して袴も着せず、其様じも不敬なればとて、切腹せしめらる、其母弟は光降に預けらる」とある。彼が其最後に六方者らしい人嚇かしの辭世を讀んだのを見ても、其不逞さ加減が推知せられる。

我衣に、男伊達の風俗及振舞を說いて、「正保慶安の頃、江戸中に武家は不ㇾ及ㇾ申町人ともに劍術の類大に流行す、依りて男伊達といふことはつからせり、町人といへども武偏を立て、計切喧嘩處々にあり、此節大小の神祇組とて若手の御旗本町人といへども一口に組合何百人と云ふ事不知、又白柄組（吉屋組と云）風俗は髮を手一束に切たぶさを取れぬ用心し、冬紺縮緬白大細入一つ帶も白く三重に廻し、袖口白太く括り、丈は三理少し下へ下る程に短く、（鉛三匁づつくけこみ、つまをはねかへるをよしとす）長き大小を帶し、柄糸下緒何れも白し、衆道專らに流行る、其振舞人に伍くる事を死ともせず、或は菓子や酒や茶や等にても茶腹の節は入て食ㇾ之、持合なき時も今日は拂はぬぞと云ひ、商人不ㇾ苦候とて猶々慇懃にすればよし、若しあいしらひかねる時は六ケ敷言ひて身上も仕舞ふ程なり、慇懃にすれば、一齣を述べて立ち、重ねて五匁三匁の喰物たりとも此間の代物何程とこまかには云はずして慶長金出し或は一兩投げ出し、此頃過分なりと一禮はず、つりを上げんと云へば却て立腹す、又他人にても仲間にても被ㇾ賴、何分加勢奉ㇾ願と云たすらに賴へば、命を捨ても反故に不ㇾ致、只男道の強きを表にして、義を守り節を失はず、さしてあばれ歩行くにてもなし、無理なる事もせず、無心がましき事などは仲間の法度なり、少しにも人に弱き言葉を云ふを第一に嫌ふ組合なり、仲間入する時は傳手を求めて命限を出し仲間に入り、若し親兄弟の以ての外なる事とて勘當などする時は仲間にて樂々と養て少しも不自由をさせず、是れ則ち歷々夥分にて采配をする故なり、云々」と云へるは、其の善い方面を述べたので、反面には傍若無人の非行をも敢てしてゐた。けれど一諾千金より重く命を鴻毛の輕きに比した氣魄に至つては、所謂任俠の名を贏つた所以である。

彼等が武張つた事を好み其言葉にもなまぬるきを忌んだのは、如何にも其職業柄然るべきことではあるが、これも關東べいから轉訛したもので、土地風氣の影響である。用捨箱に六方詞を叙べて、昔奴と唱へしは、男達の事なり、故に當時は寬濶の字をやつこと訓す、或は六方者と云ふ、中は昔々物語にも出て、人の知る所なり、詞もなまぬるきを忌み、片言を好みて云ふ、かなしけないを、かたじけないと述べ、泪をなだとつたる類、嚴へ、も盡し嚇し、事だをとんだ、あまたくなそおつかける、

いはゆる山東べいなり、其様をかぶきに似せ、小袖のゆきいと短く、無反(むぞり)の刀鞘も長きを閂にさしてらし、手を振つて動ぎ出で、彼の六方詞、名のり詞なんどいふを、演べて、後狂言にかゝるが、すべて、當時の風なり」とあるのが、それである。寛文七年に出版された清十郎追善の奴俳諧の如きは、此徒の間に流行する言葉で俳諧を讀んだもので、一面に此等片言の流行を思はせるに足りる。

こゝかしこ地こぎの雪の消えやらず
　柳が陰は日もさゝぬつちや
池の面に照る夕月のひからめき
　秋の暮のそらつとべり
學文を身にとつちめてする頃は
　とち狂うてや遊ぶ新發意
太鼓をしのゝろに打つとうちぬめり
　ひやりこりこげに吹く神樂笛
祭りとてでこにきめける寶前に
　あちらこちらとするはどろぼう

の類である。「名月や來て見よかしの額際」と自讃した俠客深見十左衛門は身の丈低くあつたが、額を廣く拔き上げ、老年になりても、猶二尺四五寸の朱鞘の大脇差を帶してゐた。助六劇にて、「此鉢卷は過ぎし頃、ゆかりの筋の紫のすゑはなしの色に見えこ」と唄ふ紫の鉢卷は若衆歌舞伎の遺風であらうが、一つ印籠一つ前、ハツハ鮫鞘はいづれも男伊達の好みであつたらう。「遠くは八王子の炭燒賣炭の齒の缺け爺(おやぢ)より、近くは山谷の古遣手梅干婆に至るまで」と大見得を切つて、己が名を聞いて見ろ、「先づ第一瘧が落ちる」と自惚れ、「相手があれば龍に水」と喧嘩商賣を吹聽し、「鼎の中に屋形船を蹴込むぞ」と威嚇するに至りては男伊達なるものゝ啖呵を集大成したものと云つてよからう。

助六は髭の意休と三浦屋の揚卷を取合つたのである。上方種である萬屋助六の心中淨瑠璃も江戸に入ると達引の任俠淨瑠璃となり、半太夫節に、河東節に、愛護櫻だの、江戸櫻だの、其他多少詞曲を變じた諸種、助六淨瑠璃となり、結末は曾我五郎と云ふ江戸傳來の曾我物荒事劇に舉つてゐる。しかし此劇が吉原を背景としてゐるが如く、男達が幅を利かして入り浸つた天地は吉原と云ふ別乾坤であつた。白柄組が白い裝束を好み、白柄の刀を帶し、廓通ひをした華車な風俗は、遂に飾り白馬の上手通ひとなつた。「春の日の糸遊分けて柳手折るは誰れ／＼ぞ白き馬に召したる殿御よ」の小唄は白馬銀鞍の風流を想ばせる。「可職智惠出す分別は、ない／＼、ねつからない／＼、おんじやりまうさないよサ、とかく戀路は氣がもめる、「ことであるべけれ」諧

いて貰ろたが、それさへ出口へ置いて來た、義理も諸分も此通り、面目ないく、おんじやりまうさないよサ」の上手節も、此等の徒が吉原通ひに多く歌つたと云はれてゐる。

助六が意休を挫いた如く、後年大口屋曉雨が穢多頭久米八を挫いだ如く、町奴は廓内で横暴の徒を取鎭めたことも多かつたらうが、又此徒自らが亂暴狼籍をしたことも少くはない。吉原年中行事には深見十左衞門が「我等儀五丁町の内にて度々騒がせ、其上夜前は酒に食べ醉ひ、其方の内へ長右衞門と申すもの語らひ、脇差を抜き、臺所迄切込申候云々」と書いた寛文十三年四月十五日附の道安老人宛の詫證文を載せてゐる。此等の男伊達は、花の廓に於ける油蟲であつたに相違ない。

水野十郎左衞門と相並んだ旗本奴には、吉屋組の棟梁三浦小次郎がある。赤坂の祭禮の折、大あばれにあばれたのを紀伊大納言頼宣之を見て老中へ達しあり、其罪に依て父小左衞門に預けられ、後浪人となつた。吉屋組の相馬小次郎は酒の肴に煙草を食ふと云ふ變人、箕與三兵衞は肥桶をつけた馬にて吉原廓内を乘り廻りしたと云ふ徒らもの。平生頭から口まで夏冬なしに頭巾を被つた鬮屋孫之丞、鐵棒を突いて横行し、小坊主の頭に放尿して、よい小便壺ぢやと云つて通つた高木仁左衞門を初め、武士らしからぬ不逞の武士游俠は殆ど眼中國法も道德もなかつたのである。友田作取の大御番の山中源左衞門が正保年中に切腹を命ぜられた時に、「わんざくれふんぞるべいか今日ばかり、あすは烏がかツかじるべい」と、六方式辭世を殘したのは、水野の辭世と同じく、死生を超越して、世間を愚にした所に、彼等の無頼さが見える。町奴のうちで名あるものには、死人小左衞門がある、淺草鳥越橋にて旗本奴に組付かれたるに、小左衞門は脇差抜いて相手を刺さんとしたが、相手はしつかり組んで働かせない。えい面倒なと、小左衞門は我が腹を徹して相手の腹まで突き通し相果てた。放駒四郎兵衞は風呂屋の二階から下りんとする所を、はつたと切られ、首は前へぶらりと下る。四郎兵衞、其首を片手にて押へながら相手を切り殺して、自分は生き存らへた。唐犬を足にて蹴り殺したところから唐犬の異名を取つた權兵衞は、所謂唐犬組の首領であつたが、平生紅絹裏がんぎの裾べり取つた衣を着してゐた。丁度大小神祇組の頭柴山彌惣左衞門ががんき染の紅裏を常服としてゐたのと相對してゐる。此唐犬組には唐犬與兵衞、唐犬三左衞門等が居り、淺草の玄祖にはさる八兵衞、ざる源五兵衞、さる安衞門、さる友之助があつた。

此等の徒には隨分異名が多い。中には其根據の推知し難いやうな異名もある。ひたい次郎、おほら惣左衞門、かみなりお右

衞門、はすつぱ吉兵衞、達磨小左衞門、跡見ず五兵衞、遅まき十兵衞、あげ足二郎左衞門、はげの庄右衞門、こぶの長三、ぬぬつくり四郎兵衞、前髮傳三、糸びん庄右衞門、はだか八兵衞なんどに略ぼ命名の想像もつくが、くそつぼ五郎右衞門、首まげきれの彌兵衞、がつぽう利左衞門、一時清兵衞、度々の伊兵衞、そうけい太郎兵衞、くはとう長左衞門、おくわんか治兵衞、みかん庄兵衞、くちら伊兵衞、のびの片志喜三郎、かめんぼう平左衞門、そう〳〵小兵衞、あばの庄右衞門、とうざる五郎作、手この金兵衞、かんへばん喜兵衞、らつひ牛右衞門、くづら與左衞門、ゐがに伊兵衞の類は、一寸推測に苦むほど途轍もない渾名である。

江戸幕府も六方者の名に負ふ無法者を退治せんために承應年間には、夢野市郎兵衞の徒の處刑を行つたが、五代將軍綱吉の世には鋭意之を根絶することにつとめた。即ち貞享三年九月二十七日、奉行中山勘解由は配下を督勵して、大小神祇組等の徒二百餘人を縛し、其魁首十一人を斬つた。之で男伊達の名の下で市中を横行した無頼の徒は一時屏息したのである。

しかし到底此種のものを根絶するには到らなかつた。であるから任俠を賣物とする俠客なるものは、江戸時代を通じてあつた。多くは定業なしに賭博を以て其活計としてゐたのである。

尤も中には幕末に於ける新門辰五郎のやうな、博奕には一切手も觸れなかつたものもあるが、此等は全くの稀有の例と云つてよい。會津の小鐵の如き國事に奔走したもの、清水次郎長の如き多少海軍に貢獻したのもあるが、要するに之は時勢の然らしめた所で、游俠列傳中の異彩に過ぎぬ。

復讐が社會制度の缺陷を補うた如く、善い意味に於ける俠客は、又社會制度の缺陷を補うた點も少からずあつた。弱きを扶け強きを挫くと云ふ主義主張からして、横恣な徒に制裁を加へ、無告の民の爲に氣を吐いたことも少からずあつた。講談に狂言綺語に、聽くものの觀るものをして痛快を感じ快哉を叫ばしめるは此點に存する。然諾を重じ、義を見て命を授くると云ふ點は、丈夫兒の意氣洵に壯とすべきものあるが、多く子分を蓄へて虎視眈々たるのであるから、一面に任俠を行ふ代りに、一面には不良の行をも敢行してゐるし、多くは定業がないから、一種の游民として生存してゐたのである。其意氣其氣魄は甚だ尙ぶべきものあるが、任俠を賣物とする一種の職業を存して置く要はない。平民階級が武士階級に壓倒された場合には、平民の味方たるべき町奴も或は必要であつたらう。四民平等であり、平民階級の勢力が加はつた今日では何も斯る看板を掲げるものを必要とはしまい。まして親分子分と云ふ相互の觀念が薄くなり、

共關係が以前の如く親密でなからうとする今日では、俠客が立つて行くことすら餘程困難であらうと思はれる。もと〳〵戰國の餘習と關東の風氣とが生んだもので、社會制度の缺陷が成長させた變則の職業であるから、今日に於て次第に不振たらんとするのは、又已むを得ないことで、當然の勢であらう。

けれど任俠の氣風は、長へに存在してもらひたいものである。勢利の道が横行する世の中に、任俠の風は一道清爽の氣を吹き、塵濁々たる風俗を一洗するに足るものがある。江戸俠客の事蹟が事實以上に美化されて後人に喧傳するのも、此清凉の生氣が潑剌たるからである。我等は今に於て果して其殘骸から何物をば獲得しやうとするのであらうか。恐くそれは無益の勞に歸するであらう。寧ろ美化された游俠傳中から潑剌たる生氣を索めて、任俠の風を養ひ行く方が、遙に近道で、又得る所があらうと思ふのである。

郵便飛行決行の宙返飛行家

——水田……山縣……佐藤——

九路天風

事々に狐の如く顧慮し、鼠の如く躊躇した帝國飛行協會を鞭つて、兎も角も東京から大阪まで、三時間と十八分なる新記錄を造り得た、今回の郵便飛行の成功は、飛行國としての日本の將來に、一道の曙光を與えたものと言えやう。日本に民間飛行あつて十年、機體の活力と、技術の冴えとが本邦特殊の空中の難路に、調和ある大進展を示したこと今日の如きは珍らしい。此時に當り筆者は取り敢ず、これが實行の任に當りたる新らしき空界の三勇者に就て知れるところを敍し、次いで、今回の郵便飛行の成績に就て有りのまゝの批判を下して見やうと思ふ。

體(からだ)を眞逆にして、空中で蹈(ふみ)返りつゝ、把手(ハンドル)をシカツリ握り得る、所謂宙返り飛行家が、今日本に三人居る。水田嘉藤太、山縣豐太郎、佐藤章(要藏改)の三人である。佛國飛行團フォール大佐の一行が、追濱の海軍飛行場を見物に行つた時、歐米の飛行家中でも至難とする浮槽(フロート)と言ふ大きな下駄を穿いた水上

飛行機の宙返りを見事にやつてのけて、一行を驚かした海軍の桑原中尉や、陸軍の各務原組の日本最初の高等飛行術練習の一團を別として、現時の日本の民間飛行家中では宙返飛行家としては先づ此三人を推さねばならぬ。今度の郵便飛行に、この三人の名が、期せずして並んで見えるのも、時勢が自然的にこの三人の腕力と技術を、國家の生ける眞文明の爲めに網羅したやうにも思はれてならぬ。

佐藤章君

佐藤君は秋田の産、君の嚴君は驛長をして居り、令兄は陸軍中尉であつた思ふ。殆んど自分でも計り知るに苦しむ飛行度胸と、佐藤君の飛行技術が釣り合はない間は、佐藤君は能く飛行機を壞した。此點は北米の大飛行家ビーチーに似てゐる。また日本の飛行家では死んだ秋田常三郎に似てゐる。此特異の天才は思つたことは何人でも云ふその直情徑行の性格に累せられて、從來常に不遇であつた。彼が四年前飛行協會の練習生に採用せらるゝ迄、既に業に彼は關西で、飛行技術を學ばんとして某飛行家の爲めに散々苦勞をしたことは別としても、飛行協會へ入つてからでも彼は常に不遇であつた。曾て飛行協會が主催した關東關西の長距離飛行に於て、彼と同期生の後藤正雄は當時のファーマン形の調節仕立の御初穗を夫見定めの附いた、調へ向きの好天氣に比較的樂に東京大阪間の飛行に成功し、大阪市では歡迎を受け、朝日新聞からは賞金を受けると言ふ風であつたのに、佐藤はその後の最も飛び惡い冴へない四國山野の生地飛行から危險なる備後灘橫斷飛行をせられて、四國から岡山に飛び、岡山からは密雲四塞の雨の日を衝いて、岡山から、大阪、大阪から豐橋、豐橋から所澤と一氣に飛び歸つた、苦心と度胸、手腕とが餘りに世に認められなかつたのである。彼が今も尚ほその時の紀念に保存してゐる機械油と手垢に汚れたその時用ひた航空地圖をこの筆者に示しつゝ語るところを聞くに、その時最も難所であつた函根山の如きは山の頂きと雨雲との間が約百米突よりなかつたとの事である。

佐藤は僅かにこの雲と山顛との危うき間隙を縫ふて危き飛行を續け、陸地は谷々雲が低いので相模灘に出た處が、橫濱方面一帶に灰色の雲で所澤の方向を見定むるに餘程困つたとのことである。所澤では誰でもこんな天候ではとても駄目だと思つてゐた時、彼はもう所澤飛行場に着いてしまつたのである。今度の郵便飛行參加の飛行機に比較して、在らゆる點に於て前世の感がある古るい弱馬力の憐れなる機に乘つて、岡山から所澤ま

で、惡天候を突破した彼の飛行度胸には、所謂の專門家連も內心舌を卷いたのであつたが、彼の飛行家としての聲譽は比較的現れずに濟んだ。佐藤は上州尾島飛行場で今水田と同僚である。尾島の飛行場で彼は一年間に二度の大怪我をした。

前の時は足を折り、睾を打ち、眼を摧き、腦を打つた。が彼は總ての手術間頗る元氣に談笑して、一ケ月半後には再びハンドルを執つて立つに至つた。けれども彼の右の眼は傷が癒つてから形が少し變るに至つた。彼は却つて男振りが上つたと笑つてゐる。佐藤は不運なる飛行家である。次ぎの怪我の時は佐藤は教授として、周防練習生を乘せて尾島飛行場で飛んだ時である。強馬力機の重量を、その強馬力が持ち來す速力の風壓で支持する場合、その強馬力機關に故障が起つて、風壓が去る場合輕るい弱馬力機のやうに空中滑走の安全着陸をやることが容易でない。機の頭部に重い機關を積んでゐる新式強馬力機が、空中で故障の場合頭部が下がつて眞つ逆さに墜落することが多いのも止むなき譯である。

佐藤の第二の怪我は、空中で急に機關の故障で機の頭部が逆になり、これを回復するに餘りに低空であつたから起つた眞我である。高空なら何んとか仕樣もあらうが、こんな低くては機の直逆墮落より外仕樣がないことを刹那に悟つた彼は、座席(シート)から兩足を前面の機の胴體上に投げ出して、少しく腰をかゞめて兩足を以て自己の頭部の衝突を保護した。機は恐ろしい勢で地上に衝突した。佐藤は投げ出した兩足を打ち折られたのみで助かつた。が同乘してゐた周防練習生は足の代りに頭を激打して即死した。佐藤の今度の怪我は足のみだから案外早く癒つた。佐藤は死を實驗化したる飛行家である。佐藤の宙返りは彼のこの第一の不幸と第二の不幸との間に成就した。第一の怪我と第二の怪我との間の三ケ月間に、彼は常用のホールスカルト百二十五馬力で立派に宙返飛行をやり得るに至つた。

、佐藤は第二回の負傷をする迄尾島町及太田町(上州)の上空で日に何度も宙返飛行を繰返したは隱れなき事實である。この宙返りを上野か洲崎の上空でやつたならば帝都の全新聞紙は、その翌日必らず名飛行家の名を彼に授けたのであらう。佐藤は今迄不運なる飛行家であつた。佐藤は自己の技術を最も少く世人に知らるゝ不運なる飛行家であつた。佐藤は日常に何等かの不平を絕たない飛行家だ。眞率なる彼の不平は多くは嘆ずべき不平である。空中の一擧一動時に新聞紙の大活字となる宙返り飛行家たるものは、大いに自重しなければいけないと或る人が話

ふと、彼は無邪氣に笑みつゝ『僕の不平は僕の生命だ。死なゝければならぬ』と言つた。

水田陸軍中尉

水田は變り物多いので名高い所澤の第三期生中で最も變つた一人である。如何なる場合でも屈託しない水田の飄逸と、洒脱とは、規律と嚴格の特殊空氣を以て滿はるる軍隊内に常に不可解なる異彩であつた。彼は有ゆる者を茶化して通した。部下を茶化し、同僚を茶化し、空中を茶化し、飛行機を茶化し、生死を茶化し、時に敬意を表しつゝ上官をも、矢つ張り茶化した彼は許されざるに、所澤の馬鹿鳥と異名せらるゝ舊式フアーマンで横轉飛行をヤツてしまつて烈(ひど)く叱かられたこともある。彼のその茶化し方には、些の惛氣なく、嫌味なく、寧ろ作らざる愛嬌があつた。當時の上官たりし德川大尉(今の少佐)を生意氣だと言つて、胸倉を取つてコヅキ廻し殿樣に應せられた噴火口的元氣者岡中尉(今の大尉)と彼とは當時の所澤の變り者の一對であつた。

彼は曾て軍服儼めしく一飛行機の前に立つた。彼と飛行機の前には、一團の愛らしい幼年學生が整列してゐた。上官は彼に飛行機の實物に就ての説明を命じた。『皆さんヒコーキは御好きですか、家へ歸つてお父さんに賴つてお買いなさい……』彼の説明は初めから斯く脱線した。幼年生の全體には無聲の動搖を以て喜んだ『……たゞ少し高いですぞ。一つ壹萬二千圓、能く覺えて御歸りなさい』これが彼の二ノ句であつた。幼年生の總ては眼を圓くした。説明を命じた上官は覺えず笑つた。この筆者自身もその時貰ひ笑ひした一人である。

水田は幸運なる飛行家である。現在水田の在るところ、影身のやうに伴れ添ふ美なる優しき姿は、水田のこの飄逸と、洒脱とに生命までもと打ち込むだ人である。この美なる影は妻は、今春開かれた刀根河畔尾島新飛行場で、夫妻連座の同乘飛行を幾度びか決死的に操り返してゐる。曾ては『Did you win the [illegible]』とは歐米社交婦人間の好き外見語(みえことば)であつたが、今は陳腐になつてしまつた。がしかし日本ではまだなか〳〵である。今水田は、日本で夫妻同乘飛行の伎倆と、場合を、擅にし得る人となり得てゐる。新らしき夫婦に剛する人と言へやうではないか。

陸軍を出で民間に入り、水田が初めて乘つた飛行機はホールスカット百五十馬力の複葉であつた。大戰の末尾飛行機エンヂンの民間輸入は禁ぜられてゐた際、百五十馬力と言へば、

力の點に於て、日本の民間には他に類のなきものであつた。昨年から新らしく開かれた茫々たる大陸的新飛行場たる大刀根河畔の尾島飛行場で、彼はこの百五十馬力で少くも五百回以上の練習飛行を、心行くばかり行ふことが出來たのである。或る時は彼は赤城連山脈の上空を四時間に亘りて飛んだ。それは本年眞夏八月中旬のことであつた。連山脈の動かざる大波濤の物凄き綿亘を、眼下に見て進み行きし彼は、眼下に異樣な靈界の光を認めて慄然として慄かざるを得なかつた。

凝視すれば一大山巓の舊噴火口に、噴火以來幾千年溜りて動かざる深碧の死水の色に、折しも洩るゝ雲間の日光が映發するのであつた。彼は刹那に彼の上州太田町の偶居にて曾て聞きし傳說、數十年前今の上州出身の貴族院議員赤堀千代吉の祖先の娘が赤城連山中の一峻嶽黒桧山の山巓にある太古より傳說多き火山湖に、不思議にも幾度び連れ戻るも殆んど無意識に登り行きて遂に歸らずなり、その湖の主となりたりと言ふ傳說を、今矢の如く進みつつある空中に想ひ出して言はれざる壯美の感に打れたと平常の笑顏を引き締め、筆者に直話したことがあるほど彼の機の翼は上毛一帶の空中に隈なく觸れてゐるのである。

本年四月廿五日の尾島飛行場の開場日までには、彼は步一步的確に合格の高級飛行術の無言の練磨約半年に及んでゐた。群馬、崎玉兩縣知事を初め官民五萬餘の頭上、約八百米突の碧空で、十五回ブッ通しの正面宙返りをやつた（四月廿五日）ことも、當時の中央各新聞に報道せられた通りである。彼が今回大阪での七回の宙返りも大阪市民には新らしき刺激であつたらうが、彼に取りては尋常茶飯事である。日本に飛行あつて十年、その間凡そ飛行家と名の附くもの、一齊の希望は、良き飛行機と良き飛行場と、良き練習とを得ることであつた。而してこの三つの希望を充分に達し得た民間飛行家は、この十年間一人も無いと言つて宜い。水田は良き機を得た。良き飛行場を得た。而して充分なる練習の機會を得た。その上に彼は美なる姿の人を得た。水田は此點に於て幸運なる飛行家であると言へやう。

前記十五回連續宙返り成功の後、水田は宙返りから來る生理的の結果たる充血した眼に、何時もの笑みを見せて飛行場に降り立つた。宙返りの爲めに自ら作れる怖ろしい風壓の刺激の爲めに、彼の赤味を帶びた顏は色褪せて見えた。宙返り十五回中十二回まではアップライト・ループ（正面宙返り）であつたが、

最後の二回は曾て北米女流飛行家スチンソンが能くやつたやうに、機の直立の絕頂に於て、方向が崩れたことを、彼に語つたところが、彼は相變らずニコニコしながら『十四回目からは少し氣を緩めたからだ』と彼は言つた。今度は彼は敗軍の將である。けれども彼の將來は恐るべく驚くべきものを藏することを忘れたくないのである。

山縣豐太郎君

行く先きで飛行家か、役者のやうに浮ついた持て方をした時代は去つた。辛酷なる練磨と、精刻なる研究と、これを爲さしむるに適する財力とが備らなければ、飛行家は世間に顏が出せない時代となつた。今度郵便飛行に打つて出た水田、山縣、及佐藤の三者はこの意味の體現者と言つて良いと思ふ。たゞ水田と相互んで何んと言つても日本が今僅かに有する宙返り飛行家中での花形たる山縣は、水田と比して兩極端のコントラストを爲してゐるのは頗る興味ある問題である。殊にその經歷に於て、性格に於てその然るを見るのである。水田は豫備になつて歸省中、井上航空本部長の紹介で、「毛島の新飛行場に天下つた飛行家である。山縣は一自働車商の内弟子から身を起して、難戰鬪遂に日本飛行界の水平線上にニジリ上つた飛行家である。

水田は飄逸奇警如何なる場合でも屈託しない徹底した才人である。山縣は決意、實行、突進、口より先きに手の出る青年飛行家だ。水田はガソリンの價段を知らぬ飛行家だ。知るを要さざる飛行家だ。山縣はガソリンの武力罐を肩に擔いで、飛行場まで幾度びか驅け附けた事のある飛行家だ。水田は陸軍中尉である。徹頭徹尾軍隊の空氣中から生れた飛行家だ。山縣は今春上野の上空で帝都最初の日本人宙返りのレコードを破つて、初めて世間に名を知られたが、實は可なり古るい飛行界の苦勞人である。

山縣は所謂刻苦力鬪の self made aviator だ。過去數年間恰潮の退くが如く凋落し行きし、隨分ヒドイ民間飛行界の、あらゆる不遇と、慘苦と、危險とを、具さに味ひ盡して、遂に現在の最も苦き民間飛行界に於て、押しも押されもせぬ宙返り飛行家たるの位置を克ち得た彼の飛行家としての歷史は、過去數年虛名の獲得に、飛行事業の名を濫用せる、一夜作りの多數の飛行屋亂與中に在りて、確しかに異彩あるものと言つて良いと思ふ。

普通の民間飛行が、もう別に珍らしくもなくなつて、普通飛行會の擧行と言ふことが、その擧行せらるゝ片田舍の地方以外に中央の諸新聞には報道せられないやうになつた最近

山縣は自己の多くの先輩の援助關係裡に、血の出るやうな飛行を、日本全國の驚くべき邊鄙な場所までにも擧行しつゝあつたのである。彼は斯くして自活しつゝ、研究しつゝ、練磨しつゝ遂に花の上野の天空で、宙返りを擧行して必らず失敗せぬと云ふ確信を彼の双腕に確しかに覺え得るまで、絕望せず焦慮せず進み來たのである。

山縣は現在日本の民間飛行に於て避くべからざる一切の不設備、不便利、不完全に打克つて今日に至つた堅忍力鬪の飛行家と云ひ得と思ふ。帝國飛行協會は長岡白將將軍と、五十萬の恩賜金とを得て、不思議にも或る變態を現はし初めた。恩賜金の光輝を現はすことの代りに、協會の行動は遺憾ながら益々愚劣見當違ひ、不熱誠の度を加へ初めたやうに見える、陸海軍と上州太田の陸軍御用工場とを別として、日本に一臺の强馬力飛行機用機關の存在せざること明白なる四ケ月前、絕對に强馬力エンヂンの精良機を必要とする日本最初の日本飛行郵便競戲開催を帝國飛行協會は平氣で發表した。

しかもその開催期日迄に約三ケ月の短期間より與へなかつた。日本には發動機(エンジン)がないのだから、大急ぎで北米へ行てエンチンを賠つて來るとしても、本年の郵便の都合 かゝ しまう。かと言ふて日本には適當品はない。かと言つて當本現在の民間に在る飛行機ではとても間に合はぬことは天から解つてゐる。第三回民間飛行大會を滿天下に發表した後、御流れにし、昨秋擧行の筈なりし懸賞飛行會をも御流にし、飛行機用發火器製作懸賞計畫を有耶無耶にして平氣なる帝國飛行協會は、今回の郵便飛行計畫發表も、實は御流れ希望の發表かも知れぬと日本の民間飛行界は何人も手を出し兼ねたのである。殊にその擧行期日が九月中旬(二百二十日)から十月へかけての暴天時季と聞いて、多くの飛行家は驚たのである。

帝國飛行協會のイツもながらの杜撰なる計畫に對して山縣は無言で應じた。昨年北米飛行家パタソンが秘密に日本に殘し行きし使ひ古るしのゴルハム百二十五馬力を、辛くも得て、堂々と今回發表の郵便飛行に打つて出た山縣及山縣後援者の慘憺たる努力と縱橫の苦しい心とは、容易ではなかつたらしと思ふ。山縣が若し應じなかつたならば佐藤と水田が同僚で競技にはならないからこの郵便飛行は前例通り御流れになるより途はなかつたのである。要するに宙返りなる空航術上の度胸試驗に合格してゐるもの今日本に三人なることと、その三人が今回の郵便飛

行の選手であつたことはこれで分つたらうと思ふ。さて、それではこの三人の宙返飛行家は果して誰れが作つたかと言ふことをこゝに說明しておきたい。水田と佐藤の宙返飛行家とのして親は中島(知久平)機關大尉である。山縣を斯く仕立上げたのは伊藤音次郎其人である。中島大尉が海軍唯一の長浦の飛行機工場の出來初まりからの工場長として日本飛行機製作界の權威であるのは世間周知の事實、伊藤は大阪天王寺の或る社會の親方の子で十九の年に所澤の飛行工場に職工になつて住み込んで以來、純民間より生え拔いて今日に至つたのも隱ない事實、たゞ共に飛行機では苦勞を仕盡した Pilot & constructer 飛行家を兼ねる製作家たるは一つである。前者は群馬縣新田郡太田町に工場を刀根河畔の尾崎町に飛行場を有し、後者は千葉縣津田沼町に工場と飛行場を有してゐる。前者は既に陸軍の指定工場たる點に於て後者に優り、後者は乃木式質素生活を堅持して、純民間飛行界の中堅を爲さんとすることに於て特色を現はしてゐる。兩者共に精悍にして短軀、精刻なる注意力に活きてゐる、研究者を兼ねる實行家たる點に於て殆んど一致してゐる。

郵便飛行の成績

今度の郵便飛行で水田中尉の失敗は最も惜むべきである。搭乘機は參加飛行機中最優秀の二百馬力で、操縦者の腕は宙返飛行家としてもう些の危な氣がないのであるとすると、水田中尉の大阪を通り越して和歌山着陸の失敗は、その主因は大阪方面の地理(殊に航空的地理)に充分明るくなかつたのに因りはしまいか、佐藤君は去年岡山から所澤までの飛行で、大阪から此方生駒山の屛の形を火の出るやうな注意の眼で睨み詰めつゝ突破したことのある人である。山縣も大阪方面の空中には充分に觸れてゐる。水田中尉が尾島の飛行場附近を幾百回飛んで、群馬一帶の山また山、殊に日光、赤城連山の上空に精通してゐるこの智識の十分一を、京阪の山野に有してゐたならば、今度のやうな力で勝つて、角力で負けたと言ふやうな失敗は無かつたかも知れぬと思ふ。

水田中尉は生駒山の東方で、八百米突の高度を取つたと言ふ。何故彼は二千乃至二千五百米突の高度を以て生駒山の背を越えて攝、河、泉の平野を見下さなかつたであらう。たとへ一面の低雲が斷續低迷して居たにしろ、大阪市の上空の雲は、一種黑ずんだ特別の色を爲してゐることが通例であつて、一見して無數の煙突より吐き出す煤煙の大工業市街たる大阪市の所在を、その黑味を帶びた雲煙下に察知することが出來るのであるが、

水田中尉はこの大阪の空中の特徴を見なかつたであらうか。假令また雲が厚く深くして、これらの特徴が見えぬにしても、三千米突の上空から見れば現れ得たる山川の地形は大阪の位置を綜合察知し得易かつたらうと思ふ。これを見るには彼の機の位置が餘りに低くかつたのでなからうか、筆者は水田中尉をして今度の郵便飛行前一度大阪方面で準備飛行をさせて置きたかつたやうな氣がしてならぬ。しかし今日本で最強力の百哩機で葛城山上で迷路に入り、僅かに發見した紀の川に沿ふて、着陸地點を、殆んど盡きんとするガソリン缺乏を物ともせずに、發見に苦心した時の彼の胸中は苦しかつたらうと思ふ。

殊に空中滑走が最も仕悪い、一噸以上の強馬力機で、何等着陸準備のない、多くは石と砂との堆積たる河の河原に着陸して機も人も無事なるを得たに就ては、準備が最も親切に且つ完全に整備してゐた旦々たる大阪城東練兵所に着陸した佐藤、山縣の二氏よりも、水田君の馴れ切つた決死の苦心には察してやるべき點もあらうと思ふ。次に一番後から出て第一着の光榮を握ふた佐藤君は何人と言つても今回の郵便飛行の殊勲者たる榮稱を彼に授くることに何人も異論はなからうと思ふ。常に滿腹の不平に生きてゐる佐藤君も、不思議にも不遇續きの佐藤君も今度と言ふ今度は萬斛の留飲一時に下つたことと思ふ。十年の積氣一度に消えたことと思ふ。尾島の飛行場で、一年に二度の大怪我をして癒つたばかりの佐藤君は、その磊平たる性格、その危險を味はいたさに狂せんばかり熱氣は、遂に押ゆること能はず。遲蒔きながら彼の親分たる中島大尉に駄々をコネて、今度の郵便飛行競技に控え飛行家から實行者に割り込んだ彼は、彼一流の一路直進力を、思ひのまゝに發揮し去りて速度に於て日本のレコードを作り、郵便飛行の堂々たる先驅者となつてしまつた。佐藤君の不調なる境遇がこれまで與へた幾多の無理なる危險飛行は彼に偉大なるものを與えた。彼はこれらの無理なる飛行に於て、特殊の山嶽國にしてまた、海國たるこの日本の海が生む濃霧、山より湧く雲霧の變化より來る危險を瞬時の決意に突破し、且つ回避するに就て人の知らぬ直感力をも得たのである。これらの直感力が優つて彼の直進力に調和された場合彼は空中で安全である。が直進力が總てを無視する場合筆者は此得難き飛行家の空中の生命の上に、慄然たる懼きを感ずるのである。飛行界に於て佐藤君の父たる中島機關大尉は佐藤君の此直感力と直進力とを調和し成長せしむるに耐ふると思ふ。彼の如き飛行家の直進力と直感力とが充分に成長を遂げたる場合、彼れが太平洋横斷飛行の前途を賀ふ者ぞ。と筆者は首

ひたい。

山縣君に至りては今度の郵便飛行中最善の努力を最も多量に拂つた飛行家たるは無論の事である。と同時に機の弱點を補ふに技倆と膽力とを以てせし點に於て最も秀てゐる。空中に於て機の二十馬力の優秀は時に百萬の味方である。殊に天候の險惡の場合に於てその然るを見るのである。山縣君の機は水田中尉のそれに七十五馬力少く、佐藤君のそれに二十五馬力の弱少である。彼は足弱の駑馬に鞭つてたしかに駿馬に伍したのである。駿馬の一ツが埒外に逸せし間に、彼は難なく決勝のゴールに入り得たのである。「彼の時に精製の護謨の如く彈力あり、また時に百練の鋼の如く堅確なる膽力より湧き出でし油汗は、恐らくはその時彼の前額に紫色となつて滲み出たであらう。ゲエテの書いたこの一句は山縣君が箱根を深く密雲を三千米突以上突破するに機力の不足を憾みつゝ天城山脈上に低迷して、辛くも靜岡に向ひ、更らに强風に煽られて、止むなく引返さんかと幾度びか思つたと言ふ。その刹那の彼の惱苦を言ひ現し得てゐるやうに思ふ。筆者は日本國民と共にこの青年飛行家の大なる未來を囑望するものである。

自己の腕に安心し、自己の機に信頼し、飛行機に乘ることと、愛馬に乘ると變らざるに至つて、初めて飛行家は空を航き得るのである。飛行は特異なる技術問題であると等しく、また微妙なる心理問題である。大責任ある生地飛行に於て、往路が無事であつたと言ふ飛行家の經驗と、安心とは、法として、歸路を樂にし、その成績をより優秀にするのも當然の譯とも言へやう。山縣君が歸路に於て五十一分の時間を節し得たのは、その往路に於ける飛行に於てそれ丈けの時間を餘計に苦しんだことを明かに説明すると同時に、この東京大阪間の航空路が、山縣君に熟路になつた曉は、山縣君は氏の現在のゴルハム百二十五馬力を以てするも、約三時間半を以て往復し得ることとも豫想し得らるるのである。山縣君が往路に四時間と四十六分、歸路に三時間と五十五分即ち五十一分を早め得たに比し、佐藤君は往路に於て、三時間四十分歸路に於て、三時間十八分、即ち二十二分節約を得てゐる。

佐藤君も東京、大阪往復に（各種の天候を通じて）充分に慣れて來たならば現在の力の機を以てして、三四時間で樂に達し得やうかと思はれる。佐藤君の歸路節約時間の山縣君より少なかつたのは、それ丈け佐藤君の百五十馬力が、雲と風とに勝さ

れ方か少かつたことを説明すると同時に機にシツクリと打ち組んだ佐藤君の大膽なる技術より克ち得たる結果らしくも思はれる。殊に水田中尉の二百馬力機が東京、大阪間の航空路に充分に馴れて來た場合には必らずその到達時間を三時間以内に切り詰めらるゝの時機が來ることを豫想し得るのである。水田君は和歌山から大阪へ飛んで、空中で旺んに暴れてゐる。帝國飛行協會の宣言御流れが、常習でないならば、次ぎに來る東京大阪間無着陸往復飛行に於て、この最强馬力機を擁する新しき宙返飛行家水田中尉はドンな飛行振りを見せるだらう。

次號說苑欄豫告

「未決囚」　山中峯太郎

箱根情話　村松梢風

題未定　田中貢太郎

銀座街頭のトルストイ　井箆節三

等掲載せらるべし

俺の見た日本人

大泉黒石

序

華族の次に士族があり、士族の下に平民があり、平民の腐つたのが新平民であり、新平民に尻の毛が三本不足して此處に毛唐があると書いてあつた。何だか、獺見たいな定義だ。正直な人が見ると、俺は成る程毛唐に見えるだらう。俺に面と向つて、「先生と云ふ奴が、蔭で毛唐々々と言ひ變へてゐるぜ」と報告する者があつた。毛唐でも山賊でも、用は辨ずるから構はないが、せめて何とか、うつりのいゝやうに陰でも敬意を拂つて見せろ。

俺は昔から今日まで、特殊な待遇にあづかつて來た。三河島の特殊部落を彷徨してゐる時分に、或金滿家の伜にある大官の娘が嫁に來て、あとで、其家が穢多だと解つて、もめてゐたのを見たが、同じやうな目に逢つたことがあるから、何だかその時は花婿が可哀さうに思へた。論より證據、黒砂糖をコーヒーだと云つて湯に溶いて呑ませた俺の細君にした女で、たまに亂暴を働くと、「あなは人種が異つてゐるから、そんなことをするんです。お隣りの夫婦を御覧なさい」と云ふ。「あなたのやうなお方でも兵隊に取りましたかね。」以前は、どうして、どうして、迚も徴りませんでしたと言ふ積りの客が俺を尋ねて來る。「あなたのやうなお方」は俺に取つて少々過分だ。さつくばらんに「手前見たいな野郎」で俺は喜んでゐる。

俺は先達て、俺の日本系の親戚全部と絶交した。ハガキに、旨を含めて送つたんだ。俺もお前の家へ出掛けないから、お前も俺の家へ斷じて來るなと書いてやつたやうに覺えてゐる。面を合せる度に、俺を馬鹿にするから、癪に障つたんだ。露西亞服を着て、みすぼらしい姿で、出入して貰つちや、近所の手前見つともないと言つたこともあつた。せめて車でゝも來いと吐したこともあつた。俺が貧つてゐるのを、みんな知つてゐて、この間親類合議の上で、俺の細君へ、洗ひ晒しの木綿の袷せを小包で送つて寄越したから、國交斷絶を宣言したんだ。親類にさへ、俺はこの位馬鹿にされてゐる。中學時代に、靴が買へないで、洋服に足駄で出掛けたら、教師が俺を教員室に呼びつけて[illegible]

んな眞似をするから、お前は世間から異人種だと言はれるんだ。氣をつけろ」と怒鳴つた。或る時、高等學校の教師と生徒と一緒に筑後川へ旅行した。その時、土人が筏の上で、襤褸をしてゐた。後から教師が俺に向つて「河の上で素つ裸になつて寝そべつてゐたのは、君ぢやなかつたかね」と眞面目に言つた。半分輕蔑して半分感服したんだらう。いくら毛色が異つてゐたつて、裸で筑後川に寝られるものか。

處が、中には、俺が紳士扱いにされることがある。少なくとも、親爺の國を紳士扱ひにする人がある。これも中學に通つてゐる時だ。俺のズボンの前の處が綻びてゐた。蹲む度に、中から白い褌が見えたさうだ。ある教師が慧眼にも、そこだけ見つけて、「君のやうな紳士國の人に、そんな不作法な手本を見せて貰つちや困る」と言つた。親父の國を紳士國に奉つて戴くのは勿體ないと思つて、有難うございますと答へて置いた。

その紳士國にゐるとき、一ケ月顔を洗はないで、半年湯に行かないで、長い間褌をしなかつたことがあるから赤面する。紳士にされたり、野蠻人にされたり、俺の立場も樂ぢやない。

そう云ふ譯で、いゝ着物を着ても粗末な着物を着ても、非常に哀れに見えるさうだ。小さい家に餘儀なく納まつてゐると、「これまで、大きな國にゐらつしやつたから、こちらへお出なになるとせめて家だけでも小さい處へお居住ひになるんでせう」と云ふ。「左樣ですとも」と一應返事はするけれども、日本人の緜に愛嬌のない皮肉だけは、いつも先廻りして、他人の分まで背つてのけるのには、毎度痛み入る。

* * * * *

日本人は狡いと思つた最初の印象はこうだ。近所の子が俺の家へ遊びに來ると、ビスケットをやつた。與れる役が俺の祖母だ。「俺の自叙傳」に出て來る三公や留太郎などが、ごた〳〵と集つて、がつ〳〵食つた。

食つてゐるうちは、遊んでゐる形をしてゐるが、食つてしまふと、「失くなつたから俺つちはけえる」と云ふ。俺は狼狽して、「コムドが歸るから、もつとビスケットをやつてくれ」とねだつた。俺はコドモと云へなくつて、コムドと云つたんだ。祖母はあの通の馬鹿と來てゐるから、すぐ出してやる。それがなくなると、[illegible]ゑるく、また俺を脅かした。

その年頃から、子供だてらに、物をせしめる旨い手管を呑み込んでゐたんだ。

子供からして、[illegible]から、その時にすつ[illegible]、如才なく徹底してゐた。

近頃の新聞記者だと、俺の前だけ、あなたとか君とか、擽つたいお世辭を列べて、俺を喜こばせて置いて、いざ新聞種の埋草を作る段になると、猛烈に、頭から、混血青年が、どうしたから、かうだと、侮蔑と輕蔑とを一緒に埋めて書くんだから、俺の方でも、恐れ入つて憤慨するんだ。

處が、先刻云つた三公や留太郎の親共は、そんな處世術の天才でなくつて、たゞ、正直一方に正直で、狡すい一方に狡すくつて、横着一方に横着だつたから、自分等の子が、たまに俺が外へ飛び出た面を眺めて、前後左右から、縱横無盡に「異人の子やあい」と囃し立てゝ手を叩いたとき、俺が口惜しくつて泣いて歸つて、俺の祖母が盲目の癖に、庭箒を逆樣に提げて、彼等をなぎ倒しに出掛けると、あべこべに逆ねぢを食はせて、「俺つちの餓鬼を箒でよくも掃き倒した」損害賠償に、結局またビスケツトで示談にしたもんだ。

その時分は、今のやうな貧乏世帶を張つてゐないで、素張らしい五月幟や武者人形を、借金してゞも、立てゝるだけは立てゝゐたんだから、米屋の支拂ひは差し置いても、ビスケツト位は、ふんだんに買つてゐたらうと思ふ。今日大びらに箒で毆られてビスケツト稼ぎの工夫する魂膽を、露西亞が舞臺ならスラブ魂の神髓とか何とか云ふんだらう。

恨みもない俺を前に廻して、「お前の惡口を書くぞ」と正面から怒鳴り込んだ奴があつた時、金がなくて、學問がなくて、その代りに地位もない俺を脅かしに來るやうな奴には、惡口を叩かれる覺えはないし、叩かれても、ビスケツトなんかやるもんかと思つて「何卒御隨意に」と云つたのは、ついこの間のことだ。暇があつたら、馬鹿にするなと今度は俺の方から毆りに行きたい位だ。

俺を生え拔けの西洋人だと思ふから、酷めたくなるんだ。大和魂が半分位あつて、講談だらうが、落語だらうが、浪花節だらうが、聞けば隨所隨時感嘆が出來る程の作懷があつて、人力車にも乘つたことのある輜重輸卒だ。糞でも喰へ。

俺が子を背負ふて銀座街頭をさまよふてゐる時分に、ある官吏の知人の家へ、仕事を世話してくれと、長い膝を屈して行つたら、「君は日本人ぢやないから、迚も官省や會社で雇つて吳れまい」とすげない返事をせめてもの土産に態々玄關まで送つて吳れた。明日にでも今の夜稼ぎが出來なくなつて、食ひつぱぐれて、賴みに行かうものなら、屹度先年の情ない挨拶を繰り返へすだらう。官僚の口から見ると、俺は、これ位の非人なんださうだ。官僚は下らないと心得てゐても、かう云はれると、流石の俺も喧嘩腰になりたくなる。

新聞には、米國が、日本人の移住を喜ばぬとあるが、あつちの方ぢや、此方の方が、尻の毛に三本不足があると教科書に書くんだらう。お互様だ。然し露西亞人として排斥されて來た俺の親爺の國は、靜のゐだから、いつも日本人を優待してゐるのかも知れない。

これは別の話だが、變な小說まがひの自叙傳をこしらへて、遠くから冷罵を冷びてゐたかと思ふと、反對に過分な批評やらお世辭をいたゞいた。だから、ついこの間まで、變な熱病に取りつかれたやうに、朝晩赤くなつたり蒼くなつたりしてゐた。

此處で、こんなお願ひをするのは、卑怯未練の振舞ひだが、昨日飛び出した無鑑札の朦朧車夫だから、何分、御手やはらかに願ひます。俺は小便さへ眞つ直ぐに出る正直者だ。親分もない。乾兒もない。泡鳴さんぢやあるまいし無暗に親分乾兒があるもんか。

「俺の見た日本人」は、何だか妙なものになつて來た。始めから、妙なものになりはせぬかと思つて、びく／＼してゐたんだ。「露西亞の郵便局ぢや、美人の寫眞を入れた手紙は事務員が猫ばゝを定め込む」の「日本は風流國だから公園の堤に『この枝を手折る可からず内務省』なんて川柳を書いて立てる」なぞ埒もない話を列べた處で讀者諸君の方で御承知に悩るだらう。俺

は國民性の比較をするんぢやないんだぞ。

幼年時代には到る處で迫害された。少年時代にはその迫害を痛切に感じ始めた。幼年時代には何故俺だけ小供の仲間から馬鹿にされて、のけものにされたんだか解らずに一人で小さくなつてゐたが、物心がついて、親類と他人の區別が判然分明る時分に漸く、俺の親の爺が露西亞人だから、酷められるんだと言ふことが解つた。

俺が生涯を通じて最も日本人の男を怖れて嫌がつたのはその頃だ。だから女の友達しか持てなくつて、今でも笑はれる。正直の處男より女がいゝ。ふざけるなと言ふなら、勝手に言ふがいゝ。

俺の交際つた人種の中には、日本人と露西亞人と支那人を除いて、亞米利加人と獨逸人と佛蘭西人と伊太利人と英吉利人と朝鮮人があつた。無論俺の少年時代であるが、この連中のうちで、俺を蝙蝠扱ひにしたのは亞米利加ゑびすを筆頭に英吉利の畜生と獨逸の下郎だ。

「貴奴は日本人でもなければ、露西亞人でもないから相手にするな」と言つた。こちらでも、この手合ひが馬鹿に意臭くつて、下素つ張つてゐたから、寄りつかなかつた。

露西亞人は俺を可愛がつたもんだ。たゞ困つたのは俺に向つ

て時々「佛陀々々」と冷笑したことだ。それも最初「お前は教ひ主の教へを信仰するか」と言ふから「いや俺は禪宗だ」と答へた。禪宗の高臺寺にお袋の墓や、先祖の墓があるんだ。其處の坊主が月に一度お經を讀みに來て、酒を吞んで、頻りに俺を膝の上に乘せて可愛がるから、その由を申し聞かせると、以來俺の「スキー」が「佛陀」になつたんだ。日本人は人間その物を嫌つて、露西亞人は宗教を排斥した。この連中と色氣づく迄育つた。色氣づくと云ふと下品なら、世間體を繕つて、俺の下品な性質を隱すために「性に目覺める頃」と言はう。

氏と育ちがお誂らへ向きに出來てゐた俺をはじめ、下品な奴等が、よつて集つて女の話をして喜こんだ。感心に露骨な處まで近らなかつたが、俺を捕へて日本の女のことを根堀り葉堀り聞きたがつた。丁度日本人が、より以上露骨に外國の女のことを聞きたがるやうに。可笑しいのは、露西亞人は饒舌方が上品で、書き方が露骨だ。日本人は饒舌ると露骨で、書くと上品になるから偉い。證據にならぬ惡事にかけては物凄い腕を逞しうして證據になりさうな惡事には甚だ溫順しい。露西亞人はその裏を行くから、馬鹿だ。

俺が日本にまごついてゐて、食へない處から、苦しまぎれに色々なものを書きたくなるのは、恰もカンガルーが上野の動物園でのらくらして生きてゐるやうなものださうだ。俺も確かに賛成する。要するに變てこで珍らしいからなんだらう。

俺が今十年早く生れたら、日本人のことだから、俺を生捕つて淺草公園の花屋敷へ連れ込んで、世界で一番珍妙な動物だとか、形は西洋人のやうでも、「それ皆さん、御覽の通り、棒で尻を叩きますと、日本語を饒舌ります」と言つて儲けるに違ひない。その通り。不思議な動物だ。いゝ鹽梅に十年遲く生みつけて貰つて棒で尻を撲られずによかつた。

その證據には、先達て「俺の會」に雨村氏が出るんだか、出ないんだか解らないからある會社に掛け合ひに行くと、その隣りの應接室に女雜誌の記者と訪問客とが密談してゐた。訪問客が「近頃黑石と云ふ男が賣り出しましたねえ。」女雜誌記者が「なあに作、今の中央公論があてになるものか。あれや下色が變つてゐるからだよ。中央公論にさへ出れやいゝものだと思ふと大違ひだぜ」。そうだとも。本人の俺が動物園のカンガルーだと思つてゐる位ぢやないか。だから日本人はいかもの食ひと云ふんだ。食つてるうちに飽きが來るんだ。飽きの來た時が即ち、棒で尻を叩き潰した時だと觀念してゐる。

新聞の廣告に「露西亞人の血を享け、特異なる經歷を以て日本文壇に振ひ立つた新人が」などゝ解り難く、皮肉に、半上手

に書かないでも、日本人の本性を遠慮なくむき出して、一層のこと一目して解るやうに、「形は紅毛獸に似て、日本語を操る奇怪の人間が」と吹聴すれば、俺の文章を載せた雜誌は立ちどころに數萬を一束にして「忽ち五版」の如くに、應接に遑なく賣れるだらう。請け合つて見せる●

少年時代の慘苦は親爺の寂滅と共に加つた。暫く留守をして戻つて來た時は春機發動時代だつたこと、既に一代記の中に書いて置いた通りだ。俺の近所に妙齡の娘が數人あつた。毎夜俺の家へ遊びに來た。御存じの通りの俺だから大いに歡待したのはよかつたが、その娘逹が他所へ廻つて、「今迄あれの眼玉を見て來たが、可笑しかつた。あれで夜でも見えるから不思議だ」と云つて笑ひこけたさうだ。それつきり俺も嫌になつたが、娘の方でも來なくなつた。多分、眼玉の神秘を見とゞけて、すつかり安心したんだらう●

それつきり、どの女とも交際は止めた。目の玉は、御承知の如く碧瑠璃の色であるが、眉は月に似て見事な濡れ羽色だ。外國の女は、俺の眉が黑いから、お化けだと陰口を叩かなかつたから、これでも俺が一歩足を日本から踏み出せば、必ずもてると、此時分の日記に不平を書いたことがあつた。

俺の友人や親戚は俺に向つて「お前は並の日本人より、いくらか肩身が狭いのだから、惡いことをするな。[illegible]を立ろ。でないと他人様と一様に世渡りが出來ないぞ」と小さい時分から教へられて來た。今日でも、俺の細君や、細君の親共は俺の面を見ると、直ぐ列べる。有難く服膺して、その氣で今日まで辛棒して來たから、お粗末作ら肩身が狭くつても、年だけ尋常に取つて、五尺五寸迄長々と伸びたが、時々氣が狂れると、何が並の日本人だ、何が並製だ、本や玩具ぢやあるまいし、並製も特製もあるもんかと、細君を敵に廻して、臨時に鬱憤を晴らして、あとで詫まる。すると細君が、俺の虚に乘じて、「そんな失禮なことを仰有るから、新聞や雜誌に、生意氣な舶來文士だなんて書かれるんです」と言ふ。俺には細君筋にあたる無學な、丈の短かい女だが、流石に此の邊は日本人に違ひないと思つた。

處がこの間から、俺が外出する度に、隣家の杉垣が、ボワ〳〵騒ぐから、野良犬だと思つて「叱！叱！」と杖を振り廻したら、野良犬でなくつて、隣近所の人逹だつたから、「どうも濟みません」と云つて俺は駈込んだ。細君が、「どうしたか」と尋ねるから、實は斯様々々だと云ふと、突然腹を抱へて笑ひ潰れた。「そりやねえ。この間、交番のお廻りさんが、この邊に異人が引つ越して來たさうですね」と戸籍の帳面を、ぺら〳〵と繰り

先に垢をつけて繰り乍ら、

「と尋ねましたから、えゝ、それは妾の家ですと云つた聲が、お隣りの臺所へ集つてゐた近所の奥様達の耳に入つたらしいんです」

だから、異人珍らしさの餘りに、俺の外出を待つてゝ、垣根の杉の葉の隙から眼を出して見物してゐたんださうだ。

「近所の奥様は、誰も知らないと思つて居なすつたんですけど、妾は水口で屑屋にビールの空瓶を賣り乍ら、ちやんと横から見てゐましたの。ほんたうに可笑しかつたわ。あなたが、ほゝゝ」

と、何を可笑しいのか、癖の悪い女だ。

「ほら。ほら。今戸口を出たわよ。あなた。ひどいわ。妾にも見せて頂戴なつて。それは、大變な騒ぎでした――わ。」

「俺の顔を争つて見物してゐたのか」

「えゝ。」

「何故。黙つて見せないんだい」

その時「いゝぢやありませんか」と俺の細君はいゝ積りでゐたんだが、俺は「近所の奥様は失敬な奴だ」と態と大きな聲を出して怒鳴つた。俺の形がこの位珍らしくて、この位有難いものなら其の半分でも俺の書いたものが歡迎されるといゝ。

近所に俺が異人で通つてゐるのを感づいたのは、俺の子が、寢床から起き出た俺に向つて「異人さんお早う」と言つて挨拶をしたからだ。俺の細君ばかりでないが、自分の亭主には、いけぞんざいな、物の云ひ方をして、他人には、あべこべに、馬鹿丁寧な言葉をかける風習があるんだから、奇體なもんだ。

先達千穴守神社へ、ある外國の男が散歩するから來いと云つたので行つたら、熱心な稲荷派が親子穴の奥に蹲踞つてゐて、頻りに額を掛けてゐたが、靴音に振り返つた。

外國の男は、俺のやうに日本人の生活に明るくないから、早速その親子を乞食だと間違へた。乞食だと間違つたのか、それとも、暗い、じめじめした穴の中で、頻りにぶつぶつ稱へてゐたので、哀れに見えたのか、兎に角、ポッケットから二十錢銀貨を一枚掴み出して、子の手に握らせた。親子乍ら、さつぱりした銘仙の着物に銘仙の羽織を引け掛けてゐた。女親がそれを見て、二つ三つ頭を下げ乍ら、有難うございますと禮を云つたから、俺はぎよつとした。

この親子は乞食でないから、餘計な眞似するなと云はうとしたら、もうやつて了つた。前額は暫く中止の形だつた。佛蘭西で、山高帽にフロック・コートの掃除人夫を見て感心したが、俺は銘仙づくめの頃か乞食は始めてだ。いやなもんだ。外國人、

を見ると、日本の小供が金を貰ひ廻るのが、恥し乍ら、俺の故郷の規則になつてゐる。だから、九州の女だと云ふと、偉いと謂ふ。九州の女が偉いと云ふのは、海の外へ醜業に行つて成金になつて歸つて來るからだらう。

それで、俺のお袋の寫眞を見て、新小說が「どうも天草あたりの女は、偉いもんですねえ」

と感心するのか、馬鹿にするのか、嘆聲を洩した。俺は、その時、餘つ程毆らうと思つたんだ。せめて何とか挨拶をしやうと思つたが、くだらないから控へた。俺の自叙傳を讀まない奴はこれだ。だから、俺の自叙傳を讀まない奴は俺ん處へ來るな。

俺は日本でハンチキヤツプをつけて貰つてゐる。「まあ〳〵いゝから君は一足先の方から走り給へ。油斷すると、並製の日本人から、駈け拔かれるぞ」と言はれて、恥しい出發點から、一生懸命でやつて來た。

到着點は前途遼遠だから、今に落伍するか、追ひ越されるだらう。既に大分追ひ拔かれて、氣を揉んでゐるんだから。

「ハンチキヤツプ」は英語だ。これを露西亞語に翻譯すると「資格が足らぬ」と字引に出てゐる。これを日本語に反譯すると「非常な不具者」になるさうだ。俺が非常な不具者である證據は、何をするにしても、世間から、ハンチキヤツプをつけられてゐるを見て解る。

自叙傳で漸く飯が食へさうになつたから、何が、何處で當るか解らないもんだと思つてゐると、人が來て、「ありや書き割りの煉瓦建だ」と敎へて呉れた。書き割りと云ふのは、芝居の背景のことだらう。煉瓦建の家を見せた背景だらう。だから火事の方でも、眞個の煉瓦建てと間違へて、燃えつかないんだと廻り冗ひ說明をして呉れたから成る程、燃えつくまいと思つた。こ處まで書いて來ると、何だか「俺の見た日本人」でなくつて、「俺と日本人」になつて來たやうだ。更に俺、ハンチキヤツプだけは有難く頂戴してゐる。更に有難く感謝するのは、俺なんかにへ來ない前には、到る處で、貧乏者として相手にされなかつたに拘はらず日本へ來てから、貧相な身なりをして、貧相な生活を立てゝゐるに拘はらず、更に俺の親戚共が、貧乏者として俺を馬鹿にするに拘はらず、世間が俺の貧乏振りを見て、左程卑くびらないことだ。

俺が本郷の湯屋の裏で、三助と一緖にくすぶつてゐる時、外國語學校の學生が大勢して來た。小屋の入口で、子供のおしめを洗つてゐる俺の細君に「この邊に露西亞人が本國から越して來て、住つてゐるさうですが、何處にゐるんだか、御存じない

ですか」と尋ねてゐるのを、俺は小屋の中で聞いてゐたことがある。どう云ふ理由で御來臨になつたかと聞くと、露西亞語の研究に手傳つて貰ひたいからだとあつた。日本人はこの通り親切だ。俺が食へないでゐるのを見兼ねて、金儲けの仕事をどし／＼持つて來て呉れる。あるお役所の役人が突然やつて來て、「お前は過激派であるまいな」と。「どう致しまして、過激は不倶戴天の仇でございます」「そんな不安な商賣をしないでも、俺の役所へ來ると、生活の保證をしてやるよ」とぐる／＼俺の小屋を見廻した。「家族は？」。「税金を拂つてゐない犬を入れて合計七人でございます」。「百圓もあれば充分食つて行けるだらう、「左樣で」。「犬も飼つてゐるのかね」。「うちの犬にして居りますが、主人がこの有樣なものですから、氣の毒だと思つて犬は往來で自活してゐます」。「老婆もあるのかね」。「あれはもう死んでもいゝんです」。「兎に角、そんな不安な商賣をしないでも樂に安心して食へる道があるぜ。どうだい」。

不安々々と言ふから、念の爲、何が不安だか說明を仰ぐと、「お前は原稿稼ぎだらう。日本と云ふ國はな。目先が變つて、一寸の暇潰しや、間に合せに、讀んで面白さうだと思ふと、やんやと囃し立てゝ其奴を擔ぐんだ。」「有難いです。私などは、それでないと食へません」「處が最初目先が變つてゐると思つて煽り立てた奴が今度はだ。」「今度はどうしたです」。「少し其目先に飽きが來て、古くなつて來ると、もういけない。擔いだ奴をすぽんと落して、はい左樣ならと云ふんだ」。「つまり相手にしなくなるゝ仰付るんですか」。「左樣々々。さうなると、原稿の買ひ手がなくなる。早い話が、飯の食ひ上げさ。」「成る程不安なもんだなあ。」。一特にお前なんぞ、聞く處によると、大した學問はないし、聞く處によると、大した天分もないし、聞く處によると、まるで文學的の經歴がないし、聞く處によるとペトロンも文閥もなくて、獨りぼつちださうだから。その點は餘程注意しないと、今にやられるぜ」と云ひ乍ら、にや／＼笑つた處は隨分遣つ氣味が惡かつた。不安な商賣だとすると、今度はあべこべに、十年早く生れて、花屋敷の檻の中で尻をひつぱたかれた方がよかつたと後悔した。

俺は凡人だから、然し只今の景氣では、どうも行末がそう迄悲慘だとは思はれません。何故なら、つい此間も、私の家業とは全然で畑違ひの「料理の世界」や「裁縫の友」や「毛唐撲滅雜誌」の記者さんか來られて、原稿を寄越せと言ふことで、私一人は、どもも偉い先生になつたもんだと恐怖を感じて居りましたが」「そんな奴等は大抵血迷つてゐるんだから、的になるものか」。「左樣ですかね恐ろしい國だなあ」。「だつてお前考へて見るがい

ゝ、お前は毛唐だらう」「御尤もです」。「その毛唐の處へ」と續けさまに毛唐々々と云ふと、三助が小學の入口でくす〳〵笑つてゐた。「そこへ『毛唐撲滅雜誌』――はてな。何とか別の名があつたけが。おい黑石君。毛唐撲滅雜誌は何とか社と言つたね。」「新陳代謝でせう」「あつ。シンチンタイシヤだ。その奴が來る處を見ても、如何にお前を馬鹿にし切つて、本當がいかに血迷つてゐるか解る筈だ。だから、俺の役所に勤めて、小使ひなり、庭掃きなりやつた方が安全だ。嫌だと云ふならお前の爲によくなからうと思ふ」と云ひ殘して歸つた。

歸りがけに、俺の机上にあるトルストイの畫像を指して、「危險たからあん寫眞は飾つて置かない方がいゝ」と注意してくれた。

面倒だつたけれども、氣になるから、「トルストイが何故裝飾品として危險ですか」と追つかけて尋ねた處が、「彼奴とマルクスとレーニンぢやないか。今ロシヤで暴れ廻つてゐるのは。怪しからん」と云つた。

トルストイが過激派の大將になつて暴れ廻つてゐるのは頗る珍だが、この間のやうに俺に向つて「小泉八雲さんですか」と新聞記者に訊かされるのも珍らしいと思つた。

日本人が俺に對してこの位親切だと云ふことは、これを以ても呑み込める筈だ。

日本人が親切であることはこれを誤解つたとして、日本人が如何に手前勝手であるかと云ふことは、先日俺の處へ來た手紙で解る。

差出人は、某縣某市の某高等官で、「別封の和文を露譯して下され度候」と云ふ件で、高等官の露西亜人の婦人へ送る長々しき書信である。無論俺の係り知つてゐる人でもなければ、誰の紹介がある譯でもなく、返信料さへ封入してなかつた。

俺は用を足してやつたから、先生滿足に思つてゐるだらう。ハガキで「御手數でした」と言つて來た。

それからも一つ（これは合計三つ）は「別封小生作小說一篇、御覽の上、相當に批評さるる樣の文學雜誌へ御廻し下され。掲載の上、御報酬中より□く候」附きの傑作（長篇）を郵便局が屆けた。その時、きつと、私の原稿さへ、十度に九は賣り損ねて反古になります。その僅微力の名に、原稿御掲載きな御依託にならないでも、まだ〳〵ずつと偉い先生方がお出になりますから、其の下ら、そのうちに、お下命になつた方が、確實です。そのおりくは、從來通り精々勉强して、あなたの原稿をも乾燥の〔?〕ひて見るもでせう。貴下の御商議は欲しいけれども、止むを得ないと思つて……」と答へて、……

である。

無名の文學者だつて、何もへこ垂れるには及ばないだらう。拵へた原稿が賣れなくて、持て餘すやうだつたら、英文に書き替へて、あめりかなり、いぎりすなりへ持つて行くんだ。あめりかや、いぎりすで相手にならなければ、更にふらんす語に書き替へて、ふらんすに持ち込むんだ。

ふらんす人が解らず屋で、お前の原稿は御免だと言つたら、獨逸語に書き替へて、マルクスの本場へ送るんだ。それでも駄目なら、奮發して、露西亞語に書き替へて、ゴーリキーの產地へ擔ぎ込むんだ。

そのうち、物好きな[illegible]が飛び出して、買ふだらう。何も原稿は日本語やローマ字に限つたもんぢやないと云つてやらうと思ふ。賣れない原稿を鞄に詰めて國境を越えて歩くのもコスモポリタンでよからう。

有名な著作業組合ひの中に入れて吳れずに悲哀を感じた作家や、書きなぐり過ぎて評判を落した先輩達は、無慚を感ずる前に、鞄と旅券とを準備する方が利巧だらうと思ふ。生意氣だと言ふなら、そのまゝ生意氣で承知する。喧嘩腰になる前に、もつと大きな量見になつて見る方が、俺の立場から申し上げると、何だか儲かるやうな氣がしてならない。何。俺も食へなくなつたら、その邊へ逃げ場所を拵へるかも知れない。「いくら何でも、まだ一年や半年は大丈夫ですよ。長くは續くまいけれども。」と俺を慰めて吳れた、この方面の猛者があつた。猛者の主說だから、まだ一年や半年位は、大丈夫だらうと、すつかり、その氣になつて了つたが、どうだか。

俺にも、古本で讀んだ文學論があるんだ。同じく古本の御厄介になつた藝術論や哲學論があるんだ。但し自分のものは一つもない。この話が文學論や哲學論を書くんだつたら、それこそ大變だが、こんな出放題で勘辨の出來さうな俺と日本人のことだから、まあよかつたと思つてゐる。正直に讀む人こそ、いゝ災難だと思ふと、つくづく申し譯がないけれども。相手が垢ぬけのしない毛唐だと考へて、日本人らしく見逃して貰ふことにする。そして、更めて、また何處かの雜誌の例の尻の方でお目にかゝりたいと思ふ。

俺は小さい時、盲目老婆の背に負ぶさつて、他人の家へ遊びに連れて行かれた。行つた先が何樣の家であらうと、遠慮會釋なく疊の上を這ひ廻つて、先づ臺所を狙つたさうだ。食ひ意地の張つてゐる俺だから、その時分から、へんな邊へ目をつけてゐたと感心した。

臺所へ行くと戸棚があつて、食ひ物が入つてゐる。俺は、これ

を盗んで食つたさうだ。

俺の祖母は、最初から、その目的で、俺を連れ廻つたんだらう。俺が幼稚園に放り込まれてゐた時分、唱歌時間に、俺一人が子供の群を離れて、その頃流行つた國の俗謠を「おちがよかときや、どんげんゆうたへえ」と唄ひ出すと、女教師が眞つ赤な顔をして、俺を建物の外へ摘み出して、そこに一時間ばかり、突つ立つて居れと命じたつけ。唄の意味は「お前がいゝときや、どう言ふた」となる。

アダム・イヴの罪のはじは林檎を嚙つたとあるが、俺が罰のはじめはこれだ。以來その罪が災をなして、故郷を去る迄、不良幼年の開祖となり、故郷へ舞へ戻つたときは、不良青年として、世間でも學校でも、俺を見る眼鏡は別だつたが、舶來の不良青年は、いくら丸許でも取り次ぐまい。（完）



時論

政黨の地盤政策を難ず

法學博士　吉野作造

九月下旬行はれた府縣會議員の選擧は、政友、憲政、國民の三黨各々其政黨の名に於て鎬を削り、各政黨の幹部までが態々田舍を狂奔した事は人の知る所である。此事は今日我國の政黨が如何に地方の問題に興味を有つて居るかを語るものであると共に、國會議員選擧の場合に於ける地盤の擁護乃至開拓と云ふ考がまた彼等をして大いに地方問題に浮身を窶しさしめて居ると云ふ事も掩ふ事は出來ない。國家の經綸――從つて中央政界の問題に專ら沒頭すべき筈の政黨が地方の自治制に干與するの不可なるは云ふ迄もないが、殊に彼等が黨勢擴張乃至地盤の擁護開拓の目的の爲めに地方政治を紛亂して顧ざるに至つては、之れ立憲政治の本義に悖る一大罪惡と云はなければならない。

立憲治下に於て守られねばならぬ數ある原則の中、其最も重要なるもの丶一つは、各國民の人格的獨立の尊重である。之が爲めにはすべての國民をして其政治上に於ける意思の決定を最も自由ならしめなければならない。而して所謂憲政創始の運動は其形式的自由を確立し、又は少くとも確立するの端緒を開いたのであるが、其實質的自由は今日尚未だ十分に確立されてゐない所がある。我國の如く未だ普通選擧の行はれてゐない所では、國民の自由が形式的にも完成してゐないが、せめて其與へられたる範圍内に於てでも其自由が本當の意味の自由であれかしとは我々の切に願ふ所である。即ち我々が現行選擧法の下に於て尚選擧權の行使につき、いろ／＼の註文をするのは、現在の選擧權者が單に法律上の文面のみでなく、事實眞から良心の命ずるが儘に自由の行動を執り得るやうにしたいと希ふからである。斯くの如きは啻に立憲政治の本義に協ふばかりでは無い。更に斯くして國家の文化を高め、國運の進歩を促すと云ふ道德的効果もあるからである。蓋し選擧人が選擧權を行使するに方つて買收せらるるでなし、其他いろ／＼の利害によつて動か

ざるると云ふ事がなくなり、單純に自分のよしと信ずる所によつてのみ行動するといふ事になれば、政黨の競爭に於て勝敗の決定をなす者は即ち國民の偏する所なき良心の判斷であるから昔の政爭のやうに殺伐陰險なる手段を運らすの餘地はない。從つて政爭を倫理化し、其結果また各政黨をして互に切磋琢磨し、競うて良能を發揮せしめることが出來る。啻に之のみではない、各政黨が各々其最もよきものを發揮して競爭に勝たんと努むるの結果、國民其物も亦之によつて大いに發達を促さるゝ。即ち斯くして政黨は他の政黨と各々其能を競ひ、國民はまた政黨と交互に其最もよきものを發揮せざるを得ざらしめる。之れみな國民の意思の自由を尊重することより生ずる賜物に外ならぬ。

然るに不幸にして我國現今の政界に於ては、所謂國民の自由は其實質に於て大いに蹂躙されて居る。而して其中官憲の干涉とか候補者の買收請托とかは、人多く之を駁却し得ずして而かも之を非とするに誤らざるも、此外尚大いに國民の良心の自由を蹂躙する怖るべき弊根あるを氣附かざるものが多い。それは何かと云へば、即ち政黨の所謂地盤政策なるものである。

天下の政黨が地盤の開拓と稱して或は府縣、甚しきは郡市町村の行政にまで干與し又は種々の問題を[illegible]一一地方の[illegible]黨籍に列せしめると云ふ事は、西洋諸國に於て殆んど其例な[illegible]ざる所である。蓋し政黨は天下國家の問題を以て爭ふべきもの、地方政治の問題は原則として地方公民の自治に委し、直接政黨の干與すべき性ではない。若し夫れ地方の公民に至つては自ら中央政界の舞臺に乘り出さんとするものにあらざる限り、各政黨の理義の爭に對し公平なる批判者たるべくして、爭の當事者たるべきものではない。即ち彼等は今日の場合甲黨を是と思はば甲に贊し、乙黨を是と思はば乙に贊し、贊否の票決に於て毎に全然自由の立場に立つて居なければならない。斯くしてこそ初めて政治に公正あり、國家にも進歩あれ。然るに我國の如く政黨が山間僻邑まで其毒手を伸ばし、よくもわるくも誰某は甲黨に又は乙黨に投票するものと豫めきめて置くのでは、黨爭はつまり自分達の立場は國民多數良心の認受する所となれる結果として勝つのではなくして、つまり腐れ緣につながる家の子郎黨の高によつて極まる譯になる。其結果どうなるかと云へば、各政黨は平素色々の利益を提供して地方民を繋ぐのみならず、いざ選擧と云ふ場合には更に種々の不義の利益の提供によつて大就の[illegible]味なるものを施與する。斯くしていゝ事をしやうが、わるい事をしようが、何うでも自分達は勝てると云ふ意味で堅い地盤を[illegible]

極めて安全な方法であらう。けれども之によつて國民の道心を傷け、一國文化の進步を妨ぐることの如何に大なるやは測り知るべからざるものがある。頑迷者流動もすれば政黨の弊害を說くが、政黨其物に斯くの如き本質的缺點ありと云ふ議論には固より贊成は出來ないが、少くとも我國今日の政黨は此種の詰問に對して一言辯解の辭なかるべきは疑ない。

以上述べたる意味に於て予輩は今日の政黨の所謂地盤政策に多大の反感を感ずる。殊に此點に於て今日までの政友會の遣り方に最も遺憾とすべきものが多い。主義として政黨內閣論者たる予輩にとつて、我國政黨の今日の暴狀は最も悲痛なる煩悶の種でなければならない。而して今日の政黨は或は救べからざるも、地方多數の公民中には尙其良心の聰明をたゝくことによつて我々の立場の諒解を求むるの望有ることを疑はない。是に於て我々は敢て地方の公民諸君に告ぐる。諸君は專門の職業的政治家で無い限り、籍を政黨に列してはいけない。此點に於て斷じて政黨者流の甘言に耳傾けてはいけない。諸君は何處までも不偏不黨の態度をもつて、其眞價値に於て各政黨の立場を比較し、最も公平に其角逐の勝敗を決すべき任務を忘れてはならない。國家の諸君に期待する所以は忠實なる行司の役目である。政治家たる伯力は行司までを東西に分つて党派的味方たらしめんとする。此誘惑の怖るべきに警戒して、何處までも良心の判斷を自由に且つ鋭敏ならしめんことは、我國憲政の進步の爲めに予輩の切に祈ふ所である。

西伯利派遣軍の始末

今期の議會に於ては國內の問題としては物價調節や普通選擧などが矢釜しく論ぜらるゝだらう。國外の問題としては講和會議を中心としての政府失態の糾彈から日支關係などが大分論爭の目標となるらしい。而して西伯利派遣軍を結局どう始末するかと云ふ問題は單に形式上の責任をどうするかと云ふ點ばかりでなく、今後をどうするかと云ふ非常に大事な、而かも非常に復雜、困難な實質問題にも觸れるので、隨分矢釜しく論ぜられるだらうと思ふ。

西伯利派遣軍の始末に關して主として問題となるのは撤兵するか、又は減兵に留るか、若くは逆に增兵するかと云ふ事であらう。一面から見ると、今日國費多端の際、且つ物價騰貴やら勞働問題やらに關聯して財政の格別膨脹しつゝある、更に大い

に膨脹せんとしつつある際、非常緊急の必要あらば格別、然らずんばあの儘不得要領の駐兵を繼續するは無鐵砲の甚しいものといはなければならない。けれども又他の一面から云へば一旦拔いた刀は不得要領に引つ込ませる譯にも行かない。駐兵の意義が不得要領に見えるのも畢竟十分活動を縱まにするを得ざる狀態に置いたからの事である。もつと兵力を增して十分威力を發揮させたらばどうだらうと云ふ議論も成り立つ樣である。

斯う考へると積極論にも消極論にも共に一應の理屈はあるやうだが、併し同一の問題につき斯る剛極相容れざる議論の起るのも、畢竟出兵の眞實の目的が未だ國民の頭に十分明かになつてゐないからである。茲に出兵の目的と云ふのは表面出兵の口實として擧げられたものを云ふのではない。表面は何と云つても實質に於て何を目的とするかは、多くの場合に於て國民一般の理解し承認するものあるを常とするのが、西伯利出兵丈けは全く之れがない。何の爲めに出兵をしたのか今日尚國民が迷うて居る。恐らく政府に於ても明白になつてゐないのであらう。何れにしても西伯利出兵は文字通りに不得要領の出兵である。目的を定めず拔いた刀だから鞘に納めていゝやら、納めないでいゝやらが分らない。人々は各々其觀る所に從つて得手勝手な議論をするのである。

若し之が五年前の出來事であつたら今日のやうに議論は多岐に亘らなかつたらう。何故なれば其頃は世界全體の空氣が專ら武力的競爭に熱中する時代であつたし、又隣國の露西亞は我々にとつて夫自身一個の脅威たるを失はなかつたからである。不得要領の出兵でも、出兵の機會を捉へたと云ふ事は夫自身露西亞に對する牽制であり、又東洋に於ける帝國々威の發展であつた。然るに今や露西亞は如何に帝國の施設を逆ふするあるも、武力的意味に於て最早や何等怖るべきもののなきことは國民の遍く疑はざる所である。更に世界昨今の風潮は著しく武力の多少を以て國際間に於ける發言權の多少を定めんとする從來の風潮に反對して居るから、故なく他國の領土に兵を出すと云ふやうな事は寧ろ大いに輕蔑する所たらんとしつゝある。當時の當局者は或は彼の舊るい思想に動かされて出兵を決行したのかも知れないが、新時代の滔々たる大勢は斯る出兵を無條件では許さない。ソコで駐兵其事を是認せしめんが爲めにはどうしても目的の合議が必要缺くべからざる事になる。

目的の論議を極めず、今おめ／＼と歸つては帝國の面目に關すと云ふ立場から撤兵反對或は少くとも現狀維持を說く感情論は、甚だもつともらしく聞えることもあるが、[illegible]

して居るのは目的をこれとなく感じて居る結果では無いか。扨て駐兵の目的について一番先きに說かれたのはチエック・スロヴアックの救援と云ふ事であつたが、此點では今は殆んどあれ丈けの駐兵の理由にはならなくなつた。從て又昨今之が目的だと云ふ樣な議論も無くなつた。初め之々目的として出兵したからと云て何時までも之に拘泥するの必要なきは云ふを俟たない。次に駐兵の重要な目的として擧げられるのはオムスク政府の援助といふ事である。若し之が駐兵の目的であるとすれば、もつと增兵するを必要とせねばならない。併しオムスク政府を援けると云ふ事は西伯利の難局を收拾する所以であるか、之を援くる事が世界殊に東洋の幸福であり又同時に日本の利益であるかは愼重に攻究を要する。それよりももつと緊切の問題は所謂オムスク政府なるものは夫れ自身援けて遣る丈けの自力を備へて居るかどうかの點である。今日まで我國が隨分立ち入つてオムスク政府を援けた事は事實疑ひない。其行き掛りから云へば更に大いに之を援くるのが當然の順序であるけれども、昨今之が援けても物になるかどうかを疑ふものが頗る多くなつた。駄目なら早く手を引くがいゝ。行き掛りに拘泥して足を洗ふに躊躇しては益々深みに陷るばかりである。斯くしてどうやら此第二の目的も根柢がぐら附きだしたやうである。

ソコで第三に過激思想の撲滅若くは過激派の討伐と云ふ事に問題が移つて來る。此點について予輩は過激思想の何たるか、過激派の何たるかについて十分なる諒解を缺くものなきやを懸念し、少くも過激思想乃至過激派を評價するに餘りに其外面的なるものに拘泥して居るを疑ふものである。何れにしても過激派の跋扈並びに之によつて起る過激思想の蔓延は何とかして之を喰ひ止めねばならぬものであらうが、然し之は西伯利まで行つて喰ひ止むべきものかどうか、大なる問題であらねばならぬ。此事に關しては一つにはどれ丈けの大兵を以てしても西伯利に於ける所謂過激派の撲滅は不可能であるまいかと云ふ點を考へねばならず、又過激思想の我國に於ける傳播は、西伯利に於ける過激派の討伐によつて防ぎ得るものではないと云ふ事を考へねばならぬ。思想の傳播は武力を以て壞くことは出來ない。反對にまた西伯利に於ける過激派の跋扈跳梁を許したからというて過激思想が急激に流行し出すと限れるものでもない。過激思想の撲滅を念とするなら何處までも之を思想問題として取扱ふべきではないか。思想問題を國際政治の問題として失敗した適例は前世紀初頭の神聖同盟が餘りに明かに之を示して居る。斯う考へると此方面から云つても駐兵の目的は十分明かにならない。

そこで予輩の考によると駐兵を是認し得べき目的として殘る所は只二つあるのみとなる。一つは朝鮮滿洲特に朝鮮に於ける日本の既得地位の擁護である。も一つは極東に於ける一般治安の維持である。滿洲朝鮮に於ける日本の既得の地位其ものに關する論及は今姑く措く。此既得の地位が露領亞細亞の紛亂に影響されて頗る脅さるゝ所あるの事實に疑なしとすれば、此の爲めに若干の兵員を彼地に駐るといふ事は多少の理由は無いではない。併し之丈けが目的であると云ふなら、現在の地位より大いに退くの必要があり、又兵員も著しく減ずることが出來よう。けれども更に進んで極東に於ける一般治安の維持と云ふ事を考へると、それほどの消極的態度を執ることが出來なくなる。けれども其程度は極東に於ける各國の生民の平和なる生活を保障するを限りとすべきが故に、今日現に我駐屯軍が執つて居るやうな積極的態度を必要とするや否やは多少の問題とならう。何れにしても此邊が西伯利派遣軍の始末をどう着けるかの標準でなければならぬと思ふ。

只此際一言注意すべきは東洋一般の治安の維持を目的として駐兵を繼續する以上、我々は之によつて一般東洋の平和、否、世界の平和の爲に奉仕しつゝあると云ふ考を離れてはいけない。世界殊に東洋一般の平和の爲めに貢獻すると云ふ意味に於てのみ我々は敢て治安維持の仕事を我々の責任ある仕事の中に加ふることが出來る。若し然らずして此處に一點不純の考が混じるならば啻に治安維持の目的を達し得ざるのみならず、我國の國際間に於ける立場を著しく危うするの惧なきを得ない。斯うなると我國は或る決まつた目的の爲めにどれ丈けの兵員を駐在せしむべきかの問題より一轉して、我國軍隊の將卒は果してよく此任務を盡すに足るや否やを吟味せざるを得ざることになる。昨今此問題に關する世上の議論の中にも、派遣軍の將卒の中には敵とすべきものとすべからざるものとの鑑別を誤り、甚しきは單に日本に好感を有たないとか、日本の保護せんとするオムスク政府と偶々政見を同じうせないとかいふものまでも過激派の名前を附して無遠慮な攻撃の矛先を向けるものがあると云ふ事實を認めて居る。果して然らば此方の吟味が我々にとつて最も急要な問題となつて來る。

此夏大學法科在學の友人蠟山政道君が西伯利方面を旅行してゐた感想を述べられた手紙の中に、次のやうな事が書いてある、「……此の間小生の最も感じた一事は極東西伯利の國際的色彩の如何にも濃厚な點であつた。其處はもはや單に露西亞人のみの天地ではなくして、支那人、日本人、亞米利加人の共同的生

活舞臺であると云つて差支へない。いはゞ一種の世界的生活關係が極東の一角に現出されたのである。而して之は戰爭と革命との齎らした一時的現象と目すべきものでなく、將來の世界の趨勢を偶然に暗示する永久的事實であらうと思はるゝ。從つてこゝには一國又は一民族が他國又は他民族を征服して行くと云ふ統治原理はもはや通用しない。多くの國民又は民族が共同して社會生活を營んで行くと云ふ新らしい原理と新しい形式が成立をなさんとしつゝある。斯く觀察しつゝあるに際し小生の最も遺憾に堪へないのは、西伯利各地に於ける日本人の思想乃至生活が此趨勢に正反對若くは著しく遠ざかつてゐると云ふ事である。就中派遣軍の將卒其他の官憲及び在留の老實業家等の思想が極めて淺薄な侵略的色彩を帶びて居ることである。……」之れ恐らくは彼の地の眞相を語るものであらう。兩三年前迄では日本內地の通有の思想も亦斯くの如きもの多かつたが、今や黎明の曙光が素晴らしい勢を以て輝き亘りつゝある。此際我々は更に此光を以て西伯利の空に漂ふ暗雲を突破する事は、啻に目前の問題を始末するばかりでなく、東洋平和の問題を根本的に解決する所以たるを思ふものである。

内柔外剛の跛行的政論

近頃持て囃さるゝベルトランド・ラツセルに從へば、凡そ人は二つの衝動によつて支配さるゝ。一つは物を造らんとする衝動で、他は物を所有せんとする衝動である。而して創造的衝動の自由なる活躍を抑へて、所有的衝動のみを横行せしめた事が即ち現代文明の弊根で、資本主義やら軍國主義やらで世界の人の散々迷惑を蒙つたのも畢竟之が爲めであると云ふ。

　ラツセルの思想を全部としては最近本誌の誌上に於て中澤臨川君が叮嚀に紹介して居られるし、其專ら社會問題に交渉する方面に於ては福田博士が相當に詳密なる紹介を試みられて居る。此等諸氏の力によつてラツセルの透徹すべき思想が大いに普及するやうになつたのは我々の感謝して措かざる所である。斯くして近頃では勞働問題にあつては資本主義を攻擊し、政治問題にあつては官僚軍閥の跋扈を攻擊し、又國際問題にあつては武力若くは資本を以てする侵略主義を攻擊するにラツセルの立場を借りるもの頗る多いやうに見受けられる。

然るにラツセルの立場を根本的に理解して居る人々は別とし

て、一應其立場を借りて勞働問題や政治問題を論ずる人の間には、知つて知らずしてか、一旦國際的問題の論議になると、丸でラッセルの眞の立場を逆さかるものがある。近代に於ける所有的衝動の傾行が武力的及び資本的帝國主義の發達を促した。此點に於てデモクラシーの本家を以て任ずる英吉利も亞米利加も共に潔白を主張し得ないと云ふ迄はいゝ。併しながら更に進んで、だから我々も進んで彼の爲す所を爲し、他日彼等と相抗爭する時の用意に專念すると云ふ事になると、これは最早やラッセルの立場では無い。ラッセルは創造的衝動を自由に活躍せしめんが爲めに所有的衝動を排斥した。資本主義の撲滅を主張するは資本家の據つて居る地位を勞働者に奪還せんが爲めではない。資本家も勞働者も皆おしなべて資本主義の毒から救はれ、自由に文化の創造に活躍せしめんが爲めである。此點に於て彼は所有的衝動の產物たる所謂國家の光榮——資本及び武力を以て飾られたる——に對して寧ろ反對の聲を擧げて居る。國家の光榮を讃美するは自由と進步との敵であるとさへ云つた。自由と進步との敵なるが故に、彼は英米の所謂資本的帝國主義に極度の反感を示したのである。然るに此の所謂國家の光榮其物に反對すべきを忘れて、只徒らに外國の勢力を敵視せる性癖を有するものは、ラッセルを味方として英米を攻擊し、我亦同じく武器を以て彼に對すべしとするのは、斷じてラッセルの立場では無い。

英米をどう觀るかは固より茲に直接問題とする所では無い。又ラッセルの立場が全然正しいものかどうかも茲に論ぜんとするのではない。只與るにしても戰るにしても理義の明晰を缺く感情論が殊に國際的問題になると意外に多いので、偶々ラッセルの說を藉りて此點を共に相戒むる所以である。

勞働運動に對する予の態度

「我等」の十月號に、坂口喜一氏の「吉野博士に呈す」と云ふ一文が載つて居る。勞働運動に對する予輩の態度についての眞摯なる詰問で、予は其好意に對し沈默を守り得ざるを感じた。のみならず同じやうな考を有つて居らるゝ方が外にもあるだらうし、而して又此種の考が予以外の所謂智識階級に向けられて居ると云ふ事もあらうから、之を機として一言予の立場、而して又予と態度を同じうする多くの同志の立場を明かにするは無用の業にあらずと考へる。

最初此答辯は「我等」に寄せようかと思つたが、坂口氏は本誌一昨年十一月號に出た予の論文を[illegible]

ら、矢張本誌を藉りて答へた方が便利だらうと思つた。此點に特に坂口氏の諒解を得て置きたい。

坂口氏の難點は要するに予の所謂人道主義は、それは資本家の人道主義では無いか、予の態度は人道主義を振り翳して勞働者の運動を抑へんとするのではないか、さう云ふ態度は巧妙に假裝した資本家の犬が從來屢々執つた所であるが、それを眞似るのは心外に堪へないと云ふやうな事に歸すると思ふ。細目に涉れば外にもいろ〳〵の事があるが、此等を一々辯明するは煩に堪へない。坂口氏の主として難ぜらるゝ點を眼中に置き、予輩の本當の態度――曩きの論文に於て明かにせんとした、又明かにした積りであつた所の――を更に積極的に明かにして置かうと思ふ。

第一に明かにして置きたいのは、予は人道主義と云ふ言葉の意味を坂口氏の解するやうには使つてゐなかつた。此言葉が坂口氏の解せらるゝが如き意味に資本家側から惡用せられた事實は之を認める。之が爲めに人道主義が誤解を受け、不當の侮辱を受けたのであつたが、其誤解に謬られず本當の人道主義に立つべしと云ふのが予のあの論文に於て主張せんとした本旨であつた。此點を十分諒解せられなかつたのは或は罪予の立言の不完全なるに基いたのかも知れぬが、[illegible]所である。

云ふ迄もなく人道主義と云ふ言葉は勞働運動に對する一つの牽制方法として資本家側から唱へられた事が久しい。斯う云ふ方面から人道主義を觀ると、資本主義の存在を寬假して徒らに勞働階級の正當なる要求を抑へんとするものと云つても間違はない。又坂口氏の云はるゝやうに彼等の云ふ人道主義は寧ろ資本家側にこそ缺けて居るではないかと非難されても仕方がない。併し斯う云ふ人道主義は本當の人道主義ではない。いはゞ資本的利己主義の巧妙なる變裝に過ぎない事は云ふ迄もない。予の人道主義を説くのは斯う云ふ變裝的利己主義に味方して、勞働者にトルストイ流の無抵抗主義を奉ぜよと云ふ意味でない事は、相當に明白にした積りであつた。

予等の所謂人道主義は資本家と同じやう　勞働運動を故なく危險視して之を牽制せんが爲めに唱へたのではない。寧ろ勞働運動に大いなる同情を有つの結果、それが有效に、正當に、又確實に其行くべき所に達せしめんが爲めに、一言にしていはゞ、勞働運動を正しき軌道の上に安全に馳せしめんが爲めに唱へたのである。從つて予の人道主義は資本家の道徳とか勞働者の道徳とか、さう云ふ特殊の階級を超越した一段高い普遍的の立場

から說いた積りであつた。從つて予の人道主義は、資本家の爲めに都合のいゝものでないと同時に、また勞働者と云ふ特殊の階級の爲めに都合のいゝものであつてもならない。即ち予の人道主義はすべてのものに正しきを求むるものであり、又すべて正しきものゝ味方たらんとするものである。從つてまた斯う云ふ人道主義の立場を取る予自身は資本家の味方でないと同時に、又必ずしも勞働者の味方でない。すべての正しきものゝ味方たらんとするが故に、概して勞働者の味方であるけれども、勞働運動が正しき軌道を脫するの虞ありと見れば、時として之に反對するを辭せない。又概して資本家の敵であることを公言するを憚らないが、正しきものに味方すると云ふ範圍に於て、場合に於ては資本家の味方たることを厭はないものである。

斯くして予の人道主義は資本家と勞働者とに對しては先天的に味方でもなければ敵でもない。敵とするものは不正であり、味方とするものは正である。而して今日の資本主義は明白に不正なるが故に之を排斥するに於ては一歩も假借しない。而して予が概して資本家を敵とする所以は畢竟彼等が資本主義の不正を悟らず、悟つて而かも移ることをなさず、甚しきはあらゆる方法を講じて資本主義の橫暴を勞働者に加へて平然たるが故に外ならない。只夫れ此理由に於て資本家に反對するのであり、而してすべての資本家はすべて皆斯くの如き頑冥者と限らず、中には眞面目に自己の立場を正しくせんとして深刻なる煩悶を嘗めつゝあるものもあるから、之を諒とせずして無下に彼等に反抗せんとしない。而して予輩の人道主義的信念は資本家と雖も人としては勞働者と同じ魂を有つて居るものと見るから、結局に於て說いて訓ふべからずとは思はない。併しされば云つて予輩は資本主義其物を少しでも大目に見ようと云ふ考は斷じてない。資本主義其物に對する反感と資本家に對する反感とを混同するは、坊主を憎んで袈裟を捨てるの類にして、勢止むを得ずとしても理に於て之を是認すべからずとするものである。

予の人道主義は資本主義其物に絕對的反對を表すると同時に、勞働階級の解放乃至獨立の主張には絕對的贊同の意を表するに躊躇しない。何故なれば、此要求は勞働者の權利の主張としても、又一般社會の正義の確立としても其當然なること一點疑を容れないからである。併しながら勞働階級の其正しき主張に味方すると云ふ事は、必ずしも勞働者其物のすべての要求に味方すると云ふ事ではない。勞働運動の根柢には右に述べたやうな正しいものがあるから我々は之に味方する。斯くして一社會を正しく改造することは社會の一員としての我々の義務であると

も考へて居る。併しながら勞働運動が勞働者其人の自體的運動とすると其實際の要求は該運動の眞の要求のみに止らない。勞働運動の味方だからと云つて、勞働者のすべての要求に味方せねばならぬと云ふのは、[illegible]面も笑醫の類で識者の厭ふ所であるのみならず、朱中盲目的同情を寄するの結果、慈母の偏愛が折角の愛兒を誤るが如き愚は最も戒心して避くべき所である。此意味に於て予輩が人道主義を執つて勞働運動に警戒せるは、決して勞働者に資本家の横暴に屈すべきを勸めたのではなくして、大いに資本家と戰ふべきではあるが、只其戰に於て守るべき道を踏み外づすなと戒めたに外ならない。

坂口氏は勞働運動は元來が一の反抗運動であるといはるゝ、斯くなるのは必然であるといはれて居るが、此點には異議がない。勞働運動は勞働者の運動でなければならぬ。從つて資本家に對する反抗としてあらはるゝのは必然の勢であらう。併しながら必然は必ずしも當然ではない。勞働運動は反抗運動としてのみ有效に起り得ると云ふに誤りはないが、併し反抗運動で固まつてはならない。其上に勞働者とか資本家とか云ふ區別を超越した、高い普遍的の立場を掴むことを忘れてはならないと云ふのが予の人道主義の立場である。人道主義を説いたからと云つて勞働者に無抵抗主義を取れと勸めるのでは斷じてない。要するに資本家があゝ出たから勞働者は斯う出るといふ風に差別に拘泥しては、勞働運動は決して純なるを得ない。予の人道主義を資本家の武器といふ風に、差別的に坂口氏は解して居らるるが、予の眞意は差別を超越した高い立場から、折角起つた勞働運動の純眞を維持し、近頃段々附き纏つたやうに見える幾多不純の分子を洗滌せんとするにあつた。

勞働運動は本來何處までも勞働者の運動でなければならない。智識階級の之に干與するは坂口氏のいはるゝ如く勞働者にとつて有難迷惑でもあらうが、また一般の見地から見て正しいことでもない。併し今日の所、有難迷惑といはれても知識階級の入つて行くべき餘地もあれば必要もあり、否な勞働者自身大いに之を歡迎して居ると云ふ事實は爭ひ難い。予輩は我國の勞働運動が智識階級の參與を必要とせざる日の一日も速に來らんことを希望するけれども、併し若し當分彼等の入つて行く餘地ありとすれば、彼等の勞働運動の指導乃至助成の方針は予の茲に述ぶる所と同一でなければならい。斯くして予は最後に斷言する。智識階級は勞働運動の熱心なる味方たるべくして勞働者の味方であつてはならない。勞働者も亦智識階級に俟つに自分達の正しい要求の味方を以てすべく、一から十まで自分達の要求を聽いて呉れる友人と狎れてはいけない。

思潮

中澤臨川

「覺えがき」より

正義も自由も手段

◎今日世の中に行はれてゐるいろ〳〵の社會改造論を細かに檢べて見ると、そこには樣々の缺點が發見される。それらは無論已むを得ない事情から起つたものが多い。我等の志さす社會改造の動機は、主として今の人類の大多數を惱ましつゝある生活の缺乏及不安といふこと、是等の人たちの毎日從事しつゝある勞働の耐えがたき苦痛といふこと、の二つの事情に基いてゐるので、かやうに逼迫した狀態を對照として現はれる方策が、焦眉の急に應ずる必要から、勢ひ捷逕に流れ、近視眼的になり、遠い未來の考慮を忘れ勝ちであるのは、諒とすべきである。

◎マルクス社會主義の根柢をなす動機、乃至主本感情は、資本家又は中流階級に對する劇しい憎惡である。彼は今日の社會組織を以て少數資本家が多數勞働者を掠奪する奴隷制度であると見てゐる。彼の心は一圖にこの不正義に對する憤怒の爲めに燃えた。その憎惡及憤怒が彼の優れた科學的才能を驅り立てゝ、彼をして浩瀚な『資本論』を成さしめたのであると言へる。彼の勞働掠奪論即ち餘剩價値説は資本主義に對する彼の嚴しい復讐である。

◎此の如く、マルクス主義は社會的不正義の現象にのみ重きを置いた爲めに、勢ひ所得の公平な分配といふことが斯の主義の唯一の目的となつた。然るに現代人の心に蟠まる深い不安の病根は、ひとり貧困からのみ發するのではない。それよりももつと深い自由の欲求が癒やされずして横はつてゐる。

◎動機が「有つ者」に對する「有たざる者」の嫉妬憎惡であり、而して要求が物的財の分配であるから、かやうな主義の赴く前途ほど危險なものはない。それに未來に物質的幸福の黄金世界を約束する主義は、無學の貧困者にとつては棚から牡丹餅の話であるだけ、それは聞耳に入り易いことにとつて見え、同時

に同じ理由によつて墮落の淵に踏み入つたのである。勿論之はマルクスの豫想しなんだところであらうが、彼が餘りに社會的正義のみを力說して、自由に對する考慮を忘れたといふことは、彼の主義の將來を誤らした主要原因である。

◎マルクス主義が正義の要求に重きを置いて、自由の理想を虐たげた事實に對し反對の聲を舉げたのがサンヂカリズムやギルド社會主義である。然るにここにも亦同樣の誤りが繰返された。彼等は現代の奴隷制度に對する切實な反抗から、社會的自由を以て人間の要求する唯一最高の理想である如く思ひ做した。コールの詞どほり『凡ての眞實なる社會主義の終局目標であるところの自由』が、彼等の要求するアルフアで同時にオメガであつた。

◎然るに、正義は一度實現された後に於てはそれ以上新らしき生活の源を持たぬやうに、自由もまた一度實現された後には何等建設的生命力を有しない。社會的正義と社會的自由とは共に消極的原則たるに止まつてゐる。それ等は在來の惡い制度に對する反抗の聲としては可いが、生命を益する積極的條件としては役立たない。

◎大多數の貧乏が逼迫した社會的現象である時に正義の要求が聲高く叫ばれ、大多數の奴隷的生活が同じく逼迫した社會的現象であるときに自由の要求が強く描かれるといふことは、いかにも自然である。かやうな要求は至當過ぎるほど至當であつて、我等の良心はこの聲を聞かずに過ごすわけにはいかない。併し是等の聲がどれだけ時代の最大要求であるにしても、この爲めに我等の耳が聾せられてはならない。「最大」といふことは「唯一」といふことではないのだ。

◎社會的正義も社會的自由も、共に生命の手段たるに過ぎない。正義が與へられ、自由が保證されることは善いことではあるが、それは人間の眞活動の第一歩である。我等の終局目的は他にある。それは社會から與へられるものでなくて、自分の中から發現するものである。『私は自由が凡ての寶のうちの最大なものだとは言はない。最も善き物は内部から來る――それは創造的藝術、愛、思想などである。かやうな物は政治的條件によつて保護されたり、妨げられたりするが、併しその爲めに作り出されるのではない』とラッセルの言つてゐるのは至言である。

◎之に對して或人はかういふ。お前の言つてゐることは如何にも尤な說には相違ないが、併しそれは理想家の閑思想といふものだ。今の逼迫した社會に於ては、われ等は現實に必要であるところの正義なり自由なりを一向專念に要求するだけで十分

だ。われ等の求める第一の要求が充されさへすれば、その後の事はまだどうにもなる。お前の言ふてゐる樣な生温るい理想は却つて我等の實行を鈍らす有害の刄物だと。それに對し私は次の如く答へる。あなたの言は所謂「實際家」の能く使ふ下手な口實に過ぎないので、われ等の實行が眞に有效である爲めには、それより先にわれ等の理想は最も精錬されたものであらねばならぬ。われ等の矢は最も確實な的を目掛けて射られねばならぬ。われ等の目的の達せられようとする瞬間までは、之に對して採る行動はどの主義に於ても殆んど變るところがないやうではあるが、併しその目的の僅かでも達せられ始めた曉からは、例へば正義を主目的とする國家社會主義と自由を主目的とするギルド社會主義とでは、その道は忽に南北の兩極に背反して進む。二つの主義の志ざす港は千里を距てゝゐるので、お互の船は寧ろ永久に相逢ふ機會がない。であるから、そのどちらの船を撰ぶかによつて未來の人類の運命に取返しの附かないとが起る。

◎矢は既に絃を離れたではないか。船はもう港を出たではないか。用意せよ、今の第一歩が何物にもましてわれ等には肝要である。

勞働の意義

今日の社會生活の逼迫した要求から、正義及び自由の聲が高く唱へられると同じやうに、現代の大多數を强制しつゝある勞働に伴ふ堪ゆべからざる苦痛から、いかにして勞働を愉快なものにし安樂なものにしようかといふ救濟策が研究されつゝある。賃銀奴隷と極端な分業制度とが、どれだけ人間の製作慾を殺し、創意を無みし、唯だの機械の番人として今日の勞働者の一生を了らせ、その爲めに彼等の生命がいかに不具的に傷害されるかといふことは、考へるだけでも恐ろしいことである。之は實際由々しい罪惡であり、そして人間の驚くべき浪費である。されば勞働の改善は、正義や自由の要求と並んで、現代の社會改造の重要な一因子である。

◎で、之に對していろ／＼の藥策が提唱せられてゐる。生産者の立場を尊重して勞働組合又はギルド組織の如き自治制度を採用することが一策。定業の代りに混業を以てすること——即ち一人の職業を一つに限らないで二三の違つた職業を以てすること——それには一日の仕事の種類を幾回か變へるとか、冬は工業に夏は農業に就かしめるとかするのが一策。農場と工場とを分立させないで勞働の綜合を行ふのが一策。極端な分業の弊を矯正する爲に或る程度まで中世紀時代の手工制度を復活させるのが一策、そのほかにもいろ／＼[illegible]。

◎これらの名案は皆な苦い思想であつて、われ等の理想とする社會の勞働は、成るべく苦痛の代りに快樂が置き代へられて、能ふべくんば花に働く蜜蜂のそれの如くであつて欲しい。併しそれは他愛のない理想である。寧ろ私の恐れるのは、勞働に伴ふ現在の苦痛の餘りに色濃い爲めに、その「快樂」といふことが何よりも重要な要求であるかの如く主張される結果は、勞働者をして怠惰な妄想に耽らしめ、引いては勞働の眞意義が誤解されるに到りはしまいかといふことである。

◎智識や藝術や戀愛や、このほか人生の眞面目な事業の目的が單なる快樂でない如く、勞働の目的も亦快樂ではない。智識や藝術やがその追求に當つて並一通りでない努力を要する如く、眞の勞働も亦必然に努力を伴ふ。勞働は人生の本然要求であり、それ自らのうちに目的を持つ生の發現であり一の眞劍(アーネスト)な生活様式である。然に今日の我等は勞働を餘りに方便視してゐる。最も若き社會改造論でさへが、勞働の苦痛を除去して快樂を増す方法を説くばかりで、その眞目的を教へてゐるのではない。

◎一たいに現代の社會改造論は、人生の意義に對して餘りに樂天的であり、安價なエピキュリズムに墮した嫌ひがある。或るものは物質的の黄金世界(ミレンニアム)を約束し、或るものは遊惰な逸民の理想を説いてゐる。その間に立つて、ひとりサンチカリズムの思想家が飽くまで悲壯な人生觀の上に立ち、英雄的で崇高な行爲を貴び、幻滅的であり乍ら勇敢に、厭世的であり乍ら理想を擁守するところに、一味の眞實な人生味を見出すのである。然るにわれ等の忘れてならないことは、人生は努力の價であつて、生命の大旨(むね)は「忍苦」であるといふことである。社會的正義と自由とは僅かに我等の生活から外部的苦痛を除去してくれるだらうが、我等の生命それ自らが生れ乍らにはぐくんでゐる忍苦に觸れる力はない。われ等の眞の幸福は社會が與へてくれるものでなくて、われ等自身の努力が築き上げねばならぬものである。そこに我等の『苦惨な、併し貴い處世法』がある。われ等の勞働もまたこの貴い處世法の一つである。食ふ爲めには我等は働かねばならぬ。肉體を索いて生れた人間が、先づ第一に生きる爲めに筋肉を働かすといふことは必須な自然の法則でもあり、且つ一番最初の義務でもある。アダム以來、あらゆる人間の智慧を以つてしても、額に汗せずして食ふ方法はまだ發見されぬではないか(他人の勞働を掠奪するずるい道は別として)。

これを昔から勞働の深い意義を現はしたものにミレーの繪ほどの者はない。「私のプログラムは勞働である。萬人は肉體的刑罰の運命を以て生れた。「汝の額に汗して汝は汝のパンを食へ」とは幾世紀以前に書かれた詞である。これは決して變らぬ、可

勁の運命である』と彼の言つてゐるとほり、彼は勞働の必須を人に敎へる。彼の藝術は自然と人間との大眞面目(おほまじめ)な戰の記錄である。『……耕作地に於てもお前は是等の人間が土を掘つてゐるのを見るだらう。時どきお前はその一人が彼の腰を延ばし、そして彼の手背を以て彼の前額の汗をふいてゐるのを見るだらう。之が或人々の考へてゐるやうに惱み半分の樂しい勞働だらうか。併し私にとつては之ゝに眞の人生(ヒューマニチー)、偉大なる詩がある』と。

◎この『眞の人生』——勞働——は、ミレーにとつてはすべて苦惱なものであつた。生きとして生ける者の避くべからざる、また避けてはならない勞働の苦痛、義務、神聖、敎訓を現はし、同時にこの重い苦痛な義務の中からその貴い詩と生の意義とを發見することが、彼の藝術の使命であつた。ミレーの暦(こよみ)には祭日がなかつた——恵み深き死の瞬間までは。彼の畫は春の種蒔きから冬の薪採りまで、永い一生の戰の縮圖を示したものに過ぎない。あの『鍬を持つ男』の夕陽に照した疲れた筋張つた顔を看よ。あの重い荷物を肩にして手と足とに力の這入つた『樵夫(きこり)の歸り』を看よ。石の上に腰を下ろした『休息』の若者の表情を看よ。彼は婦人にさへ劇しい勞働を課した。あの『落穂拾ひ』を看よ。『枝を集める人々』を看よ。是等の畫の見ては、勞働を一の神聖な法則として、萬人の上に強いられた宗敎的の運命として、我等の心に不可抗な威力を感ぜしめる。

◎勞働は力である。されはミレーの「人々」は強い自力の人たちでなければならない。あの『種蒔き』を看よ、あの『鍬鍛ひ』を看よ、あの『耕作者』の中に並んだ二人の若者を看よ。

◎劇しい勞働、避くべからざる義務の苦惱——そこに眞の人生の味ひがあり、やがてその後に恵み深い安泰の死がある。

"Thy life thou shalt gain
In the sweat of thy brow;
After long toil and pain
Death beckons thee now."

(汝の額の汗で汝の生活を得よ、永い勞働と苦痛のあとで死が汝を招く。)

◎これが人生である。それを恨れて避ける者は人生それ自らを忌避するものである。腦の勞働を手の勞働よりも貴いものだと思ひ、又はどんな意味に於てでも筋肉勞働を免れようとする者は一種の怠惰者である。何つても看よ、生活に缺くことの能きない勞働が手を使はずに出來るか。例へば我等が科學者であり文學者であるとしても、よしんば又我等が英雄であり天才であり半聖であるとしても、筋肉勞働なしにパンの一片でも、敢

の一枚でも造り出すことが能きるか。原則としてはどうしてもお互は勞働の苦勞を分たねばならぬ。腦の勞働者が手の勞働を賤しみ嫌ふ心理は、支配人が書記の仕事を賤しみ、書記が鐵工の仕事を賤み、鐵工が車夫の仕事を賤み、車夫が溝浚ひの仕事を賤むと一般、その心根はずるい考である。現代の勞働論者はなぜそこまで突込んで教えてくれないのか。

◎併し最後に注意すべきことがある。先に述べたミレーの人生觀は餘りに厭世的である。新しいわれ等の未來は過去の基督教や佛教の教えた如き「勞苦」の福音にのみ囚はれてはならない。「幸福」は「勞苦」と同じく至大な生命の力であることを我等は忘れてはならない。

社會科學の改訂

◎社會的現象を取扱ふ科學、例へば法學、經濟學、社會學、史學などは、自然科學と違ひ、どうしても傳習に囚はれ勝ちで、時の權勢の謳歌と維持とに傾くのは已むをえないことである。トルストイの言つた如く、昔は大多數の人間が貧しい生活を營んでゐる事實を説明する爲めに神の意志を以てした。そしてかやうな生活の悲慘と不公平とは人間の手ではどうすることも能きない不可抗な法則の結果であるといふ意味の人生哲學が構成された。その爲めに無數の書物が書かれ、そして無數の説教が述べられた。然るに近代に入つてからは、かうした説明では自覺した多數の者を滿足さすことが能きなくなつたので、恰度あつらへ向きのやうに新しく流行り出した科學の形を籍りて、より込み入つたそしてより巧みな新説明が發見された。經濟學は幾多の學者の努力により、需用、供給、利子、利潤、價値、價格、賃銀の鐵則などいふ小六ケ敷い詞を定義し、それ等をデリケートな論理により複雜に關聯させることによつて、「不易」な法則を造り出した。そして今日在るが儘の社會の狀態は充分安全に辯護された。で、或る一部の人々が勞働を怠り乍ら贅澤な生活をしてゐることも、大多數の者が缺乏と不安との生活につながれてゐることも、それはみんな「學理」にかなつた現象であり、之を疑ふ者は無學のせいであると看做されてゐる。

◎アダム・スミス以來の經濟學は生產を先にして消費を後にしてゐる。いかにして物資が生產されるか、資本と勞働と機械とはどう働いて富が出來、それがどう消費されそしてどうすれば利潤が多く得られるかといふ事の説明は到り盡されてゐる。經濟學は私利の學問となり了せた。生產は需用の見地を離れて利潤の手段となつた。然るにもと〳〵人間の根本需用を充たすといふ要求が經濟活動の眞の動機であつて、いかにして需

くべきか、いかにして同じ資本からより多くの利潤を上ぐべきかといふことよりも、どうすれば萬人の物質的需用は最も平易に有效に充たされるかといふことが經濟學の正しい職務であらねばならぬ。かうした意味から言へば、今日の經濟組織は甚だ非能率的であり、今日の經濟學は本末顚倒である。クロポトキンの言つてゐる如く眞の經濟學は『人類の需用の研究、及びいかにすれば人間のエネルギーの最小消費を以てこの需用を充たしうるかといふ事の研究』であるべきである。われ等の經濟學は改訂の必要に迫られてゐる。

◎ひとり經濟學ばかりでなく、何れの社會科學に就ても同じ事が言ひ得られる。もう一つの例を史學にとつてみよう。歷史家は昔から阿諂者と型の極まつたものだといふ極端な罵倒もまんざら當らぬではない。歷史とは『過去の政治なり』と定義されて、君主や英雄の野心の跡のみを記錄された習慣が、不思議と今の民主時代まで生き殘つてゐるのが抑々おかしい。クローチェの言つてゐる如く、歷史的說明の規準として「マルクスの唯物史觀をみるときに、それは確かに有力な眞理である。大多數の民衆を動かした歷史は一の時代の狹義な政治的出來事でなくて、その時代の經濟組織である。人類の大半が毎日の時間の過半又は殆んど全部をその爲めに費し、且その爲めに生活の糧を與へてゐる仕事は、君主や英雄の野心的事業よりももつと重要であり、且つその時代の大骨を形造つた出來事である。人間の經濟活動は確かに何物にも增して社會的現象の骨髓である。それは民衆の性格を鑄冶し、一の時代の政治的及精神的出來事に深い印象を及ぼす。この意味から言へば、歷史の大半は民衆の經濟史又は勞働史でなければならない。かやうな意味にマルクスの唯物史觀をとるならば、マルクスは新史學の鼻祖としての偉人である。

◎どの道今の社會科學の凡ては根本から改訂さるべきものであらう。われ等は茲にも社會改造に伴ふ廣い分野を見出す。

「毒鼓」闇を破て其響天に冲す!!

「毒鼓」は日蓮主義宣傳の機關なり世人誤て日蓮主義を宗教の名と解す、不可也、這は思想道德政治經濟文藝社會等一切に對する根本性命にして亦その光の源なり現代紛々の諸問題は只此主義によりてのみ徹底解決を得べし、世界改築の原圖!問題解決の鍵!乃し本誌によりて提供せらる、世人よろしく一先づ一切の考察を中止して玆に新に想壇に警烽せる曾て思ひも付ざる新思想に接して曾て經驗せざりし最新文化に浴すべし

「毒鼓」は斯かる必要に因りて世に出でたり

「毒鼓」闇を破て其響天に冲す!!

日蓮主義 宣傳機關

毒鼓

主幹 田中智學

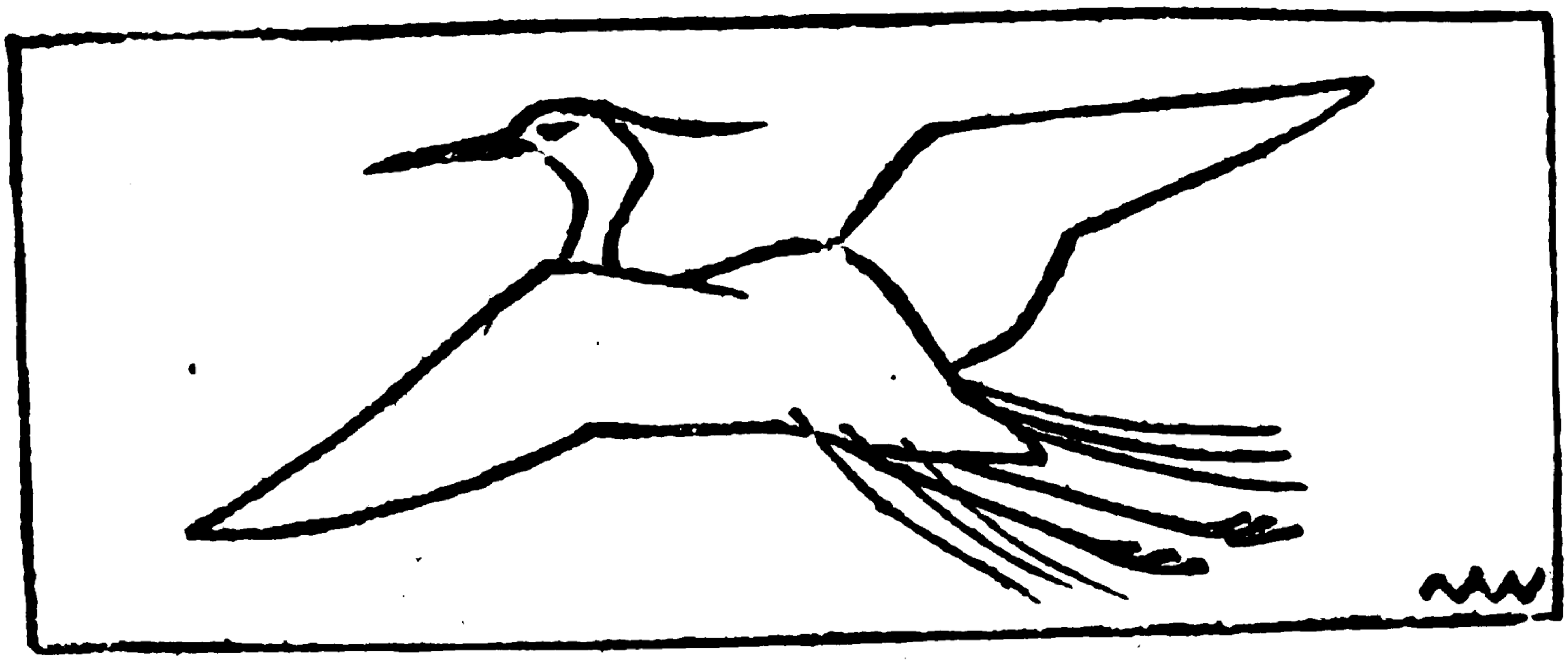
師子王文庫發行

創刊號

- 創刊の辭 …… 田中智學
- 唯物史觀と階級鬪爭說(さに對する吾人の感想) …… 山川智應
- 要するものは人間か日本人か …… 志村智鑑
- 「愛」の文藝より「恩」の文藝へ …… 河野桐谷
- 國際聯盟に對する吾人の疑ひ …… 螢澤藍川
- 加島法難 …… 中村旭鶯
- 勞働本位の家庭 …… [illegible]
- 英文「天壤無窮」 …… 桑原天寂譯
- 娛樂開題 …… 田中智學
- 東伊豆の印象 …… 霜田清藏
- 講和特使を乘せて …… 熱田丸船長 稻津幸次郎
- 電車日記(當今類なき快文) …… 簑農夫
- 降魔 …… 田中智學
- 國の聲 …… 田中智學
- 聖傳千言詩 …… 巴雷
- 脚本 加勢川の清正 …… 食滿南北
- 紀行 佐渡が島 …… 星野武勇
- ◎歡呼の聲(本誌を迎へて街上に轟く雷の如き歡呼の聲)
- 法華經の研究 …… 長瀧智大
- 日蓮聖人遺文の研究 …… 保坂智宙
- 光明の力暗黑の力 …… 星野武勇
- 人間的な日蓮聖人 …… 里見岸雄
- 日蓮主義より見たる神經衰弱 …… 清淵璉雪
- 社會主義の理想及空想 …… 豐田劍陵

(每月一回 一日發行) 發行所 (本號ニ限 金七拾錢)

東京上野うぐひす谷 師子王文庫 電話下谷一〇九〇 振替東京六六七



或る少女の死まで

室生犀星

遠いところで私を呼ぶ聲がするので、ふと眼をさますと、枕もとに宿のおかみが立つてゐた。それを見ながら私はまたうとうとと深い睡りに陷ちかかつた。

「是非會はなければならないと言つて、そとで誰方か待つていらしやいます。おやすみになつていらしやいますと言つても、是非會はなければならないつて――――。」

私はゆめうつつに聽いてゐたが、もしやと思つてはつとした。すると、ふしぎに頭がいちどに冷たくなつた。

「どんな人です。」

「眼の鋭い、いやな人です。とにかくおあひになつたらどう。居らしやいますと私そう申しておいたのですから。」

「ぢや階下へいま行きます。」

私は着物をきかへると、袂のところに泥が食つついたのが何時の間にか乾いたものであらう。さらさらとこぼれた。

したへ降りると、玄關の格子戸のそとに、日に焼けた脊の長い男が立つてゐた。見ると同時に、額からだらだられた血を思ひ出した。ふらふらして宿へかへつたとき、宿の時計が午前二時を指してゐたことと、宿のものが皆寢込んでひつそりしてゐたこととを思ひ出した。

「あなたですか。××さんと言はれるのは。」

といきなり田舍訛りのある言葉で言つた。

「然うです。ご用は。」

「私はこんなものです。」と一枚の名刺を出した。駒込署刑事何某とあつた。

「すぐ同行してもらひたいのです。昨夜は遲くおかへりでしたらうな。」

私はすぐに

「二時にかへつたのです。みな分つてゐます。いま着換えしますから。」

と、私は二階へあがると、泥のつかない着物を押入から取り出して着た。そして室の中を叮嚀に見廻した。ガマロの金を半分だけ机の曳出しに入れたが、こんどは辭書の中へ挿み込んだ。何故かこんなことをしなければならないやうな氣がした。くしやくしやになつた敷島の殼を反古籠に投げ込んで、ぬぎすてた着物も疊んだ。室が亂れてもないのを見て、ほつと安心した。

階下へ下りると、すぐ男とつれ立つて街路へ出た。男は私とならんで歩いてゐたが、私はその顔を「見ないやうに」して歩いた。もう新しい朝日が昇りはじめてゐた。商家の小僧らが表に水をまいたり、女中らが拭き掃除をしたりしてゐた。

駒込林町の裏町のまがりくねつた道を、私どもは默つて歩いた。男の紺の縦めた袖がちらちらと見えた。かれは私の右に添つてあるいてゐたからだ。この樹木の多い緑深い靜かな町の或る垣根を越えた幾本かの日向葵の花が、しづかに朝日をあびながらゆらりと揺れてゐるのが、特に山の手の朝らしく目に觸れた。表の通りを行いむつちりした二の腕を露はしに掃いてゐる、若い細君らしいのが、凝然と私どものあとを見送つたりしてゐた。總てが靜かに穏やかな、晴れ亘つた夏の朝の心に充ちてゐた。

私は深酒したのと酷い疲れとで、あたまがふらふらしてゐたが、それとは反對に心はハツキリと昨夜の出來事の逐一を辿つてゐた。まるで蜘蛛が糸を操るやうに、素早く、その光景を描いてゐた。

…………………………

S酒場は團子坂からやや根津へ寄つたところの、とりやや、淫賣屋の小路の中に、そまつな硝子戸を立てこんだ新しい建物からなり立つてゐて、そこの鍵形になつたチエブルの正面に、いろいろな酒瓶が處せまく竝　てあつて、そこにおかみが何時も座つてゐた。おかみは目の大きな、いきなところがあつたし、お世辭もよかつた、といふより、何よりも料理らしいものがなくて、ほんの酒専門であつた理由から貧しい私など、晩食前にはつい近くの下宿からよく通つて行つたのであつた。そこに鶴のやうにやせた十二三の女の子がゐて、よくお酌をしてゐた。ときとすると此少女は睡りながら酌をすることがあるほど、ひどい睡眠不足にかかつてゐるらしかつたが、睡りながら酌いでゐて　、特に酒を零すといふやうなこともないほど上手であつた。たとへば上野などのあの繁雜な人通りや車馬の劇しく通るところで能く睡りながら車をひく商家の小僧が居るやうに、それが特に自動車　完全に役目を果すやうに、この少女もときどき睡りながら、ゆめを見ながら酌をして

くる少女によく似てゐ

この少女の二重になつた目は大きく、微笑ふと、可憐な子の長い男が立つてゐた。見ると同時、

た。私などのやうに毎月行くものに對しても別に何もしやべら時が午前二時を指してゐな

「入らしやいまし。」とか、「おかへりなさい。」としか言はないほど、默つた子であつた。唯かの女をとり立てて言へば、いつも渝りない不斷な、やさしい少女らしい頰笑みをもつてゐたことであつた。心から可笑しいといふことが無くとも、ただ、平和な、純潔な、持つて生れたままの頰笑であつた。

私はこの少女を見てゐると、この少女の母親のことがよく考へられた。この子のやうにやはり善良な微笑につつまれた女のやうに、わけても自分の子供さへ手にかけて育てられない運命をもつてゐる女のやうに思はれた。事實、彼女の母はある飲屋に彼女を生み落すと同時に行衛不明になつてゐた。やはり街裏の垢じみた一室に苦しい淫をひさいでゐた女であつたことは、おかみからよく私は聽いてゐて知つてゐた。

おかみはこの少女をよく叱つた。けれども持ち前の頰笑みは叱られながらも彼女の顏に泛ぶので、よくおかみは

「この子はまるで馬鹿ちやんだ。何を言つても笑つてゐる。いやな子だ。」

と言つてよく小衝くことがあつた。そんなとき、この小さな子は

「ごめんなさいまし。」

と謝まつた。その大きな目は悲しさうにまたたいてゐたが、すぐ私たちの方を向くと、人の善い微笑が瞬と一しよに自然に流れるやうに浮んでくるのであつた。私はその泣き笑ひする目の複雜ではあつたが、その自然さにいつも惹きつけられた。ときとすると、白痴のやうにさへ思はれるほど、ぼおつとしたところに私は何んだか大變清純なものがあるやうに思はれた。性格的な微笑は私がS酒場へはいると同時にいつも向けられてくるのであつた。それが私の方に向く

と、私は私で、どういふ氣むづかしい時にでも、すぐ柔らかい心持になつて、可憐な微笑に對して、つい目で微笑つてやることがあつた。

あるとき

「お前は何かすきなものがあつたら言ひなさい。買つてきて上げるから。」

といふと、かの女は耻かんで、れいのあどけない微笑をしながら、すぐには返事をしないでゐた。

「ね。言つてごらん。」

と言ふと

「何んにもほしくないの。私、ほんとに何も買つてほしくないんです。」

と、心で欲しいと思つても、いつも頑固に口ではいらないと言つてゐた。しかし時たまおつりなどがあると、そつとこの子に握らせると、嬉しさうに小さい手の中で揉んだり撫でたりしてゐた。

こんな親しみがあつたので、私のみならず此界隈の畫かきなども、夜おそくまで飲んでゐることがあつた。

ある晩、私はぶらぶら此酒場の前までくると、そこにHとOとが椅子に座りながら飲んでゐるのが見えた。止さうかと思ひながらも通りすぎやうとすると、れいの少女がすぐ硝子戸越しに私を見つけた。

HとOとはかなりに醉つてゐた。Oは醉へば醉はない振りをする男で、いつでも梟のやうに喉の奥で笑ふくせがあつた。

Hはときどき、女の子の大きな目を見てゐたが、

「氣味のわるい目だ。」

などと言つてゐた。

涼しい風がときどき通りから吹いてきたりして、私はつい深酒をしてしまつた。そこへ表から踊り込んだ男がゐた。大學の制帽を冠つてゐたが、胸が開がつてかなり醉つてゐたらしかつた。

「君達に一杯あげやう。酒は一人ぢやつまらない。」

と、その大學生は徳利を持つて、私達ちについで廻つた。かうした酒場にありがちな、だらしのない飲み仲間が得て出來るものであるが、この晩もみんな醉つて譯の判らないことを饒舌りながら騷いでゐた。

そこへ遊び人風な、日燒けのした、下駄のやうに粗雜な感じの男が、その妻らしい脹に太つた女をつれて這入つて來た。間もなく酒が遲いとか何とか言つて、可愛想な少女を急かしつけてゐた。さういふとき、彼女はかなりに慣れてゐたけれど、その目は悲しさうに寧ろ對手を靜かに愼しませるやうな表情をするのであつた。

「早くしてくださいな。なんてのろまな子だらう。」

と、その妻らしいのも言葉を添えた。

少女は、ちらとその妻らしいのに目をくれたが、すぐまた悲しさうに「そんなに言ふものぢやありません。」とでも囁くやうな目をした。まもなく例の微笑をたたへて奧の方へ酒をとりに行つた。

「あんなに叱らなくてもよささうだね。あの子に何のつみがあるものか。」

と私はHに囁いた。

男はたへず私達ちの方を見てゐたが、こんな酒場にありがちな、無意味な、幾分蔑しみを含んだ視線が互ひにとり交されてゐた。酒の癖のわるいOは舌打ちさへして、Oらしい睨み顔をしたりした。得てこのOはよくこんな見え透いたこ

とゝやつた。

醫科の學生は聞えがしに

「弱いものさへ見れば慘めたがる奴がゐるものさ。」

などと言つた。すると、かれは險しい目つきをして此方をにらんだ。

私はあの男が這入つて來た瞬間から、何かしら不吉な、一種の挑み合つた相互の感情が暗々裡に次第に膨脹されるのを知つた。何處となく張りつめたやうな、反感的な窮屈な氣分が、靜かに時の移るにしたがつて、だいぶ危險な空氣をさへ豫覺させた。

私達は何か高く話してゐたが、どつと一時に笑ひ聲をあげると、耐へかねてゐたやうに男はどなつた。

「ずいぶん騷ぎやがる。」

と、すると一番醉つてゐた學生は、ぐつと蛇のやうに首をあげて叫んだ。

「騷ごうが騷ぐまいが此方の勝手だ。引込んでゐた方がいい。」

と言ひ返すと、

「もう一度言つて見ろ。なまいきな。」

と、男は少し中腰になつて大學生を憎々しげに睨んだ。それがいかにも闘々しいゴロツキ肌な、厭味たつぷりなものであつた。大學生は、私が見てゐてはつとする間もなく、もう手に持つてゐた玻璃の盃を男を目がけて投げつけた。男は野獸のやうに猛々しく何か叫んだが、盃はかれの頭をかすめて、うしろの壁にあたつて微塵に碎けた。男は「何をする」と言つて大學生に飛びかかつた。二人は拳固でなぐり合つてゐたが すぐ表の方へ組み合つたまま飛び出した。

Hも出た。Oも出た。

すると、かれの連れて來た女は、さつきからはらはらしてゐたが、組み合つて外へ出るのを見ると、いきなり私に飛びついた。

「あたしの旦那をどうしやうとするんです。」と、まるで氣狂ひのやうに、私の胸もとにしやぶりついたので、私は呆れかへつて、その女の生白い、きかぬ氣な尖つた鼻を見つめてゐたが、

「表です。おかどちがひです。」と、私は汚らはしいやうな氣がして、表へつき出すやうにした。女はすぐ表へ出て行つた。私はその瞬間、兇暴な、動物的な荒い呼吸がからだのどこから吐かれるかと思ふほど、ひどい鼓動を到るところに感じた。何者にむかつて發せられるといふことのない激しい怒りが、まるで私の上から下からとから壓してくるのであつた。

私はそのとき、酒場の隅の方で小さくなつて恐怖にわなないてゐる少女を見た。かの女の目はこれより外に大きくはなるまいと思はれるほど大きく開かれて、その中にかつて見たことのない深い悲しさが顫えてゐるのを見た。手も足もその目も、すべて小さな體軀が凝つたやうに動かないで、ぢつと酒樽の陰に蹲んでゐるのを見た。それは雀のやうにすくみ上つても見えたし、また別な、嚴肅な、荒々しい外部を愼しめてゐる小さな怒りのやうにも思へた。

酒場のそとは荒々しい土を踏む音や、土に踵の擦られるけはひや、叫び、肉體と肉體とが揉み合つたり撲ぐり合つたりしてゐる音がした。例の男の太い掠れた叫びや、金切聲をあげてゐる女、酒場の亭主の仲裁する聲などが、交錯された一瞬間に最も猛々しい生命の動物性を煽り立てた、私は表へとび出して行つた。

例の大學生はしやぶりついてくる女を、溝際へ押しよせてゐた。男はそれを見ると、火のやうになつて大學生に飛び

ついて行つて、その頭蓋骨をめがけて擲りつけた。大學生はふらふらとしたが、すぐにかれの額を擲りつけたが、そのとき、かれは素早く、そこにあつた下駄を投げつけておいて、くらい路次から逃げ出した。Hはもう居なかつた。何處についても自分の不利なことのきらひなかれは、もうそこらに居さうもなかつた。

Oは硝子戸ぎわに立つてゐた。まるでかれはそこを助けなかつたほど、あのゴロツキから叩かれたのであつた。ゴロツキの喧嘩は上手であつたばかりではなく、腕も強かつた。

私が酒場のそとへ、ひよこりと出かけると男はいきなり私の前に立ち塞がつた。

「てめえもぐるだな。」

と、凄い凶暴な、野獣のやうに飛びかかつた。

私は先方の手をくぐつておいて、その後ろから、殆んど蔽ひかぶさるやうにして、仰向けに引きずり倒した。そのとき私の着物の裾がゴロツキの下駄に踏まれて、めりめりと綿類どくとくの裂かれる弱いやうで鋭い音を立てたのを聞いた。

私はいきなり彼れを溝瀆へ押し込んだ。偶然にそこは溝だつたので、私をよい位置にした。ところが彼れは溝にはまつたまゝ、いきなり下駄で私の頭をがんとはりつけた。頭がぶんと鳴つて、私は足をさらはれたやうにふらふらとうしろ退さりした。そして酒場の硝子窓に倒れた。私はその瞬間、今夜は室にゐて靜かに本をよんで居ればいいと思つたが氣が遠くなるやうな氣がした。そこへ男がいきなり飛びかかつて來た。そのとき、よこから誰か來て男の額を太い杖で擲つたらしかつた。私はハツキリした意識のもとに、うしろの硝子戸につかまりながら……男の額からだらだらと血の流れるのを見た。表は一方が空地であつたために暗かつたが、酒場のあかりでぼんやりではあつたが、その日燒した顏

の皺といふ皺に溝をつくつて流れるどす黑いものを私はぢつと見た。そしてあの杖がこふして彼れの額を割らなかつたら、私はやられてゐると思つた。

彼れはふらふらと背後へ倒れかかると、その妻の手に抱かれた。かれの容貌は見る見るうちに蒼ざめて行つた。

「旦那のあたまを割つた奴はどいつだ。」

と、女は高い、狂ひ上つたやうに叫び立てた。

「皆さん。巡査を呼んで來て下さい。」

とも叫んだ。

いつの間にか群衆は一杯になつて、彼れのまはりをとりまいた。私はそのとき、この群衆のどよみのうちから、まるで群衆の一人のやうになつて、すりぬけた。それほど、人込みが多かつた。

私は太田ヶ原から湧く淸水が、この酒場からそんなに遠くないことを知つてゐたので、いたむ頭をかかへながら千駄木町の裏から裏へと歩いた。うしろから趁はれるやうな、絶えざる強迫觀念におそはれながら、まるで一人のさびしい犯罪者の落ちてゆくやうに、小路のまがり角なので、ていねいに今來た方を地べたに眼をくつつけるやうに透して見たりして、尾行者の有無をたしかめた。不意に垣根のところから手が出てくるやうな氣がしたり、また、ふと跫音がきこえて來たりした。酒はさめかかつてゐたが、頭の底にからみつい痙痛がずきずきして、耳は絶えず早鐘のやうに鳴つたり、叫びごゑが、ふいときこえたりした。

夜は靜かに更けてしつとりした雜草の囁きとともに、淸水の流れのあたりには、靑く澄んだ星の一つ一つが映つてゐた。私はハンカチを冷たい水にひたして、あたまをひたした。水の冷たさはあたまの熱をだんだんに醒ましてゆくに從

つて、私は今夜の出來事をまるで一つの夢のやうに、ずつと遠いところにあるやうな氣がし出した。ああして挑み合つた恐ろしい光景が、その理由が何であつても決して許されるものでないことを考へると、私は烈しい後悔のために、自分の生涯を汚したやうな氣がした。ただ、あれらの出來事にかかはつただけでも、自分のなかに惡い凶暴なもののあるのを知つた。

私は永い間清水の溜りにしやがんでゐた。からだの節々はひどく痛み出して、すぐ立つて歩けさうにも思はれなかつた。東京には珍らしいこの太田ケ原の林のなかは、若い灌木のしげみからも雜草のくらい高まつたところからも、いろいろの秋近い蟲の聲がしてゐて、人通りさへもなかつた。私はときをり新聞などで泥坊や殺人犯人などが潜伏する場合もきつとこんな夜で、こんな處にちがひないと考へると、急に大きな犯罪を負つてゐるやうな重みと苦しみを感じ出した。

私は過敏になつて聽耳を立てたり、人が來はしないかとくらい星あかりのした稍々白い道路のかなたを眺めたりした。

私はもういちど酒場へ行つて見やうと思つたが、足がふらふらして行けさうもなかつた。いま下手に行つて詰らない目に會つてはならないといふ考へと、また、いま行けば非常な不幸があるやうな氣もするのであつた。

私はしばらくして宿の方へかへつて行つた。どこの家もみな深く睡り込んで、それがいかにも幸福な、私にかかはつてゐない平和な睡りであるやうに思はれた。私もああして、靜かにねむつてゐられたのだと、灯のもれる二階を眺めたりした。どこかの時計が二つ打つた。午前二時であることがハツキリと頭のなかに入つた。遠くで鷄が鳴いた。

……………………………

駒込警察署の門の前まで來ると、刑事は私をさきに歩かせた。私に花崗石の嚴めしい門を潜つたとき烈しい胸さわぎと辱しめとを殆ど同時に感じた。

私は小使室のところで「待つてゐてくれるやうに」と言はれて、そこに腰をおろしてゐたが間もなく、さきの男がやつて來て

「此方へ來たまへ。」

と言つて拘留室の前の、小さな床几を指さした。私はそこに腰をおろした。ふと氣がつくと共處にOも來てゐた。Oは私を見ると苦笑しながら、目で「とうだう來たかね。」と言ふやうであつた。

私を見るとOは

「昨夜から此處に來てゐるんだ。對手が惡かつた。」

と低い聲で囁いた。

「僕は寢込みを起されたのだ。君が住所を言つたのだらう。」

「でもかうなつちや仕樣がないぢやないか。」

と言つた。その蒼白い、睡眠不足な顏はところどころ腫れたやうになつて、眼が疲れて光がなかつた。

私は默つて今まで薄暗くてよく見えなかつた四邊を見た。私だちのゐる兩側が嚴丈な格子になつてゐて、恰度、芝居などで見る昔の牢屋と同じだつた。左の方に入口がついてゐて、そこに重い錠がかかつてゐた。それからもう一つは、食物や水を入れる口がついてゐた。明り窓から射す鈍い光線でよく見ると、二人ばかり拘留されてゐるのが、時々、曖闇な内部でむづむづと動いたりしてゐて、まるで檻の中の獸のやうに重々しく陰氣であるばかりではなく、とき折、小さな控へ目な咳をしたりするのが何となく不自然な氣がするのであつた。なぜといふにその精肝な咳の音はあまりに健康で、こんな病的な暗い檻の中から起つてくるものとは思へないからであつた。

この陰氣な濁り氣のある、蒸したやうな空氣のなかに實に非常な澤山な蚊が群をつくつては私を襲ふた。精神的にも肉體的にも弱點を持つた人間を毎時もこうして襲ふだらうと思はれる蚊のむれは、私の足や手や顏や、さういふ着物から外部へ出た肉體を目がけて、殆んど暴君のやうな逞しい勢ひで拂つてゐる暇もなく襲つてくるのであつた。しかも蚊を見分けることのできないあたりの薄暗さは、刺してしまつて痒さを感じたあとでなければ、それらを追ひ拂ふことができなかつた。たとへば足の一部を拂つてゐる間に、こんどは頰のあたりを刺して來たりして、苛々しい、しかしどうにもならない苦しさを感じるのであつた。

私は彼の男を傷つけはしない。あの男の額を破つたものは私より別にある。しかしあの時あの杖がかれに加へられなかつたら私はどうなるだらう。と考へ込んだ。そしてOの蒼い顏をしづかに眺めた。Oはだいぶさきから脚氣で足をわるくしてゐたので、かれは板敷の上に座つてゐた。

「ひどい蚊だね。」

と、Oは嗄れたやうな、睡り聲で言つた。

「ほんとにひどい蚊だ。」

と私は心からこの小さな憎惡すべき昆蟲の襲擊を呪ふた。殆んど無抵抗的な條件の下に座らされた檻の內部からも、力のない蚊をはらう音がぱたぱた聞えた。それが實に衰へた寂しい音だ。

拘留室の巡査は一時間ごとに交代した。そのたびごとに騷々しい靴の音ががりがりした。黑板に私とOとの名前が記された。私はそれをふしぎに加之も別人のやうな心持でながめてゐた。他に拘留二、とあつた。

巡査はOに檻房の中に入るやうに言つた。Oはしかめ面をしながら、小さな入口から這入りかけると

「帶を解くんだ。」

とどなつた。私は持ち物を調べられたあとになつても、別に內部へ這入れといふことを言はないので私はO一人入れるのは不當なやうな、氣の毒にも思つた。

「僕も一しよに入れてくれませんか、二人とも同じい事件にかかはつてゐるんですから……」

といふと、

「此方に考へがあるのだ。君はそこに居ればいい。」

と、投げつけるやうに言つた。私は唇をかんだ。そしてOが杖でやつたことを警察でも知つてゐるんだなと思つた。私はOをぢつと見詰めた。Oはその蒼白な顏をそとの方に向けて座つてゐた。Oと私とは十年來の友であつた。私はかれの心持ちを考へると、どんなにつらいだらうと考へた。私は看視してゐる者の帶劍がからだを動かすたびごとに、金屬的な不快な音を立てるのをききながら、かれらに感情があるだらうかとさへ、極端な憎惡をもつて憎々しく眺めた。

私の座つてゐるところからすぐ廊下になつて街路の明るい日光に照らされてゐる一部をも眺めることができた。わづか二時間あまりも此暗いところに座つてゐる間に、私は街路や世間の生活が非常に遠いところにあるやうな氣がしだした。羅宇屋や學生や、若い女などが通つてゆくのが皆樂しく明るく幸福で、しかも私どものやうな暗い心持でゐる人間が此世界に存在してゐないやうに、また然ういふ想像をさへしたことがないほど、みな喜ばしく歩いてゆくやうに思はれた。ことに町家の屋根の上から覗いてゐる木の葉のゆれるのが、實に爽やかで水水しく美しい線をたたへて、私の心の奧までしみ亘つた。そのうららかに晴れあがつた夏の午前らしい日光の鮮やかさ快活さ喜ばしさが、これまでに見たことも經驗したこともない强く深い愛をもつて眺められるのであつた。私はその明るい芳ばしい日光の匂ひをさへ嗅ぐ

やうにしたのであつた。

私はとても此處を出られさうにも思はれなかつた。たとへどういふ理由があるにしても、私どもは示談ですむことを知つてゐたし、また私自らが加へた傷でないことも分つてゐたが、それらの出來事とは全然別な意味で、殆んど精神的に病的な陰鬱な、いろいろな暗いものがよつてたかつて「此處を永久に出られないやう」にさへ思はせるのであつた。ことにああいふ明るい街路の存在が、もう二時間以內ここに座つてからといふものは、とても再び愉快にそこを歩いてゆけないやうに思はせるのであつた。

私は私のあの靜かな下宿の窓を埋めて繁つた椎の葉や、落ちついて仕事をしてゐる自分の姿を思ひ浮べて、さらにこの暗い限られた世界の窮屈さをしみじみ感じた。

そこへ一人の若い酌婦らしい女が、これもやはり鳥打帽をかむつた刑事に連れられて入つてきた。そして、すぐ私の傍の床几に座らせられた。

「ここで暫らく待つてゐるんだ。」

と荒く言つて去つた。

女は垢ぬけのした、いろの白い、あだつぽい何處か酌婦らしい艶々した手足が、よく肥えてゐた。この女がくると同時に、一種の安つぽい香料ではあつたが、それでもまるで春が來たやうに靜かに匂ひをあたりに漂はした。それからまた女の夏の肉體から蒸せるやうな、しつこい匂ひが煙を投げつけるやうに、すぐ隣にゐる私ににほふて來た。

巡査が來て黒板に淫賣一、と書き加へた。女はそれを見ると何か口のうちでぶつぶつ言ひながら、唇を結んだやうにして、皮肉に薄笑をした。それが反抗的な、執念深いやうな強い目つきの中にも讀まれた。

監房の中のくらやみから、そつと猫のやうに這ひ出してきた二つの顔が、格子の間からしつこく女の方に向つて現はれてきて、じつと動かない飢えた目の光が看視の隙をねらつては發せられた。一週間も二週間もこの暗いところに生活してゐるかれらは、ただ、それは一疋の這ふものとしか思はれなかつた。(事實に於て監房は頭がつかへるほど天井が低かつたとあとでOが言つてゐた。)かれらは水を貰ふときも何時も膝頭で歩くので、いつも中腰になつたりしてゐた。ことに女を眺めに出てきた二つの顔は、まるで這つてゐるもののうちでも最も畸形な獸であつた。

女はすぐに格子のすきから覗くいくつかの目の光を、殆んど直覺的に感じ出すと、輕蔑したやうな薄笑ひを催して、これもまた格子の内部をじいつと窺ふてゐた。これらの光景は一人の看視のからだの動くのにつれて、あるものは稲妻のやうに調子をかへて真面目な顔をよそほひ、這ふものは鼠のやうに音をも立てずに姿をかくした。そうかと思ふとまたすぐ顔があらはれたりした。

私はまるで一枚の紙片のやうに白く浮いてゐる女の素足を見るともなく見てゐるうちに、Oの鋭い視線を自分の額にこれと感じると、私は監房のなかのかれを見た。かれは端然と坐つてそして私を正面に見た。そして期せずして兩方から何者を冷笑したといふこともない標準のない冷たい微笑をとり合はした。それは、ただ、その中に挿まれた兩方の感情を直覺することによつて理解された。明らかに、Oは持前の圖々しいやうな目つきで、私とならんでゐる女のことを、なにか囁いてゐるらしかつた。

しばらくすると、女は膝に手を置いて、じづかに居睡りをはじめ出した。その疲れた、ぐつたりした餅のやうに亂次のないからだは、まるで柔らかく居睡りするたびごとに、全體を少しづつ動かしてゐた。私はかの女がこの内部にあつてもそれほど恐怖してゐない常習犯であることを知つた。かの女にとつては、まるで一疋の鈴蟲が籠から籠へ移される

より簡單に、町から警察へと生活をうつしてゆくもののやうに思はれた。ここではあまりに見られない平和な夢がしづかにそれと感じられる優しい呼吸づかひを、私の方にすーすーと傳へてくるのであつた。私は何よりも看視がこの女の夢をさまさないやうに、かれの帶劍や靴の板じきにふれるのを聞くごとに、自分のやうにはつとした。併しかの女の前にあらはれた一瞬のやさしい天國の光景は、なかなか彼女をさまさうとしなかつた。彼女は見えざる何者かの魔手に據つて、ちやうど、蜘蛛の糸を引くやうに、おちついて靜かに永く居睡つてゐた。

單調な、物憂い、どうにもならない時がすこしづつ移つて行つたけれど、まだ私らは調べられなかつた。街路の日光はしだいに烈しく、暑さはこの中にあつては隨分ひどかつた。いろいろな物賣の聲がしたりした。

「君は辨當をたべるかね。自分で買ふかどうか。」

と看視は私とのとに尋ねた。

「ほしくないから要らない。」

と斷つた。

女は

「おかねはあるんですから、上等なおべんとうを言つて下さい。」

と言つた。看守はにつと微笑して

「よしよし。」

と言つた。

私は看守に

「僕に湯か水か、願へたら茶を一杯くれませんか。」

「茶はぜいたくだ。一しよに來たまへ。湯ならあるよ。」

と小使室へつれて行つた。そこに温かい大きな茶釜が湧き立つてゐた。

「その急須はまだ出るだらう。やりたまへ。」

と親切に言つてくれた。

私は出ながれの茶を靜かに味つた。うまかつた。

しばらくしてＯは呼ばれて出て行つた。私は輕い胸さわぎがした。しかし私は私のしたことを正當に言ふより仕方がないと思つて、蚊をはらつたりして待つてゐた。

私も呼ばれた。

白い服を着た劍をさげてゐない巡査どもがそれぞれテエブルに向つて調べ物をしてゐるところから、部長室へ通つた。

Ｏは私とすれちがひに入り交はつた。

部長は鈍感げな、ぶくぶく肥えた、どんよりと濁つたやうな聲で、一枚の圖面をひろげて言つた。

「君は此處に坐つてゐたのか。」

と、酒場の圖面の一部を指した。

「さうです。」

「此ステツキはＯの所有だね。」

と言つて、Ｏの杖を出した。それに血の斑點がついてゐた。

「さうです。」

「君は撲つた覺えがあるかどうか。」

私はこの問題を永く考へたので、いつそ自分の責任にした方がいいと思つてゐた。Hも逃げて行つたし、大學生もゐなかつたから、結極Oか私かだ。Oは脚氣で足が立たなかつた。それが杖をふりあげたと言つても、私が一番健康でその加害者らしい可能性をもつてゐたわけだ。

「僕がやつたかもしれません。しかし醉つてゐてしつかり覺えてゐません。しかしOは足がわるかつたから、Oでないことは實際です。」

といふと部長はじつと私の顔を見つめた。そして微笑した。

「Oも自分でやつたと云つてゐるし、君もやつたといふが、君らは友人同士だからどちらでもいいらしいが……」

とまた微笑した。

「ともかく酒はあまりやらない方がいいね。被害者は全治二週間の傷を負つてゐる。で示談にする氣があるかね。」

「私も示談にしたいと思つてゐるんです。」

「では告訴は三日間の期限があるから、それで先方と示談したまへ。それからこんどの事件以後は許さないから、さう思ひたまへ。」

と、部長は柔和な、重い調子でいつて書類を二つに折つた。

「承知しました。」

「どうも酒はいけないね。ことに詩かきだのつて連中は、酒くせがよくないね。」

と言つて

「ではもう歸つてよろしい。」

とまた言つた。

私は頭が輕くなつたやうな氣で廊下へ出た。そこへ呼び出されたHも新しい服などを着込んで來てゐた。

私達は三人揃つてそとへ出やうとした。私はもう一度ふりかへつて拘留室の暗いところを眺めた。そこに女がこちらの方をじつと眺めてゐた。

街路は暗いところから出て行つた目には、明るすぎて眩しかつた。私は帽子をとつて黴菌のために日光をあびた。烈しい夏の日光はじりじりと頭の地にしみ込んで、針ででも刺すやうに熱かつた。

OはHに言つた。

「昨夜はさつそく逃げたね。」

「めんどうだつたから。」

「おかげで一ト晩蚊に食はれちやつた。」

と、れいの喉の奥で笑つた。

私 Hに

「君はいいことをしたよ。あんなところへ君をいちど入れておく必要もあるやうな氣がするね。君のやうに問題をそらすことのすきな人はね。」

と私は笑ひながら言つた。

「僕よりＯが入つてきたことはいいことだ。」

と言つた。それはＯは間々しいから懲りたもいいだらうといふ意味も交つた。Ｏはいやな顔をした

「誰でもあんなところへは一度だけは一度きりだよ。入つてゐてもわるいことはないね。」

と私は二人を見た。ＨもＯも、ずるさうに微笑つた。

私達ちは先方の男の傷の治療代や、示談を開始することのために今夜Ｓ酒場へあつまることにして別れた。私とＯとは駒込の浴場に入つてからだを洗つた。たへまない蚊の襲撃や、汗や、きたないもので體軀が一杯のやうな氣がしてゐたので。

晩方、私はＳ酒場へでかけた。昨夜のあゝいふ騷ぎがあつたと思はれないほど、道路はよく掃き清められて涼しげに打水がしてあつた。私は地上をじつと見つめた。寂しい後悔が胸に起つてきた。そこらにまだ凶暴な呼吸が殘つてゐるやうな氣もした。

酒場へ這入ると、おかみが出て來て

「昨夜はおけがもなさいませんでしたか。わたし、一時はどうなるかと氣が氣ぢやありませんでした。」

「すこし頭がいたむだけです。たいへん御迷惑をかけました。」

「いゝえ。よくあることですから、それに對手は淫賣屋の亭主なんですつて。對手が惡うござんした。」

「私もあまり質のよい人とは思はなかつたのですが……」

「この界隈でも厭がられてゐる暴れ者なんですよ。」

「さうですか。では示談も中々むつかしいでせうね。」

「命をほしがるでせうね。傷も二三日に癒るのをあゝして二週間なんて診斷をお醫者から取つたらしいのですよ。」

私は紅茶をのみながら、昨夜の出來事が嘗つて起つたやうにも思はれないほど、きちんと形づけられたあたりを眺めた。おかみが去ると、れいの女の子がでてきた。

「いらしやいまし。」

と私の方へきた。深い頰笑をいつものやうに漏らしながら……。

「昨夜はこはかつただらうね。」

といふと

「わたし皆見てゐましたの。あなたのおつむがどうかならなくて――」

と彼女は上目をして私を見た。

「すこし痛むが大したことはないよ。これからあんな喧嘩はしないからね。」

と私はこの小さな魂を慰さめるやうに優しくいふと

「え。しないで下さいね。」

と悲しさうにした。この小さい子供は私のあのときの容貌をきつとどんなに恐ろしく感じたであらう。そして人間が大きくなると何といふ獸に近い凶猛になることであらうと感じたにちがひないと思つた。私はかの女の痩せた肩や、手や足を見た。それらがどんなに昨夜震へながら恐怖の念ひに充たされたことかと、幾分の恥かしさを感じた。本當にはづかしい事だ。

「あのときあんたはどんな氣がしてゐたの。言つてごらん。」

と私は柔しく言つた。

「みなさんがお怪我をなさらないやうに祈つてゐましたわ。」

「ほんと。」

「ええ。」

と、彼女はにごらない刻みつけたやうな微笑をした。目はしづかに、むしろ平和に輝いてゐた。その色の白い、どこか品のある顔は澄んで、どこといふこともない別な神祕なものが漂つてゐた。

私は心でこの少女に感謝した。この小さい魂の前で私は決してああいふ出來事に再び加はつてはならないと思つた。

「男のひとはみんなああして喧嘩するものでせうか。」

「そんなことはないよ。善い人は決して喧嘩なんぞしないよ。」

と私は答へて顔が赤くなるやうな氣がした。喧嘩した私どもはそうなると惡い人間だ。私もそれに違ひない。

少女は默つて紅茶の道具をひいてゆくと、そこへOとHとが來た。三人の頭には昨夜の事件が顔を合すと同時に想起された。

「ともかく誰か見舞ひに行かなければならない――」

といふことになつた。私は

「僕が行こう。」と言つた。

HもOも行こうとしないことを知つてゐるので、私がビール半ダースを提げて示談にでかけることになつた。私はいやではあつたが併し今となれば、この忌はしい事件の渦中から逃れたい願ひをもつてゐた。一日でもこの事件のために頭をいためることは不愉快でもあり、無益なことでもあつたからである。

「なるべくならばだ、そのビールだけで向ふが我慢するやうにして來てくれたまへ。金だとかなりやられるからな。」

とOが拔目なく言つた。Hもそれに贊成した。

「どうでもビールでさよならをするんだね。」

と言つた。

「額を破つておいてビール半ダースで、けりがつけば面倒はないがね。」

と私は苦笑した。

私はともかくビールを持つて、すぐ近所にある彼れの開いてゐる料理店――といつても、ほんの小さな飲屋を訪ねた。昨夜私に食つてかかつた女がでてきて、私を見ると同時に手みやげを見た。

「すこしお待ち下さいまし。」

と言つて奥へ這入つた。間もなく男が出て來た。額から頭一面に繃帶を施した、見るからに不愉快な容貌をしてゐた。眼の圓い小利巧相なところがあつた。

「さあ。どうかお上り下さい。」

とお世辭よく言つた。私は頭の方は痛むかどうかと、私としては落ちついた叮嚀な言葉で言ふと

「かなり痛みますので今まで寢て居たのです。飛んでもない災難でした。」

と私の出したビールをじろりと横目に見たが、すぐに

「かまはないで下さい。」

と彼れは挨拶がはりに言つて煙草を喫つた。私は言ひ出し憎くかつたが

「實は警察でも示談にしたらどうかと言つてくれたのでお伺ひしたのですが……」

「え。話に因つては示談にしてもいいんですが、何しろ二週間も治療しなければならないんですからね。」

といふ言葉は明らかにそう簡單ではだめだといふ押しの強い、商人にも見ることのできないゴロツキ肌なところがあつた。これに又た言つた。

「何しろ男が額を破られたのですからね。署長が示談しろと言はなければ此方にも考へがあつたんです。」

と、惡意のある冷たい調子で言つた。私は非常に不愉快な、ありありと侮辱されてゐるやうな氣がし出した。

「失禮ですが治療代の方はどれだけ差し上げたらいいでせうか。」

と私の言葉の終らないうちに、向ふはもう疾くに考へてあつたらしく

「二十圓は是非貰はないでは足りませんね。」

と言つて私の顔をちらと見た。その視線は明らかに勝利者の苛酷な、むしろ惡々しい光を帶びてゐた。

私は唇を嚙んだ。

「それだけ差上げれば示談してくれますか。」

といふと

「もとより私も内分に濟ましたいのですから、喜んで示談します。」

といくらか私の方で承諾するらしい樣子を素早く見て取つて聲を低く落して言つた。私は刻々に募る不快さに耐へられない苛々しい氣で、外へ出た。玄關のところで

「三日間以内の規定ですね。告訴は――」

と言つた。

私は默つて裏町を歩いた。私は私の内に住んでゐる魂までが卑屈なものになつたやうな汚らはしさと憤怒とを感じた。

OとHは私のこの報告をきくと、Oはすぐに私をなじつた。

「二十圓なんて馬鹿々々しいぢやないか。拙い談判をしたものだ。」

と不平らしく唇を尖らした。Hもまた私から金額を示してでも來たやうに取つて

「君は下手だよ。そんな金があるものか。」

と言つた。

私は唇を噛んだ。

「金は向ふで言つたのだ。君だちは僕のせいだと思ふのか。」

と、つい私は怒りに燃えた聲をあげた。私は心のそこからな不愉快と忍耐との爆發したものを抑へてはゐたものの、もう耐らないやうな氣がした。

「さつ怒るな。怒つてゐるときではない。」

とOは持前のわざとらしい冷やかな態度をとつた。

私は默り込んだ。

Ｈと０とが酒を命じた。私はほしくもないのと、もう一緒にのみたくないのとで、一滴も口にしなかつた
「頑固だな。」
と０は言つた。
「頑固だ。しかし君たちのやうな分らずやではない――。」
と私はまた黙り込んだ。
私は頭の中で昨夜のやうなことも、今夜もまた起りさうな氣がした。あの人間の靈魂を相互にどうにもならないまで辱しめ合ふ醜い諍ひや、再び回復しがたいやうな感情的な致命傷を闘ひ合はすことや、それらによつて人間そのものの性格に荒い苦しみを刻みつけたり、よくない經驗によつて益々よくない傾きに墮ちてゆくことを考へると、私は慄然とした。そとからそれらの耐へがたい爭ひを見るとき、どんなに醜くく卑しい心を人々の心に起させることだらう――私は床几に腰かけてゐる少女を見つめた。あんな小さな子供の心にまで、吾々は動物的な爭鬪の瞬間を押し展げて見せた。かの女をして鳩のやうに震はせたのは誰だつたか。
「人はみな自分の内によくないものを持つてゐる。」といふ言葉が浮んだ。一人づつが性格的にならうとしたりするとき、とても他を容れられるものではない。「人間一人づつでは永久に孤獨だ」といふ言葉も浮んだ。
そのとき０はまた言つた。
「あのビールは無駄なことだつた。つまらないことをしたね。」
とＨに言つた。ＨはＨで、本來は優柔な、美しい線を愛してゐる作家であつたが、酒氣を帶びてゐたので、すぐに贊成した。

「考へるとばかばかしくなる。」

と言つた。

私はこれらの言葉を聞くと、益々物凄い低められた感情をありありと見るやうな氣がした。しかし私も決してこの女らを責めるほどの高いものをもたない。私はかれらを責めてはならないと感じた。私の内の内なるものの醜くさ卑しさこそ掘り出して責めなければならない。

――私達はその翌日、みんなで金をまとめて、料理屋へもて行つた。OとHとは、千駄木町のうらに待つてゐて、私が彼を料理店にたづねた。

私は金の包みを彼の男に渡すと、急にいやらしい笑顔になつて

「これで私も治療できます。ご心配をかけました。」

と言つて、上包みをとつて内容を改めた。そこに紫色の紙幣が四枚はいつてゐた。かれは日焼のした指さきで數へて見てから、もとの通りにつつんで

「では警察の方は取下げをしておきますから。」

と言つた。

「受取りのしるしになるやうなものを一つ書いてくれませんか。」

「あ、そうですか。」

と彼れは、治療代の受取りをかいた。私はかれと別れた。

OとHは、涼しい垣根に添ふた樹のかげに、私のかへつて行くのを待つた。私は受取書をかれらに見せた。

「これで一段落だ。」

と、Oは睡眠不足らしい蒼い顔を私の方に向けた。

私も心が輕くなつたやうな氣がした。

然して吾々はただ疲勞だけを各々に與へられただけた。三人ともぐつたりしたやうな心持で、白く光る道路を眺めたまゝ、しばらくぼんやり佇つてゐた。まるで外からはよくないことを相談でもしてゐるやうに、吾々の心の方面ではみな別な生活を考へてゐた。

私らはそのとき、私達ちの前を通らうとする一人の大學生を見た。向ふでも、叫びをあげるほど驚いた。それは例の醫科の男だ。あの晩行衞をくらやました男であつた。私だちは初めて會つた人だつたし、警察でもしらべがつかなかつた溫和な共犯者であつた。

「此間の晩は失禮しました。」

といふと、Oはすぐ

「君にちよいと話がある。」

と言つた。あの晩のいきさつを話した。

「さうですか。では僕も一部分の責任がありますね。出しますとも。」

と、あの晩、ひどく醉つて暴れたこの人は、おとなしい性質をもつてゐるらしかつた。そして

「實は試驗中なんで本當は逃げを張つてゐたんです。あなた方にたいへん迷惑をかけました。」

と言つて、かれは一部分の負擔額を財布から抓み出した。Oはそれを受取つた。

Oは自分の住所書きを手渡したりして

「とにかく事件は濟んだのだから安心したまへ。」

と言つた。

學生は去つた。Oは

「負擔させたものの最う事件は濟んだのだから一つ飲まうぢやないか。」

と言ふと、Hもすぐ酒のみらしく

「よからう。君はどうか。」と私をかへり見た。

「僕は氣がすすまない。今日はこれで失敬する。」

と別れにかかると

「一しよに來たまへ。」

とOがいふのを背後にききながら、沈んだ心で宿へかへつた。

私は午后から谷中の方面を歩いて、新しい宿をさがした。自分の宿にゐても絶えず私は監視されてゐるやうで落ちつかなかつた。ことに朝、目がさめると、鳥打帽をかむつた褪めた紺絣をきた男が、いつも玄關に夢にさへまで現はれたりして、佇つてゐるやうな氣がするのであつた。

何となく不吉な經驗をさせられたこの宿を越して行つて靜かな宿に、全然心持ちの汚れや疲れをあらためたい願望をもつやうになつた。椎の葉のしげみや、その葉の上にそそぐ雨は懐かしかつたが、それよりも、夜など、散歩から歸へつたりするとき、ふいと裏にれいの鳥打帽が立つてゐるやうな氣がして、落ちつくことができなかつた。

谷中もやや根津の辺りに近い高臺の、とある坂の上に小さな離れを見つけた。室もきれいで靜かで、入口も自由であつた。

表は、大きな屋敷の楓ばかりの美事な垣がつゞいて、靜かな通りが曲つて谷中の墓地や上野の方へと續いたりしてゐた。

私はさつそくそこへ越して行つた。

一間の窓の前に小さな庭があつて、鳳仙花の幾本かが田舎めいた質素な赤い花をつけてゐた。その他に見るものもない庭のこととて、私はその正面に机を据えた。

日暮れまでにすつかり荷物の始末をすると、ひと風呂浴びてかへると、門のところに十ばかりの女の子がにこにこしながら、小さい弟と遊んでゐた。貴族的な、血色のよい、品のある顏立であつた。私は可愛らしい子だと思ひながら室へはいつた。

この家には私の外に二つの家族が住んでゐた。一人は年寄夫婦で、一人はれいの女の子のお母さんの一族であつた。

朝、臺所で女の子のお母さんにあつた。上品な、鼻の高い中年の女のひとだ。

私は引越しの挨拶をすると、向ふでもていねいにあいさつをしてゐた。

「子供がゐるものですから、さぞおやかましいことと思ひます。どうか、御遠慮なくお叱りくださいまし。」

と言つた。

「どういたしまして。」

と私は自分の室へかへつた。

朝のおそい私はおひると一しよの食事をしてゐるとき、彼女はよく、大きな高い、女の子供らしいはね上るやうな聲で

「かあさん。たゞいま。」

と言つて、椽側に本をつつんである包みを投げ出すのが、毎日のやうに私の室にきこえてきた。そんなとき時計をもたない私はちやうど午后一時ころにあたるのを何時も知るのであつた。

よく庭で弟と遊んでゐる聲が聞えた。

私はあの事件以後、めつたに外へ出ることがなかつた。ことに家の込み合つた町の有様や、小さな酒場やカツフエを見るごとに、私は自分の心に痛みをかんじた。まるで犯罪者のやうに室にばかり籠つて、創作に苦しんだり古い日記の整理などをしてくらしてゐた。

ときには、表へ出て通りを眺めることもあつた。ことに寺の多い谷中のこととて、晩方、涼しい風に送られてよく鐘の音がきこえた。しづかな夕方など、都會の騒音にまぎれない、しめやかさと寂しさをふくんだ音色は、よくきき得られた。

彼女は弟と、も一人の男の子とで、庭のところで石をたたいては鐘の音を讀んでゐたりした。

……いま鳴るかねは、いくつのかねぢや、六つのかねぢや……とお國のうたらしいのを、少女らしいあどけない、どこか鋭い哀切な調子でうたつてゐた。私はそれを夕もやゝ暮れちかい涼爽な、どこか冷たみをもつた空氣のなかに、ちつゝ踞んできいてゐると、少年時代の微妙な生活を考へ出すのであつた。人間がどれだけ成長して行つても、いつも貧弱しきつた、思索しつづけた心のそこに何時も湛えられてゐるものは、あの少女のいまうたつてゐる心境だ。それを思ひ出すことによつて、しづかに、うつとりしてくる彼のたのしい瞬間だ。

私はその小さな花のやうな顔を見た。敏り深い聰明な清い瞳を見た。まるで蝗のやうにはしこくデリケエトな足や手や、それらが絶えず目まぐるしいほどよく運動してゐるのを見ると、この地上に於て、何者にも恐れることをしらない自由な、山嶽のなかに咲いた一トむれの花のやうに、はげしく匂ふやうに思ふのであつた。

女の子と、その弟とは、人懐かしげに私の方にやつて來た。そして總て中流に育つた子供等のあどけない品のある惡ばれない無邪氣さで、寂しさうに立つてゐる私にはなしかけるのであつた。

「おぢさんはそこに何してゐらしやるの。」

「あなたらの遊んでゐるのを見てゐたんです。あなたはうたが上手ですね。」

と私は微笑しながら言つた。

「あたしよりね。弟が上手なの。」

といふと、弟は姉さんの手にぶらさがるやうにして甘えた。

「姉ちやんは僕より上手だ。」

と言つた。

私はこの小さな姉弟を眺めた。私にも親切な姉があつた。ちやうど今ここにゐるこの姉弟は期せずして、私の遠い子供のときの空氣を吸はしめ慕はしめる。

「あなたは何んと呼ぶの。」

と問ふと、すぐに

「ふぢ子つて言ふんです。弟は撤宗つていふの。」

彼女は明るいつやつやした目で私を見上げた。誰でも一度は、この子のやうに美しい透明な瞳をしてゐる時期があるものだ。五つ六つころから十六七時代までの目の美しさ、その澄み亘つた透明さは、まるで、その精神のきれいさをそつくり現はしてゐるものだ。すこしも他からそこなはれない美だ。内の内な生命のむき出しにされた輝きだ。

それがだんだんに、宛然、世間の生活に染みてゆくやうに、すこしづつ濁つてゆき、疲れを感じるやうになり、ねむれなくなつてゆくのであつた。私はいまこの濁つた自分のひとみの中にうつした瞳を、その瞳の清淨な光によつて、いくらか洗はれてゐるやうな、清さを傳へて貰へるやうな氣がした。

「いくつになつたんですか。」

「九つ。弟はね。六つになつたの。」

私は間もなく自分の室の方へかへつた。晩夏の永い日もやゝくらみをおびた。

……いま鳴るかねはいくつのかねぢや……といふうたごゑが、こんどは、お母さんの室の方にきこえた。

私は机にむかつた。

そこへOが訪ねてきた。あの日以來、私どもは會はなかつた。さまざまな感情の機微がこの友を厭ふたりして、しばらく會はない方がいいやうな氣がした。

Oは這入ると、すぐに、

「いい室だね。それから君は芝の方へまだ行かないさうだね。」

と言つたが私には譯が解らなかつた。

「芝の方へとは？」

「芝の區裁判所さ、僕もHも呼出されて検事から說諭されちやつた。そのときにね、君が出て行かないものだから、ぶつぶつ言つてゐたよ。」

「でも僕は越したので通知を受取らないから仕方がない――明日行つて見よう。」

「さうしたまへ。めんどうだからな。」

とOは言つた。

私はまだあの出來事が網の目のやうに、私の行く先に張られてゐたことを知つて、不幸な、怯えるやうな苛々しい氣分になつてゆくのであつた。

「檢事はいつたい何んなことを言ふんだ。」

「唯いはゆる說諭だ。なんでもないよ。駒込から通知が行つたんだね。」

とOは寂しい顏をした。

「おかみのことは正確だね」と私はいつた、

「仕事だから正確だね。」

私はやつと落ちついて、これから初めやうと思つてゐた仕事が、また明日ああしたとこへ行くことによつて破壞される不幸な豫覺をさへした。みなこの小さな私の成長の上に樣々な苦しみと邪魔をすると思つた。今夜はまた私はしづかに詩作に耽ることを考へてゐた。人間の心が眼の光りに働きかける心持を詩で現はさうと樂しんでゐたのに、もうOの持つきた疑矢はぴつたりと私の優しい心をつき刺した。

私はOに言つた。

「飲まう。くさくさしてきて、室に居られないから。」

Oにはこの心持が見えてゐたらしく、冷やかに笑つた。私はそれを感じると、心は二重の意味で限りない怒りに叫んでゐるやうに苛々しくなつた。

「かねがあるか。」

「かねは作ればできるんだ。さあ出かけやう。」

と、私は二三冊の書物を抱えて出た。私はいつもゆく質屋へはいつた。そして書物を叩きつけておいて幾枚かの紙幣を袂に捩ぢ込んだ。

S酒場へは、かりがあつて厭だといふOを無理につれて行つた。私もこの酒場へ行きたくなかつた。厭な暗い陰氣な心持ちになるばかりでも、他の明るいカツフエへ行きたかつたが、今夜は此處へ來たかつた。

私達は盃をなめはじめた。私は深い飲酒者が永い時間をかけて愛飲するやうに、ちびりちびりと深い滿そこへはまり込んで行くやうに、次第に意識を圓滿にやはらげてゆくやうにした。酒は意識を五彩あやなす錯然とした或る夢幻的な心持に、たびたび誘はうとした。しかし私はもはや醉へなかつた。あたまの中にシンが立つたやうに、醒めて冷えきつたものがあつた。

れいの少女は、自分の坐るところに居て、私達ちの方を見つめてゐた。……間違ひのないやうに、あんな恐ろしいことが起らないやうに……とその大きな目が謹しみ深い或る一點に、しかも黒々と据えられてゐるやうであつた。しかもあの永久にさうあらうと思はれる頬笑みは、ときとすると、老人のするやうな枯れたやうなところが浮んできて、大きな悲しさうな、とても現はさうと思つても、わざとは現はしきれない複雜な光とともに、しづかに私の上にそそがれて

ゐた。私はにつとほほえんで見せると、かの女は立つて、私だちの方へ來た。

私はこのごろになつてから、彼女に酒をつがせることをしなかつた。何かしらこの少女の靈魂までをおもちやにするやうな、變な、ある道德的でない感情的な意味で、いつも自分でついでは飮んでゐた。しかし私は今夜はその細い麻のやうな手でついでもらひたかつた。

かの女は酒をついだ。そして默つて立つてゐた。……このひと達ちはいつまで酒をのむのだらう……といふやうな言葉が、その小さい胸に呼ばれてゐるやうに思はれた。

私はだんだん醉つてくると、妙に人の叫びごゑや、荒い組み合つてゐるやうな音を、遠いところで感じ出した。頭をがんとやられた。むかふの頭蓋骨をがんとやり戾した。血がたらたらと流れた――私はまた脅迫されたやうにいろいろなことを考へ合せた。

「かへらう。ふらふらするな。」

と、私はOをいましめた。さういふ私もふらふらした。地の上が靜かに大きな圓をえがいて、波のやうに搖れて行つた。

「さよなら。あぶないわね。」

と、彼女は走つて來て私をささへやうとした。小さな一疋の蝗のやうに滑く擦せた、神聖なかの生きものの聲は、私の奥の奥まで、しかも雷のやうにひびいた。醉つてはならないと心で誓ひながら、私は何といふ人間の屑の屑であらうかと思つた。

「大丈夫だ。おかへりなさい。心配しなくていいからね。」

「さう。さよなら。」

と酒場へ入つて行つた。私は鞄からありたけの金を彼女にあたへやうとしたが、さういふ淺猿しい見えすいた寂しい心を自分で叱り飛ばした。決してしてはならない寂しい加之もしなければならない心を、私はいくたびとなく考へた。

街へ出た。

別れるときOはまた言つた。

「明日行くんだよ。忘れないやうにしたまへ。」

と。私はこれには答へないで歩いた。根津の通りのゴチヤゴチヤした商店のつらなりは、私の目を眩ゆくした。

私は坂を上つて歸へらうとした。が、すぐ私はそこの町角にあつたカッフェへ這入つて行つた。

私はそこで默つて飲んだ。一つのことをしつかりと考へ合せる意識が、例へ存在してゐても、いつの間にかばらばらになつて行くほど醉つた。

女が私の向ひに坐つてゐた。おしろいがチョオクのやうに乾いてゐて、すこしもあぶら氣のない顔であつた。それは醜いといへば極端に醜くかつた。他の女中はみな客と巫山戯てゐた。しかしこの女は自分を知つてゐるやうに温和しかつた。私は哀れをかんじた。

――私は宿へ辿りつくと、ビール瓶のやうに室に轉げ込んだ。蒼白い睡眠が間もなく私の上に覆ひかぶさつた。

朝、目をさますと、私は忌はしい心で、着物をきかへると芝の區裁判所へ向けて出頭して行つた。暑い明るい焼きつくやうな日光は、街路の並木の葉を潤ませてゐた。街のなかにも、そこここに蟬の啼くのが遠くきこえたりした。

私は區裁判所の受付に名刺を出して、引越したあとで通知を受取らなかつたが、今日聞いて出頭した旨を、かゝりの檢事につたへた。私は夏羽織をひらひらさせたり、土くさい浴衣がけの群と一しよに控所の腰掛けにもたれてゐた。私はここに集つてゐる人々が、みた私のやうに或る種類の背景と、何處となく心にくらみをもつてゐるやうに思はれた。それと同時にまるで塵埃のやうにゴミゴミした、人間の屑の屑ばかりが蚊のやうに群れてゐる氣もした。汗の匂ひや、手足をむき出しにしてゐる人々は、ことに私の嫌惡の烈しい對照をしてゐた。私は私自らをこの埃のなかに見出すことを不愉快に感じた。たへず精神の仕事を目ざしてゆこうとする私の魂だけは、何人にもふれさせないし、觸れるものもなかつたけれど、外部から泌みついてくるやうな、暗い憂鬱な心持をどうすることもできなかつた。

私は呼ばれた。給仕は私を若い、いろの白い檢事のテエブルの前につれて行つた。私は心が顫へがちなのを「しづかに」制して檢事の顔を凝視した。

「引越したのか。道理で君だけが來なかつた譯だ。」

と言つて印の澤山押してある書類をしらべた。

「著述業といふのはいくら位收入があるものかね。」

と、バスで言つた。

「書かなければ一文もありません。」

と私は冷やかに答へた。

「ではどうして生活をする――收入が無くては生活が出來ないではないか。」

私はできるだけ落ちついた。

「藝術家は財産をもつてゐます。で、しよつちう書かなくとも平常から餘裕をつけてゐるから書かなくとも平氣です。」

と、私はある苦笑を感じながら言つた。

「さうか。ではそれでいいとして——此度の事件は示談にしたさうだが本當かね。」

「さうです。」

「で、このつぎに此麼事件が起ると容赦なく告發するからさう思ひたまへ。」

「承知しました。」

檢事は間もなく歸つてよろしいと言つたので、私は外へ出て行つた。

ぶしつけな、機械を取扱ふやうな問い檢事の物の言ひかたも不快であつた。——私の心は汚され通しのやうな、汚濁されたまま喘いでゐた。

宿へかへると疲れてゐた。

小さい庭の雜草を見るともなく眺めてゐると、そこへ、ふぢ子さんが庭づたひにやつて來て、

「先刻、お客様がいらしつてよ。」

「どんな人でしたか。」

「髮の長いひとよ。おぢさんみたいにおひげもあつたわ。」

「さう。どうもありがとう。」

血色の透つた頬はまるで磨いたやうな、美しい少女期の光澤に張り切つてゐた。

「おぢさんのお室へはいりませんか。叔母さんも一しよに呼んでいらつしやい。」

といふと

「母さんに言つて來なければわるいわ。母さんがね、いいつて仰有つたら弟と一しよに來ますわ。」

と利巧な目を瞬いた。

「その方がいい。ぢやおゆるしが出たらいらしやい。」

と、私はその母なるひとのしつけのよいのを感じた。主人は、通譯官を勤めてゐて今滿洲に行つてゐるといふことであつた。母なるひとは、いつも新聞を毎日のやうに送つてゐた。ふぢ子さんは、いつも學校からかへると、開封の新聞をもつて、通りの郵便局へ行くのをたびたび見ることがあつた。

私はそんなときに出會すと

「それは何處へ送るの。」

と問ふと

「お父樣にお送りするの。切手はここに貼ればいいんですね。」

と、いつも仕てゐることながら、子供らしく少さい不安な顔をした。

「そこでいいんです。」

ふぢ子は敬宗と一しよに、この離れへやつて來た。

「母さんのおゆるしが出ましたか。」

といふと

「え。おとなしくして居ればいいつて言つてらしたの。」

と言つて、弟を顧みて

「敬宗もおとなしくしてゐなければ駄目よ。」

と、姉らしい調子で言つた。

ふぢ子は、室のなかを見廻して、一枚の額の繪の上に瞳を凝した。

「あの繪は何んでせうか。わからないわね敬宗。」

と弟をかへり見た。

私は言つた。

「あかくなつてゐるのは煉瓦の塀です。そう見えるでせう……」

「ええ。」

「その前を人が歩いてゐるのでせう。うつ向いて——空に雲が出てあかくなつてゐるでせう。それからいつぱいに草が生えてゐるでせう。あれは野です。」

「夕方ですわね。」

「そうです。あのひとは大變寂しさうに見えるでせう。」

「そうね。何處へゆくんでせうか。」

「さあ、何處へ行くのか。」

と、私は言ひ詰つて默つて、繪を見つめた。一人の男が町端れから野のある方へ向つて、重く歩いてゐるさまが描かれてあつた。Hの繪だ。Hはよく憂鬱な寂しい自畫像を畫いた。かれはいつも好んで、自然の中に投げ出された自分を

描いた。

ふぢ子は、こんどは、もう一枚の燻し金のふちに入つた繪に目をとめた。

「二人で何をしてゐるのでせう。」

「お祈りをしてゐるのです。夕方、田畑の仕事が済んでから、お祈をしてから家へかへるんです。」

「……晩鐘…つてどんなことでせうか。そうかいてあるわね。」

「晩方、よく鐘が鳴るでせう。あれをいふのです。此間ふぢ子さんが…いま鳴るかねはいくつのかねぢや…とうたつて言つてゐたでせう。あんな夕方のかねのことを晩鐘つて言ふんです。」

「そう。」

と、彼女は感心したやうに言つた。室の中の繪を一枚一枚に彼女に私に說明させた。その注意深い、智識に餓えてゐる少女時代が、今かの女の全てに溢れてゐた。

「おぢさんは毎日何をしていらしやるの。何を書いてゐらしやるの。」

と、直接に言はれると

「おぢさんはね。……」

と、詰つた。どう言ひ表はしていいか判らなかつた。私はなぜだか、かう問ひつめられると赤面するやうな氣がした。

「おぢさんの書いてゐることは、ふぢ子さんがもつと大きくなると、ひとりで解つてくるやうになるの。」

「それまでどうしても解らないの。」

「さう。なかなか解らない。」

彼女は不審さうな心で、私を見たが、すぐまた忘れてしまつたやうな顔をした。

彼女等が去ると、私はぼんやりと、窓にもたれてゐた。子供の魂には、どうしても解らせることのできない仕事を、つくづく考へ込んだ。

ふぢ子は時々私の室をたづねた。そして開け放した、寛大な花のやうな言葉を私に話してきかせたり、そのあどけない微笑のうちに靜かに私を落ちつかせるものがあつた。私はもはや街へは永く出て行かなかつた。夜も晝も室にばかり籠つて、少しづつ創作を發表して行つた。

創作は一主として詩の精神に沒頭することは、苦しいながら一つの幸福であつた。なにごとも此内にあつては、他からそこなはれるものがなかつた。自由な空氣はあたらしい私の生命をよび醒させた。

ふぢ子はよく言つた。

「おぢさんはいつもちやんとお座りしてゐるのね。」

と。ときには、彼女はその生れた鹿兒島の市街からやや離れた自家のことを話しすることがあつた。

「鹿兒島はちつとも雪がふらないの。毎日溫かくていいの。大きなボンタンが實つてよ。そりや大きいのがあるわ。こんなのがあるわ。」

と、少女らしく昂奮して、手で大きさを示したりなどした。濃やかな綠葉のあいだに、輝いてゐるボンタンの重い美しい黃金色なのを、かの女は目にちらちらと思ひ浮ばせながら話した。

「それからお家のうらの山に、蜜柑なんかいつぱい實つてゐて、私だつて採れるやうな低い枝もあるの。」

「ぢや、ふぢ子さんは田舍がすきでせう。行きたくない？。」

「もうじき歸へるの。お父樣が滿洲から田舍の方へおかへりになるので、さきに私らが田舍で待つの。」

「いつごろですか。」

「まだ分らないがもうじきよ。わたし田舍が好きよ。お庭が廣くつていいわ。」

私は母なるひとから歸國することをきいてゐたが、この可憐な少女のかへつてゆくところをよく想像したりした。低い山畑に揉みついたやうに熟れてゐる柑橘類の烈しい芳醇な匂ひに沁みた新しい空氣や、そこを馳け廻る少女の姿などを描いて見たりした。

「お國へかへつたらおぢさんにボンタンを送つてあげるわ。大きい大きいのを。」

と、善良な、あどけなく今にも送つてくれるやうな顏をした。

「ほんとですか。」

「え。お父さんに言つてね。お父さんは私のいふことは何んだつてきいて下さるわ。ほしいものは皆買つて下さるわ。」

私はその父なるひとの愛を感じた。

私は時をり寂しくなると表へ出た。秋近くなつてから道路に靜かなしめりが行き亘つて、何處か淸涼な氣があつた。

ふぢ子は學校からかへると、よく

「おぢさん。唯今。」

と微笑しながら言ふことがあつた。

「おかへりなさい。」

と、私も微笑した。

母なるひとは

「いつもふち子が出ましてお邪魔してすみません。」

と言つてゐた。

母なるひとは、行きもしなかつたし、訪ねて來もしなかつた。ふち子がなかにゐて、時をり、私のことなどを言ふらしかつた。

私はこのあどけない子供を見ない日は、寂しい心がした。なにかしら温かい特別な空氣が、いつも平和に彼女をつつんでゐるやうであつた。

ある晩、畫家のSが訪ねて來た。この温和な友だちは、久しく會はなかつたので、私はしみじみ話した。

「この間來たときに、小さい女の子がゐたね。美しい子だね。」

と言つた。

「君だつたのか。留守をしてすまなかつた。あの子は隣の子だ。ああいふ子供を見ると何ともいはれない綺麗な氣がするね。」

「ほんとにいい子だ。」

と言つた。Sは、その日は陰氣に默り込んでゐた。何か話さうとしながら、それを自分でおさへるやうにしたり、つとめて話さうとしたりして、苦しい心の内で努力してゐるやうに思はれた。私はそれが静かに理解できるやうな氣もした。

「やはり苦しいかい。」
と、友の蒼白な、つかれたやうな顔を見た。
「看板繪をかいても見たが、やはり駄目だ。どうしてもペンキ屋にはなれない。」
「君にはとても我慢できないだらうな。でも暫らく行つてゐたぢやないか。」
「一ト月ばかり行つてゐる間に、すつかり頭を荒されてしまつた。もう行かない。自分の墮落が恐ろしくなる――」
と、溫和しい彼れは、寂しさうに私を見た。この友は非常に貧しかつたが、その精神はいつも純潔な、まるで優しいものをもつてゐた。
「では、このごろはやはり苦しいね。」
「うん。」
「ぢやまだ食事前だな。」
「うん。」
と、かれはすこしく赤くなつて微笑した。私も金の用意がなかつた。私は押入をあけて行李の中を見た。一枚二枚と失はれて行つたなかに、まだこの友の食事に足りるものがあつた。私はそれを一枚とり出した。
「これをかねにしないか。なるかね。」
かれは恥かしさうに見たが、
「なる。ありがとう。」
と言つた。

「おたがひだ。」
と、私にかれを表まで送つて出た。
「からだを大切にしたまへ。」
「ぢや暫らく借りるよ。」
「いつまでもつかつてくれたまへ。」
と、友は闇の中を行つた。
私の心は沈んだ。あの友と同じいやうに私も貧しかつたからだ。
二三日すると、Sはやつて來た。そして金をとり出した。
「返さなくともいゝぢやないか。」
といふと
「ある時には返したい氣がするのだ。返さないと落ちつかない。」
と、彼れは言つた。
「あのふぢ子さんといふ女の子を見てゐると、僕らと人間の種類が異つてゐるやうな氣がするね。」
と、感傷的なかれはかう言葉を添えて言つた。
「さうだね。餘りに清淨なものと、餘りに濱れたものの相違は、ときとすると人間の隔離を遠くするね。」
と私は言つた。
二人は默つて對ひ合つた。私はこのSとともに苦しんだ千駄木町時代を思ひ出した。私達ちはよく飲みに出かけた。

かれはいつも街裏の貧しい屋根裏で、食ふや食はずの多くの日を送つた。私もよくそこで彼れと會つた。かれはいつも仕事にはぐれて蒼くなつて

「君のやうに仕事をしなければならない場合でも、よく仕事をしないで平氣でゐられるね。」

とよく私のことを言つた。私は、仕事が自分の内に起るものに限つては、やつたけれど、仕事から金をとることができなかつた。さういふ仕事はやつても必然努まらなかつた。

私は私の詩作によつて僅かな報酬を得ることと郷里からの僅かな送金とでくらしてゐた。私はよく饑餓に瀕した。私は日沒頃の寂しい下宿で、どうにもならない永い時間を送つた。私は机にかじりついたまゝ、自分の仕事の完成をいそいだ。仕事のみが魂によき慰さめや鞭撻をあたへた。……

「今も苦しいが千駄木町も苦しかつたね。」

と私はSに言つた。

「あのころの君は凄かつたね。あのころの君はまるで一と處ばかり見てゐるやうな、いつもじつと動かない目をしてゐたよ。」

と、かれは私の目を見つめた。

「苦しんでゐる時は、すぐ目の色が變化つてしまふね。」

と私は言つた。自分でも、だんだん眼が据はつてゆくのや、荒い圖々しい、ときには狡猾な光を帶びるのがよく分つて行つた。そのたびごとに澄んだところがなくなつてゆくのだ。ただ、冷たい濁つた澄みかたをしてゆくのだ。

「たいがいの人間は目を見れば分るよ。内の内までははつきり分るよ。」

とSがいふ。かれもまた疲れ喘いでゐるやうな目をしてゐた。そして

「Oの目を見たまへ。實にあの男の性格を現はしてゐる。やさしさうで、深い狡猾さをもつてゐるのが内の内の分まで、はつきり分つてくるぢやないか。」

と、かれは附け加へた。Oの目、その特質的で、對手次第で變つてゆく表情は、いつも濁つた感情を現はしてゐた。

「あいつは目にそつくり出てゐるね。しかしHをどう思ふ。」

「Hは一性慾的な汚なさと淫猥さを有つてゐる。しかし微笑ふとそれがなほよく出るのだ。ともかく他人を正視しない目は卑劣だ。わざとらしい凝視をする奴は、内面に虚僞を有つた奴だ。(Oにはこの特長があるよ。)やはり靜かに眺める目の人に、質の善良さがある——。」

と彼は言つて立上つた。

「歸へるか。」

「ながく居たから失敬する。」

私達は別れた。かれの足音が表へ消えると私は靜かに貧しかつた時代の自分を考へた。

——Sは屋根裏のやうな室を借りて、パンばかり食つてゐて、ひよろひよろしてゐた。私がゆくと西洋皿の上に幾切れかの、彼のためには高貴な唯一な、しかもバタのついてないのが狐色に燒き上つてゐた。

「飯かい。」

といふと

「飯だ。」

と、彼は粉つぽい奴をがりがりやり初めた。

「君もやるかね。」

「僕も必要に迫られてゐる。」

と、笑ひながら、二人は默つてたべはじめた。

二人は、別な不安な生活に追はれてゐることを、期せずして考ひ合せてゐた。どうしたら此苦しみから遁れることができるかといふことが、明日の糧のない私の身の上にも及んだ。

「僕はこのごろ淫賣婦を笑へなくなつた。教養のない女があそこまで墮落してゆくのが寧ろ當り前だと思ふね。」

と、Sは言つた。私も同感した。

「ほんとだね。すくなくとも、今の僕らがもう肉體を切り放しても金が要るんだからね。」

「女が自分の肉體から自分の糧を得ることは殆んど自然に近いね。人間をもつと原始的に解剖して考へると、ことに女にあつては然うするより外に方法とてないだらうぢやないか。」

「本統だね。」

私だちは、默り合つて、友は友で別な窓の外を見た。熱烈な生活にたいする愛慕が、いつも私だちにそむいたに係はらず、私だちはどうにかして其處に辿りつきたいと思つてゐた。

「君は生活のらくな連中を見ると、どんな氣がする。」

「その存在はその人にあつて運命だからね。羨望もなければ特別な愛もない。併し、僕らのやうに貧しいものは決してあの連中に劣らないといふ自信を強くするね。」

と私は答へた。何者をもその存在する事實は許さなければならない。たとへ盜人でも殺人でも、そうしたものの必然に生れてゆくことを根絶することはできない。唯、その事實に愛をもてない。喜べない。

Sは

「ともかく偉くなるまでは樂しみだ。いまの苦しみにも酬ひられるときがあるに違ひないのだ。」

「幸福はいちどに寄せてくるらしいね。苦しいときは何も彼も苦しいやうに、よくなるときは一度によくなれるね。」

と、私は心の中に燃えるやうな、高揚された熱情をかんじた。今に見ろ、私をくるしめたもの、輕蔑したもの、低めたもの等が、ひとりで私のあたひを感じなければならない時代(とき)があるに違ひないと、強く信じた。

私達はまづしい食事を終えた。

……その日のことが、今、私にはつきりと浮んだ。餓えも決して私どもの燃え立つ願望の上からは、問題ではなくなつてゐた。どうしても出るときは出ずに居られない、烈しい發芽時代だつたのだ。

私は間もなく床についた。友や自分にたいする一種の祈禱的な、圓滿に近い心を抱いて、靜かに睡つた。

ある朝、私はふち子と動物園へ行つた。

ふち子と私とは、秋がくるとすぐに黄葉がちになつた公園の櫻の並木の、よく掃かれた道路を歩いて行つた。水いろのうすい單衣の上から、纖い彼女の頸が、小さい頭をささへて、それがまるで瑪瑙のやうに透いて見えた。

私だちは、鶴を見た。この首の長い丹頂のある動物は、ときどき、秋晴の高い空に向つて、鋭どい高い啼きごゑを上げた。それは、一つの祈りの叫びのやうでもあり、地上の生活を恰も天上に向つて歎くところの、絶えざる倦まない永

久な報告者のやうに見えた。

一つはこの白鳥のもつ傳奇的興味が、いかにも清淨な、上品な、しかもゆつたりした高踏的な歩みに據つて表現されてゐた。

そこには愛すべき二羽の雛鳥が、灰色の柔らかい着物をふわふわにして遊んでゐた。

「おちさん。鶴でも子供があるの。あれは鶴の赤ちやんでせう。」

「さうです。鶴でも何でも生きたものは子供があるんです。」

と答へた。鶴は長い首をさしのべて、この少女のそばへ來た。

「やつぱり卵から生れるんでせうか。」

「さう。」

小さい雛鳥は、よちよちと親鳥のそばにまつはりついて遊んでゐた。餌をやると、すぐ自分の子供の方へ咥へては持つて行くのであつた。

私どもは象を見た。この巨大な、岩のやうな荒い皮膚をした動物は、たへず藁や鹽せんを拾つては口のところへ持つて食べたりして、おとなしい子供のやうな善い性質を、見物してゐる人々に開いて見せた。何よりも私の注意を惹いたのは、この大きな室内に、非常に正確な、しかも非常に眞摯な八角時計が、がさがさな象の背中越しに、ちくたくと動いてゐるのを見たときに、私はすぐに變な氣がした。しかも建物の煉瓦の調子と象そのものの傳奇的興味とが相待つて、實によい調和をあたへてゐるのを見た。

それは私どもの幼年の時代に、何かしらお伽噺のなかに見たやうな時計のやうな氣がしたり、また、ああいふ原始的

な巨大な動物との對照上、時代錯誤(アナクロニズム)的な、文明と野蠻とでもいふやうな感じを起させるのである。

「ふぢ子さんは象がすきですかい。」

「くさくて、きらひ。」

「けれども温和しいから好きでせう。」

「きらひ。お猿を見ませうよ。」

猿はかなり廣い檻のなかに、追つたり馳つたり、喧嘩したりした。その利巧な、快活に巫山戯るさまは總ての人に面白がられた。何かしら齒痒い一種の憎惡に類似した感覺があるにもかかはらず、却つてその無邪氣だとまで思はれる憎憎しさは、人々の笑ひをさへ起させた。

私はその檻をかこんで眺めてゐる人が、金網一枚を隔つてゐるにかかはらず、猿の方でこちらを眺めてゐたら、どういふ心持になるであらうと、氣味惡くかんじた。

「お猿は可愛いわね。」

と、ふぢ子がいふので

「どうしてです。あんな憎らしい顔をしてゐるぢやありませんか。」

「顔ぢやないわ。面白いことをするからですわ。」

と言つた。

私はすぐ答へができなかつた。

「魚のぞき」は彼女を喜ばした。彼女は象や鶴やお猿を見たときとは、全然別な心からの愛をもつて、そのお友達のや

うな美しい阿蘭陀金魚の紅い尾や鰭ふるさまを眺めてゐた。

「ほんとに綺麗ね。」

と、その絢爛と光る魚を指した。

私はこの金魚といふものの、どこか病的な、虚偽な色彩のやうなものを好まなかつた。その娼婦のやうに長い尾や鰭に何かしら人間と共通な、わけても娼婦などと一しよなもののあるのが嫌ひであつた。ときには、汚なくさへ感じた。

「おぢさんはどうして嫌ひなの。」

「あんまりぴかぴか光るでせう。あんなおさかなより黒い鯉の方がすきなんです。」

鯉は、ぢつと水中に澄んで、落ちつき拂つて尾とひれを震はせた。あのせかせかした金魚よりは、その立派さが際立つて、静かさ寂しさをさへ私の胸につたへた。ことに私たち人間から見れば、どことなく寂しい氣がする魚族の幽邃さは、この健康な生きものの上にも充分に讀まれた。その不動ない目はちやうど重い牛の眼を思はせるほど、あやしい神秘的な、しかも思慮深さうに蒼々と澄んでゐた。

山椒魚や鰻は、ふぢ子をいやがらせたばかりではなく

「おぢさん。出ませうよ。わたしあんなおさかなを見ると恐くなるのよ。」

とさへ言はせた。

大きな椎の蔭に、らくだが長い首を柵のそとへ出してゐた。そこらの赤土が白つぽく乾いて暑さうに見えた。

私だちはライオンを見た。虎を見た。ふぢ子は恐がつた。

私は虎の美しい毛並みの下から隆起する肉體の肥りやうに、手を觸れて見たいやうな、猛獣にたいする懐しさをかん

じた。しかも自分に危險の及ぼさない檻の中を覗き込んで、私は安心しながら、さういふ空想をする自分を卑劣にかんじた。

二疋の豹。それはまるで美しい絨毯の飽くことのない深い天鵞絨を眺めてゐるやうな、それでゐて、絶えず自由に柔らかい光澤をもつて、しきりに、巫山戲ちらしてゐた。しかも長い斑點のある尾は、一疋の蛇のやうに自由に捲きあげられたり、床の上に引きずられたりした。

私はこれらの猛獸の棲む高原の森林や、暗い溪谷、あるいは廣茫とした沙漠のありさまを一瞬の間に、あたまに描いた。その引き續いた氣分のもとに、その奈何なる高價な寶石にも見ることのできない眼底の光芒や、眞紅な脣をあくこともなく眺めた。そこに烈しい生きた美があり、美はたへず荒い呼吸をつづけて自分の中にまで注いだ。自分の中に住んでゐる思想的な、あだかも仕事に對つて絶えず傾注されてゐるやうな內の內なる生命の本體が、いまありありとかれらの魂と相囁いてゐるやうな、烈しい歡喜をしづかに感じさせて來た。

ふぢ子は私を急がせた。この小高い丘からすぐ下にサンフランシスコを思はせるやうな、水族の鳥類がさまざまな啼き聲を、あたかも一つのコーラスのやうに形作つて、たべず叫ばれ啼き立つてゐるのが見えた。

私たちはそこへ行つた。いろいろな種類がかうして啼き立てたり、泳いだり、ばたばた羽搔きをやつたりする目間苦しさは、その一羽づつの美しい觀賞を削いだばかりではなく、人間的な、どこかで出會つたある夜の群衆を思はせた。またば、その雜然とした中に、一つのものを永く眺めてゐられない焦燥した氣持ちになつたのである。

しかし私はその騷々しい中に、一羽の鷺が靜かに白い翅を立てながら、ゆつくりと步行してゐるのに目をとめたときは、かなり落ちつけたのであつた。野の沼や水面にいつも淋しさうにしてゐる彼れは、あだかも、このなかにあつて

ひとり嚴肅な孤獨をまもつてゐるやうに思はれた。

私達は二頭の白熊が、靜かに水の中に、仰向けになつて浸つてゐるのを、殆んど想像することのできない奇怪なしかも珍らしい心になつて眺めた。かれらは子供が脊中を水底に向けて泳ぐやうな無邪氣さと、いかにも樂な放逸された氣分で水に浸つてゐるのを見た。その白く矢のやうな光澤をもつた毛並は、みるみるうちに濡れかがやいた。しかも彼らが水中から上つて來て、身震ひをして水や水のしづくをはね飛ばしたとき、實に立派な豐富な純白な毛並みを立てたのであつた。

私はこの動物を眺めたときから起りかけた心は、一つには北極の寂しい空氣であつた。あだかも視野をさいぎるもののない廣大な氷の海に、夢からうつつに想像されるところの、世にも珍らしい光景であつた。そこに一切の緑樹も靡いた光もないやうな冷嚴な、思ふても人々の心を嚴肅に表情づける奥の奥なる自然の巧緻があつた。恐ろしい荒凉と、流れ去る氷山の群があるのだ。

しかも彼れは人間の世界に、こうした小さな水壺を與へられて生活してゐるのを見ると、いつの間にか優しくなりかけた相貌の中に、なれなれしい馴致性な、凡ての生きものの本然な共通的のやさしさ親しさがあつた。

「ふぢ子さん。これは氷の國にゐる動物ですよ。」

と、私は子供のやうに彼女にささやいた。誰しもこれらの動物を眺めてゐるうちに、ふしぎと調和されてくる總ての動物的な、珍らしい睦まじさ親密さをかんじるのであつた。

私達ちはこの氷原に別れた。そして小高い丘に登つた。

人間さへ見ればぴよこぴよことおじぎをする熊がゐた。習慣的に墮落して行つたものか、あるいは野師の手によつて

敎へられたものか、かれは、ふぢ子の前にもおじぎをたえ間なくくり返した。

「まあ利巧な熊さんだこと。」

と、ふぢ子は言つて餌をあたへた。

かれは後足で座るやうにして、前足で柵をつかまへておじぎした。恰度、虎やライオンがいつまでも檻の中をぐるぐる廻つてゐることを仕事としてゐるやうに、この哀れな熊はおじぎばかりして暮してゐるやうだつた。私はいくたびとなく苦笑をした。

私は狡猾な狼を見た。

狐を見た。

最後にこの動物園にみなぎる、ある異臭と苦しい何かしら頭をおもくするやうな空氣とを嗅いだ。何人もこの中にあつては、離れがたい執拗な生きものの幻影と同時に、たえまない空想的なあどけなさを感じるに相違ない。

私は彼女がもう歸途についたとき、非常に行きよりも快活で、しかもその目がいきいきしてゐるのに氣がついた。それが非常に空想的な光を帶びてゐたことは實際であつた。

「面白かつたでせう。」

と、たづねると、

「熊さんのおじぎはずいぶんおかしいわね。わたし一番すきなのは、うさぎよ。あの赤い目が一番すき。」

と言つた。少女らしいことをいふ。

「一番きらひなのは――。」

「火喰鳥つてのがゐたのでせう。あれは一番きらひなの。」
私だちは公園から谷中の通りへ出た。
「ふち子さんはいつお國へかへるんですか。」
と問ふと
「まだ分らないの。けどもうすぐだわ。あなたはずつとあすこの家にゐるのでせう。」
「たぶん居るでせう。」
「越しちやつまらないわね。わたし、鹿兒島へ行つたらてがみを上げますわ。ほんとよ。」
「きつと下さい。私も出しますから。」
「ええ。きつとよ。そして、一年ばかり經つとまた東京へこんどはお父様もみな一緒に出てくるの。」
「そりやいいね。」
「そのころは根津へ電車が通るやうになるでせうね。」
「來年できるんだから、きつと通るでせう。」
私らは坂から根津一帶の谷間の町の見えるところに立つて、夕方近い混雜された、物質の呼び聲の寂しく起つてくるのに耳をすました。それらの町の家々から漂ふ煙は、低く這ふて殊に凡てを物悲しく沈ませて見せた。
この少女があの家から居なくなることは、私にとつて友を失ふやうな、あいてが小さく可憐なだけ寂しさも一層深いやうな氣がした。
「お父様も出ていらしつたら、みんなで植物園へゆきませうね。」

「え。きつとよ。」

私達は家へかへると、母なるひとが今日は大變おせわになつたと、禮をのべて行かれた。私はひとりで配達されてくる、まづい夕食を待つた。その夕食を待つ心持ちは、いつも私を陰氣にした。それは町の方から定刻になると運ばれてくる貧しいものばかりであつた。私はひとりでよくそれを机の上にひろげた。さうしながらも、自分は自分を信じるちからが大きかつたため、いま在る生活がきつと自分を善くしてくれることを考へてゐた。茶もじめなかつた旅行中のドストイエフスキイや、いつも愛と饑えとの永い彷徨をつづけたヴェルレエヌ、ミレエの窮乏、ミケラゼエロの苦しみ、さうした先人の道程を考へるとき、私は却つて指してゆくところに明るみ光り望み生命を感じた。まだ來ない幸福や喜びや藝術の出生やを、私はあたかも一つの山嶽を前方に凝視するやうな心持ちで、それに近づくために忍ばなければならないもの、一つ一つに耐へゆかねばならないと感じた。

日は暮れた。

ある日、私の家を訪ふものがあつた。出て見ると巡査だ。自分は突嗟に、この夏の苦しいあの出來事があたまに殺到して浮んできたのであつた。

しかしそれは自分の錯誤であつて、巡査は戸籍をしらべに來たのであつた。私はかれがかへると、古い傷のいたみを感じた。そればかりではなく、自分は自分をたづねてくるものを恐れた。あだかも、窓もとを人の足音がすると、自分の全身の神經はピリリと感電したやうに震へた。同時に小さな胸さわぎが、目的のない恐怖の發作のやうに湧き起つてくるのであつた。さういふとき私はペンをとり落したほど驚いたばかりではなく、その不安な足音の持主の誰であるか

といふことを考へるだけでも、不快で、心寂しいことがあつた。
私はよくさういふとき、ふぢ子に玄關へ出てもらつた。
「おぢさんは今お留守よ。」
と、いふ聲がよく私のところまで、きこえて來た。
「いつ居るんですかしら。いつ來たつて居やしない。」
と、太い聲でいふのをきくと、私はかれが私の負債の權利者であることを知つた。私はかれのために晝も夜も考へ通したけれど、それはどうにもならない負債であつた。私にとつてはもはや今それがとうてい義務的に支拂ふことが出來ない事情にあつたのだ。
「だつておぢさんは、いらつしやるときはいらしやるのよ。またこんどいらしつたらいいわ。」
「ぢや、こんなものが來たつて言つて下さい。おたのみします。」
と、すぐ窓のところから歸つて行つた。ふぢ子は
「名刺をおいていらつしたの。」
と言つて、私に見せた。私はその權利者の苛酷な冷たい顏をつきつけられたやうな不快さで面をそむけた。
私はふぢ子に感謝した。
「どうもありがとう。」
といふと
「わたし、あんな人はきらいよ。家のなかをじろじろ見まわすんですもの。」

と、彼女は眉をよせた。

しかし私はこのあどけない少女に何故嘘を言はせなければならなかつたか。自分が出て立派に申譯をすればいいのだ。彼女が無關心であるとはいへ、私は何といふさもしい心から、一時のがれの言葉をつたへなければならなかつたのだ。私は心でこの少女の魂に謝罪した。私は決していまのこの苦難な時代を通り過ぎてしまへば、私以外の人々をそこなうことはしない。私にもきつと美しい義務の正當な履行の「時」がくるにちがひない。私はさう思ひながらふぢ子の好意を謝した。

しかし彼等は聖書にも記されてゐるやうに、その最後の一錢をも償はなければならないやうに、また、最後の一錢を取らねばならない人々であつた。かれらは繁々と私をたづねた。私は極度に不安な心でくらした。

ふぢ子は、しまひに腹を立てて

「おぢさんはお留守だつたらお留守だわ。わたし、知らないわ、そこをあけちやおぢさんに叱られてよ。」

と、高い聲で叫ぶことがあつた。そのたびごとに此優しい少女のためにかれらは追ひ歸された。私は机にもたれて、彼女のさうした聲をきくと涙ぐんでゐた。私はまるで彼女に感謝の言葉をさへ完全にいへなかつた。

「おぢさん。もうかへつたのよ。それでいいでせう。」

と、私の顔を覗くやうにした。そういふとき、なぜか彼女も悲しさうであつた。

「ありがとう。」

と、私はいつて顔をそむけた。

——或る時、Sはハンドスケウチ形の、額に入つた小さな肖像をもつて、訪ねて來た。

私はそれを見た。それは、ふち子の肖像で殆んどあのやさしい呼吸をしてゐるかと思はれるほど、底からな表情をくみ取つて描かれてゐた。

「よく似てゐるね。いつか見ただけで能くこれほど描かけたものだ。」

と私はかれの烈しい洞察がいつも物象の魂につき刺されるのに驚いた。

「僕はあの子供の顔を見た瞬間、いきなり花のやうなものを投げつけられたやうな氣がしたのだ。第一あの柔らかい色彩は、あゝいふ子供でなければ見られない色彩だ。すこしも交つたものがない本統の色だ。」

と言つた。

「君はいきなり能く中心をつかむね。」

「僕は永い間かかつて見てゐるよりも、第一印象が一等正確に映るのだ。」

そのとき、表に誰か來たやうな足音がした。若しやと思ふと、私はまた胸さわぎした。その執拗な、殆んど毎日のやうにやつてくる權利者を憎んだ。

「オイ、誰か來たやうだぜ。出て見たまへ。」

と、Sは云つた。私は、

「借金取りさ。毎日のやうにやつて來て困るんだ。」

「あれか、ふち子さんがよく追拂つてくれると言つて君の感謝してゐるのは――で、やるあてがあるか。」

「當分どうにもならなくて困つてゐる。」

「さう待ちたまへ。僕が出て話をしてあげよう。」

と、Sは出て行つた。長い押問答がきこえた。Sの鋭い聲と、先方の鈍感な煮え切らない曇つたやうな聲とが入交つてきこえたが、暫くするとSはかへつて來て

「僕はちよつて行つてくるからね。君、彼奴を表に待たして置くけれど、會はないで居てくれ。」

「だつて何處へゆくんだ。今にどうにか僕がするんだから關はないでゐてくれ。」

「いや彼奴が癪にさわることを言ふからね。まあ、待つてゐたまへ。」

と、彼はそとへ出て行つた。私はSが金をつくりに行つたのを直覺しながら、この友に心配させたのをつらく感じた。Sの性格として思ひ立つたら、それを完成しなければ歇まないし、それを停めるといふことも出來ないほど劇しい男だ。

私は不安な揺ぐられるやうな時を送つた。戸外にはれいの男が立つて、ときどき、そこらを歩いてゐるやうだつた。

Sが歸つてきた。

かれは戸外の男に何かいふと

「いただくものさへ貰へさいすれば、私はべつに何とも申しません。」

と、いふのがきこえた。

「ぢやもうお歸りなさい。わづかなものに人の感情をそこなうものでないことを記憶したまへ。」

といふと、Sは私の室へ這入つてきて

「君、もう歸してしまつたよ。金は拂つてやつたから安心したまへ。」

「さうか。」

と、私はかれが大切にしてゐた羽織を着てゐないのに氣がついた。

「羽織は――。」

といふと、かれは少し赤くなつて

「金にしたのさ。ああいふ奴に苦しめられてゐるのを見てゐられるものかね。」

「それまでして呉れなくともよかつたんだが、本當にすまない。」

私達は、かうした事柄の後にありがちなお互ひの昂奮したやうな心持を、押し隱すやうにして座りあつてゐた。Sは、思つた通りのことをやりぬけた安らかな顏をして、じつと額の肖像をながめた。私は心に重苦しいものを感じながらも深い感謝をかんじた。

二人は永い間、さうして座り合ひながら、おたがひの視線を逃れあつてゐた。あまりにセンチメンタルに思はれはしないかといふ懸念のために、ときどきSはせかせかと額の繪を眺めたり、窓のそとを見たりした。私は私であした友の善良な、あまりに過激なやり方のために心は慌てたやうにバランスを失なつた狀態をつづけてゐるのを苦しくかんじた。

Sは

「久しぶりで飲もうぢやないか。」

と言つた。私もそれがこの押し默つたところから切り拔けるために必要なやうな氣がした。

私達は、日暮に近い街路へ出て行つた。私の家からすこし行くと、根津へ下りる坂があつて、櫻がふた側に並木をつくつてゐた。本郷高臺のあたりにまだ秋の日の靜かな微光が漂ふてゐた。

Ｓ酒場へはもう私達ちは行かなかつた。街かどの小さなカフエエで、私どもは盃をなめ初めた。
「君がさきに世の中へ出たら、僕は君の地盤に座り込む。君が僕を引立ててくれるだらうな。」
と、かれは赤くなつた顔をあげた。
「喜んでやるよ。君の方がさきでも同じいことだ。どちらかが先に出るんだね。」
「それにね。もう間もなく世間に出られるやうな氣がするんだ。苦しんだだけでも出るだけは苦しんだからな。」
「ほんとだ。僕らは少し默り過ぎるのだ。お互に永く忘れないで行くんだね。」
私達は話しながら、もう胸の中がすつかり溶け合つたことを感じた。
「さきのことを考へると樂みだ。君もさう思うだらう。」
「一日でも早く出たいな。」
かう語りながら間もなく私どもは街路へ出た。すべての夜の街衢のよそほひが晴々しく輝いて、私どもの健康なからだに觸れるものを懐しがつた。美しい逞しい女の散歩する姿もひとりでに今夜は、わけてもしめやかに眼にうつつた。
「今夜は女がばかにきれいに見える。しかもいやな女に一人もあはないね。みな優しい顏の人ばかりだ。」
と、Ｓは嬉しさうに通る女らの、白い、あるいは、なよやかな肩つきや、髪のかたちなどを喜んだ。まるで地上にかうしたいろいろな女がおろされて、寂しいもののために充分な慰さめを頒けあたへてくれる命令者があるやうに、ことに、いつものやうにつんとした女や、いやな毛ぎらひばかりしてゐる厭な表情をもつたものが歩いてゐなかつた。すべてがよく調和された美事な夜の天國が、いま下ろされたばかりの新しさで、私どもの歩いてゆく至るところな街衢に輝いてゐた。

それは、Sのいふやうに、「みんなにキスをして上げたくなる」晩であり、「みんなと腹をさらけ出て話したくなる」晩でもあつた。一人の喜びは決して一人のみに限られたものではない。それは、みんな人間が知覺しないあひだに、人間と人間とが靜かに分け與へられてゐるものにちがひない。心や神經の外に、別な、人間同志さへ知ることのできない微妙な靈的なるものが、ひそかに囁き合つてゐるのにちがひない。見えない命令者がゐるやうに、靈のみが住み合つた世界があるにちがひない。

「Sバーへ行つて見やう。あそこの子供の顏を見にゆこう。」

とSは言ひ出した。私はすぐに晴い氣になつたが、しかし、あの女の子はどうしてゐるかも知りたかつた。それに永く行かなかつた。

私達ちがあの不吉な思ひにみたされてバーへ這入ると、そこには、まだ見たことのない若い女がゐた。見るからに、うすぺらな、いやな感じのする型であつた。

「おひさしうございますのね。」

と言つておかみが出て來た。

私達は酒を注文した。しかし何かしら物足りなかつた。いつも座つてゐる筈の女の子が居ないためであることは無論ではあつだが、他に客もなく、しんと寂しかつた。

私はおかみにたづねた。

「此間ゐた女の子はどうしたんです。けふは居ないぢやありませんか。」

おかみは、

「あの子ですか。すこしからだを惡くしてやすんでゐますの。」
「どんな病氣なんです。」
「いやな病氣らしいのです。私どもも困つてゐるのでございますよ。」
と、眉を顰めた。その頬は冷かな、あまり小さな病人をいたはりさうにも思へなかつた。
「それや可愛想だね。」
と、Sは私の顏を見た。
私はすぐに、あの鶴のやうに瘠せた彼女の病氣が、そのせまい胸を思ふただけでも判るやうな氣がして、一時に、どつと氣分が沈んでしまつた。
「よほど惡い方ですかね。」
とSがいふと
「もう三週間もねてゐるんですが、醫者がむつかしいといつてゐました。」
私とSとはまた顏を見合せた。あの小さい魂――それが今私にありありと考へ出された。いつも浮べた善良な微笑と、それにはひきかへ彼のいつも耐らないやうに、大きく開いた悲しさうな眼の靜かさ。
Sと私とは勘定の外に金を出して「あの子のすきなものを買つてやつてくれるやうに」と言つて、そこへ出た。
私達は街路へ出た。二人とも沈んで步いて行つた。
「あの子は死にさうな子だよ。あの子はきつと死ぬ。――」とSは言つた。
「僕もさう思ふ。きつと近いうちにはね。あの子は一種の宗教的なものを、それが何だといふことをはつきり言へない

が、さういふ嚴肅なものを容貌の內にもつてゐた。それはたしかだ。」

と、私は言つた。さう言ひながらも、私はいつも悲しさうに、ときには居睡りしてゐたりした姿を思ひ出した。おかみの叱責のひまひまに隱れてやつてゐた彼の平和な居睡り――私にはそれがあの子の最も幸福な瞬間であつたやうな氣がした。さういふとき、ふいと目をさまして、につと微笑するときのつみのない美しさ――。

「あの子が死んだら花でもやりたいな。しかし餘り出しやばるやうでいやだね。」

「さう。花はすこし變だね。しかし君でも僕でも、あの子のために祈つてやりたいね。なんだか殊更に祈るといふ言葉はいやだけれど、祈つてやりたいね。」

と、私は心からさう思つた。あの短かい苦しい生涯の花のない道を通つたかの女のために、私は心で、しづかにあの子を祝福してやりたいと思つた。

二人はいつの間にか池の端へ出た。もう邂はやぶれ初めて、水分をふくんだ風はすこし寒さをかんじた。

廣小路で二人は別れた。二三歩すぎると、Sは思ひ出したやうに、つと走つて來て

「今夜は握手して別れやう。ね、いいだらう。」

「よからう。」

と、二人は鍵のやうに握手した。

私はいつもふぢ子をボンタン、ボンタンと呼んでゐた。なぜかしら、然う呼んだほうが此の少女の心持ちが出てゐるやうな氣がしてくるからであつた。

「ボンタン。お出で。」
と、庭に出てゐる彼女を呼ぶと、いつも定つて
「ボンタン、なあに。」
と、向ふでもボンタンをくりかへして私を呼ぶのであつた。
「おかあさん。妾のことをおぢさんがね。ボンタンだつて、おかしいわね。」
と、よく笑つてゐた。
それからまた私が勉强してゐると、すぐ窓のところへ來て
「ボンタン。なにしてゐるの。」などと言ふことがあつた。
「おぢさん。妾、鹿兒島へかへつたらきつとボンタンを送つてあげてよ。お父様にさう言つてね。きつとよ。」
と、彼女は約束した。
「皮をむくとなかが紫になつてゐて、そりやいい匂ひがしてよ。おぢさんはたべたことがあつて――。」
「一度もないの。」
「さう。いまに送つてあげるわ。」
「きつとだね。」
と、私は笑ひながら約束した。
「それまで此處ンちにゐるでせう。」
「ゐますとも。ボンタンの來るのを待つてゐますよ。」

と、私どもはまるで子供のやうに、しやべつてゐると、ふぢ子は表に目をやると
「おぢさん。誰か來てよ。いやなひとよ。わたしあつちイ行つてよ。」
「え。あとでまた入らしやい。」
私はすぐ不安にとらはれた。このごろは定つて人さへ來れば胸さわぎをかんじた。ことに今日ははげしくそれがした。
「ごめんなさい。」
といふ、太い聲がした。私は玄關へ出て行つた。
そこに黑の木綿の羽織袴といふ姿で、色の黑い顏の、眼の底深い男が立つてゐた。私が出ると
「あなたが室生さんですか。」
と言つた。私は
「そうです。君は誰方です。」
といふと、かれは一枚の名刺を出した。手にとつて見ると、駒込署高等掛刑事××とあつた。私は背後に水をあびたやうな不快さを感じた。
「何か御用でしたか。ともかくお這入り下さい。」
といふと「では失禮します。」と室へ上つた。かれは私の室をじろじろ見廻した。その目はたへずあたりに向つて、鋭く、細密な觀察をしてゐるやうであつた。たとへば、ある一點から一點まで、非常に素早く視野を轉じたりした。
「此頃は何か書いてゐらしやいますか。」
「別に取り立ててお話しするほどのものを書いて居りませんが……」

「そうですか。ご自分で雜誌でもお出しになつてゐませんか。」
「いえ。別になにも出してゐません。」
「そうですか。」
と、彼は落ちついて、煙草をふかした。何を調べに來たのか私には分りかねた。が、やはり此間のS酒場の一件から、こうして訪ねて來たものらしく思はれた。
「××といふ雜誌が發賣禁止になつたのは、あなたの詩からではないのですか。」
私はひやりとした。それは「急行列車」といふ詩で風俗を亂すものとして禁止になつたらしかつた。
「あるいは然うかもしれません。私にもわかりかねてゐるのです。」
「內容はどんなんです。」
「一種の戀愛をとりあつかつた詩です。つまらないものなんです。」
と、私はいやな氣がした。自分の詩がこの人々にわかつてほしくないやうな氣がした。
かれは話を轉じて
「この間のS酒場のことは示談になつたさうですな。」
「え。つまらない事をしてしまひました。」
かれは、ゆつくり落ちついてゐるらしかつたので、私はもどかしかつた。私ははやく仕事をしたいと思つたりした。
「お酒はよほどおやりになりますか。」
「ほんの少しです。毎日やりません。」

「酒の上ではよく失敗があるものですね。酒は愼しむべきです。」と言つて、「いや大變お邪魔をしました。私が來たつて御心配に及びませんから。」と出て行つた。かれを表へ送り出すと、あの晩の出來事がいつまでも自分のまはりに、いつも自分の氣分や仕事の上に覆ひかかつて、自分を暗くすることを感じた。

私は永い間、窓のところに佇つてゐた。私のまはりがすつかり網を張られてゐるやうな、たえまない犯罪者の恐怖をかんじることが、もう二タ月後にまで襲つてくることを忌々しく感じた。これらの苦しい想念から遁れるために、私は旅行のことを考へたりした。

そこへボンタンが來た。

「お客樣がおかへりになつて――。」

「歸つてしまつたの。」

「おぢさんのお友達ち？ あの方は。」

「いや、ちごふ。何んでもない人。」

「おぢさんはあの人をきらひでせう。おぢさんはいやな顏をなすつていらしつたもの。」

「まあ、きらいな方ですね。――」

と、私はこの敏感な少女の目を見た。この目こそ本統のものと嘘のものとを、直覺的に見る目だと思つた。

私はふいと姉のことを考へた。やさしい魂につつまれた姉を思つた。

「いつそ歸國しやう。そして頭をすこし休めなければならない。」

と、私は考へた。然うだ。今、一切から別れて彼の緣深い叉の國へ行こう。私はさう思ひながら靜かに室を見廻した。

「ふぢ子さん。あなたより先きに國へかへりますよ。」と言ふと

「ほんとう。おぢさんがお國へかへつてしまつちや詰らないわね。」

「だつてふぢ子さんも歸へるんでせう。」

「ええ。」

「だからまた東京へ來たらいいぢやありませんか。」

「そうね。ぢやおぢさんも、また東京へいらしやるの。」

「え。一年ほどするとね。」

「ぢや、また遊べるわね。」

——ふぢ子が去ると、私はSに會ひに行つた。Sは屋根裏で仕事をしてゐた。

「僕は一年ばかり國へ歸へつてくるつもりだ。何だかひどく疲れたから。」

Sは、じつと見て

「さうだな。しばらく休んで來たまへ。きつと元氣がもり返すよ。」

「いまはいい時季だしね。」

「永く居るといけないよ。なるべく早くかへつてくるんだね。」

と言つた。そしてまた

「あまり田舍になれすぎると、かへつてわるいから、いいかげんに又たやつて來るんだ。仕事は田舍だつて出來るから

ね。」

「來年の春あたりまで居やうと思ふ。」

「その方がいい。」

私はSに別れを告げてかへつた。

私はもう一日も早く田舍へ歸へりたいと思つた。小さな荷物をまとめながら、都の生活の紀念のために、Sの繪や、Hのスケッチなどを鞄のなかにしまひ込んだ。それから本郷の靑木堂で小さな買ひものなどをした。さういふ小さな忙しさ慌しさは、間もなく秋深い故郷へかへつてゆく樂しさと、一つはまたこの都會と別れてゆくつらさとを感じた。

ボンタンがやつて來た。

「あのね。お母さんが晩ごはんを食べないでいらしやいつて、さう言つてゐらしつたの。」

「さう御馳走するの。」

「え。お別れだつて――いいものがあるのよ。」

「ではお母さんにね。遠慮なくあがりますつて言つて下さい。」

「え。」

と彼女は去つた。

時間を繰ると、九時三十分の直行がある。今夜それに乘つて發たうと思つた。

しばらくすると、ふぢ子が迎えに來た。

「一しよに入らしやいな。」

と、彼女は嬉しさうに私の手をひつぱつて室へつれて行つた。お母さんは
「今夜お發ちなんですて。たいへん急におかへりになるんでございますね。」
「思ひ立つたものですから急に歸へることにしました。」
母なるひとは、ちやぶだいにいろいろな物をならべながら
「やつとお馴染みになつたのに、ほんとに惜しうございます。」
と言つた。
ふち子は
「おぢさんは此處よ。そのつぎが敬宗、それから妾――これでいいんでせう。」
とお母さんにいふ。
「あ、それでいいとも。」と、こんどは私にむかつて
「何もございませんが、お別れのしるしまでにいたした〳〵でございますから、おあがりになつて下さいまし。」
と、何處か國なまりのある、靜かな快よい調子で言つた。
「ではいただきます。」
と、私はちやぶ臺にむかつた。永い間、いつも一人で食事をしてゐた私は、ことにこの小數な美しい家庭の一員になつて、食事をともにすることは、私の心をしづかに溫め柔らげた。
ふち子も嬉しさうにくすくす笑ひながら私のかほを見たり、弟をしかつたりした。母なるひとは
「いづれ私どもも月末には歸國しますので、主人からも手紙を出すやうに申しますが、またおたよりを下さいまし。」

と、所書きを教へた。

「私こそ澤山おせわになりました。ご主人によろしくお傳へなすつて下さい。」

と言ふと、ふぢ子が

「おぢさん。わたしも手紙をあげますわ。いいでせうお母さん。」

と母親の方へ小さい顔を向けた。お母さんは微笑しながら

「おぢさんに笑はれないやうに勉強して上手におてがみを書かなければいけません。」

「え。妾、きつと書いてよ。あなたからも下さるでせう。」

「あげますとも。」

私たちは、くつろいでふぢ子を中心にした晩食を終えた。私は間もなく別れをつげて、宅にかへつた。

車が來た。

門のところにふぢ子とその弟、お母さん等が出てゐて、私の寂しい旅を見送つてくれた。

母なるひとに

「ではこれで失禮します。ご主人によろしく言つて下さい。」

「おからだをお大切になさいまし。」

と、母なるひとも私の苦しかつた生活をいたいたしさうに見送るやうな表情をして、ふぢ子の肩に手を置いた。

「ふぢ子さん。あなたにもたいへんお世話になりましたね。」

と言ひながら私は車に乘つた。

「おぢさん。來年また遊びませうね。」

「あ。あそびませうね。さよなら。」

「さよなら。」

と、私達は別れた。さつきから快活だつたふぢ子は車がうごくと少女らしく涙ぐんで、いきなり母親の帶のところに顔をおしつけた。ひくい忍び啼きをあげながら——。

明治四十四年十月三日、私は第一回の都落ちをした。越えて十一月、父なる山元椿莊氏から一封の手紙をうけとつた。ひらくと、ふぢ子は腸に病を得て亡くなつたことが記されてあつた。生前いろいろお世話になつた旨を感謝すると書いて、なほ、ふぢ子はいつも「髪の長いおぢさん」のことを言ひ言ひしたと書き添えてあつた。

私はその手紙を見て烈しい涙を感じた。そして、私のためには小さな救ひ主であつた今はむなしい彼女の魂に向つて合掌した。

悼詩

ボンタン實る樹のしたにねむるべし
ボンタン思へば涙は流る
ボンタン遠い鹿兒島で死にました
ボンタン九つ
ひとみは眞珠

ポンタン萬人に可愛がられ
いろはにほへ　らりるれろ
ああ　らりるれろ
可愛いその手も遠いところへ
天のははびとたづね行かれた
あなたのおぢさん
あなたたづねて　すずめのお宿
ふぢこ來ませんか
ふぢこ居りませんか。

これはその當時、ある雜誌にかいた悼詩の一章である――。

――完――



拒婚同盟（一幕物）

上司小劍

人物

雪枝。新婚後間のなき女。二十三歳。
階下の奥さんA。二十六七歳。
隣りの奥さんB。三十二三歳。
女中。二十歳。
雪枝の夫。著述家。三十二歳。

時代

一九二五年頃の仲秋。

場所

ある小國の首府。

幕、靜かにあがる。

著述家Sーの書齋。

首府も場末の町に新築された木造共同家屋の三階の一部で、品のない、いやな模樣

の色紙で貼つた壁に沿ふて、安つぽい卓子を据ゑ、椅子も粗末なのが四五脚置いてある。主人の椅子だけが些かよい品に見える。壁には相應に名ある畫家の書きつぶしらしい油畫の額が、四つか〻つてゐる。それが偶然に、――多分偶然に――春夏秋冬の四季を現はしてゐるので、別に主人自身の手になつたらしい拙惡な手蹟で、『四季庵』とある日本風の額が、これは掛けないで、卓子の上から壁にもたせかけてある。折角表裝までさしては見たもの〻、この室とこの日本風の額との調和が、如何にも惡いので、主人公の著述家も持てあましてゐるものと見える。第一この共同家屋の三室を占めて、書齋兼接客室と、寢室と食堂とにしてゐる近代都會式の生活に、昔しの四疊半を想はせるやうな『庵』なぞといふが映らぬのは當然のことだ。それをうつかり『四季庵』の三字の額にしたのから考へても、主人公の頭は餘程混亂してゐるものと見える。この思想の混亂といふことが、總べてこの一室の色合ひに出てゐる。紫檀の書棚は、この家の什器中第一等の價値を有するものであらうけれど、もと〳〵支那製で、こんな室に置くべきものでない。其の上に金文字入りや假綴の洋書に並んで、表紙の破れた和書も十數冊は見える。伊萬里らしい花瓶に、白百合の造花が時候ちがひに麗々しく塵埃に汚れて挿されてあるかと思へば、額に並べて日本古代の驛鈴の模造が、赤い絹紐に結び付けて吊り下げてある。

主人の椅子には、新妻の雪枝が腰をおろし、卓子に凭れか〻つて考へてゐる。主人の書きかけの草稿が、青いクロースの上に散らかつてゐる。

雪枝。(日本服に羽織。亂れた束髪を左の手で掻き上げ、右の手には赤い表紙の横文字の詩集を持つて。)ほんとにね。この詩集がよつぽど好きなんだと思つてたら、こんなものが挾んであるんだもの。……每日懷中へ入れて、肌で溫めるから、この通り表紙が脂じみてる。お〻厭やだ。(詩集を卓子の上へ投げ付ける。)

（室の扉を敲くものがある。コツ〳〵コツ〳〵。）

雪枝。おはいりなさい。

（新銘仙のあらい棒縞の袷に、年と比べて滑稽なほど派手な赤い帯を締めた女中がはいつて來る。）

雪枝。何んだお前か。……いやお鹿さんか。（言ひなほして一寸舌を吐きかける。）

女中。（一禮して。）あのう、階下の奥さんがお見えになりました。

雪枝。A子さんか。（少し考へて。）仕方がない、此處へ通して下さい。

（女中退場。暫らくして階下の奥さんAが、簡略な洋服姿ではいつて來る）。

A子。あら奥さん、御主人はお留守なの。

雪枝。えゝ、散歩にまゐりました。

A子。あなたちや、お仕事をなさる時間より、散歩をなさる時間の方が多いのね。

雪枝。えゝ。

A子。もう少しはお馴れになつて。……

雪枝。夫にですか。（少し顔を赧くする氣味で俯向く。）

A子。いゝえ、このお家にですよ。わたしなんか、ほんとに厭やでしたわ。共同家屋なんてね。何んだか初めは家を持つてるやうな氣がしなかつたんですもの。裏長屋よりひどいと思ひましたわ。

雪枝。おや、さうですか、わたしは別にお家のことなんか、何んとも思ひませんの。どんな方がお住ひになつてるかそれもよくは存じませんもの。あなたの方とお隣りだけですわ、御交際を願つてますのは。

A子。わたくしどもだつて、交際は狭いんでございますよ。昔しは一つ鍋のものを頂く、と言つたら、大變に親密な間柄だつたさうでございますが、今はお顔も碌に知らない方と、一つ鍋のものを頂いてるんでございますからね。

雪枝。幾人くらゐ居らつしやるんです、この共同家屋には。

A子。總べてで百十二室あるさうでございます。お住ひになつてらつしやる方が四十四組あるとか、事務所の人が言つてましたよ。お子さん方を加へると、夜分は二百近くの人がこの屋根の下に眠るんでございますね。

雪枝。割合ひに尠いんでございますね。わたしは五六百人も居らつしやるかと思ひましたよ。

A子。そんなにあなた、はいれやしませんよ。だけど、今に二千人から住へるのが出來るさうでございますね。何んしろ、木造ぢやこれ以上に大きいのを、家屋審査委員會の方で許さないさうでございますから。……

雪枝。お喧ましくありませんか、あなたの方の御寢室が、直ぐこの眞下になつて居りますので、隨分注意はいたしとりますが。……

A子。いゝえ、ちつとも。……あなたの方はお靜かでゐらつしやるから。……わたしの方のお隣りは眞上があの俳優さん御夫婦でせう、丁度このお隣りですね。……時々御夫婦でダンスのお稽古が始まるんですもの、たまらないんでございます。

雪枝。矢ツ張り、こんな共同家屋は鐵骨煉瓦か何かで、堅牢に建てなけれやいけませんわね。地震でもあつたら大變でございませう。

A子。わたしは地震より火事が怖いんでございますよ。一番階下の炊事場からでも火が出たら、まるであなた、焚き付けに火が移つたやうなものでございませう。わたしが田舍の實家に居りました時、父が山から生の木を伐つてまゐり

まして、いゝ加減に割つて二十日も干しときますと、よく燃えるんでございますもの。……こんな家の材木はあなた、伐つてから材木屋へ來るまでにもう二十日や三十日ではきゝませんでせうし、材木屋へ來てからまた半年經つたか、一年經つたか分りませんし、かうやつて建てゝからでも、もう二年になるんですから、よく燃えませうよね。それにお竈の中で束ねて燃すのと違つて、いゝ鹽梅にあなた、風が透くやうに組み立てゝあるんですから、火がついたら、全くよく燃えませうね。

雪枝。木で建てる家は、矢ツ張り昔し風の五室か六室ぐらゐ別々の、小さなのがいゝんでございませうね。

A子。さうでございますよ。何んでもこの國ぢやね、改革といふと中途半端なことをして、折衷だとか、穩健だとか、國情が何んだとか言つて、生煮えを喜んでるんでございますよ。こんなあなた共同家屋なんて、住まつた當座は隨分不自由しましたわ。……今でもあなた、御飯を炊く面倒がないくらゐでございますよ、便利と言へやね。

雪枝。ところが、夫ぢやね、あの共同で炊いた御飯を厭やがるもんでございますから、毎日別に小さいお鍋で御飯を炊くのでございますもの、面倒で仕様がございませんの。それであなた女中なんて、贅澤なものを置いてるんでございますよ。それに此頃の女中はわたしたちが子供の時のやうに呼び棄てには出來ませんし、さん附けにして呼んでお友達扱ひにした上、御飯炊きと取次ぎだけといふ約束なものでございますから、たまに掃除をして呉れと言つたつて、しやしませんし、お使ひには皆わたしが行かなけれや、葉書を買つて來てお呉れつと、つひ昔しの女中を使つた癖が出て、口を滑らしても、雇はれる時の約束外だから、動きやしませんものね。契約を變更して給金を增してまで、葉書一枚の爲めに面倒なことも出來ませんから。……

A子。でも、此頃ぢや電話が便利になりましたから、葉書といふものが要らなくなりましたわね。電話のかゝつてない

家つて、殆んどないでせう。それに混話式になりましたから、昔しのやうにお話中がありませんもの。ちよつとお待ち下さいと、相手の人に言はれる方が、交換手に『お話中』なんて、つけんどんにやられるより、氣持ちがようござんすわね。

雪枝。ところが、夫ぢや、電話が大嫌ひなものでございますから、隨分葉書を使ひますのよ。

A子。お宅ぢや、便利なものが皆お嫌ひなんでございますね。手前どもでも、共同で炊いた御飯は、初め何んだか氣味がわるうございましたがね、此頃ぢやもうあの方がよろしうございますよ、面倒がなくて、お美味くて、御飯はドッサリ炊くほどお美味いんでございますね。

雪枝。夫ぢやね、舌で感ずる味よりも、心持ちで味ふ方が大切だと申すんでございますよ。これと同じものを他の人も喰べてると思ふと、もうお美味くないんださうでございましてね。

A子。へえん。……………

雪枝。詰まり我儘なんでございませう。自分獨りだけ特別のものを見て、特別のものを持つて、特別のものを喰べたいんでございますつて。……土鍋でぽつちり炊いた御飯でぴしよ〱と不味いのでも、自分獨りだけが喰べるのだと思ふと、大勢の分を一所に同じ大釜で炊いた御飯より、ズッとお美味いんでございますさうでね。

A子。衆とともに樂むといふことが、お嫌ひなんでございますね。

雪枝。さうなんでございませう。幾ら面白い芝居を見ても、ほかの奴が矢ッ張り見るだらうと思ふと、もう面白くないんださうでございましてね。……近代文明の一大缺點は、共同といふ事を重んじ過ぎた點にあると申して居りますよ。

A子。さういふ方は共同生活の敵でございますね。

雪枝。敵。…………さう敵でございませう。(かう言つてから暫らく無言、さうして幾度か何やら言ひ出さうとして、躊躇した上、漸く決心した樣子を見せる。)奥さん、わたしあなたのお智惠を拜借したいことが出來ましたの。

A子。わたしの智惠。……何うせ碌な智惠は持ち合はせませんが、お役に立つだけお使ひ下さるなら、絞り出せるだけは絞り出しますよ。

雪枝。これを御覽なすつて下さいまし。(卓子の上の赤い表紙の詩集を取つて、A子の前へ突き出す。)

A子。(詩集を受け取つて見て。)へえ〻、この御本が何うかしたんですの。わたしには讀めませんわ。

雪枝。まアあけて御覽なすツて下さい。

A子。(赤い表紙を見詰めながら。)英語ぢやないんですもの、一字も讀めませんわ。

雪枝。兎に角、あけて見て下さいましな。

A子。だつて、……(躊躇しつ〻、漸く中頃のページを披くと、臺紙に貼つてない女の寫眞が出る。)まア綺麗な方ですこと。御親類でございますか。

雪枝。裹を御覽なすツて下さいましな。(屹となつて眼を据ゑる。)

A子。(怖さう〻にして、寫眞を摘み上げつ〻裹を見て、書いてある字を讀む。)あなたの久子より、わたしの繁太郎さま。……繁太郎さまといふと、こちらの御主人でございますね。おやまア、何うしたらい〻んでせう。(驚いた表情をする。)

雪枝。わたしが夫と結婚しました其の夜から、夫は其の赤い表紙の詩集をば、殆んど一刻も離さないんでございますよ。さうして息みます時は、床の下へ入れますしね、外へ出ます時は懐の中へ、肌身に附けて離さないんでございますよ。さうして時々其の詩集に接吻してるんでございますからね、わたしも變だとは思つとりましたが、眞逆こんなものが挾んであら

うとは、夢にも思ひませんでしたから、よッぽど好きな詩集だとばかり思つとりましたのよ。

A子。お宅の御主人は日本服ばかり御召しになりますのね。

雪枝。えゝ、洋服が大嫌ひなのでございますよ。わたしにも洋服を着たら離婚すると申すのでございます。

A子。日本服はいけませんよ。何うも罪悪を包む機會が多ございましてね。

雪枝。ところが夫ぢや、日本服が人類の身體に纏ふものでは、一番進歩してると申しましてね。日本服を着る最後の一人になるのを待つて居るんでございます。

A子。こんな寫眞を挾んだ詩集なんか、懐中へ入れて抱いてらつしやるには、日本服に限りますわ。ほゝ……。

（赤い帶〆締めた女中が、またはいつて來る。）

女中。奥さま、お隣りの奥さんが入らつしやいましてございます。

雪枝。あの女優さん。……こちらへと申して下さい。

（隣りに住む畫家の妻で、舞踊劇の踊り女B、外出姿の洋裝ではいつて來る。）

B子。おやお客さま。（馴々しさうに言ふ。）

A子。丁度いゝところでしたわ。あなたのお智恵も拜借したいのよ。

B子。あゝ、A子さんでしたね。すつかりお見それ申しましたわ。（そらさぬ風で、愛嬌を浮べて言ふ。）

雪枝。（厭やな顔をしながら。）もうお出かけですの、劇場へ。……隨分お忙しいんでございますね。

B子。いゝえ、まだ早いんですわ。劇場は八時からですもの。まだ四時間は自分の身體でございますよ。……夫で寫生に出かけちまつたもんでから、暫らく油を賣らして頂きにまゐつたのよ。榮太郎さんはお出かけなのね。

雪枝。え丶散歩にまゐりました。

A子。皆さん、お氣樂で羨ましいわね。御主人が始終お宅に居らつしやるですんもの、わたしの方なんか、朝の九時から午後の五時まで毎日〱會社へ勤めに出るんですから、わたしはまるで留守番をする爲めに結婚したやうなものでしたわ。

雪枝。結婚のことを考へるとほんたうに詰りませんわね。わたしは、いつまでも娘で居たうございましたわ。

B子。あら、(大袈裟な表情をする。)あなたがたはそんなに結婚を悔いていらつしやるの。……第一主人なんていふ言葉をお使ひになるからいけませんわ。男のことを主人だなんて、そんなこと言ふものぢやありませんわ。

A子。あなたは別ですよ。實力がおありなさるから。(冷かに言ふ。)

B子。實力はどなたにも皆ありますわ。獨立した職業をもつてゐるといふことだけが、實力ぢやありません。

雪枝。實力をもつてゐても、結婚すると同時に實力が消滅しますわ。わたしたちの結婚は錯覺の幻影でした。男の――もう主人とは申しませんよ――求むるものが何んであるかといふことを知らずに、夢中で結婚したのが過ちでした。……妻になるより女中になる方が今の世では、女として遙に立派です。女中の權利は認められて來ましたが、妻の方はまだ駄目です。

A子。詰まり實力ですわ。女中には實力がありますけれど、妻は無力ですから。……

B子。奥さんは、何んでも實力主義でございますね。

A子。主人といふ言葉を排斥なさるあなたが、奥さんといふ言葉をお使ひになるのは何ういふものです。主人といふ言葉を廢すると同時に、奥さんといふ言葉も廢さなければなりませんわ。奥さんなんて、隨分卑屈な柔弱な響きがあるぢ

やありませんか。

B子。ほゝゝゝ御免なさい。つい口が滑りました。習慣は恐ろしいものです。

A子。女中といふ言葉を廢するとか申すことを新聞で見ましたが、あれは何うなりましたでせうか。

B子。存じません。わたくしどもでは女中を頼みませんから。……

A子。わたくしどもの知り合ひの中で、女中を頼んでゐらつしやるのは、こちらばかりですが、奥さん……いや雪枝さんいかがでございます。

雪枝。わたしも存じませんの。女中なんか使ひ……いや頼みたくありませんけど、わたくしどもぢや別に一軒分の御飯を炊くものでございますから、仕方なしに頼んどりますわ。何んしろ、さん附けにして呼んだ上『使ふ』といふ言葉を使つてはいけない、必ず『頼む』と言はなければいけないなんて、面倒で仕様がありませんわ。それに先刻もA子さんに申しました通り、頼む仕事の契約が難かしくつて。…………

A子。ほんとに女中といふ言葉はもう廢されたんでございませうか。……女中といふ言葉が廢されたら、何んといふ言葉が代りに用ゐられるんでせうね。

B子。こちらの女中さんを呼んで、お訊きになれば分るでせう。

雪枝。ところが、其の女中を呼ぶといふことが、なか／＼大變なんでございますよ。……昔しのやうに手をぽん／＼と拍つたり、呼び鈴を鳴らしたりして呼ぶといふやうに、簡單にはまゐりませんの。……これ／＼を頼むといふ契約の仕事の範圍内で呼ぶのなら構ひませんが、一寸訊きたいことがあるからつて、さう無暗に呼ぶことは出來ません。わたくしどもでは、御飯炊きと取り次ぎといふ契約になつとりますから、其の範圍内で呼ばなければなりません。

A子。大變にむずかしいんでございますね。ではかうしませう、今夜の御飯を幾ら炊いて下さいと、あなたお言ひ付けになる爲めにお呼びなさいよ。それならいゝでせう。

雪枝。まだ少し時刻が早いし、御飯は毎日きまつてゐるんですから、少し變ですけれど、ぢやさうして呼びませう。（食堂に通ずる電鈴を押す。食堂の片隅を仕切つて、女中室と炊事場とを假設しあるところ。）

（間もなく女中がはいつて來る。）

女中。何か御用。

雪枝。今夜の御飯は、矢張りいつもの通りだけ炊いておいて下さい。

女中。（不平らしい顔をして。）承知いたしました。（直ぐ立ち去らうとする。）

A子。あゝ、もし〳〵。（女中を呼び止めて。）少しあなたにお伺ひしたいことがあるんですがね。まあこつちへ來て下さいな。

女中。はア。（不承不承にA子の前へ來て、どかりと椅子へ腰をかける。）

A子。あのう、女中さんといふ名を、あなたがたの組合の方で廢するといふことが、新聞に出てゐましたが、ほんとですの。……女中さんといふ名を廢すると、何んといふ名になるんでせうか。

女中。（ツンとして。）まだきまりません。家庭技手とかいふ名になりさうでございましたが、家庭といふ字が一向面白くないといふので、其のまゝになつとります。（につこともせずに退場。）

A子。威張つてるわね。……家庭技手は可笑しい。おほゝゝ。（他の二女とともに笑ひ崩れる。）

雪枝。あれですものね、たまりませんわ。いつかの女中同盟罷業から、あんなになつて、手も附けられないんでございま

すよ。あの時はわたしなんか、まだ何も存じませんし、娘時代の氣樂さで、他人事のやうに噂さを樂んで、面白がつて居りましたが、何んしろ女中會館の前を通つて、方々の女中さんが大勢集つてるのに驚きましたよ。

B子。女工に比べると、女中は駄目だ。奴隷の模型の最後の名殘りだなんて言はれたもんですから、女中さんたちが憤慨したんでせう。

雪枝。奴隷の模型の最後の名殘りは、何うやらこつちへ廻つて來ましたわ。

A子。一つ同盟罷業でもやりますかね。おほゝ……。

雪枝。いや戯談ぢやありません。男子の我儘と放縱を抑へるには、婦人が團結しなければならないと思ひます。

A子。でも實力のないものが團結したつて、何んにもなりませんわ。實力さへあれや、團結なんぞしなくつたつて、一人の女が一人の男を抑へるぐらゐ何んでもありませんわ。

雪枝。またあなたは實力主義ですね。團結が即ち實力ぢやありませんか。

B子。男子を抑へる爲めの婦人の團結つて、何うするんですの。

雪枝。先づこゝに一人の我儘な、放縱な男子があるといたしますね、それに對して世の中の婦人が拒婚同盟を作るんです。其の男から結婚の申し込みがあつても、一切應じないといふ。………

B子。完全に行はれるでせうか。

雪枝。團結力の强弱次第ですわ。

B子。違反者があつた時の制裁は。

雪枝。違反者はなからうと思ひますわ。誰れだつて、拒婚同盟の目的物に指定された男の妻になるのは厭やでせうから

……貧女か何んかなら知りませんが、誰れしも貧女同樣に見られるのは厭やですからね。

B子。貧女同樣。…………今日の所謂家庭婦人と貧女との間に、どれだけの距離がありますかね。結婚の動機といふものが貧女の身を賣つた動機に對して、どれだけ威張れるでせう。……わたしはそんな、妻が團結して夫を抑へるなんて、恐ろしい暴力主義よりか、個人々々を改善して、結婚といふものが、互ひによく理解し合つた獨立性の男女の融合同化といふこと、どによつて、戀愛の極致を現はさなけれやならないと思ひますわ。男女のどちらからも暴力の干與があつてはいけませんね。

雪枝。團結するといふことが暴力でせうか。

B子。暴力ですとも、力といふものは、個人々々に持つてゐる時は、實力と暴力とを明らかに分けることが出來ますが大勢の人が團結して一つの力を作ると、大抵暴力になつて了ひます。

雪枝。それぢや何うすればいゝんでせう。

B子。何うすれば……とは。

A子。いゝえね、こちらの奥さん……いや雪枝さんには、當面の問題がおありなさるんですよ。理想論なんか、急場の役に立たないんです。

B子。だつて、拒婚同盟の成立なんか、兎ても急場の間に合はないぢやありませんか。

A子。だから、あなたにお智慧を借して上げて下さいつて、言つてるぢやありませんか。

B子。一體何うなすツたんですの。(不審さうに雪枝とA子とを見る。)

A子。これを御覧なさい。(赤い表紙の詩集をB子の前に突き出す。)

B子。(詩集は取り上げて。)Chanta la liberté l'espace et le soleil…………(披いたところを出まかせに讀む。)

A子。讀んで下さいとも、歌つて下さいとも申すんぢやありませんよ。(押し止める。)

B子。ぢや、何うすればいゝんですの。

A子。其の御本に挾(はさ)んであるものを御覽なさつて下さい。

B子。(詩集を繰つて、挾んであつた寫眞を見出す。)おや綺麗な方ですわね。(見惚れる。)

A子。感心してちやいけません。裏を見て下さい。

B子。(寫眞を裏返して。)あなたの……(あとは默讀する。)

A子。いかゞです。(首を伸べて差し覗く。)

B子。分りました。……拒婚同盟の原因が。……(首を傾けて考へる。)

雪枝。折角わたしは結婚しましても、そんな人があれば考へなければなりません。

B子。御尤もです。……しかし雪枝さん、これだけぢや、まだよく分りませんからね、よく事實を確かめるまで、輕率なことをなさらないやうにね。

雪枝。いゝえ、事實はよく分つて居りますよ。夫(たく)ぢやね、其の詩集を肌身離さず持つてゝ、時々ページを披いては舐めてるんでございます。わたしは夫(たく)があんな變人なものでございますから、好きな詩に接吻(キス)をしてるんだとばかり思つとりましたら、其の寫眞に接吻(キス)してたんでございますね。……御覽なさい、其の寫眞の口の廻はりが、ひどく汚れとりますもの。

B子。(寫眞を表の方に向けかへして。)ほんとでございますね、あなたはお目が早い。

雪枝。一生懸命の場合に冷かしてはいけませんよ。

B子。ですけどね雪枝さん、この寫眞の人が何ういふ方か、それを確かめなければなりませんよ。果してこの世に生きてゐらつしやる方か、もうお亡なりになつた方で、こちらの昔しの戀人でゐらつしやるか、またはまるで御交際も關係も何もない、何處の方とも分らないのを、空想で愛してゐらつしやるのか。ほんの美しい花を胸に挿したぐらゐのお心で、かうして詩集に挾んでゐらつしやるのか、それを確かめた上でなければ、滅多なことはなさらないがいゝでございませう。

雪枝。だつて、わたしはわたし以外に夫の愛するものがあるといふことは、たとへ紙片一枚でも承知しませんわ。それに夫ぢや始終男女關係の自由といふことばかり申しとりましてね。大昔しの雜婚に返らなければほんとでないなんて申すこともあるんでございますよ。

B子。それで拒婚同盟といふことをあなたがお考へになつたんでございますね。

雪枝。それでと申すこともございませんが、弱いものが追々と強くなつて、自由と權利が見とめられてまゐりますのに家庭婦人といふものだけが取り殘されてゐるのは、殘念だと思ひましてね。それは詰まり團結することを知らないからだと考へましたから、こんな寫眞のことがなくつても、婦人が團結して、拒婚同盟を作る必要があると考へてゐたんでございます。女中だつて同盟すれや、あんなにえらいものになつて了うんですもの。……

A子。兎に角、何うしたつて實力ですわ。それや團結もいゝんですけど、其の前に婦人が個々の實力を築き上げることが必要でせう。B子さんが、わたしたちと違つて、いやに落ち付きながら、理想ばかり說いてゐらつしやるのも、詰まり御自分に實力がおありなすつて、家庭以外に、舞臺といふ別の世界を有つておゐでになるからでせう。獨立した

立派な實力がおありなさるから、呑氣なことも仰しやるんでせう。……わたしたちはかうやつて、留守番以外に自分の獨立した生活がないもんでございますから、弱いんでございます。進んで獨立するか、退いて女中になるか——女中の方が今では奥さんよりも立派な獨立婦人です。——この二つより外にわたしたちの道はありません。留守番をしないと言つて、同盟して驚かしてみたつて、こんな風に共同家屋が出來て、自分の室に錠をおろして外出することが出來るやうになつちや、男の方では留守番のないことをさう困りもしませんよ。

B子。あなたのやうに、さう何もかも實力〳〵つて、力のかね合いで、物事をお考へになつてはたまりませんわ。

A子。だつてさうぢやありませんか。……この家だつて、柱や梁の力のかね合ひで建つてるんでせう。屋根は下へ落ちようとする、柱がそれを防いで戰つてる。其の戰ひが即ち家屋の保存でせう。

B子。夫婦といふ精神上の關係を、材木の突つ張り合ひに比べられちや、たまりませんわ。

雪枝。あなたは理想家でゐらつしやること。

B子。だつて、さう何事も總べて力で解釋しちやあ、非常に危險なことになりますね。勞働問題が危機に臨んでゐるやうに、兩性問題も全く太古の離婚時代に逆戻りしますよ。

A子。それも仕方がありますまい。

(廊下に高い足音がきこえて、雪枝の夫の著述家が、日本服に鳥打帽、ステツキを抱へて、大急ぎにはいつて來る。)

著述家。大事の詩集を忘れた。

雪枝。(腹立たしい顔をして。)おやさうですか。(横を向く)

著述家。おや皆さん、いらつしやい。何んのお話が出來ますか。

A子。妾君の同盟罷業(ストライキ)を計畫してるんでございますよ。

著述家。(笑つて。)それが成立すれや、男は邪魔者がなくつて、仕事が捗(はか)どるでせう。…………(續)

―一九・一〇・二二―

美しき月夜

中條百合子

靜かな晩である。

空氣は柔かく濕つて、熟しかけた林檎からは甘酸い、醱酵の薫りが快く、重く眠たい夜氣の中に放散し、海茶色の煙のやうな玉蜀黍の穗が澄み渡つた宙に、ひつそりと影を泛べて居る。到る處に陰翳の錯綜があつた。夏と秋の混り合つた穩やかな何處となく淋しい景物が、今パツト咲いた銀色の大花輪のやうな月光の下で、微かに震へながら擁き合つて居る。何處にも動くものが無かつた。何處にも物を云ふ聲が聽へなかつた。その沈默が一層聞えない囁きの優しさと、見えない魂の聲樂を想はせるやうな夜の褄を、彼等は確かりと腕を組合ひながら、幸福に家路に向つて居たのである。

姪の結婚披露に招待されて、久振りで華やかなる雰圍氣の裡に心から浸つた彼等は、何時かあらゆる日常生活の煩しさから開放されて居た。可愛くて五月蠅い子供等も、老母も、地平線の彼方より遠い彼方に姿を消して、亢奮に連れて甦つた若さが二三年前の恍惚に彼等を引戻して、希望に滿ち、歡喜と純潔な羞恥に赤らんだ二つの

笑顔は、彼等に甘美な回想を與へる。單調に成り勝ちな愛の經過に、さつと差した輝きのやうな新鮮さが、彼等の裡に夢をかきたてた。彼等がまだ結婚しなかつた時分に、よく老人達の傍を逃げるやうに抜け出しては、感傷的な夜景の中を彷徨したその時分のやうな忘我と魂の皷動が、宛然(まるで)月光のやうに二つの心を耀かせて居るのである。

W、タンナーは米國の中部に在る大都會から、三四哩隔つた小邑の會社員であつた。毎朝八時に成ると、彼は木造の住家から四五丁離れた、或電氣會社の事務所に出懸けて行く。そして晝に一時間休暇を貰つて、家へ晝食を仕に戻つて來る時を除いては、朝から夕方まで、古ぶけたオークの事務机(デスク)の前に背を屈めて、無感興な數字の整理に忙殺されて居るのである。

まだ三十に成るか成らないの彼は、漸々家族を支へて行く丈の俸給ほか貰つて居なかつた。從つて、二人の子供達と老母とを抱いて、彼等の生活は、何處の隅にも餘裕と云ふべきものを見出す事は出來ない。白襯衣(ホワイトシャーツ)一枚に成つたWが、西日の差込む溫室のやうな事務室で、よき良人らしく、忠實な父親らしく額に汗して居る間に、妻のマーガレットは、又彼に劣らぬ眞劍さで何くれと無く家事の爲に奔走する。彼等にとつて、贅澤な流行品の存在が、何ら關心の材料にも成らなかつた如くに、あらゆる空想と云ふものが、生活から驅逐されて居た。結局實現も出來ない空想に心を奪はれてボカンと仕て過す五分が、何を産むだらう?、彼等に室外の野心も無かつた。激しい口論を起すべき衝突も亦無い。單調な田舍の圏境が、何時か人の心に與へる不思議な催眠で、光澤の無い水色のやうな生活が、彼等の結婚後三年の月日を滿たして今日に至つたのである。

Wが、安い月給取りであると云ふ事、彼の妻は、又彼に相應しいよき主婦であると云ふ事は、其處に何の華やかさも無い代りに、彼には平凡な信頼を與へた。彼は毎月定まつた金額を彼女の手に渡す。何の不安も、焦燥も感ぜさせない其の

を彼女の配慮で日常の生活を滿たして行く。

天氣の晴々と輝り渡つた夏などに、晝飯に戻つて來た彼は、よく子供達に取繞かれながら裏の草原で洗濯物を乾して居るマーガレットを見出す事があつた。

金色の日光がキラ〳〵と金粉を撒くやうに降り注ぐ明るみの中で、嬉戯する子供等と、陽氣な高聲で喋りながら、白く肥つた腕を素早く動かして、張渡した綱に濡れた布を吊る彼女の姿は、如何那に彼の心を悦ばせた事だらう。一足毎に大きな籠を傍へ〳〵と引寄せながら、上下する體の運動につれて、愉快な小唄を口誦む彼女。踊む機勢(はずみ)に落ちかゝる後れ毛を、さも五月蠅さうに手の甲で掻き上げながら、一寸頭を擡て大きく息をする彼女。其處には若い母親の豐饒な愛が、咽せる程芳しく漲つて居る。見馴れた光景でありながら、其の家庭的な情景に逢ふと、彼は湧き上る感謝を堪へる事が出來なかつた。よき家である。よき妻や子等である。故意(わざ)と木影に隱れて、我れともなく恍惚とした父親を眞先(まつさき)に見つけた子供達が、彈む小毬のやうに頸や胸元に跳び付く頃は、微風に連れて雲のやうに膨れたり萎んだりする白布を背景にして、眩ゆさうに額際に腕を擧げたマーガレットが、血色のよい頬に渦卷くやうな笑を湛へながら〝Halloo dear ー〟と野放しの聲を投げる。

質素な木綿著物に包まれた彼女の細そりとした體の周圍からは、稍田舍めいた、清潔な快い糊のにほひがプント立ちのぼるだらう、濡れて光る双手、小さい汗のために水蜜桃のやうな顎——。あらゆるものが彼女の母性(マザーフツド)を囲んで耀くやうに見えた。壞れ掛けた玩具も、磨かれた家具も、總てが彼女の影を受けて始めて、活々と仕て見えるやうにさへ思はれるのである。

左樣云ふ時若い良人のWは、涙が出る程の悦びを感じずには居られなかつた。然し、其の悦びは、決して今のやうな

ものでは無い。何と云つたら好いだらう。丁度、仕合はせな、可愛がられる子供が、髪の毛を透して、母親の慈愛に滿ちた寵撫（ペット）を受ける時のやうな心持である。其の膝に靠れて其儘眠つて仕舞ひ度いやうな信頼である。「我等の母」に對する尊敬とも云ひ得る感激なのである。

けれども！

Wは、半ば駭き、半ば歡喜の含羞みで上氣したやうな瞳を瞬きながら、自分の腕に倚つて歩を運ぶマーガレットを眺めた。

其處には、何時もの見馴れたマーヂーの、主婦（ハウスワイフ）らしい地味な、取繕はない風は、其影さへも止めて居なかつた。か非常によきもの、美くしきもの、其等は、彼が曾て一度も彼女の裡に見出した事が無いやうにさへ思はれるものが、今薄いラベンダーの着物に包まれて、半ば眼を瞑るやうに閉ぢながら、足音も立てずに引添ふて來るマーガレットの周圍に燦然と耀いて居るのである。

日常生活の單調な反復が、何時か積らせた鈍重な塵の底に埋もれて居た美が、今、其の遮蔽物を掃除けて光り始めたのであらうか。

其共、久振りの甦つた亢奮が、彼女に新らしい魅力を加へたのでらうか、其は何方だかW自身にも判斷が付かなかつた。

けれども、歩むにつれて、フワ〳〵と搖れる鍔廣の帽子が、すべ〳〵な頰を斜に掠めて優しい影を投げ、捲毛から溢れた小さい耳朶から、芳しい頸、胸と何の滯りも無く流れる圓滑な線が、レースと、飾帶（サッシ）につけた花束の間に幻の如く消えて居る。その纎細な、柔かく、輕い、夢幻的な美は、身を引緊めるやうな謎を持つて居る。Wは、恰も女王に仕へる騎士のやうな眼差しで、露のやうな日光を浴びたマーガレットの横顔を偸見た。此の美くしさ。其は全く、情熱と

超えた高貴であつた。異性が、互に思ひも懸けなかつた崇高な美を對手の裡に[illegible]つであつた。匍匐する實現から截り放たれて、彼は飛翔する光りものゝ裡に、永遠の女性の再誕を感じたのである。

然し、此の靈的な、此の世の者でないやうにさへ見えるマーヂーの美に對する讃嘆は、殆ど無意識に彼の心の底に横つて居る、何物にも換へ難ひ安らかさ、確信とも云ふべきものと相呼應して、一層彼を有頂天に仕て居た。其は、此の尊むべく、愛すべき女性は、一生を徹して、自分に保證された者であると云ふ落付きである。此の寳物を、彼の掌から奪ふ何者も、此の地上には存在を許されて居ない。只、自分丈が、彼女の唯一の愛の對照として生きる事が出來る。

彼女に達する黄金の階子は、只彼の鍵に依つてのみ開かれる。如何程の高處に彼女が在らうとも、彼だけは、的確に到達する事が可能るので、此の誇とも自負とも云ふべき心持は一方に於ては、全然無條件に彼女の高貴を承認し、讃美する。彼女の尊嚴が加はるに連れて、彼の意識の奥に横はる此の自信も强度を增して來る。今の彼にとつては、此等二重の心持が働きかけて、彼と彼女を確い抱擁の光輝に包みながら、飽く事を知らぬ愉悅の彼方まで吹き送つたのである。

「俺は仕合はせだ。

彼は恍惚として額を撫でた。

「俺は仕合せだ、若いマーヂー、美くしいマーヂー。フム……俺も若いのだ。そして子供達も——子供達も惡くは無い、仕事はよく成るだらう、生活はよく成るだらう、俺は仕合はせだ。彼女も仕合はせだ。

二人ともが健康で、愛し合ひ扶け合つて、此から幾年か、さう幾十年か一緒に生きて行くのだ。よい！　生活は、よい！

彼は急に何か熱い塊りが喉元に突掛つて來るのを感じた。幸福な戰慄が彼の體を貫いて走つた。

「マーヂー………

彼は、しつとりと濕つて柔かいマーガレットの裸形の手を取りながら、微かな香りのある腕を、凝と自分の岩畳な腕の下に締めつけた。

長い林檎林を抜けると、道は急に開いて、二人の前には寢靜まつて森閑とした大通りが黒く現はれた。其處を横切る踏切りを抜けて一二丁行つた處に、彼等の安眠の巣が、大きな樺の樹に覆はれて建つて居るのである。村に育つて村に住む彼等は、何度此の道を歩いたらう、過去幾年が通り過ぎ踏み馴れた、其の道を今彼は、郷きに騎るやうな心持で履み越えようと仕て居るのである。

眠つた家々の屋根や、動かない樹々の重い梢々が、高い透明な大空の穹窿の下に、見えない刻々を彫みながら、少許づゝ、地殼の彼方へずり落ちて行くやうな感じを與へた。樹蔭の闇から月光を反射する窓硝子や扁平な亞鉛屋根の斜面が不思議に憂鬱な銀色で、四邊の闇を一層際立たせ、同じやうな薄ら寒い脊骨を刺すやうな光線は土に四本並んで這ふ鋼鐵の線路からも反射して居るのである。線路の傍に小さく建つた番小屋の傍まで來ると、今までWに體を持せ掛けるやうにして居たマーガレットは、急にぱつちりと眼を見開きながら身を起して

「好い月ね

と云つた。廣い鍔の陰から、丸い顎を仰向けるやうにして朗らかな天を仰だ眼を落すと、彼女は、一寸眉を顰めるやうにして、彼方に光つて居る鈍銀の窓々を見た。

靜かな晩――W、汽車は大丈夫？

マーガレットの此の質問は、決して無意識では無い、彼等はもう前刻から、鐵道の上に響いて來る、重い斷續的な響音

車の音を聞いて居たのである。Wは一寸頭を廻して提灯の灯程に見える赤い前燈（ヘッドライト）と踰ゆべき軌道の幅とを見較べた。が、其丈の注意さへ、此時の彼には何と無く滑稽に思はれた程、動いて來る燈と軌幅との差は大であつた。不安を持たうにも、持ち得ない程大きな差である。自分達の若い、健康な四本の脚が、此の悦に滿ちた晩に、如何うして此のたつた五尺前後の空間を横切れない事があるだらう。彼は、マーヂーの臆病を揶揄する少年のやうな聲を擧げて、高々と笑つた。

「大丈夫さ勿論マーヂー、さあ行かう

Wに腕を扶けられながら、彼女は又一寸頭を傾けて彼方に流眄を與へると、其儘良人の自信に絶對の信を置いたやうな歩調（あしどり）で動き出した。そして、ファミリアな無關心の二三歩を踏んで、其次を運び出さうとした瞬間、彼女は小さい聲で「おや」と云ひながら、前へ行かうとした良人の腕を押えた。

「如何した?

「一寸……

マーヂーは、彼に委せた右の腕にグッと力を入れながら、體を浮かせるやうにして、不自然な形で後方に殘つた左の足を前へ引かうとした。

「如何したの、マーヂー

「踵が挾まつたらしいの、

「踵が挾まつた? 何處へ

Wは一寸小戻をすると、宛然落した手巾を拾はうとするより、もつと落付いた何でもない風で彼女の華奢な、白い長靴の上に身を屈めた、此刹那、彼の腦裡では、妻の靴の踵が線路と板との間に喰はれたその事實と、前後に連關した何事

をも考へる事が出來なかつた。今、マーヂーの動け無く成つた、其の同じ線路の上を、猛烈な勢で突進して居る列車の薄黒い連鎖と、此事の間には、其の瞬間何の連絡をも取つて居なかつた。或は、列車と云ふ意識さへ、彼の心には浮んで居なかつたと云つても好い程の驚くべき餘白(ブランク)が、幸福で身慄ふ彼の、形の好い頭の裡に生じて居たのである。

興奮が産んだ、此の無意味な意識の餘白(ブランク)は、何時かマーガレットにも感染して居た。彼女も彼と同様の放心狀態になつた。宛然日向(ひなた)で草でも見るやうに

「取れないだらうかね、

と呟きながら、踞んで良人の、月光に白く光る背中に手を置きながら、彼女は時間を忘れた平靜さで、徐々と足を動しに掛つたのである。然し、重い荷車の車輪で壓拉げられた分厚な板と、不動の軌道との僅かな間隙に、眞個の力の機勢(はずみ)で喰ひ込んだ踵は、體を前後に搖る位の事では、到底拔けるものではない。胴で括れて、末端が廣く銀杏形に開いた女の高い踵は、恰も運命の係蹄の如く、微妙な一點で、彼女を完全に生捕つて仕舞つたのである。

二三度扶(こじ)てもカタリとも動かない強固(ファームネス)さに、或漠然とした、得體の知れない焦燥が二人の心に湧き上つた時である。今まで只洞穴のやうに眞暗く見えて居た番小屋の中から、一人の男が小さい手提洋燈を振りながら、恐ろしい慌しさで馳けつけて來た。

「如何仕なさつたかね、貴方早くせにやあ」眼をしよぼ〱させた猫背の男は、息を喘んだやうな氣忙しさで、せか〱と喘ぎながら、早口に囁いて踞み込んだ二人の周圍を動き廻つた。

「貴方、早くせにやあ危い、殺される、貴方早くせにあ、貴方汽車が來る！

此の最後の一句が、呆然として居た二人の心に慄然(ぞつ)とする冷水を浴せかけた。

「汽車!」

彈かれるやうに體を捧げた二人の目前には、瞬間忘られて居た恐ろしい機關車が、刻々と確乎たる步程で突進して居る。

「汽車!」

俄に體を反らせて飛び上つたマーヂーは、急に狂氣化たやうな鋭い叫びを擧げながら身を踠いた。

W、早く! 早く! 早く!

突嗟の激動に夢中に成つた彼女は、當も無く擴げた兩腕を振り廻しながら、叫聲を擧げ、身を燥き、焦燥り猛る。然し、Wは、失神したやうに呆然と口を開いて、此の瞬間を立ち盡した。極度の緊張と衝動が、頭の裡で、一時に衝動た彼には、何か何だか、何程考へても譯が解らないやうな氣がした。一切がボーッと心の前で、ぼやけ切つて居るやうな氣がした。が、其にも拘らず、彼には、何かひどく明白なもの、胸が惡く成る程、圖々しく白ばつくれて解り切つたものが心一杯に詰つて居た。何か慘酷な、血みどろな、プンと鼻を突く臭ひ、自暴自棄な、死ぬに極つてらあと云ふやうな心持、其の死をフヽンと他人事のやうに嘲笑してやり度いやうな氣分、あらゆる激情が、此の刹那、彼の見開いた魂の絕壁の際でこんがらかつた。陰氣な、氣に喰は無い、いやな…… Wは額中をくしや〳〵に顰めて、恰も叱責するやうに妻の方を振向いた。瞬間、彼は甲高な、刺すやうにひどく憐れつぽいマーヂーの叫聲が

「W、ア! W早く! 救けて

と息も切れ〳〵に叫びながら、彼に向つて白い丸い、可愛い二本の腕を差延すのを見た。

「マーヂー!」

Wは、俄にかつと成る程の恐怖を感じた。その、何だか分らない、宇宙がどつさりと落ちて、體中に伸懸つて來るやうな致命的な恐怖を反撥するやうに、或は其とガッシリ組合つて、彼の裡には血がドク／＼と音を立てゝ、狂奔するやうな反抗を感じた。Wは、愛着、憤怒、恐怖、反抗に夢中に小突き廻されながら、いきなりマージーの足を摑むと、髮の毛を逆立てたやうな眼付をして、其を力委せに彼方へ捻つた、と、同時に、體を半ば宙に浮かせてフラ／＼仕て居た彼女は、死ぬやうな悲鳴と共に、バッタリ軌道を横切つて倒れて仕舞つた。動顚した男達は、踵を一厘も動かさないで却つて彼女の足の骨を挫いて仕舞つたのだ。然し、誰も其那事を思ふ丈の意識を持つては居なかつた。皆の氣が逆つて居た。まして此の場合、軌道の内側に倒れたマーヂーを、逆に倒して、足一本の犠牲で、彼女の生命を救はふとする丈の周密な考慮を廻す頭腦は無かつた。總ての魂が、奈落へ逆落しに成つて居た。總ての意志が、流星のやうに顚落して居た。統御を失た本能の、眼の無い、大きな眞黒い頭許りが、無二無三に方向の定まらない動亂を起したのである。

一旦右側を下にして倒れたマーヂは、やがて必死な齒軋りと一緒に上半身で飛び上つた。

彼女はいきなり咆吼とも悲鳴ともつかない叫びを擧げながら、獸のやうな勢で夢中になつた良人の胸元に跳び付いた。

「駄目だ！　駄目だ！　もう！

W！　駄目！　もうだめ、早く逃げて、よ！　子供　が、ア！　駄目よ！　駄目よ！　W!!

十呎程の距離まで接近して來た列車は、ギラつく前燈を一面に軌道の上に投げて居た。其の、蒼白い月光と、赤い焔のやうな光線の混亂し錯綜した、斑まだらな明りの裡で、我を失つたWは、自分の魂にピッタリ貼付いたやうに近々と髮を亂し、齒をギリ／＼と嚙みながら、瀕死の鳥が羽搏く通りに身を踠くマーガレットの、恐怖と哀願と、そして極度の憤怒に掻き毟られたやうな顏を眺めた。其を見ると、彼は、何でも彼でも、マーガレットが、彼女の全生命で愛して

居る、其事を、きつかりと一つの間違ひも無く自分の心に[illegible]
と火花を散らして結び合つた。

「死ぬもんか！　馬鹿！

如何して、此處で死なゝければ成らないのか？　如何して死から逃れるか？　其那事が問題では無かつた。只反抗である。彼女の悪靈のやうな物凄い相貌から、彼の魂へと、裸形（はだか）で踊り込む生の、飢渇のやうな欲求である。彼女を馳り立てるが故に、彼女も馳り立てずには置かない本能の爆發である。死んで堪るものか、死ぬもんか、何だ！　馬鹿、畜生！　悪魔！

Wはいきなり拳を振つて彈機のやうに空中へ飛上つた。と同時に、叩きつけるやうに、地面へ落ちて、知覺を失つたマーヂーの體に、喰ひ付くやうに掴み掛ると、決然と、恰も宣告を下すやうに

"No! sir

と叫んだ。

此の瞬間、彼の心を満したものは、決して、愛する妻を獨り死なせるに堪えないと云ふ單獨な情でも無ければ、偕に死ぬべきであると云ふ倫理的な判斷でもない。増して、此の瞬間に、生と死とを選擇して、英雄的最後を選ばうとするやうな心は無い。只、彼女の全靈が、眞赤な火の玉のやうに成つて燃え上つた生の執着の偉大なる共鳴である。二つの箇體が、一つの生命に成つて居た。一つの生命の前にあらゆる空間が絶して居た。二つの體軀を貫通して反響が在つた許である。彼の心には、死と云ふ文字の存在を許す、如何程些細な間隙も無かつた。飽くまでも生である。何と云つたつて生きて遣るぞ！　と云ふ眞つ暗な絶叫である。死んでも生きて見せるぞ！　と云ふ執念である。只管の執念である

あの寸刻前の恍惚は？　あの幸福な夢幻は？　運命は、運命は……。其那事が作つて堪るもんか。彼は、生命全部の緊張を只一點に集注して"No! sir!"と叫んだのである。何に？　勿論死である。胸中で戰慄へながら、二人の周圍を馳け廻つて、叫んだり、呟いたり、跪いたりして居た猫背の男は、Wが"No sir"と叫んで、マーチーの上に重るやうに地上に横つたのを見るや否や、殺されるやうな悲鳴を擧げて、走り出した。何故とも分らず此方へ向つて確實に猛進して來る列車の、一つ目の化物のやうな前面を目がけて馳け出したのであ…。が、二三間行くか行かぬに、彼の發した叫を劈くやうにシュワッ！　と空氣を截斷して、機關車の丸い頭部が擦れ違つた。と同時に、彼は轟々たる車輪の響に混つて何とも云へない人間の叫喚が、四邊の空氣を刺し徹して空の彼方まで響き渡つたやうな氣がした。彼は急に双脚の力を失つた。地面がズルッと足の下で滑つた。彼は髭の疎に生えた口をパッと開くと、あらひざらひの生命を一時に吸ひ込むやうに息を窒めて、傍の茂みの中に轉り込んだ。

一分……二分……三分……

彼は徐々と兩膝を突いて、草の中から起き上つた。そして怖ぢた兎のやうに眼を剝いて恐る／＼周圍を見廻した。

月が照つて居る。窓々の硝子は光り、樹々が眠つて居る、森かんとした夜の空氣……

「此が？

彼は肩を窄めて。

「此が？　此が死？　此が？　此が？

痩せた顴顎をヒク／＼と痙攣させながら、彼は又延上つて、そろ／＼と四邊を見廻した。

發行所　東京銀座大通新橋際（電話銀座五九壹番・振替東京二〇〇番）　新橋堂

本品は身體慰安の用具にして一箇にて座椅子にもなり寢臺にもなり疊込めば携帶に便なり



特約店及販賣店

東京市日本橋區　三越呉服店
大阪東區備後町　白木屋呉服店
東京日本橋通　令西川甚五郎店
同日本橋通一ノ一　団西川甚五郎
同日本橋通四の三　西川甚五郎
大阪市東區本町
東京市上野廣小路　松坂屋いとう呉服店
同　第二帝國博品館
東京京橋區銀座四丁目　神谷毛織物店
同
同　五番館　東京支店
同　青山商店
京都四條通寺町角　カドヤ毛織物店
横濱住吉町五丁目　杉野洋服店
横濱市龜之橋　鶴屋呉服店
神戸元町六丁目　松山源次郎店
新潟本町通七番町　館信吾商店
名古屋中區榮町　いとう呉服店
堺大寺南門西入　吉田衣服店
靜岡札ノ辻町五　杉山椅子店
岐阜美江寺町九七　木澤商店
廣島一手町二丁目　横山商店
門司東本町二丁目　手塚商店
松江末次本町三七　地球堂洋品店
前橋連雀町八七　桔梗屋洋品店
高崎連雀町一四　桔梗屋商店
北海道札幌停車場道、五番館

取次販賣店御希望ノ方ニ謹告

各地ヨリ頻々御注文有之何レモ緊急御入用ノ旨ニ付遠方ヨリ御送付タハ御間ニ合ヒ兼候場合モ可有之ト存候ニ付全國各市又ハ滿鮮臺灣帯ノ内未ダ販賣店無之箇所ニ限リ新タニ一箇所宛販賣所ヲ設ケ度候次販賣御希望ノ方ハ至急申越被下度候也

製造發賣元

東京市芝區下高輪二十一番地

樂民堂

電話高輪一〇九五番
振替口座東京一八七六七番

〇定價　金五拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

國別／冊數	內國	外國
六冊	金參圓	金參圓六拾錢
十二冊	金六圓	金七圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金八圓五拾錢外國は金拾圓貳拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

一誌代郵稅

一振替貯金　口座は東京三十四番なり

一郵券代用　は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
一金拾圓迄　金八錢
（集金委託料及送料共）

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正八年十月三十日印刷納本
大正八年十一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木酉三

發行所
東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話（小石川一[illegible]／小石川三[illegible]二〇）
電信略號コウロン

印刷所
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 10,20; Single copy 60 *sen* including Postage. . Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.